

悪魔のヒーローアカデミア

たうる@gご都合主義の使い手

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チエンソーマンのアニメ見て衝撃を受けて、ヒロアカの最新巻読んで衝撃を受けて、衝動のままに書きました。

ヒロアカの二次創作のテンプレみたいな小説です。

ご都合主義が沢山あります。

それでもいいよという方はどうぞ、お楽しみください。

チエンソーマン世界の全悪魔の能力を使うことのできる、個性：悪魔。

黒魔ヒロフミはこの個性を使い、全ての絶望を踏み潰し全ての悲劇を消し去る。

敵にとつての悪魔としてヒーローを目指す、悪魔の物語。

目次

目覚め	1
黒魔ヒロフミ：オリジン	3
「雑な救済と、”絶対指名者”	5
悪魔と、女神と、人と。	9
響香の決意とヒロフミの憂鬱、それと焼き鳥。	14
雄英入試と新たな悪魔。	16
雄英高校、入学。	19
個性把握テスト。上	21
個性把握テスト。下	24
戦闘訓練。上。副題：ヒロフミの受難	30
戦闘訓練。中。副題：悪魔の子事件、裏。	37
戦闘訓練。下。副題：ヒロフミの舌は絶好調。	42
戦闘訓練、後。	50
閑話：ヒロフミとマスコミ。	54
USJ襲撃。上	57
USJ襲撃。中	64
USJ襲撃。下	70
ヒロフミ、暗躍する。副題：ヒロフミ、勘違われる。	82
？の悪魔	87
雄英体育祭	
雄英体育祭、開幕。	95
雄英体育祭——Part 1	100
悪魔は笑う。まるで恋する少女のように。	106

雄英体育祭 — Part 2 | 109

雄英体育祭 — Part 3 | 114

雄英体育祭 — Part 4 | 133

雄英体育祭 — Part 5 | 141

雄英体育祭 — Part 6 | 147

雄英体育祭 — Part 7 | 153

雄英体育祭 — Part 8 | 159

雄英体育祭 — Part 9 | 164

雄英体育祭、裏。 | 171

雄英体育祭 — Part 10 | 176

雄英体育祭 — Part 11 | 180

夕焼けの道で。 | 186

閑話編

レディ・ナガンは光を見た。 Part 1 | 190

レディ・ナガンは光を見た。 Part 2 | 197

レディ・ナガンは光を見た。 Part 3 | 201

レディ・ナガンは光を見た。 Part 4 | 207

レディ・ナガンは光を見た。 Part 5 | 212

レディ・ナガンは光を見た。 Part 6 | 217

設定用語解説回 | 224

あの人は……。 | 231

職場体験篇

ヒーロー名とヒロフミ | 236

蠢く悪意。 | 241

レディ・ナガンヒーロー事務所 | 244

379	報告、及び連絡。
	閑話編——What If…?
374	日常に戻って
369	脱出
362	めちやくちや
352	ヒーロー、参上。
345	相対。
334	林間合宿——Part 3
328	林間合宿——Part 2
324	林間合宿——Part 1
318	林間合宿、開始。
313	実技テスト、後
307	実技試験Part 2
302	実技試験Part 1
298	テストに備えて。
294	救助レース
	林間学校編
288	ヒロフミ・ぎ・ろつく!
284	暗躍。
	閑話編（リクエストあり）
275	病室にて。
271	後味の悪い結末と病院
266	ぶつちぎりでイカれたヒーロー
261	激突。ソロモンvsヴァイラ
255	ヴァイラとヒーロー殺し

A組の新たな任務／クリフオート：オリジン	1
クリフオート：オリジン	2
準備は綿密に	
悪魔は踊る	1
悪魔と兎	
地獄の顕現	1
地獄の顕現	2
地獄の顕現	3
地獄の顕現	4
希望は無く。	
ただ、絶望のみが彼の瞳に写っていた。	
仮免試験編	
入寮と、説教。	
仮免試験の準備	
仮免試験	1
仮免試験	2
	472
	466
	463
	457
	441
	430
	422
	415
	411
	404
	400
	396
	391
	387
	382

目覚め

<???
side>

人間はいずれ死ぬ。老衰かもしれないし、病死、または自殺かもしれない。だが、俺の場合は事故死だ。飲酒運転をしていた車に轢かれそうになっていた四、五歳くらいの幼女を庇い、死んだ。

——と、思っていた。

「いやあ、またこの手の事故死つか。うーん、幼女救ってるし、オレロリコンだし、チート持って転生でいいよ。ほんじゃバイならー」

…割と軽い…いや軽すぎない？普通人間をそんなノリで転生させるものなの？…あとロリコンだったなんて教えなくてもいいだろう。聞きたくも無かったわ。

にしてもあるもんだなあ、異世界転生。一体どんな世界なんだろうと、まだ見ぬ世界へ思いを馳せつつ、ゆっくりと意識はおちていった。

<???
side out>

その“世界”は彼が生きていた世界とはかけ離れていた。

事が起こったのは中国、軽慶^{けいけい}市。

“発光する赤子”が生まれたというニュースだった。

それ以降、超常現象は各地で確認され、原因も判明しないまま時は流れる。

いつしか、“超常”は“日常”となった。

その超常は、いつしか“個性”と呼ばれるようになった。

そして、世界総人口の約八割が何らかの“特異体質”である超人社会となった。

——とある一般家庭の話しよう。

その日、とある普通の家庭に、一人の子が生まれた。

どこにでもあるごく普通の家庭で、父の“個性”は普通より力が強いだけ、母は無個性だった。

そこから、時が流れ五年後。

少年はすくすくと成長した。これまたどこにでもいるような、た

だのヒーローに憧れる少年だった。

父も母も子を愛していて、また少年もそんな二人を愛していた。

その日は、少年の誕生日。保育園から帰ってくる息子に、ケーキやご馳走を用意し、少年が初めて会う幼なじみとその家族であり、両親の友人でもあるミュージシャン夫婦が誕生日ソングを歌いに来る予定があった。玄関には、クラツカー片手にサプライズをするために待っている父と母の姿があった。

バスの排気音が扉の向こうから聞こえてくる。

いまか、いまかと待ち——扉が開く。

パン、パン、と。クラツカーが割れ、少年に祝福の言葉を掛けようとしたその時。

その家は完全に消滅した。

個性を発現させた少年を残して。

その個性は、右と左、そして頭に大きなアサルトライフルがくつついており、その胸元にはおぞましいまでの量の顔がぎよろぎよろと、隙間を埋めるようにくつついていた。

脚部には弾丸が帯状になっており、正に“悪魔”のようであった。

その日から、少年の心と自我が死に、植物状態になりかけたところに“別の自我”が生まれた。

だが、それは誰も知ることはない。

(転生したら辺りが消し飛んでいた件について。なんでやつ!?)

と、新たな自我は心の中で叫ぶ。

(にしても妙に、視線が高いなあ…ん?んんん?胸元に顔がうじやうじやと…え?銃?...これ!銃の悪魔じゃねえか!?)

——こうして、一人の“アホ”が生まれた。

これは、一人の男が、最高の悪魔ヒーローになるまでの物語。

黒魔ヒロフミ：オリジン

<ヒロフミ side>

あの事件から九年経ったのか？俺は中学生になった。あの事件っていうのは、俺こと、黒魔^{くろま}ヒロフミの個性が初めて発現した事件のことで、俺自身は全く覚えていないのだが、今世での親二人を個性の暴走によって死亡させた。さらには近隣住民にも重軽傷の怪我人が出るなどの被害が出た。

事件直後、直ぐに公安が動き事件をもみ消そうとしたが…まあ、目撃者多数で上手くいかなかったな。そのおかげで、世間からは“悪魔の子”なんて呼ばれた。それを初めて聞いた時似た様な二つ名を某海賊漫画の考古学者みたいだなって思ったわ。

周囲は結構その名前に心配そうな顔してたけど、俺は特にダメージはなかった。だって俺のせいではなくてこの個性のせいだろ？それも初めて発現した個性、だ。俺が何らかの意図があつてわざと使った訳じゃあないのに、なんでこんなにもバツシングが来るんだ？訳が分からんわ。

…さて、少しこれまでの事を振り返ってみたが…なーんで、ヒロアカの世界に転生しちゃったんだろうなあ俺。それもチエンソーマンの全悪魔の力をもって、ヒロアカつか。うんそれどこの二次創作？思いついても書かねーよ。

幸いにも、俺はその両方の原作を読んでいたから対処できたものの、最初はめちゃくちゃ混乱したな。

あの、ロリク…ゲフンゲフン。神はチートをあげる的な事を言つてたけどさすがにやりすぎだつて…。

悪魔に寄つては世界を滅ぼしかねないし。

あの時にいち早く気付いて制御に全力を注いでなかったらもつと被害が出てたんじゃないか？

極めつけはこの身体。身体能力はえげつないし頭良いし、それに顔があので殴つてそれで密かに人気を集めてる“吉田ヒロフミ”だし、つか、名前も吉田が、黒魔に変わったただけっていう…。

とは言え、言いたいことは色々ある。が、一番の不満……というか、嫌だなど思ってる事がある。

この世界は現実だ。ヒロアカ神とやらが、なんやかんやして創作上の物でしかなかったものを現実にした。してしまった。

約束された物語。

ジャンプなのだから最終的には勝つだろう。

そして、そこで起こる悲劇は物語に深みを持たせどンドン面白くなるだろう。

しかし、それは物語というあくまで空想上の話だ。

何度も言うがこれは現実だ。

もちろん俺はヒロアカに出てないし堀越先生も俺の前世の事など知らないだろう。

だが、神は強制的にこの世界に転生させるために俺という自我だけをこの黒魔ヒロフミの身体に混入させた。

これは仮定の話だが、俺という自我と共に個性が入ったとしたら？

元々、黒魔ヒロフミという少年は原作に登場しないモブで（モブにしては厨二っぽい名前だが）、俺というイレギュラーを無理やり入れるために、強制的に退場させたとしたら？

そんな、考えが俺の頭によぎる。

でも、でも、そうだとしたら、仕方ないなんて、ごめんなさい、なんて、そんな安い言葉で済まされない。

それならば、せめてこの黒魔ヒロフミを……世界で一番素晴らしいヒーローとして名を残そう。

あらゆる悲劇を踏み潰し、あらゆる絶望を叩き潰す、全ての敵をサイラン恐怖のどん底に突き落とす。

サイラン敵にとつての悪魔の様なヒーローに、俺はなろう。

まあ、ぶつちやけヒーローアカデミアの世界に転生したからにはヒーローになりたいしね。

さあ、始めようか。

悪魔のヒーローアカデミアを。

雑な救済と、”絶対指名者”

<ヒロフミside>

ふんふんふんくと、特に決まったりリズムの無い鼻歌を歌いながら朝の住宅街を歩く。

まだ少し肌寒いな。本格的な冬、とまでは言わないが、次からはコートを羽織ろうかな。

暇だし、雄英高校の入試について考えるか。

まずは、ペーパーテストだが…これは余裕だ。

というのもこの身体。神がくれたチートのおかげで身体能力はもちろん、頭脳的なスペックもえげつないのだ。一回自分の限界を確かめるために色々検証していた頃に、色々な過去問を試しに解いてみたのだが…世界最高峰とも言える大学のテストですらあっさり解けたのだ。

これには俺も口をあんぐりしてしまった。

というか、これもやりすぎな気がする…

つくづく思うがああ神適当だなオイ。

そして、本当に二次創作のオリ主みたいな存在に近づいてきた…。ま、原作キャラとか一杯救済するし、オリ主と言っても過言ではないか。だははは。

実技も問題無いでしょ。

そんな事を考えてるとズボンのポケットが震えた。

電話か。相手は…ホークスさんか。

「もすもす、どうしました?」

『ハイハイもすもす。…まあ、ヒロフミ君は単刀直入が良いだろうから、言うけど…キミ——雄英目指すんだって?』

うほっいいい声（中村悠一ボイス）。

「まあ、ハイ」

『ん、分かった。それでね?ヒロフミ君だけ、特別に試験受けなくていいから』

「えっ？はぶつすか？ヒドイナー」

『ハハ、違うよ。推薦と違う——』“絶対指名者”としてキミは入学するんだ』

「…ふーん。でもなんで、俺だけそんな特別扱いするんです？」

『まあ、キミ…世間から色々言われてるだろ？』

「そりゃあそうですけど…絶対指名者の方が色々ブーイングが来そうですね」

『それもそうんだけど、君の個性は見た目もだけど例の事件のせいで周りに余計な緊張をもたらしちゃうだろ？』

いやまあ、それは分かるけども。でもその位乗り越えられないと“ヒーロー”にはなれないでしょ。

「…ん、まあ事情は分かりました。とりあえずそれでいいですよ。納得はしてないですが」

少し不満げな声があちらに伝わってしまったのか、電話の向こう側の方で少し気まずい空気が漂う。

『貴方の善性を今更疑ってる訳じゃないの。ただ世間が少し、いや、ほんのすこーしだけ、キミに厳しいだけ』

そう言って割り込むように電話から聞こえてきたのは、“元”公安直轄ヒーローの“レディ・ナガン”だ。現在は、事務所を立ち上げ、ただのヒーローとして活動している。

元々彼女は公安でヒーロー達の黒い“裏”を取り締まる役目を担っていた。

その時はまだ、超常黎明期なんて呼ばれる時代の頃の話だ。まあ、末期ではあったが。

個性を持つものと、持たざる者で格差ができ、差別が起き、暴動が起きた。

当然そこで悪い事を考え、個性を使って悪い事をしたやつがいたわけで。そういうやつらが、敵と呼ばれるようになった。

そんな最中に、“ヒーロー”が現れた。

コミックのように悪を討つ。

そんな存在が、敵と結託して利益を得る。

そんなことはあつてはならない。

一度それが民衆にバレてしまえば、折角平和へと近づいた“今”が無駄になる。

だからこそ、消さなければならぬ。“無かった”事にしなければならぬ。

言わば対ヒーローの掃除屋^{殺し屋}。

それが——レディ・ナガンというヒーローの役割だった。

しかし、彼女は——良くも悪くも、普通の唯、ヒーローに憧れる一人の少女に過ぎなかったのだ。

仕事^{殺し}て仕事^{殺し}して仕事^{殺し}した。

そうして、病んで行き——当時の長官を殺してしまったのだ。

そんな悲しい話を見て、とても心に来る物があつた。

ならまあ、やることは一つだよネ！

助けましたとも。

なんてつたつて神が造りたもうたチートオリ主（笑）ですから。

具体的に言うならば——まあ、脅迫だよネ！

当時の公安の上層部に「こういうこと（ナガンの事と、調べてたら出て来た大企業との癒着やら政治家からの賄賂の事など）やってるらしいやん？」と当時まだ幼かった俺が大胆不敵な笑みを浮かべながら脅してくるもんだから腰を抜かして驚いていたっけ。

いやあ、そんなときの長官の顔ったら面白かつたなあ。

証拠に関してはみんな大好き支配の悪魔でちよちよいのちよちよ。

…ただ、支配の悪魔を使った時だけマキマさんの体になるのはびつくりしたなあ。

おっと、少し長くなつたな。

簡潔にまとめると、俺、レディ・ナガン助けたで、OKだ！

にしても、ナガン原作と口調がだいぶ違うな。

ま、いいや。

『ちよ、ナガンさんどうしたんですかその口調』（ボソボソ）

『い、いや？私はずっとこの口調だが？』（ボソボソ）

全部聞こえてるけど気にしない!!難聴系主人公こと黒魔ヒロフミだぜ!!

「……とりあえず、そういうことなら雄英で、ヒーロー目指して頑張りますね!」

『つああー!頑張れよ!ヒロフミ君!』

『えええ!その調子よ!尊い!』

ホークスさんとナガンさん（尊いとか言ってたけど聞こえてない。聞こえてないったら無い）から激励の言葉を貰い心が熱くなる。漫画で読んで知ってたけど本当にいい人だな、この人達。

「じゃあもうすぐ学校に着くんで、それじゃ」

電話を切り、校門をくぐる。

はあ、これから教室に向かうってことを考えると少し憂鬱だけど、仕方がない。

今日も一日頑張るZOE☆!

悪魔と、女神と、人と。

<ヒロフミside>

上靴に履き替え、朝のいつものルーティンをこなした後に、階段をゆつたりと昇る。

憂鬱——いや、めんどくさい気持ちが自分の足取りに出ているようで余計に進みが遅くなっている気がする。

はあ、もう教室に着いてしまった…。

今日はどんな挨拶で行こうか…。

そうだ！今日は最強の人の挨拶で行ってみよう！

扉に手をかけ、ガラガラと音を立てながら中に入り——

「おつはよー！G L Gのヒロフミ君だよー！」
グッドルッキングガイ

シーン、と。それまで騒がしかった教室が静まる。ワロタ。滑ってるやん。なんでやっ！前世じゃあ夢女子を大量排出したイケメンで最強の男のギャグやぞっ！

…まあ、もう一つこんな微妙な雰囲気になる理由がある。

つつても、理由それは簡単な事で、俺が個性を初めて発現させた時の人間であることが知れ渡っているから、関わらないように無視されているというだけなのが真相だな。

本来なら未成年の俺は少年Aとかで報じられるはずが、悪質な三流ゴシップ紙がすっぱ抜いたおかげで周囲に俺のことが知れ渡ってしまった。(しかしその後、その会社は社会的にも物理的にも消えた。恐ろしい話だな！)

断じて俺が面白くないから無視されているという訳ではない！

断じてだ！

地獄の空気感
そんな中。

「よっヒロフミ、おはよー。アンタその挨拶何とかなんないの？」

気にせず話しかけてくれる女神は、我らが耳郎響香様である。

彼女は、この世界——《僕のヒーローアカデミア》に出てくるネームドキャラクターの一人であり、個性は「イヤホンジャック」と

いうものだ。

「む、そこにおわせられるは我らが女神、耳郎響香様では無いか？」
「はいはい、女神じゃなくてウチはウチです。…あ、そうだ、昨日借りた漫画面白かったよ。帰ったら返すわ」

と照れ隠しをしつつ、恥ずかしさを紛らわすためか、そっぽを向
きながらその長い耳を忙しなく動かす。

「いや、実際女神だぞ。だって、俺に話しかけてくれるじゃん？」
「んぐっ——…ま、まあ、あの事があったとしてもヒロフミの内面
を知ってるし。そもそも！ヒロフミは悪くない、でしょ？」

それに、こんないじめみたいな事、ロックじゃないよね。と、少
し怒りを滲ませながら呟く響香。

ほんま出来た子やでえ…
うりうりくと、つい頭を撫でる。

すると響香は顔を真っ赤にさせながら、手を振りほどこうとする。
そうやって、からかって遊んでいるとチャイムと同時に今となって
は珍しい、無個性の先生が入ってきて、中断となった。

ただ、頭から手を放した瞬間「あっ…」と寂しそうな声を出す響香。
…ちよつとお…いきなりそのギャップは俺の心にダイレクトア
タックというかあ…。

まあ、はい。それでは皆さんぐ一緒に！耳郎響香は可愛い!!

時間が過ぎるのも早いもので、あっという間に帰りのHRとなっ
た。

授業？へっ、このチートbodyにかかればあんなもの屁ですよ
屁。

…まあ、言うなればアレだ。二次創作特有の“作者は特に考えて
居ないけど頭が良かったらかつこいいでしょ”という浅はかな設定
のオリ主（偏見）なのである。俺は。

まあ、作ったロリコンの神（誤字にあらず）もそんな思考の持ち
主だったのだろうな。

ま、どうでもいっか。

「——という訳で、高校入試の書類は明日までなので、忘れないように…：まあ、どこに出すかは皆同じだろうが」

「当たり前じゃんか先生!!」

「私たちは雄英に行つて、立派なプロヒーローになるんです!」

やいのやいのと。俺と響香以外の皆は期待で声を弾ませている。

うるせー。つーか、原作じゃお前ら響香以外出てなかったし、どうせ落ちるだろうに。

…：まじウケるんですけど。

「あ、そういえばヒロフミ。お前、雄英の推薦…：みたいなものに受かったんだってな。おめでどう」

その先生の口から出た言葉は一瞬で教室の空気を凍らせた。

え、ちよ、バカじゃーん。折角俺が空気読んで黙ってたのに、バカじゃーん。

ああ、ほら響香だつて頭抱えてるし。(響香には先に教えていたのだ!なんせ女神だしな!)

そんな事は置いておいて。このクソみたいな空気を何とかしな
いと——

「え?あのヒロフミが?」

「…アイツ自分の親殺したの?」

「アイツのせいで…私のお父さんは…」

あーあー、ほーらこうなる。んで、やらかしてくれた教師は——
——と、なんだあれ?

「すごいなあ、良かったなあ」だど?…：のほほんとしすぎじゃね?

「…おい、どんな手を使ったんだよ悪魔」

とうとう痺れをきらしたクラスメイトの一人が俺に向かって今にも掴み壁際へと押しこむ。

そんなことしたところでこのダイヤモンドよりも硬いメンタルを持った俺にはノーダメだが。

…：そうだ。いっちよイジって遊んでみるか。

「別に?何も、実力だよ。実力。…：にしても君らみたいな人がヒーローねえ…?」

「っ！なんだよ！悪いかよ！」

「そうは言っていないさ。：時に、俺がまだ幼い頃の個性事故。知ってるだろ？」

「ちよつと…」

見かねたように、止めようとしてくる響香。

「大丈夫だ響香。大丈夫」

そう言って落ち着かせる。

だが、目の前のクラスメイトはそうは行かない。

「…だからなんだってんだよ！ここに住んでる人間なら皆知ってるさ！…それに、俺の母さんもお前の家の近くを通ったせいで足を怪我したんだぞ！」

「へえ、俺は俺自身の手で母親を殺したけど？」

「っ……………」

「何黙り込んでんの？別に良くあることだろう？強個性の子供が個性を発動した時の周囲に被害が及ぶこと。俺の場合は父も母も死にじまつたけど…ま、もう吹っ切ってるさ。んで？ヒーローを目指す人間がこの自分の親を殺しちゃったこの“悪魔”がどんな卑怯な手を使ったかって？答えは何もやっちゃいない、が正解だ。過去に踏ん切りをつけて、人を、親を殺したこの個性でヒーローへの切符を勝ち取ったんだ。：大体、何らかの卑怯な手を使って雄英を目指すなぎ、二人に申し訳がたたないしな。それになにか文句でもあるか？ん？」

終始おどけた調子だったが、最後の方だけ睨みを利かせつつ低い声で聞いてみれば、黙りとなつてしまった。

少し大人げなかったが、これくらいで良い薬になっただろう。：ゲスとか言うなよ！

あと、実力で入れただなんて言ってしまったが、これは本当だ。

実は一週間前にHOOKスさんがいきなり現れてビデオカメラ片手にこんな事を言ってきたのだ。

『ちよつと上に報告することがあるから模擬戦してくれない？』

と。今思えば試験…の代わりだったのだろう。

ちよつとした憂さ晴らしに使ってしまったが、ま、問題ないでしょう。

さて、目の前のヤツはまだ黙ったままで俺の方を睨みながら何やらブツブツと呟いているが、生憎と聞こえないな。

名前は…なんだっけ？覚えてないや。その価値も無さそうだ。

「とりあえず、そろそろ離してくんね？バイトに遅れる」

「……っチー！」

舌打ちと共に悔しそうに俺を睨みつつパツと離す。

たまんないね、この感覚。あとやっぱりこいつにヒーローは向いてないな。

さ、とつととバイトに向かおうと。

響香の決意とヒロフミの憂鬱、それと焼き鳥。

< 耳郎響香 side >

ウチには、ちっちゃい頃からの幼なじみがいる。

名前は黒魔ヒロフミ。顔はいいけど性格が結構クズなところがある…でも、それ以上に人のことを思いやる事のできる…そんな人間だ。

ウチがまだ小さい時に個性の事で「耳長女!」とイジメられた所を助けてくれたこともあったし、その後で、

「大丈夫。響香の耳はとってもえr…ゲフンガフン…カツコイイから! 自信もつていいよ!」

となくさめてくれた事があつた。…イヤ、いま思えばアイツ何か変な事を言っていたんじゃないかなろうか? まあ、後で問い詰める事にするか…

ともかく。ヒロフミはウチにとって“ヒーロー”というものに憧れを持つようになったきっかけの一人だ。

——でも、そんなヒロフミには誰よりも深い“闇”がある。

通称悪魔の子事件。世間ではそう記録されることになったこの事件は、ヒロフミの個性の発現時の事故として記録されている。死者二名、重軽傷者複数を出し、その内の二人は、ヒロフミの両親だったのだ。

当初は記録的なガス爆発としてニュースでは報じられたが、どこから掴んだのか悪質なゴシップ紙からの報道のせいと、一気にその名前は広がり、親族からは絶縁、世間からのバッシングに晒され続けた。そんなヒロフミを見て、放っておけなくなったウチの両親は、(養子としてでは無いけど)第二の家族として受け入れた。

…誰よりも辛いはずなのに、ウチを守ってくれて、怖がられていられるにも関わらず困っている人を助けているのに、今日みたいな事を言ってくるやつがまだ沢山いる。それも同世代に。

…その度に挑発的な事を言つて、ヘイトを買うのはどうかと思うけど…。

でも、でも！必ず強くなって、ヒロフミを…今度はウチが、守れるようになるんだ！

<耳郎響香 side out>

<ヒロフミ side>

「ヒロフミくーん！串20本追加ねー!!」

「はーいー」

じゅうじゅうと。次々とオーダーを消化していく。

というわけで(?)焼き鳥を焼いている黒魔ヒロフミですわく

!

現在、女神の家に住まわせてもらってるんだけどね…ぶっちゃけ、気まずいんでこうやってバイトを沢山して、少しずつ一人立ちの賃金を貯めています。

…まあ、自分でもクズな性分は自覚しているけど、受けた恩は必ず返すようにだけはしている。

ヤクザだった前世の父からの教えだ。

…今世の父と母は知らない。だから、事故とはいえ殺してしまった事に罪悪感はない。

そりゃあ、元の黒魔ヒロフミ君には可哀想とは思うけど、でも、それまでだ。

…はあ、シリアスな気分になっちゃったな。

こんな気持ちで焼いていると不味くなってしまふ！切り替えて焼きまくるぞおお!!うおお!!

「お！ヒロフミ、気合い入ってんな！オレも負けねえぞ?うおお!!」

「ふっ、店長、遅いですね…まだ”ギア”上げていきますよっ」

「望むところだ！まだまだ若造には負けんよ!」

この後、オーダー以上に焼きすぎて店長の奥さんに怒られた…。

くそっ、店長が煽るからいけないかったんだ!

雄英入試と新たな悪魔。

<ヒロフミside>

さて、試験の日がやってきた。…まあ、俺は合格しているから響香の試験の日って事なんだけども。

まあ、勉強、体術をあらかた叩き込んだし、原作よりも強くなってるから問題ないでしょ。

何故、ここまで手を貸すのかというと、俺というイレギュラーが介入したせいでどこが原作改変となってしまうかが分からないせいである。

だからなるべく原作キャラである響香は強くなっていて欲しいのだ。

それは置いといて、昨夜の響香の試験のために行った壮行会はめちゃくちゃ盛り上がったなあ…。

響香の父親はミュージシャンということで、今日のために試験頑張れソング（五分間）を熱唱し、響香の顔が、恥ずかしさと嬉しさの半々みたいな顔で照れていた。可愛い（確信）。

とはいえ、一応送るとしよう。

「別にヒロフミは来なくていいのに…」

「んーまあ、そうなんだけどさ。受験とか行く時って結構寂しいもんだろ?」

響香は、俺の言葉に少し照れたような表情を浮かべてから

「…ん、まあ気遣いアリガト」

と、そっぽ向きながら返事した。

耳は寒さのせいか真っ赤になっていた。

そんなこんなで。言葉少なめで歩いていると、とうとう雄英のものの前に着いた。

「うっし！頑張れよ！響香!!」

「ちよ、アンタ声デカ…も、もう分かったから！…頑張る、よ…」

俺の大きな声に面食らいつつも頷き、確かな足取りで雄英に入っていた。

さて、とりあえず帰りますk「おい」

「ぬわらばっ!？」

低い声がいきなり耳元に届き、びっくりして振り返って見ると、髪は黒く長いながらも、ボサボサのいかにも手入れしていなさそうな、冴えないおじさ…お兄さんがいた。

「…お前、確か校長の言っていた絶対指名者ってヤツだよな…?」

「は、はあ、そうですが…ってプロヒーローのイレイザーヘッドさんじゃあないですか」

「…一応アングラ系で、あまり顔を出していないが…まあ、いい。なんでここに来た?お前はもう合格してるはずだろう?」

ンだよ。びっくりしたわ…というかなんというか…しよぼいな…ワロタ。

「友人がここのヒーロー科を受けるんです。俺はその付き添いです」

「…そうか。ならあまり長居しないことだな」

「へーい」

「…言葉遣いが少し悪いようだな…」

やっべ。除籍…は、まだ入学前だからないか。

「すみません。以後気をつけます」

「はア…」

ため息の後に、イレイザーヘッド——もとい、相澤先生はどこかへと姿を消した。

まあ、モニタールームだろうな。

なんて考えていた時だった。

自分の中に、何かが増えた”。

人格とかそういうものではなく、個性が”拡張”された感覚とも言うのだろうか。

個性を試していた頃に何度かあった現象だが、少しおかしい。

というのも、俺の使う個性…悪魔は全てがチェンソーマン世界の悪魔のビジュアル・能力をしており、あとから追加されていった悪魔達はどれも見たことのある、しかしそこまで強く無かった悪魔だっ

た。(ヒルの悪魔とか)

追加されていた悪魔は俺の胎——亜空間へと収納された。亜空間の正体についてだが、恐らくアレはチェンソーマンに出てきた地獄、のようなものではないだろうかと考えている。

目を閉じ、念じる事で何時でもその中を確認できる。

話が逸れた。

それで今回俺の胎に入ってきた悪魔——計三体はどれも別格の強さのオーラを感じる。

冷や汗が吹き出る。

かつてここまでの悪魔は『支配』と『銃』の悪魔だけだった。

恐る恐る目を閉じ、胎の中を確認すると件の悪魔三体が佇んでいた。

この個性で使う悪魔達には基本自我が無い。

きっと神が制御しやすいように調整してくれたのだろうが、この三体は違う。

周りをキョロキョロと見回し、理解できない言語をブツブツと呟いている。

支配の悪魔を呼び寄せ、最大限に注意をはらいつつ、近づきその名を確認する。

——の悪魔。

——の悪魔。

——の悪魔。

…ふう。

もう…何も…見たくねえ……………(現実逃避)

雄英高校、入学。

『いいねえー！応援するよー！ヒロフミ君！君はその過去を持っていないが、前から見続けるその姿！実に好ましい！キミに力を貸そう！』

と、元気よくその悪魔は答える。

『……キミは光になるべきではない……闇であることが……キミの霸道であり……栄光でもある……だが……キミのその“イカれ具合”が気にいった……力を貸そう……』

と、静かに、しかし悔やむようにその悪魔は答える。

『いやあ、愛されてるねえ。面白い。ん？私かい？もちろん、力を貸そう！なんせ楽しそうだ。……キミの行く道が美しいものであることを祈るよ』

と、ニツコリと笑みを浮かべながらその悪魔は答えた。

<ヒロフミ side>

と、とりあえず三体の爆弾悪魔の処理は何とかなったようだ。

色々と考察したいことが多いけれど、いかんせん情報が少なすぎる。

三体の悪魔についてはもう少し様子見というか。

さて、響香はどうなったかというところ……無事、雄英に合格した。

響香の両親は泣いて喜んでいた。もちろん俺も喜びの舞い（ゲツダン）を踊り祝福した。

……すぐにやかましいと怒られてやめた……

そして、今日、雄英高校入学の初日となった。

制服に身を通し、俺と響香の二人は玄関で、隣にならび立つ。

「にしても二人の制服姿……最高にロックだな！」

と響香父がサムズアップしながら満面の笑みを浮かべて、

「ええ、本当に……立派になって……」

と響香母がしみじみとした声で俺たちの成長を喜んでいる。

——きつと、天国のお父さん、お母さんも喜んでいますよ。

と、言葉を続けた。

「……ん、まあそうだといいいんすけど」

おい、黒魔ヒロフミ。お前が子供の頃から憧れていたヒーローに近づいたぞ。

…だが、ここからだ。まだ道は長いけれど、俺なら行ける。だから見とけよ。

いままで、俺のことを実の子のように育ててくれた言葉に胸がジン…となり、目から涙が…あ、これ醤油だわ。

「ちよ、アンタ涙…ってこれ何!？」

「何って…醤油だけど？」

「醤油だな」

驚きながらツツコむ響香と冷静に返す俺と響香父。

「まあまあ、ヒロフミ君だって思春期ですもの。醤油の一滴や二滴くらい目から出ますよ」

「出ないからね!？」

「俺は出たぞ」

「父さんが…？」

言っている意味が分からず宇宙猫のような顔をする響香。

「…まあ、ドツキリなんだけど」

緊張をほぐすためのね。

「…はあ…もう…」

「スマンの。…んじゃまア…」

「…行つてきます!!」

——行つてらっしゃい。

二人の声を背に受け俺たちは“憧れ”への第一歩を踏み出した。

個性把握テスト。上

<ヒロフミside>

たわいのない(目から醤油を出す宴会芸についての)話をしながら雄英を目指し歩く。

木々が流れ、街を進めばあつという間にアニメで見た雄英高校に着く。

中に入り靴を履き替え、クラスを確認する。

「…同じA組…だね。ヒロフミ」

少し嬉しそうな声で話す響香。

「ん、やっぱ顔見知りと同じクラスだと気が楽でいいわ」

と返し、階段を登り——A組のドアの前に立つ。

でかいなあおい。

ガラリ、とドアを開けると原作でお馴染みの爆豪と飯田の言い争いはまだ起こってないようだった。

「にゃんぱすー!黒魔ヒロフミツデース!気軽にヒロフミと呼んでクレメンス!」

「うおあつ!キャラが濃ゆいやつが来たなオイ!」

「アンタ、一緒にいるのが少し恥ずかしくなる挨拶やめなさいよ…!!」

驚きつつもよろしくなつ!と声をかけてくるツンツン赤髪は切島君だな。リアルで見るとほんとツンツンしてるなその髪どうなってるねん。

ちなみに爆豪くんは俺の事をチラリと見るとチツ!と舌打ちしただけだった。ヤンキーすぎる。

「えーっと席は…ここか。んで?数はひい…ふう…みい…そして俺入れて二十一人…なるほど〇〇不在のタグはなくA組二十一人のタグの世界であったか…」

「はあ…今度は何言ってるの?」

「気にするな。別世界からの電波を受信したに過ぎん」

「へえ、それが個性なのか！強そうだな！」

「違うからね!？」

朝からコントのような会話を続けていると――

「やあ！ヒロフミ君…と言ったね！お、じゃなくて僕は飯田天哉！よろしく！」

「ういっす！オイラは峰田実だ！…お前…朝から女と登校とか…羨ま
しすぎんだろおっく〜！」

「私は八百万万ですわ。よろしくお願いします。ヒロフミさん」

「ふむ…マジメ君に助平君にサ〇メ嬢だな。よろしく」

「二違うからな（いますわ）!?!?」

声ピツタリやん。素晴らしいね。お笑いグループ組まない？

…しかしまあ、すごいと言うべきか、こんな変なやつを受け入れ
ているこいつらは間違いなく、陽キャだなあ…。

「うっ！陽キャだ…！目がア！目がア！」

と、某天空な城の、三分間待つてくれそうな大佐のモノマネをす
ると一気にドン引いた様子となった。これが…恋?!?（違います）

「あー…コイツはいつもこんな感じだからあんまり真面目に取り合わ
ない方がいいよ。私は耳郎響香。そのヒロフミとは幼馴染」

よろしく、と。疲れと笑顔が入り交じったような顔で自己紹介をす
る響香。

「お、おう…何か…苦勞してるんだな…」

労わるように切島が声を掛ける。

なんだよー。別に俺そこまで苦勞かけた覚えは…あるわ。ご
めん…

と、ともかく。とりあえず全員の自己紹介と挨拶が終わったな！
そこから四、五分ほど経っただろうか。会話が舌打ちしか無かつ

た爆豪と飯田の言い争いが始まった…後に、入ってきたのがこの世界
の主人公の緑谷出久だ。

いやあ、漫画で読んでても冴えないなと思っていただけ但实际上に
見ても本当に冴えねえな！

なんて、とっても失礼な事を考えていると、イレイザーヘッド――

——もとい相澤先生がぬるりと入ってきて“個性把握テストなるものをやると言い出した。

合理的だ何だと言いながら体操服に着替え外に出る。

いやあ：漫画で読んだ流れを実際に体験するのは感動するなあ…。

さて、ここから原作のイベントの一つが始まる。目指すは一位！

頑張るZOE☆！

個性把握テスト。下

<ヒロフミside>

男子更衣室にて。

「ヒロフミ…お前…すごい筋肉してるな…」

「んまあ、鍛えてるし」

「鍛えているからって…すごいなあ。制服越しじゃあ全然分らなかったのに…」

「細マッチョってやつか？」

個性の影響で肉体を鍛えてる切島が俺の肉体に目を輝かせる。

へへん…凄いだろう！

そんな雑談をしていたことで切島とは結構仲良くなったと思う。外に出て軽く準備運動を済ませると相澤先生が個性把握テストについての説明をする。

曰く。中学までは公平性を保つために個性を使わずに身体テストをしていたがこの場では個性を使ってテストして良いとのこと。

「何それ？面白そう！」

とピンク肌の美少女——芦戸三奈が澆刺とした声でこのテストに関して好意的に受け取っているようだ。

周りもそれは同じようで、中学よりどのくらい記録が伸びるのか？であったり、自分の個性であつたらどの項目が有利なのかを考えていたり、まだ、自分の個性の制御ができていない…どうすれば…？とブツブツしていたり。

…まあ、最後のやつはデク君だろうけど。

そんな三者三様の反応を示す中、担任の相澤先生と原作を知っている俺だけがただ、何かをするでもなく、その様子を眺めていた。

そんな俺を不思議に思ったのか相澤先生が近付き「…何か気付いた事でもあるのか？」と、聞いてきた。

「…ん、まあ、話を聞いた時は面白いと思いましたが、どうもただのテストのようには思えなくて…」

と、答える。まあ、原作知ってますしおすし。

「…へエ…何があると思ってるんだ？」

ニヤリと、興味深そうに笑いながら聞いてくる相澤先生。

うへえ。これ期待してるパターンじゃん。

「そうですねえ…まだあまり先生の人となりを理解してるとは思ってませんが…先生って相当な合理主義の人でしょ？ならまア…このテストでビリになった人は除籍…またはそれに相当する罰ゲームを用意してるでしょ？その方が、みんなもこのテストにやる気出すでしょうし」

「…ほう…」

偉そうに原作知識を振りまけるのもオリ主の特権よな。

それはそうと相澤先生、すっごい笑顔。同じこと考えていた生徒がいてよっぽど嬉しかったのかな？

「ちよ、ちよっと！それは流石に嘘つスよね!？」

と、先程までの喧騒はどこへやら。クラスメイト達は静まり返っていた。

少し震えた声で「嘘だよな？」と確認するように聞く、金髪の少しチャラそうなクラスメイト——上鳴電気の希望は相澤先生の次の一言で粉々に粉碎される。

「ああ、本当だ。黒魔の推察通り——このテストで最下位を取った者は除籍処分とする」

「「ええええー!!!」」

一部を除いて、驚きの声をあげる。

既に息ピッタリなクラスメイト達に苦笑しつつ、ビリを避けるために何をしようかなと考えていると——

「よし、じゃあこのテストを見破った黒魔からこのハンドボール投げをしてもらおうか」

「さあお前の個性実カを見せてみる」と言わずとも伝わるように視線で挑発してくる先生。

…すげえニヤついてやがる……

……んー、そうだなあ……あ！こいつを使うか！

「お……おい……ヒロフミの腕が……なんか……人体模型の腕みたいになってるぞ……!?」

「しかもめちゃくちゃムキムキだ……」

使用したのは筋肉の悪魔。チエンソーマンじゃ序盤に殺されたヤツだが意外とポテンシヤルは高く、俺の身体能力を底上げしていく。

増えていった筋肉は既に成人男性の平均身長分くらいには大きくなっていた。

が、サークルの外に出ていないのでセーフだな！

……さて、このくらいの筋肉なら……

「——つしよつとー!」

右手に持ったソフトボールを投げ飛ばす。すると、あつという間に見えなくなっていた。

常人じゃまず耐えられない筋肉の量だが問題ない。

俺の個性は大きく分けて三つの区分に分けられている。

まず一つはいま発動している『異形型』。

これは、悪魔の一部を身体に宿すことでその力を使えるというものだ。

次に『発動型』。

これは悪魔本体に俺自身が変身すること……つまりデンジ君が胸のヒモを引っ張り、チエンソーマンになったり、レゼが首のピンを引き抜いてボムになることと同じことが出来るわけだ。武器人間を使う際はこのタイプだ。

そして最後に『召喚型』。

これは悪魔を呼び出すこと……であったり引き込んだりすることが出来るというもので、その最たる例が『闇の悪魔』や『銃の悪魔』などの強悪魔などがこのタイプとなる。

もちろんデメリットは存在するが……まあ、体力が減るだけとかいう明らかに、コス^神パ^盛の^パフ^{オー}マン^スの部分^たの方^チが高い^トという訳が分からない性能してるのだ。

それはおいとして
閑話休題。

俺の投げたボールはどうなった？

「…結果は666・66m…まあ上出来だ」

「二結果は凄いのにな数字が不吉だ…！」

「いやそれな？」

またしてもA組は息ピッタリにツッコむ。

いつくらの悪魔の力つたつたって流石に…ってなったわ。

「でもっ！最下位除籍って…！入学初日ですよ?!いや初日じゃないくても…理不尽すぎる!!」

確かになあ…でも、相澤先生は、イレイザーヘッドそう考えないんだわ…。

「自然災害…大事故…身勝手な敵たち…サイランいつどこから来るかわからない厄災…日本は理不尽にまみれてる」

そう言うのと髪をかきあげつつ、フ、と。笑う。

「そういう理不^{ピンチ}尽を覆して行くのがヒーロー。放課後マックで談笑したかったならお生憎。これから三年間、雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける」

髪から手を離して、不敵な笑みを浮かべる。

「Plus ultra」さ。全力で乗り越えて、来い」

いーいねえ…燃えるじゃん。

あれよあれよと。時間は過ぎていく。そして気づけば結果発表となった。

いやあ、個性把握テストは難敵でしたね。

…まあ、ほとんど筋肉の悪魔で済んだし、好成绩を取れたな！やはり筋肉ツ！筋肉は全てを解決するツ!!

相澤先生が前に出てホログラム装置のようなもので結果を投影する。

順位は…一位か。筋肉つてすげー！八百万が悔しがってる。んでデク君は…まあ、最下位か。

周囲からの同情の視線が集中し、本人はガタガタと震えている、

が――

「ちなみに除籍はウソな」

「……………!?!」

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

「二は……!!?!」

飯田はメガネを割り、麗日お茶子——個性『無重力』の少女はその大きな口をあんぐりとさせ、デク君に至っては写真を取った時にブレて写った時のようになっていた。

「あんなのウソに決まってるじゃない……ちよつと考えれば分かりますわ……」

と、呆れたように言う八百万。

「ははっ、なるほどねえ……ダブルスタンダードってわけか。ズルいねえ……先生?」

隣に立ち、ニヤリと笑いながら俺と先生にしか聞こえない音量で話しかける。

「はっ、俺はいつも合理的だと判断した方を選択する。今回はこういう結果になった……それだけだ」

……ま、そういうことにしておくかね。

安堵している緑谷とその周りをながめる。

……こうして見てみると、ヒロアカの世界に転生したということを実感するな。

「緑谷……だったか?お前指大丈夫か?」

「あ、ありがとうございます……えーっと……」

「ヒロフミ。黒魔ヒロフミだ。よろしくな」

「ヒロフミ君……だね。よろしく……ッ痛っ!」

「あ……全く、だから左手出したのになんで痛めてる方ですかねえ……」

「はは……ごめん……」

すると見かねた先生が、

「これ。リカバリー^ほガール^あのところで治してこい」

と言いついプリントを渡して去っていった。

「ならまあ、とっとと行ってこい。怪我の放置はあんまり良くないからな」

「うん!ありがとう!ヒロフミ君!」

そのままデク君は走り去っていった。
さ、俺も着替えて響香と帰ろーつと。

戦闘訓練。上。副題：ヒロフミの受難

<ヒロフミside>

さて、昨日の個性把握テストから一日が過ぎ、雄英での学生生活、二日目となった。

いつものように起きて、朝食を食べた後に制服に着替えて響香と共に登校する。…あれこれカッフルみたいだな??…今更か?

途中でデク君と出会い三人で話しながらの登校となったが、中々楽しかった。(デク君の話題は全てヒーローに関するものだったけど)

あ、そう言えば、デク君っていつ呼ぶことにしようか…。んく、麗日が「デク君」って呼んでる時に合わせて言うことにしようかな。緑谷って呼ぶのも堅苦しいしな!

…女子はどうしようか…。んく、分かんねえ。そもそも響香は幼なじみだから呼び捨てにしているのであって、他の女子はなあく。…分かんねえ!この年頃の間感分かんねえ!

前世じゃアラサーだったからなあ

とまあ、色々悶々としつつA組に着くと、

「知らぬが仏!」

「知らぬが、仏??…どういうこと…??」

「浮かんできたんですよ…言葉が…」

「知らぬが仏」が…??」

「ヒロフミ君って、イケメンで個性も強そうなのになんか…」

「これでバランスをとっているんだ」

「はあ…ヒロフミは、マトモにおはようが言えない病気なんだよ」

呆れたような声で突っ込む響香。

どういふことなの…?と、宇宙猫となる芦戸、切島、上鳴、緑谷の四人。

いやア…眠いと脊髄で話しちゃうんだよねえ…

仕方ない。仕方ない。と、頷きつつ、教科書を準備する。

「んじゃ次の英文のうち間違っているのは？」

金色の髪に鶏のトサカのような髪型のヒーロー…もとい、英語の教師でもあるプレゼント・マイクが教壇に立ち、黒板に英文を四通り書き連ねていく…のだが、中々にシユールな光景だな、これ。

「おらエヴィバデイセイヘンズアップ盛り上がれー!!」

周りも同じことを考えていたようでそのシユールな光景に中々順応することが出来ずにただ見ているだけで、しびれを切らしたプレゼント・マイクが叫んだ。

慌ててデク君が手を挙げ問題に答えた。

まあ、いかにヒーローを育てる高校の、最高峰と言えど扱いは普通の生徒のそれと何ら変わらないな。

なんて、どこか他人事のように考えつつ、時間は過ぎていった。

<ヒロフミ side out>

<三人称>

爪楊枝で、歯に挟まったものをとっているヒロフミ。

やはり唐揚げ定食は安定して美味いなくなってるって考えると廊下の辺りから、

「わくわくたわくわくがくく普通にドアから来た!!」

と、前のドアから一際画風が違う大男——オールマイトが勢いよくA組の教室の中に入ってきた。

(画風が違いすぎんだろー!アメコミかよ!)

と、心の中で突っ込むヒロフミ。

周りは「すげえ…!銀時代のコスチュームだ…!」「画風が違い過ぎて鳥肌が…」と感嘆の声が周囲からあがる。

鼻歌交じりに教室の中央へと向かうオールマイト。

「今日のヒーロー基礎学…ヒーローの素地を作る為様々な訓練を行う科目だ!!」

と元気な声でこの授業についての説明を行い始める。

「早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!」

Battle!と書かれたプラカードを周りに見せつけながら大きな手振りで話す。

A組は緊張と、期待の入り交じった興奮状態へとなっていた。が、ヒロフミは未だに歯に挟まっているものを取ろうと爪楊枝を動かしていた。ある意味平常運転というところだろうか。

「そしてそいつに伴って……こちら!!」

オールマイトが、リモコンを操作すると左の壁が突如として動いた。

「入学前に送ってもらった「個性届」と「要望」に沿ってあつらえた……」

01、02、03、と。数字を割り振られたアタツシユケースが姿を表す。

「戦闘服!」

「「おおお!!」」

戦闘服。それは、幼い頃に夢想した己の“憧れの姿”^{ヒーロー像}のカタチ。

それを前にしたA組の面々は興奮も最高潮といったところだろう。

…未だに歯に挟まっているものを取ろうとしているヒロフミを除いて。この男はいまの熱い展開の中で何をやっているんだ。

「クソっ!このままじゃ、やりすぎて血が出ちまいそうだ!」

「なんでアタタはこんな時まで自分のペースなのよ……」

と、肩を竦めてやれやれとため息をつく耳郎。

「まあ、俺のは地味だしなあ……」

ボヤきつつも、アタツシユケースを手に取り男子更衣室へと向かった。

ヒロフミの戦闘服は、とても地味だ。

黒いスーツに白いシャツ。そして膝元まである黒いコート。

一見すれば、ただのサラリーマンにしか見えないその服だが、その性能は高く、優秀なものとなっている。

先ず、弾丸すら弾くロングコートは、そのまま市民を守るための盾として使えるようになっていたり、ベルト部分にはポケットが着いており、応急処置の一式が詰め込まれている。

(ロングコートの中にはチュッパチャプスのコーラ味が常備されていたりする)

そんな地味だが凄い戦闘服を身にまとい外に出ると、どうやら一番乗りのようだった。

「おや、黒魔少年じゃないか！それが…君の戦闘服なのかい？…なんというか…その…」

「地味、でしょ？」

「ま、まあ、ユーモアのない言い方をするならそうだな」

自身の戦闘服なものにも関わらず、あんまりなもの言いのヒロフミにオールマイトは少しだけ面を食らうが直ぐにたてなおし、

「でも、それが黒魔少年のヒーローの形の二つならば、私は何も言うまいやー！」

ウインクをひとつ零し、茶目っ気を見せるオールマイト。

その様子を見たヒロフミは、何故、オールマイトがナンバーワンヒーローであるかという理由がよくわかったような気がした。

（まあ、この服はデビルハンターを意識してヒロアカ風にアレンジしてもらったものなんだよなあ）

そんな話をしていると、

「お！ようやく来たか！」

威風堂々と。胸を張り、自身のヒーローを投影した姿で現れたA組達を見てオールマイトは一層笑みを深めた。

「さア——始めようか有精卵共!!戦闘訓練のお時間だ!!!」

ヒロフミは皆と一歩離れたところに立ち、腕を組みながらオールマイトの説明を待った。

すると、耳郎が近づいてきて、

「ふーん、それがヒロフミの戦闘服なんだ？」

「まあな。地味だろ？」

「ふ、まあ、否定はしないわ」

だが、これでいいのさ。と自慢げに胸を張るヒロフミ。

互いにスーツのポイント等を話していると、

「先生…ここは入試の演習場ですがまあ市街地演習を行うのでしょうか!？」

ビシッと、手を挙げながら飯田がオールマイトに質問した。

「いいや！もう二歩先に踏み込む！屋内での『対人戦闘訓練』さ!!」

曰く。敵^{ヴァイラン} 退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内のほうが凶悪敵^{ヴァイラン} 出現率が高い。

つまり、賢い敵^{ヴァイラン}ほど、屋内^{やみ}に潜む、ということだ。

それにより、A組は「敵組^{ヴァイラン}」と「ヒーロー組」に分かれ2 on 2の屋内戦が行われる。

と、ここで一言区切るオールマイト。

そこに畳み掛けるようにA組のクラスメイト達が質問を教師でもあるオールマイトに投げかける。

三者三葉、十人十色の質問を投げかけるA組のメンバー達にオールマイトは聖徳太子のようだとぼやく。

しかし、答える暇がないと思ったのか、全て無視して話を続ける。

「いいかい!? 状況設定は「敵^{ヴァイラン}」がアジトに「核兵器」を隠していて、「ヒーロー」はそれを処理しようとしている!」「ヒーロー」は制限時間内に「敵^{ヴァイラン}」を捕まえるか、「核兵器」を回収する事。「敵^{ヴァイラン}」は制限時間内まで「核兵器」を守るか、「ヒーロー」を捕まえる事」「二設定アメリカンだな!!」

と、カンペを見ながら言い切って一区切りした。A組の皆は、その状況設定にアメリカンっぽさを感じつつ内容を頭に詰め込んでいく。

「そして、コンビ及び対戦相手相手は——くじだ!」「適当なのですか!?!」

飯田が思わずツツコむが、直ぐに緑谷が、プロは他事務所のヒーローと急造チームアップすることが多いことを例に挙げ、納得させた。

(うーん…俺がいる場合くじ引きってどうなるんだろう…?)

ヒロフミはこの展開のことを知っているため、特に口を出すことはなかった。しかし、自分というイレギュラーが介入しているせいでペアの結果がどうなるのか気になっていた。

「さあ、くじ引きだ!…:とりたいところだが…:A組は21人いるため一人あぶれてしまう!」

「!?そう言えばそうじゃん!二人組が組めないじゃん!」

思い出したかのように話す上鳴。周囲も「そう言えば:」「言われれば確かに合わないですわね:」と、どうするのだろうかというオールマイトを見ると、その質問は想定済みだったようで、

「確かに、その質問は尤もだ。だが!心配ご無用!!今年から我が校雄英では一つの制度を新たに始めた!!」

チラリ、とヒロフミの方を見てから直ぐにA組全員の顔を見渡し、

「その名も!」絶対指名者制度!」

「絶対指名者制度??」

あまりピンと来ていないA組。(ヒロフミを除く)

「そう!雄英高校の校長先生、そして、私含め教師全員が認めた、既に“プロヒーロー”として活躍できる者を是が非でもこの高校に入学させる制度!それこそが、絶対指名者制度、だ!!」

オールマイトのその言葉に一同は啞然となる。

無理もない。如何に、ヒーローを目指すための高校の中の最高峰と言えど、まだ彼らは入学したばかり。その中に既にプロヒーローと遜色のない者が既にいるのだ。

「ス……スゲエ……」

「そんなやつが……いるんですか……!?!」

「このA組に……!?!」

厳しい試験もあつた推薦組もこの事実には驚きを隠せていなかった。

…それは、爆豪も同じようで、大きく目を見開き、愕然とした。

しかし、ヒロフミだけは頭を抱えていた。

(なんで言うんだよお!!これってつまりは:俺一人VS二人ってことになるやつだろお!!そして高確率で強いやつが当たるはず:こういう時の俺の勤はよく当たるんだよ……)

今までにないピンチに陥ったヒロフミ。

お願いだ。もうここまでにしてくれと、オールマイトを見るが、そんなヒロフミの願いは終ぞ届くことはなく、ヒロフミを指さし、こ

う言い放った。

「そう！その絶対指名者こそ！そこの黒魔ヒロフミ少年なのだ!!」

瞬間。ありとあらゆる目という目がヒロフミに集まる。

そして、

「「ええええええ!!!!すげええええ!!!!」」

破裂した。

「うぼあ」

ヒロフミは呻いた。が、その呻きは誰の耳に入ること無く、かき消されるのであった。

戦闘訓練。中。副題：悪魔の子事件、裏。

モニタールームにて。

「…恨みますよ…オールマイト……」

「悪かったって……ゴメン……でも、校長先生には『この程度のプレッシャーに負けてるようじゃヒーローにはなれないよ!』って言ってきたから……」

「はあ……もういいです。対戦相手にこの怒りをぶつけますから……」

「お、oh……ほどほどにしてくれよ……?」

はあ……と、大きいため息をつくヒロフミ。

疲れたように壁にもたれかかり、冷めた目でモニターを眺める。

「ケロ……災難だったわね……」

「ん、あーっと……」

「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

「OK。梅雨ちゃん。よろしく」

寄ってきて、ニッコリと笑い手を差し出す蛙吹。

同じように微笑み、握手するヒロフミ。

「(うわー!ほんとに「ケロ」って言ってるうー!)」

内心では感動で騒ぐヒロフミだが、ポーカーフェイスが得意なために表に出すことは無い。

しかし、その様子を見ていた響香は少しムツとした表情になるが……すぐに普通の表情になり、

「梅雨ちゃん……だっけ?ウチは耳郎響香。よろしくね」

「ええ、よろしく」

挨拶も短く返した。

一見、淡泊なやり取りにも見えるがそれも仕方ない。

なぜなら既に、Aコンビ対Dコンビの対戦が始まっているからだ。
だ。

モニターに映された戦いは泥臭くも、熱い展開が続いていた。

く時は流れく

「ギア！最後の大大トリだ！の、前に、くじだ！これで黒魔少年と戦うペアを作ってもらおう！」

「まったくですか……」

「オイラあたりたくないなあ……。だって強いんだろ？ヒロフミ」

「でも、プロに近いヒロフミさんと戦えたら何か得られるものもあるかもしれないわね……」

ヒロフミと戦うことに不安を覚える者、逆に期待をする者と様々な反応の中、

「ンンン……相手は……爆豪少年と、轟少年だ！そして……黒魔少年は敵サイランサイド！そしてその二人はヒーローサイドだ！」

歯を剥き出しに笑う爆豪。我関せずといった様子の轟。うげえ、と舌を出すヒロフミ。

「うおお……強そうなやつ対強そうなやつだ……」

男らしいぜ！と拳をぎゅっと握る切島。

「よし！早速準備に取り掛かるんだ！黒魔少年、爆豪少年、轟少年!!」

「あいく〜」

「……ツス」

「分かりました」

三人は、返事は適当にモニタールームを後にした。

<ビル内>

ヒロフミの拠点となるビルは五階建てとなっており、大通りに沿って建てられていた。窓は一階ずつに大きなものが一枚ずつあり、ビルの周りは埋め尽くすように複数の雑居ビルが建てられて、実質入口は正面の一つしか無い。

五階、核兵器のある部屋にヒロフミは一人佇んでいた。

「さて、と。まずは……『永遠』『来い』」

『はっ、』

ヒロフミが片手で印を組み、召喚したのは悍ましいまでに、顔と手が生えている肉塊、もとい『永遠の悪魔』を呼び出した。

「まあ、コイツ程屋内戦に特化したやつはいないよな」命令だ。この階——つまり、五階に入れないよう、永遠の迷宮としろ」

『はっ、』

意思のない目で頷き、ビルに溶け込む永遠の悪魔。

(まだ打てる布石を打っておこう)

次に、数秒ほど目を閉じ、開く。

するとヒロフミの左目は、変化した。これは——未来の悪魔の未来を見ることのできる目だ。

ずつとの使用は支障をきたすため、任意での発動となるが、数秒先の未来を見ることが可能となった。

(永遠の悪魔は、この階への到達を阻むことはできるが個性までは分からないからなあ…もう一つの保険として蛸と…コイツだな)

吉田ヒロフミと言えば蛸の悪魔だろうと、極めてミーハーな理由で決めつつ、自分の親指の腹を噛みちぎり、血で召喚陣を地面に書くと、ベルトに付けられたポケットの中から絆創膏を取りだし止血する。

「さて、仕掛けは上々。あとはヒーロー共を叩き潰すのみ」

すつく、と立ち上がりコートの内ポケットの中からチュツパチャプスのコーラ味を口に含み、不敵に笑った。

<モニタールーム>

「にしてもヒロフミの“個性”って何だ…ろ…ってなんだありやあ!?!」

「キ、キモイ…」

「印のような物を組んで…?まるで陰陽師のような…個性なのでしようか…?」

ヒロフミの個性に驚く切島。初めて悪魔というものを見て嫌悪感を露にする峰田。ヒロフミの個性について考察を始める八百万。

しかし、この場でオールマイトと耳郎を除いた全員が思っているのは、“ヒロフミの個性の正体について”だろう。

「(…これが黒魔少年の個性…悪魔、か。その悪魔の名が恐れられれば恐れられているほど強くなる…あまりにも強力で…こんな事を言いたくは無いが…あまりにも敵^{サイラン}向きの個性だ…。なるほど、根津校長^{A.F.O.}がわざわざ新制度まで作って入れたがるわけだ…。そしてヤツが

知ったら欲しがりそうな個性だ……！だが！そうはさせん！！黒魔少年はヒーローの道を選んでくれた！！ならば！！私がつかりと導いてあげなければ……！！」

数少ないヒロフミの事情を知る者の一人であるオールマイトは、決意を新たに拳を握りしめた。

「(ヒロフミ……)」

もう一人、この場にヒロフミの事情を知る者がいる。

通称悪魔の子事件の日、ヒロフミの誕生日を祝いに向かっていたミュージシャン夫婦の一人娘——耳郎響香だ。

その日、まだ幼かった頃の耳郎は、初めて会う幼馴染のヒロフミに対して、「どんな子だろう？」と期待に胸をふくらませていた。

しかし、その希望は、粉々に打ち砕かれた——…そう、銃の悪魔によって。

ヒロフミの家だと言われた場所は跡形もなく消滅し、辺り一帯に衝撃波が拡がり家々は倒壊していた。

ヒーロー達が駆けつけ、攻撃をしようとも、一切届かなかった。

「くっ!?コイツ!でかい上に強いぞ!」

「…だが妙だ。何故、反撃してこない……?」

そう、銃の悪魔は、反撃しなかった。ただ、ただ、何かを亡くしたかのように、哭くだけ。

『《転生したら辺りが消し飛んでいた件について。なんでやっ》
!!??
“???”
“???”

……と。

「(ヒロフミは悪魔なんかじゃない。ましてや敵ライアンでもない!」ヒーロー“なんだ!それに小さい頃には公安で苦しんでいたヒーローを助けた……まるで……ヒロフミが……敵ライアンみたいじゃん!……この空気は……こんなの……こんなの……)」

所詮は悪魔。人々に恐れられるモノ。周囲を見てみれば皆どこか険しい表情をしていた。

そして……モニターの中でヒロフミが親指の腹を噛み切って召喚陣を書き始めた。

そこで、上鳴が言っではいけないことを呟いてしまった。

「…なんつーか…怖エな。本当に敵ヴァイランみたいだ」

その言葉を聞いた耳郎は弾かれたように、上鳴の胸ぐらを掴んだ。

「っ耳郎少女!？」

「なんて…言った…? 『敵』ヴァイランみたいだって…? アイツが…どんな目にあつて生きてきたか!!」

目に涙を浮かべ、叫ぶ耳郎。一度その場が騒然となる。だが、
「耳郎少女…そこまでだ」

大きな手で耳郎の手を掴み、それ以上の事をする前に止めた。

「上鳴少年は、ヒーローを志す者として言っではいけないことを言っ
てしまった…。分かるね?」

優しく、しかし咎めるように上鳴を諭す。

「…ケロ…確かにそうね…耳郎ちゃんも少し乱暴だったけど、お友達
を傷つけるようなことを言ったら誰だつて怒るわ…。それに、個性が
敵ヴァイランみたいだからって言うのは…とても悲しいことよ…」

俯き、悲しそうにポツリ、とこぼす蛙吹。

上鳴もやってしまった事に関して深く反省している様子で、

「…ごめん…」

と頭を下げた。

「謝るなら、ヒロフミに謝ってよ…」

「と、ともかく! 試合を始めよう!!」

流れを断ち切るようにパン、と手を叩くオールマイト。

そんな事は露知らず、モニターの中ではチュツパチャプスを口に
啣えて不敵に笑っていた。

戦闘訓練。下。副題：ヒロフミの舌は絶好調。

<ヒーローチーム>

「ツチ!!」

爆豪は最高に機嫌が悪かった。

緑谷のチームに倒れた上に八百万の講評でボロくそこに言われ、個性も強く、どこか気に食わない轟とのペア。そして、相手は自分を差し置いてプロに近いと言われた男——ヒロフミも気に食わない。

プライドと自尊心の塊と評される爆豪には、とてつもなく腹立たしい事この上なかった。

「爆豪…だったか?この試合は俺がビルを凍らせる。…アイツがどれだけ強かろうが凍らせてしまえばそこまでだろ」

傲慢に言い放つ轟の言葉に爆豪はカチンときた。

言外に「お前がいなくても勝てる」と言われてるように感じ、苛立ちからか顔にいくつもの血管が浮きだす。

「クソが!!ふぎけんな!!ふぎけんなよ!!おれだって一人で充分だわ!!俺だってあのヘラヘラ野郎をぶっ殺せるわ!!…あゝムカツくなあ!!一瞬でも半々野郎ならと思っちまったことにムカツく!!)…俺だってアイツぶっ殺すくらい簡単にできるだよ!!舐めんな!!」

自身の葛藤を覆い隠すように吠える爆豪。

「そうか」

そんな爆豪の苦悩など知らない轟はクールにそう言うだけだった。

その姿が余計に爆豪の劣等感と焦りを焚き付けられた。

『シア!!ヒーローチームの準備はできてるかー!!?』

スピーカーからオールマイトのどこか、空元気な声が響く。

その声を聞いた爆豪は淀んだ気持ちを切り替えビルを睨みながら、

「オイ、まずは俺があ野郎を先に見つけて、先にぶっ殺す。だから…手エ出すんじやねエぞ!!」

「…わかった。だが、時間制限がある。タイムアウトになりそうだと

判断したら問答無用でここを凍らせる」

いいな？と釘を刺す轟。

舌打ちで返事を返す爆豪。

作戦のようなものが決まったように見えるが、違う。

爆豪と轟のひとりよがりのチームもへつたくれもない
作戦モドキ。
そんなものが果たしてヒロフミに通用するか否か。それは――

『っ…それじゃ始めるよ!!ヴィランチーム対ヒーローチーム!!……
Battle:Start!!』
今から分かることとなる。

Boom!!!

爆発音とともに空に浮かび上がり、階を一つ一つ確認していく爆豪。

二階…三階…四階…そして、ヒロフミと核兵器のある五階。
ヒロフミの場所を確認した爆豪は獰猛な笑顔を浮かべ、爆破で窓ガラスを粉碎する。

ガラス片から守るために、防弾仕様のコートを広げて核兵器を隠す。

「てめエから視界を閉じてくれるとはありがてエ…が、それが命取りになるぞ!!ヘラヘラ野郎がよオツ!!」

爆破の推進力を使い、勢いよく部屋に侵入したその瞬間。

「ああ…こつちこそ有難かったぜ…別々で攻めてきてくれてよ」

コートで顔が隠れているためか爆豪にその眩きが届くことは無い。
否、そもそも眩いていた事さえ気付けない。

「はっ――？」

思わず、呆けてしまう。

無理も無い。

ついさつきまで、五階の窓に向かい、派手に素早く侵入しようとする

した爆豪が、一階下の四階の窓から突き破りながら出てきたのだから。

何が起こったのか、爆豪も轟も、モニタールームに居る全員でさえ、分からなかっただろう。

「——っ！何が起こった!?爆豪!!」

目の前で起きたことに理解は出来なかったものの、すぐに意識を取り戻し、上空の爆豪に問いかけた。

「っは!?——わから——ねエ」

轟の声で正気に戻り、呆気に取られたまま、絞り出すように返事をした。

爆豪は言葉に出来ない気味の悪さを覚え、再度五階にまで上昇する。

五階では、ガラスの破片の付いたコートを払った後に着なおしたヒロフミが飴を舌の上で転がしていた。

また、五階に戻ってきた爆豪に気付いたヒロフミは、

「よオ、バクゴークン。さつきは惜しかったなあ?イヤア、バカ正直に攻めて来てくれて俺はとても助かったぜ…。氷が何時まで経っても来ねエ。…お前ら、協力して俺を倒す気ねエだろ?はっ、大方お前が俺を一人で倒すっつって来たところだろうが」

と、ここまで小馬鹿にしたように話していたヒロフミは一度区切り、ガリツ!と飴を噛み砕き、爆豪を睨みつけた。

「——甘エンだよ。クソツタレが」

「っ!?!」

ヒロフミの纏っていた雰囲気急変する。

空気が変わる。肺の辺りがずっしりと重くなり、苦しい。

爆豪、そして下にいるはずの轟ですらその異様な空気に冷や汗を流す。

「そりやア、今”は”訓練よ。人は死んでねエし、核兵器なんてもんは無い。たかが訓練だ……だが、これが本番だったらどうする?このビルにはここら一帯を焦土にできる兵器があつて、守るべき人々が居て、爆豪、轟の前には敵^俺が居る。…なんのための状況設定なのか、忘

れたのか？なアヒーロー。このままでいいのか？」

怒気を孕んだその声は、いつものヒロフミから想像が出来ない程の低い声で、爆豪の背中に嫌な汗が伝う。

しかし、ヒロフミの心中は少し違うようで、

「ちよっ…ええええ!!何言ってるの!?!なに勝手に俺の身体の主導権握ってるの????の悪魔さあん!?!ってあれ?何故かノイズが…」

阿鼻叫喚の嵐だった。

『すまない!少し我慢が出来なくなってるね!…それと名前はまだ、キミには言えないだろう!何故なら、』

『……まだ……闇との親和性が……高まってる……から……』

『とわあ!?!オイ!ボクのセリフを取るんじゃない!?!の!!』

『……五月蠅い。五月蠅い。……過剰すぎる光は目を焼き、想い、苦しみ、葛藤を焼き尽くす……だから……オマエは、嫌いなんだ……の????の』

『あゝアゝ!?!やんのかあ!?!』

『……上等。闇で溶かしてあげる』

『はいそこまで。ヒロフミくんが困っちゃうだろう?』

『……わかった……』

「(なあ、…終わったか?)」

『まあ、一応ね。ただ、二人は犬猿の仲、宿敵、みたいなもんだから多分これからも続くよ』

「(うへえ…俺とは関係ないところでやって欲しいなあ……そういや、闇との親和性が…低いとは?)」

『んー、それは?ちゃんの言い方だからわかりやすいように言うなら、まだLvが足りてないって事、かな?』

「(なるほど……ちなみにいまのLvだどどのくらいなんだ?)」

『んー…私たちを使えるLvが10として、キミはまだ2レベだね』

「(と、遠い…っ!)」

『……ふ、私たちの名を使いたくば……闇との親和性を深め……一体とならなくば……な』

「(うへえ……)」

というやりとりがあった。

しかし、そのやり取りは周りから見ればすぐの出来事で気付くことはないだろう。

「——来ねエのか？はっ、攻めなければ永遠に勝てないぞ？」

と、挑発するヒロフミ。

なぜ、煽るような事を言ったのか？

それは、ヒロフミからするともう言ってしまったものは飲み込めないでそのままの形で挑発するしかなかったのである。

しかし、

「……クソが……そんなにぶっ殺されてエならよオ……そうと言いやがれ!!!」

爆豪が爆ぜた。

それからというもの

何度も、何度も、爆豪は果敢に攻めた。が、攻撃どころかヒロフミに届くことは出来ずにただ五階に侵入しようとして、四階から飛び出るということを繰り返していた。

しかし、刻一刻とタイムリミットは迫り、

「……やるか」

とうとう轟が動いた。

手をビルに当て——

一気に凍らせた。

が、

「知ってるんだよなあ」

ヒロフミの左目は既にその結果を見ていた。

氷が冷気と共に一気にビルを覆う。

だが、五階に到達した瞬間に、

「な……な、に？」

“石化”した。

ヒロフミがまだ幼い頃、個性について研究していた時のことだった。

「へえ、石の悪魔って対象と範囲を決めて石化することができるんだ。……え？強くね？」

チエンソーマンでの初登場は、人形の悪魔戦であり、大挙する一部を石化するだけであったが、個性化の影響からか条件と能力が変わったのだ。

話を戻そう。

五階で氷が全て石化し、ヒロフミと、核兵器の周りだけが元の地面となっていた。

ただ、

「(永遠の悪魔の反応が消えた…。凍ってしまったか…)」

ヒロフミは予想していたとは言え、思わぬ弱点を見つけてしまった事に少し気持ちを落とした。しかし、直ぐに切り替え眼前の爆豪を見据えていた。

「(…このまま睨み合っても仕方がないな)さて、爆豪。轟の氷のおかげでこのループが解かれちゃった。仕掛けるなら——「死ねエ!!」早ええなあおい」

言葉の途中で突入してくる爆豪。

右の大振りだ。

「(半々野郎に先を越される前に…!)」

石化したのを怪訝に思いつつ、急いで階段を上る轟。

「(爆豪に先を越される前に…!)」

一気に駆け上がり、五階に到着した轟がヒロフミに突撃する。

「お前を倒す!!!」

「——上等。真正面から叩き潰す」

爆豪の右の大振りからヒロフミの顔を強襲爆破しようとする。

「『蛸』、『墨』」

ヒロフミが蛸の悪魔を呼び、ヒロフミの背後から巨大な触手と共に、墨が爆豪の視界を奪う。

「っ!?!」

目が見えなくなった爆豪はその勢いを急激に弱める。

その隙を突いて腕を掴みそのまま地面に押さえつける。

そのまま捕縛テープを腕に巻き付け、確保すると、

「(原理は分からねえがここじゃ、氷は意味がねえ。…だがこつち^火は論外だ。…だから、不格好だが、こつちは核兵器に触れば勝ちだ)」

爆豪を囷に核兵器へと向かう轟。

しかし、ヒロフミは未来視の目を発動している。

そんな中、轟に気付かないなんてことはあるのだろうか？

答えは、

『蛸』やれ」

否だ。

触手を動かし、轟の左を掴んだ。

「何!？」

そのままヒロフミの足下にまで持ち込み、捕縛テープで縛る。

『ヴィ、ヴィランチームWin!!』

勝敗は決した。

オールマイトの声に茫然とし、顔を落とす二人。

それを見たヒロフミは達成感から、ふう、と息をついた。

<モニタールーム>

「シア!! 講評の時間だ!! 今回のMVPは…黒魔少年だ!! 理由は誰か分かるかい?」

「そうですね…ヒロフミさんは最初から余裕を持っていて、核兵器に近付かせなかった。その上、個性すらも封じて見せた…。正に圧勝と言えますわね」

「o…oh…:…そうだね、全部当たっているネ…」

結局言いたいことは全部八百万に言われたオールマイトは少し気を落としてつつも、八百万の講評に沿ってヒロフミを褒めるのだった。

「…だが、逆に今回ただけなかったのは爆豪少年と轟少年だ。理由は…分かるかい?」

「…やはり、チームワーク並びにコミュニケーションが全くできてま

せんでしたわね。無策で挑んで勝てる訳では無いというのはお二人も知ってるはずですが…まあ、そのような様子では負けてしまったのは当然の結果とも言えますわ」

「け、結構辛辣だな八百万少女…ただ!!概ねその通りだ!二人とも、そこが課題だぞ!!では!また次の授業で会おう!」

最後にそうしめくくると、今日のヒーロー基礎学は終了した。

戦闘訓練、後。

<ヒロフミ side>

戦闘訓練が無事終わり、大怪我を負ったデク君以外は戦闘服から制服へと着替えA組へと向かっていった。

他のクラスも授業が終わっているようで、開放感からか、少しうるさい廊下を歩いていた。

いやあく勝った勝った。二人は強敵でしたね。

：まあぶっちゃけ室内戦での永遠の悪魔は初見殺しだし石の悪魔もびつくりするくらいに強くなってたおかげだし：ほんと、俺がやった事と言えば捕縛テープを巻いたくらいだな。

ほとんどは個性のおかげだ。

確かに個性の強さは大事だが、頼りすぎるのもよろしくない。

個性と言えど身体能力の一部。そこには必ず限界がある。

個性悪魔の使用は疲労と体力を消費していく。

もし、限界を超えてこの個性を使い続けていたら？

最悪、過労死となるだろう。

嫌だよ、「朝、目覚めたらそこは冥界であった。って死んでるではないか俺ー!!」ってなるのは。

よしっ！今日から日課のランニングの距離を10km伸ばそう。

と、密かに決意していると――

「…ヒロフミ…ちよつと話が…」

何やら上鳴が暗い顔で俺に話し掛けてきた。

「ん。どうした、そんな暗い顔して？腹でも下したか？」

「いや…別にそういう訳じゃなくて…その…悪かった!!今日初めてお前の個性を見て敵サイランみたいだって傷つけるような事を言っちゃった!!」

この通りだ！と頭を下げる上鳴。

え、ええ、そんなことのために謝りにきたの??

特に気にしてないのに。なんなら俺も劇場版の敵サイランに出てきそうな個性だなんて思ってるしなあ…。

ん？待てよ…？この世界には敵サイランっていう“悪”が居て、それを

倒すヒーローが居る…となると「敵み^{ヴァイラン}たい」って言葉は差別に当たるのか？はえ〜。前世にはない感覚だなあ〜。

「う〜ん。俺は特に気にしてねえよ?」

「ほ、本当か!？」

「おう。だつて中学…いや結構小さい頃から言われ続けてたけど、そういう意見もあるのかつて流してたし。第一俺もどちらかと言うと敵^{ヴァイラン}向きだと思つてたし、俺は大丈夫。だから気にすんなつて…つてあれ?なんで黙つてんだ?」

気付けば上鳴が俺の言葉にシーンと静かになつていた。

あつれエ〜?俺なんかやりました?

「…その…ヒロフミは…強いんだな」

「?まあメンタルはプラチナよりも硬い自信があるけど…」

「なんかツライ事があれば言えよ…」

すると、いつの間にか俺たちの話を聞いていた峰田が、

「イケメンで女にモテモテだろうとか妬んでゴメンよ…オイラも出来る範囲で力になるよ…」

なんか同情されたんだが。

どういう事だつてばよ…?」

ちよつと空気が悪いな。流れも変えるために少し男子高校生らしい、下世話な話でもするか。

議題は、A組の女子たちのコスチュームで誰が一番エロかったかだ!!

この後めちやくちや盛り上がった。

A組に着くと、今回の戦闘訓練の反省会が始まつており俺達も参加することにした。

すると、

「そういえばさ!ヒロフミ君の個性つてなんなの?何かこう…ブワア!!つて出てたの!」

虚空…では無く、透明人間の少女——葉隠がそう質問してきた。

「あ、それ俺も気になつてたんだ!!」

「私もですわ…。映像で見ても全く予想が付きませんでしたわ…」
「ケロ：そうね。爆豪ちゃんを放り投げたと思ったら石化させたり、タコみたいなものを出したり：沢山能力がある個性よね」

葉隠の質問に同意しつつ、口々に疑問を出すクラスメイト達。

んー、別に隠すような事でもないし、話すか！

：何故か一瞬響香の顔が不安そうになったのは気になるが：

「俺の個性：それは悪魔、だ」

「「悪魔??」」

「そ、悪魔。——俺が使う悪魔は、それぞれ名前がある。その名が恐れられれば恐れられている程強くなる。：例えば、コーヒーの悪魔がいたとしたら、多分強くない：まあ、弱いだろう。なぜならコーヒーは飲めるし、そんな怖いイメージは無いだろ？でも車の悪魔がいたとしたらどうだろう。車とかって人を轢いたりするイメージがあるし多分強くなる。：そういう悪魔達を使うことができるのが俺の個性だ」

「強すぎんだろ!!」

「ああ、特に人々に恐れられれば恐れられる程強くなるというところがすごいな…。凄まじい」

あまりの規格外^{チート}っぷりにどこからかゴクリと唾を飲みこむような音が聞こえる。

まあ無理もないか。このチートには引くしかないだろう。

ほんとあの神、調整が下手だな!!

とはいえ、静かになったのは数十秒だけで直ぐに戦闘訓練での各自の反省会に戻っていった。

ワイワイと、皆が話していると今度はデクくんがやってきてそっちの方へと流れて行った。

さあて。今日は疲れたし帰ろっかな!!

「ヒロフミ、もう帰るの?、じゃあちよつとまってて、私も一緒に帰るわ」

帰ろうと準備していた俺に気付いた響香がそう提案する。

断る理由も無いし、

「おっけー。腹ア減ったー」

と、了承し手早く荷物をまとめると――

「んじや諸君また明日」

「おーう。さよならー」

「悪魔を率いる者よ：明日会える事を楽しみにしていよう…」

「同志ヒロフミ!!またあしたも語ろう!!」

挨拶も程々に返し、響香と共に雄英を後にした。

閑話：ヒロフミとマスコミ。

<ヒロフミside>

朝。雄英高校の門の前はマスコミで溢れかえっていた。

「うわぁ……………」

思わずため息が出る。そこら中にカメラを持った人、人、人。

例の事件からこの世界のマスコミに対して良い感情も持っていない事もあり、少し眉を顰める。

「…ヒロフミ、大丈夫？」

隣の響香が心配してくる。

「ん、大丈夫だ」

とはいえ、入らなければ遅刻しちゃう。

とつとと行こうか。

「あつー…その君！雄英生だよね!?!オールマイトの授業について話を聞きたいんだけど!」

無数のマイクとカメラをこちらに向けてくる。

だりい…

「あー…良い先生になれそうとは思ってますよ」

「それだけ!?!もつと他にエピソードとかないんですか!?!」

それだけってなんだよ。

つーかまだ入学したばっかでそんなに話がある訳ないやん。ア

ホか。

「と、に、か、く！遅刻するんでさっさと退いてくれますか?」

少し声が荒くなってしまった。

まあいいでしょ。

「わっ、分かりました。すみません…」

すこーし睨んだだけでぶるってらあ。

「はあ、行こうぜ。響香」

「うん」

そのまま、人の波を通り抜けつつ高校へと入っていった。

その中で、中年ぐらいのリポーターがぼつりと呟いた。
アイツは――

「あれ？……あの顔……どつかで……」

聞こえないふりをした。

<ヒロフミ side out >

薄暗い部屋に根津校長、相澤、そして、いつもの画風の違うオールマイトでは無く、骸骨のようにガリガリとした姿となつて座つていた。

三人が見ているのはこの前の戦闘訓練のヒロフミ対爆豪、轟の試合だ。

――そりやア、今〃は〃訓練よ。人は死んでねエし、核兵器なんてもんは無い。たかが訓練だ……だが、これが本番だったらどうする？このビルにはここら一帯を焦土にできる兵器があつて、守るべき人々が居て、爆豪、轟の前には敵^俺が居る。…なんのための状況設定なのか、忘れたのか？なアヒーロー。このままでいいのか？

モニターの中のヒロフミは自分勝手な行動で動いている二人に対して挑発と啖呵を切っていた。

「…うん。うん！その通りなのさ！ヒロフミ君！彼は有望じゃあないか！」

根津は満足気に頷き、ヒロフミの戦闘訓練を高く評価していた。「でしよう！この黒魔少年が一年にしてプロと遜色ないとあの〃レディ・ナガン〃が評価するのも分かりますね!!」

根津の評価にさらに大きく頷くオールマイト。

「……確かに。その素養はあるようですが……」

相澤はモニターを眺めつつも概ね同意といった様子で椅子にもたれかかりながら腕を組んでいた。

「（ああ、確かに黒魔はプロに近い。だが、この歳で、か。…出来すぎてる。いつそ異常なまでに……）」

相澤は合理主義者だ。ヒーローだ。教師だ。

プロとして、ヒーローとして、どう合理的なのか分かっている。

教師として、数多くの生徒を見てきた。

だからこそ、だろうか。

ヒロフミの動きは、相澤から見ても合理的で、ヒーローとしての矜持は本物に見え、今までの生徒の誰よりも達観していた。

「——得体がしれない。一体どんな経験があつてあそこまで……」

それに、根津校長やオールライトがヒロフミに関して何も話さないのも相澤は気になっていた。

だが、本人たちに聞いたとしてもはぐらかすばかり。

意味は無いと判断した相澤は心の中で大きくため息を一つつき立ち上がると、

「……そろそろ授業なんで行きます」

外へと出る。

太陽が廊下を照らす。

「(はあく……だが、どんなやつでも関係ない。俺の生徒なら……導くまでだ)」

そう決意して、A組に向かう。

USJ襲撃。上

<ヒロフミside>

昨日は雄英ガードをぶっ壊す騒ぎがあったなあ。

その後委員長がデク君から飯田へ変わるっていう事があって…

確か原作イベントだろ？あれ。

それで今日が…なんだっけ？

なんか大事な事があったんだよなあ……………。

「…俺とオールマイトそしてもう一人の3人体制で見ることになった」

おっとそうそう、もうすぐヒーロー基礎学だった。

いやあ、相澤先生の声って眠くなるよなあ…

「ふわあ……………」

「はア…」

あ、相澤先生が俺の方を見て呆れてる。

「ハ—！何するんですか!？」

と、瀬呂範太——個性：テープのクラスメイトが手を挙げて

質問する。

「災害水難なんでもござれ」

ポケットからRESCUEと書かれたプラカードを取り出し、

「^{レスキュー}人命救助訓練だ」

^{レスキュー}人命救助か。

えーと…………あれか！死柄木が雄英に乗り込んで来るやつ!!

これ、止めなきやばいやつでは？

…………とはいえ、ここで「^{ライラン}敵が来るぞー！」って言ったとしても信

じてくれるかどうか…。

というか…内通者とかの話があったような…。

うーん、転生した影響のせいでだんだん原作知識に頼れなくなってきたな。

ま、とりあえず戦闘服コスチュームに着替えませうかね。

着替えが終わり外でバスを待つ。

「バスの席順でスムーズにいくよう番号順に二列で並ぼう」

ビシッ！ガシッ！と擬音が聞こえてきそうな程にカクカクと動きながら仕切る飯田。

しかし、

「こういうタイプだったくそう!!」

頭を垂れガツクリとする飯田に苦笑したい……ところなのだが……なーんで隣が爆豪なの??

普通にいつ爆発するか分からないヤツと隣とか嫌なんだけど。

ああ、ほら。すっごい貧乏ゆすりしてる。

アレで発電できそうだね。

「……はあ」

「ツチ!!」

「二(あそこだけ凄い空気が悪いな!)」

どこからか見られているような……。

まあいいか。

クラスメイト達の会話をBGMにこれからの襲撃について考えていた。

下っ端どもに関しては何問題ない。

多対一なら蛸の悪魔で充分だ。

問題は死柄木と黒霧、そして脳無だ。

まず死柄木は個性が強力だ。五指に触れた瞬間に崩壊するというチート級な個性だ。ただ、現段階での死柄木はまだ敵ライバルとしては二流

だ。まだ、大した脅威では無い。(当社比)

それにこの時は“子ども大人”とかボロクソに言われてたっけ。

次に黒霧。こいつは個性がワープだ。厄介で便利で強力の三拍子揃っている。また、敵ライバルとしても一流で死柄木のブレーンだ。

しかし、まだ“子ども大人”の死柄木のサポートをしなければなら

ないため自由に動かれると厄介だが、死柄木のおかげで動きに制限が掛かっている。

最後に脳無。これが一番の障害だろうな。まず、個性の複数持ちっつてところが面倒だ。確か…シヨック吸収と…再生能力だっけ？オールマイトの攻撃すら吸収する上に削り取ったとしても再生してくる。あー、面倒。まあこのクラスの中なら俺が相手取るのが一番かな。

さて、どの悪魔を使おうか…。

再生するとしたら打撃は意味が無い。かと言って切ったとしても再生してくる…。

うーん…この中なら斬撃の方が良いな。

再生を上回るスピードで切れば問題無いだろう。

「……おい。何ニヤついてやがる」

「え？」

「さっきからヘラヘラと…気色悪インだよ」

「シンプルな罵倒…悲しいわ…。お母さんかつちゃんをそんなクソをドブで煮詰めてさらに腐らせた牛乳をかけたような性格の子に育てた覚えはありません！」

「かつちゃん言うんじやねエ!!それとお前は俺の母親じやねエしんだその語彙!!」

「全部ツッコんで来るじゃん。コンビ組まない?今からM―1目指そうぜ?」

目指さねエよ!!とキレる爆豪。

そっか…目指さないか…

「もう着くぞいい加減にしとけよ…」

呆れたように立ち上がりながら話す相澤先生——いや今はイレイザーヘッド先生か。

さて、USJ…もとい、嘘の災害や事故ルームにいざ行かん!!!

<ヒロフミside out>

スペースヒーロー13号が個性の危険性と扱い方について話し

ていた頃——噴水の辺りから黒い小さな霧が徐々に渦巻きながら大きくなり——

中から大人ぐらいの手を顔につけた敵サイランが現れた。
いち早く異常に気付いたイレイザーヘッドは、

「一かたまりになつて動くな!!」

生徒達に叫び

「13号!!生徒を守れ!」

13号に指示を出す。

その間にも続々と敵はやってくる。

奇しくも、命を救うための訓練時間に。

「何だアリヤ!?また入試みたいなもう始まってんぞパターン?」

「違う……あれは敵だな。(さて、どう動いたものか)」

切島の疑問に答えるヒロフミはコートのポケットに手を突っ込みながら、雄英に攻め入ってきた敵を見据える。

イレイザーヘッドはゴーグルをかけながら、

「動くな!!あれは敵だ!!」

黒い霧から敵達がぞろぞろと湧き出る。

「13号に……イレイザーヘッドですか……」

黒い霧は蠢き、思案するような声をだす。

「先日〃頂いた〃教師側のカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが……」

カリキュラムを頂いたと話す黒霧に昨日の雄英ガードを粉々にされた事を思い出し、

「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」

苛立ちを含んだ声でまだなお出てくる敵を睨む。

すると先程まで沈黙を保っていた全身に手のようなものを付けた敵——死柄木が、

「どこだよ……せつかくこんなに大衆引きつけてきたのにさ……オールマイト……平和の象徴が居ないなんて……」

地の底から響くようなおどろおどろしい声で、

「子どもを殺せば来るのかな?」

と宣言した。

「イレイザーヘッド先生、戦闘許可は？」

平和オールドマイトの象徴を呼び寄せるために生徒達、子どもを殺すと言った敵サイランに動揺することなく冷静な声で訪ねるヒロフミ。

そんなヒロフミに内心では少し動揺しつつも、

「…場合によってだが。良いだろう」

そう返答した。

その答えにヒロフミはニヤリと笑い「了解」と頷いた。

一方、突然敵サイランが襲ってきたという事実がようやく飲み込めるようになり、空気に緊張が走るA組の生徒達。

「敵サイランンン!? バカだろ!? ヒーローの学校に入り込んでくるなんてアホすぎるぞ!」

「先生侵入者用センサーは!」

「もちろんありますが…!」

何故? どうやって? という疑問が次から次へと噴出し、騒ぎがさらに大きくなる。

轟は少し考えた後に、

「現れたのはここだけか学校全体か…何にせよセンサーが反応しねえなら向こうにそういうこと出来る”個性ヤツ”がいるってことだな」

「それに校舎と離れた隔離空間。そこに少人数クラスが入る時間割…バカだがアホじゃねえ。これは何らかの目的があつての用意周到に画策された奇襲だ」

確信を突いた轟の考察にA組の動揺はさらに大きくなる。

そんな嫌な空気をかき消すようにイレイザーヘッドが淡々と皆に指示を飛ばす。

13号には避難指示と学校への電話。

また、センサーサイランを妨害する敵の可能性から上鳴にも”個性”での連絡。

そしてイレイザーヘッドは、

「先生は!? 一人で戦うんですか!?!」

如何に個性を消せる個性と言えど、あの数との正面戦闘は難しい

のではと心配する緑谷だったが、

「一芸だけじゃヒーローは務まらない」

と返し、勢いよく飛び出し捕縛布が空を舞う。

「すごい……多対一こそが先生の得意分野だったんだ」

緑谷の言葉の通り、敵^{サイラン}達を個性を上手く使い、捕縛布で蹴散らしていくイレイザーヘッド。

「分析している場合じゃない！早く避難を!!」

慌てたように飯田が緑谷に声をかけ、避難をしよう皆が動いた瞬

間――

「させませんよ」

黒霧がヒロフミ達の前に立ち塞がった。

「しまった！目を離れた隙に……!」

隙を突かれ生徒達に危険を及ぼしてしまった事に思わず歯噛みする。

「くそっ！こっちはまだ手が離せないしあつちの13号だけでは厳しいだろう……っち！手詰まりだ!」

確かに、現状のイレイザーヘッドにとっては手詰まりだろう。とある可能性を除いて。

「(手詰まりだが、アツチには俺たち教師がプロと遜色ないと評価したヒロフミがいる……。はっ、生徒に頼るのは業腹だが……これしかないか)」

迫り来る敵^{サイラン}の足に捕縛布を引っ掛け相手に叩きつけながら思案する。

時間は待つてくれない。

選択を迫られる。

ああ、この考えている時すら非合理だ。

ならば。答えは一つだ。

「っヒロフミ!!――やれ!!」

イレイザーヘッドは叫ぶ。

ただ一人に向かつて。

「初めまして我々は敵^{サイラン}連合。せんえつながら…この度ヒーローの巢窟雄英高校に入らせて頂いたのは」

優雅に、芝居がかった動きでくるくると回り

「平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです」

——つヒロフミ!!やれ!

その瞬間^{とき}、イレイザーヘッドの音がヒロフミの耳に届いた。

ヒロフミは、「了解。イレイザーヘッド」と呟き、A組を庇うように前に出る。

「おや?君は…私と…戦うつもりですか?」

「黒魔君!!」

「つヒロフミ!?!」

「まあ、関係ないことです。…散らして——」

ヒロフミは右手を狐の形に変え、右目だけ瞑る。

「罅^{ひび}り——殺す」

「——コン」

左から大きな複眼の狐が黒霧を食らった。

USSJ襲撃。中

巨大な狐が黒霧を食らったまま動かず、ヒロフミの指示を待っていた。

「……はっ!? な、なんだこれ!？」

「……コイツは狐の悪魔だ。最悪な事が起こる前に口に閉じ込めたが……」

黒霧が能力を発動する前に狐の悪魔によって妨害したかに思えたが、

「……危ない危ない。さすがはヒーローの金の卵。判断が早い」

すぐにワープし、狐の顔の上に立つ黒霧。

「(やつぱダメかー。反則なんだよなああの個性) 敵に褒められても何も嬉しくないな。——…それに、その高そうな服も涎ツィランのせいでベタベタだな? ……水も滴るいい男ってか?」

「良く回る口ですね…殺して、黙らせてあげましょうか?」

ヒロフミの挑発に苛立ちながらも黒霧は次の攻撃に備えていた。

その様子にヒロフミは「狙い通り」と内心でニヤリと笑っていた。

元々、ヒロフミは今回の襲撃事件の相手は脳無にすると決めていたが、一番の障害となるのは黒霧だと思っていた。

ヒロフミがここまで黒霧を警戒するのにはヒロフミの中で、半分確信しているとある可能性があるからだ。

もし、黒霧を野放しにした場合、ヒロフミが脳無と戦っている最中に黒霧のワープの個性で脳無を援護してくる可能性は高いと考えた。

そして、それを半ば確信している理由わけは一つある。

それは、ヒロフミがまだ微かに覚えている原作知識の一つで、本来ならば脳無の相手はオールマイトだったのだがその中で黒霧がオールマイトの攻撃を無効化し、あまつさえダメージまで与えている場面。

その場面の影響からヒロフミは黒霧を倒すために自分の中で筋

道を立てた。

そしていま――

「狐、戻れ。――蛸、行くぞ」

行われようとしていた。

狐が消え、上にたっていた黒霧は地面を失い地面へと落下する。

ヒロフミは、当然そこに隙が生じる事を知り、思い切り落下地点に蛸の悪魔を引き連れ走りだした。

「くっ!!こうなれば強制的に転移をつ^{ワープ}!!」

「させねえよ!!」

黒霧は体を文字通り黒い霧で覆っており、その体をワープゲートにできる場所は限られている。

「(いま霧が覆われてないのは―――そこか!!) つ蛸! 墨!!――
ーツツそんでもってえ…足!!」

視界を奪えばどこに生徒がいるかも把握はできない。

めちやくちやにワープゲートを広げればその分弱点が晒される。

流石に目的よりも己の身を優先した黒霧はワープゲートを閉じようと判断したが…その判断は少し、遅すぎた。

「ぐあっ!?!」

全身が筋肉とまで呼ばれる程の蛸の足が黒霧の腰をしつかりと掴んだ。

ご丁寧に吸盤で固定までして。

そして、

「叩きつける!!蛸!!」

地面を割る程の勢いで黒霧を叩き落とした。

「ぐはあっ!?!」

その強い衝撃に思わず吐血し、骨の二三本が折れた音が黒霧の耳に届く。

「(不味い。不味い不味い不味い!!このままではただの生徒に…倒されてしまう!!)」

「(クソツタレ!!あんだけ強く叩きつけたのにまだ意識を保ってやが

る！見た目よらず頑丈なのか!?!」

粉塵がヒロフミ達の視界を悪くする。

黒霧はそれを好機だと考え、ヒロフミはまずい、と思った。

「この隙に……！私は私の目的を果たす!!」

「しまっ——全員13号先生の所へ!!ワープが来るぞおおお!!!」

「っ!?!みんな！僕の所へ!!」

ヒロフミは自分の作戦が失敗してしまった事を悟り、すぐさまA組のクラスメイト達に避難を指示する。が、それは——

「もう遅い」

間に合わなかった。

黒い霧がA組を包み、A組はUSJにちりじりに飛ばされてしまった。

「ヒ、ヒロフミ——!!」

その時の耳郎の叫びはヒロフミに届くことは無かった。

ヒロフミが転移した場所は——

「っと、わああああ!!そ、空ア!?!」

USJの天井付近から投げ出されていた。

黒霧はあの数分の戦闘でヒロフミを最も脅威と判断し、すぐに撃退できるようにと空から落とす事に決めた。

「あーんにやろおおお!!はっ！いいもんねー！だ!!こっちだってギリギリだったが”仕掛け終わってる!!”

——ソイツをこっちまでぶん投げろ!!……幽霊!!!
ゴースト

ワープさせてくる瞬間に13号の所まで滑り込ませた幽霊の悪魔に命令した。

13号の背後からヌルツと出てきたのは、女の顔で目と口が縫われ、長い首に花が咲き誇り、さながら花畑を思わせるような複数の手を持つ悪魔が現れた。

「わ、わわわわ……!!なんですかコレえ?!」

いきなりホラー映画よろしく現れた幽霊の悪魔に敵の前にも関

ヴァイラン

わらず驚きの声を出す13号。転移せず、その場に残っていたA組も同じようで、ブルリと体を震わせていた。

それは黒霧も同じようだと思う体硬直させてしまう。

幽霊の悪魔は恐怖を見る。

確かに全員恐怖していたが、この中で一番恐怖をしていたのは――

「な、何を!? ――つは??」

黒霧だった。

「はっはア!! 空の旅へ一人ご招待!! 行先は汚い地面だぜ!! ほうら歯ア食いしばれ!!」

呵呵大笑しながら、黒霧の足を蛸で捕まえ空中で黒霧を担ぐ。

黒霧は拘束から逃れようともがくが、投げ飛ばされた衝撃で思うように体が動かない。

「(この状況じゃ、個性を使ったとしても正確に転移ができない…っ!)」

「…………おいおい、あんな上空からアルゼンチンバックブリーカーだと? …イカれてやがる…!」

地上でその様子を見ていた死柄木が呻いた。

上空のヒロフミは下半身を筋肉の悪魔で超強化し、

「頼むぜ蛸の悪魔!! 着地は任せたぞ!!」

ズガアアアアン!!!

落下着地した。

黒霧は意識を手放した。

「つてえ…………あれ? …っつてまさか…」

「…………そのまさかだ。敵のど真ん中だぞ? 何してんだ。…………それに

…ソイツは生きてるのか? …流石に殺すのは…」

「ん、大丈夫。流石に調整した。死んでないよ……………多分」

不安だ。と心の中で呟くイレイザーヘッド。

ガリ、ガリガリガリ……

しかし、前には首を掻きむしる死柄木が、

「ああ、出入口がのされちまった…。ゲームオーバーだ。——だが、まあ…運良く一人生徒がこつちに来てくれた…。黒霧を起こして逃げる前に、ヒーローの矜恃を壊してから帰ろう」

獣のような笑みを浮かべるが、その目は笑っておらず内心では激しい怒りと苛立ちの炎を燃やしていた。

「黒魔…：…一つ聞く。行けるか？」

「はっ、丁度準備運動が終わった所です。——…行けますよ、イレイザーヘッド」

イレイザーヘッドと、背中を合わせ軽口を叩くヒロフミ。

「はあ——…はあ——…」

ガリガリと、ただひたすらに首を掻きむ死柄木。

「お前がワープゲートじゃなかったらいま殺してたよ…黒霧」

ヒロフミの足元に転がっている黒霧に吐き捨てるように言うと、

「かっこいいなあ…かっこいいなあ…ところでヒーロー…いいの？生徒なんてハンディキャップ背負っちゃって…」

「問題ない。コイツにはここに立てる実力がある」

「へー…信頼ってヤツ？ますますかっこいいなあ…」

「それに——本命のお前を倒せば後のコイツらはただのチンピラだ」

イレイザーヘッドは、目の前の死柄木を睨み捕縛布を握る手の力を強くする。

しかし、死柄木はイレイザーヘッドの返答を聞いた途端口を三日月のように吊り上げ、

「くはっ…：…はははっ!!」

嘲笑った。

「何がおかしい!!」

「っ?!本命はアイツじゃない!あの…化け物だ!!」

「あ、それは——」

なにかに気づいたヒロフミがその場所を指さす。そこには、人の脳みそをむき出しにした全長にして2 m以上の肌の黒い化け物が死

柄木の前にでる。

「はははっ！お前勘が良いなあ！！——そう！本命は俺じゃない！コイツは対平和の象徴…故人、脳無！！倒せるものなら…倒してみろ！！」
「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

脳無がヒロフミ達の前に立ち塞がった。

USSJ襲撃。下

——土砂ゾーン。

「散らして、殺す…か。言っちゃ悪いがあんたらどう見ても」個性”
”を持って余した輩以上には見受けられねえよ」

敵は轟サイランのその言葉に言葉に激しい怒りを覚えた。

今すぐにもこの目の前の子供ガキをこの手で殺してやりたい。と、
暗い感情が沸き起こる。

しかし、その感情すら凍りついてしまう。

轟の個性によって。

「このままじゃあんたらじゃわじわと身体が壊死していくわけなんだが
：俺もヒーロー志望。そんな事は”なるべく”避けたい」

轟は自分に向けられた敵サイランの弱さを疑問に思っていた。

あの、オールマイトを殺すと言ったのだ。余程の精鋭かと思え
ば、その内実はチンピラの寄せ集め。

見た感じで強そうと感じたのはたったの4、5人程。

またA組が別の場所に転移させられているだろうと考えたが、黒
霧の相手ならヒロフミがすると分かっていたので、特に心配はしてい
なかった。

そこまで考えると、次に轟が取るべき行動は——…

「あのオールマイトを殺れるっつう根拠…策って何だ？」

——山岳ゾーン。

「ううわ!!ここ、コエー…!!マジ!!今見えた!!三途見えたマジ!!」

敵サイランが放つ大振りのパンチを寸前で躲した上鳴。

「何なんだよこいつらは!!どうなってんだよオ!？」

「っ…そういうのは後!!」

「ええ。今はこの数をどう切り抜けるかですわ」

八百万、耳郎、上鳴が互いに背中を預けながら、三人を囲む敵サイランと
相対していた。

「(あっちにはヒロフミが戦っているはず…!ならばは…!!)」

唇を噛みながら小太刀を構える耳郎。

十数年間家族と共にヒロフミと暮らしてきた耳郎にとっては、ヒロフミとの関係は兄妹のそれに近い。

…ただ、耳郎が感じている親愛それは実の所勘違いであり世間一般ではそれを――

「――行くよ!!」

耳郎は、小太刀の柄の部分握りしめ、三人は敵サイラン達と対峙する。

――USJ入口付近。

USJのあちこちにある災害ゾーンに飛ばされなかった麗日、飯田、瀬呂、芦戸、砂藤、障子、そしてスペースヒーロー13号の七人は、突如として現れた幽霊の悪魔におっかなびっくりとしつつ、上空で行われていたヒロフミ対黒霧の戦いを見ていた。

――はっはア!!空の旅へ一人ご招待!!行先は汚い地面だぜ!!
ほうら歯ア食いしばれ!!

ヒロフミの大きな笑い声が一層強くUSJに響く。

「……先輩……とんでもない生徒が入りましたね……」

心の底から同情したような声をだす13号。

あれは問題児になるなあ……と呟いてから、

「………委員長!」

「は、はい!」

「君は学校まで駆けてこの事を伝えてください」

「っ、わかりました!!」

力強く頷き、出口へ駆ける飯田。

それを見てから残っているA組達に13号と共にここで待機を言い渡した。

「悔しいですが……僕はここで皆さんを守らなくてはなりません……っ」

そう言った13号はただ見守ることしか出来ない悔しさに拳を強く握りしめた。

――倒壊ゾーン。

「これで全部か。弱えな」

倒壊した建物の中で複数の敵^{サイラン}達は切島と爆豪によって制圧された。

「っしー早く皆を助けに行こうぜ！俺らがここにいることからして皆USJ内にいるだろうし！攻撃手段が少ねえ奴等が心配だ！」

額を伝う汗を拭いながら爆豪に向き直る切島は、

「…それにあの時俺らの中で動いていたのはヒロフミだけだったし：クラスメイト一人に頼りきりつても男らしくない！」

ぐっ、と硬化させた拳を見ながら決意する。

だが、

「行きてえなら一人で行け。次は俺がああのワープゲートをぶっ殺す！」

「はあ!!？」

既にヒロフミに倒されているのだが、それを知らない爆豪は敵の出入口である黒霧をいざという時逃げ出せないように元を締める為だと話した。

その背後から潜んでいた敵^{サイラン}が――

「(ペチャクチャダベリやがって！その油断が…)」

ナイフを振りかざし、爆豪に迫る。

切島は急いで戦闘態勢をとろうとするが、敵^{サイラン}が爆豪に近付いた瞬間、サツと躲し、

――BOOM!!

^{サイラン}敵の頭部を爆破した。

「っーか、生徒^{おれら}に充てられたのがこんな三下なら大概大丈夫だろ」

「…ええ…そんな冷静なやつだっけ？おめえ…」

「俺はいつでも冷静だくそ髪やろう!!」

「ああ、それだ」

先程の冷静な爆豪はどこへやら、切島の一言ですぐにキレていつもの光景へと戻った。

「チっーじゃあな。行っちゃまえ」

「待て待てダチを信じる…！男らしいぜ爆豪！ノったよおめエに！」

圧倒的なポテンシャルを持つ爆豪と、根性と努力で才能の差を埋

める切島がUSJ中心部へと駆け出した。

——水難ゾーン。

ここに飛ばされたのは緑谷、峰田、蛙水の三人だった。

水系の個性を持つ敵達サイランに取り囲まれたが、三人の息のあった連携と作戦で切り抜けることが出来た。

今は地上で戦っているイレイザーヘッドの近くまで向かおうとしていた。

向かうまでの間緑谷はずっと自己反省ブツブツしていた。

「緑谷ちゃん辞めて、怖いわ」

「あ、ああごめん蛙水さん」

ようやく地面のところまで着いた一向は戦っているイレイザーヘッドと、ヒロフミを見て驚きに目を見開いた。

「あ、あれは黒魔君!?なんであそこに…っ!ワープさせられたのかあの——敵サイランの中に…!」

「まずいわね…いくら強いと言ってもヒロフミちゃんにあの数は…」

「オイオイオイ助けに行くとか言うんじや無いんだろぅな!?!流石にヤバいって!!」

「分かってるけど…どこかのタイミングで撤退の援護とかできないかな…」

しかし、これが勘違いであった。初戦闘に初勝利。自分たちの力が通用したのだという——錯覚を。

——セントラル広場。

ヒロフミは迫り来る敵達サイランを蝮の悪魔で薙ぎ払う。

イレイザーヘッドは敵の個性を消して捕縛布で縛りあげると、そのまま別の敵サイランへと投げ飛ばした。

「…強いなあ…ヒーロー。生徒の子ももうプロ級じゃないか。チートだ。オールマイイト以外にもチートがいるな…。ほんと情けないよ敵サイラン連合。——…でも、脳無はどうかな?」

ヒロフミ達が必死で戦っているのが愉しくて堪らない様子の死

柄木は新たな戦いの火種に巻をくべた。

「!!!」

脳無は叫び声をあげながら猛進し――

「あつ――ぶねええええ!!」

ヒロフミに右ストレートを叩きもうとした。

しかし、間一髪でそれを避けたヒロフミは脳無から4・5mほど距離を取った。

「黒魔!!大丈夫か!」

数は相当少なくなってきたものの、依然として攻めてくる敵を捌きながら問いかけるイレイザーヘッド。

「(あそこまでのパワーとは思わなかったな。大砲が掠めてきたの
かって思ったもん)大丈夫です!!とは言え…っ!このままじゃジリ貧
かなあつ!」

瞬時にヒロフミとの距離を詰め嵐のようなラッシュをかける脳無に対応しつつ返すヒロフミ。

「(いくら黒魔と言えど、いきなり俺たちが戦ってるレベルの敵は厳し
いか…)分かった。交代するぞ!!タイミングを合わせる!」

最後のチンピラ 敵を倒してからヒロフミに向かって叫ぶ。

「(――流石にこのラッシュをずっと捌き切れる自信はない。そ
れにここで”変身”すればタイムラグの関係で一発は貫つちまう可
能性が高い。仕方ない、一度退くか…)先生!!コイツは何故か打撃
の類が効いてません!!恐らく斬撃ならあるいは…!それにパワーも
…凄まじいです!」

脳無についての情報を共有したヒロフミは右手の二本指を立て、
脳無に向けると――

「ツツコン!!!」

狐の悪魔の足が脳無の腹に直撃し、死柄木の所へ吹き飛ばされ
る。

死柄木はそれをヒラリと躲したが、ヒロフミの一撃に驚いてい
た。

とりあえず強制的に距離を取る事に成功したヒロフミは一度U

SJの出口へ繋がる大階段の所まで下がった。

そして、入れ替わるようにレーザーヘッドが前に躍り出た。

「委細承知だ。——…黒魔良くやった。あとは俺に任せろ」

目の前の敵への怒りからか、はたまた生徒に頼らざるを得なかった情けなさからかいつも無表情のレーザーヘッドとはかけ離れた

——険しい表情で、脳無と対峙する。

レーザーヘッドの長い髪がぶわり、と浮く。

個性を発動したのだ。

「はあ…折角生徒を殺す所を見れると思つたのになあ…」

「俺がいる内は生徒に指一本も触れさせん」

「かつこいいいなあ…レーザーヘッド。いいよ、俺が相手する。脳無は俺の命令まで待機。(それにカラクリも何となくわかつたし)」

脳無に待機に命令し、ゆつたりと歩きレーザーヘッドの前に立つ。

沈黙が場を支配する。

そして——

先に動いたのはレーザーヘッドだった。

捕縛布が死柄木を縛らんと一直線に進むが、それを死柄木は掴み、無力化する。

「24秒…20秒…」

「ちっ!!」

捕縛布が無意味と理解したと同時に腰を低く落とし死柄木に向かい突進する。

「17秒」

一瞬で死柄木の目の前にまで近付いたレーザーヘッドは、未だ捕縛布を掴んだままにいる死柄木を見て、ぐいつと自身の近くにあった捕縛布を引っ張り——

ドス!!!

そのまま死柄木を引き寄せ腹部に肘打ちを叩き込んだ。

しかし、死柄木は苦しむことなくまるで懐に来るのを待っていた

かのようにそれを受けた。

「動き回るので分かり辛いけど、髪が下がる瞬間がある」

いつの間にか、イレイザーヘッドの肘を五指でしっかりと握っていた死柄木は愉悦を含んだ声で語りかける。

その間、イレイザーヘッドの肘はぼろぼろと崩れ崩れていた。

「二アクション終えるごとにそしてその間隔は短くなってる」

ニタア…と、嗤いながら――

「無茶するなよイレイザーヘッド」

耳元で囁いた。

「――っ!!」

痛みを堪え、呻きながらも死柄木の顔をもう一方の拳で殴った。

死柄木は防ぐ間もなく横へと吹き飛ばされた。

「(肘が”崩れた”!)」

そのまま距離を詰めようとしたその時――

「くはっ……脳無……やれ」

イレイザーヘッドの目には死柄木が笑っている所が映り――

「――!!」

後ろから覆いかぶさってきた脳無がイレイザーヘッドを抑えつけ、腕をあらぬ方向へと、折っていた。

――ああ、畜生。忘れてた。イレ先は……ここで……

――緑谷も蛙水も峰田も、絶望一色って顔してやがる。

――糞が。糞が。糞が!!何しているんだ。何してんだ俺は!!!

――血の消費がどうだの、体力の消耗がああだの……言ってる場合じゃねえだろ!!

気付けば、ヒロフミは脳無に向かい駆け出していた。

「バ……か……逃げ……ろ……ヒロ……フミ……」

血みどろになっているイレイザーヘッドが声を掠れさせながらもヒロフミを遠ざけようと――

「嫌だね!ここで逃げちまえばヒーローにはなれんだろうがよ!!!」

「ははっ！良いねえ!!教師ヒローの目の前で生徒アイツを殺せ!!脳無!!」
愉快げに嗤いながら、死柄木は見せつけるようにイレイザーヘッドの頭を持ち上げた。

「!!!」
ヒロフミは走りながら、自分の右手を引き抜いた。

「……………え？」

誰かが、呟いた。

ヒロフミが右手を引き抜いた事もそうだが、それよりもそこにあつたものに目を奪われた。

そこには、

「……………なんで、ヒロフミ君の右手に…刀が…?」

右手を引き抜く事に
出来ない事に、あるはずの無いもの刀ががヒロフミの右手が在った場所からむき出しの状態でそこに存在していた。

夥しい程の血がセントラル広場の床を濡らす。

その時、USJにサムライ刀の悪魔ソードが現れた。

「!!!」

脳無は目の前でヒロフミが人から悪魔へと変わったとしても止まることはない。ヒロフミの間合いに入った瞬間に容赦なく顔面を横へ吹き飛ばすべくその大きな右腕で、

ブオン!!!

殴った。

しかし、その拳は空を切っておりヒロフミに当たる事はなかった。

ヒロフミは脳無が振りかぶった瞬間にしやがみこんだのだから当たるものも当たらない…のだが、

「…っ！いつの間に脳無の後ろへ行きやがったんだ!？」

気付けば脳無の背後に立っていた。

「???」

脳無は、何故か後ろにいるヒロフミに疑問に思いながら振り返ろうとした瞬間。

脳無が崩れ落ちた。

四肢を斬られて。

しかしそこでヒロフミは止まらない。直ぐに死柄木へ呐喊する。

「な……に?」

「次はお前だ。手だらけ野郎!」

「……は、だがそいつには超再生がある!!俺のところに来るより先に脳無がお前を殺す!!」

「その前に斬つちまえば問題ねえだろ?」

確かに死柄木の言う通り脳無の四肢は再生はしていた。

しかしそれよりも速くヒロフミは死柄木に迫っていた。

「——クソ!!黒霧がいればこんなやつ…!!」

そして死柄木は、気付かない。

横から飛び出していた緑谷出久の存在に。

「(人に当てるぞ調整しなきゃ殺しちゃうまずいまずいまずいまずい!!…覚悟を決めろよ…!僕!) おおお!! S M A S H !!!」

「しまっ——」

死柄木の横面を殴り飛ばし、黒霧のところへと吹っ飛ばした。

「——ナイスだ!緑谷!!」

「(で、出来た!土壇場だけど…調整が!!) へへ、ありが……黒魔君後ろ!!!」

「そうだった!!まだ居るんで——!!!?」

既に四肢を再生していた脳無がヒロフミの横腹を蹴り飛ばし、倒壊ゾーンの壁にまで叩きつけられた。

変身は解け
刀は折れ骨も折れた。

「(痛ってえ……目の前がチカチカする……これアニメだったら星が飛んでるやつだよな……ははっ……)」

されど心は未だ折れず、

「(?)の悪魔…力を貸せ……)」

『しかし……闇との親和性が……』

「(全部とは言ってない。…身体はどこか…右拳だけとか……そこだけ力を宿らせる…それならLvが足りてなくても行けるだろ)」

『……………最悪消し飛ぶかもしないぞ』

「俺はいま猛烈に背中がいたい。骨も折れてる。つまりブチギレてる」

『……………うん?』

「(ヒーローだとか敵だとかどうでも良くなってきた。ただ、個人的な理由で脳無をぶつ飛ばしたい)」

『……………』

「(だから——黙って俺に力を貸しやがれ)」

『……………くはっ!』

その精神は誰よりもイカれていた。

『……………良いだろう……………良いだろう……………サービスだ二つまで〃操作〃していい……………その分の負担は私が受け持とう……………』

「(助かる)」

『して……………キミが望む……………力は?』

「(……………〃雷〃と〃地震〃だ。地震は右拳に頼む。イメージは白ひげだ)」

『白ひ……………まあいい。了承した……………ふむ。大方雷の力で……………怪物に向かって一直線で……………距離を詰めて……………地震で攻撃して……………言ったところか』

「(大当たり。流石、主人の考える事は手に取るように分かってるって感じ?)」

『……………フ、』

「(あれ?照れた?)」

『て、照れない!……………早く倒す……………んだろ!』

『『じー』』

「(うつし、そういうことだ。頼むぜ?)」

『……………あ、ああーま……………任せておけ……………!』

石壁から抜け出し、地面に降り立つ。

足も折れているのか着地した瞬間に激痛が走ったが、それすらも顔に出すことはなく、ただ笑っていた。

「おいおい嘘だろ……………あれで生きてんのかよ……………!」

その様子を見た死柄木は戦々恐々としていた。

「さあ…て、楽しくなってきた…！」

———ジジジ…ジジジジジ!!!

ヒロフミの周りにスパークが起こる。

そして———

「ぶっ飛ばす!!!」

雷が、脳無目掛け一直線に———
奔る。

文字通り音速で脳無の懐に入り込み、ヒロフミ渾身の右ストレートが、脳無の頭に直撃した。

その威力^{震度}、は脳無を葬り去るには十分な力で、数字にしてマグニチュード8.0の拳^{地震}が叩き込まれた。

周囲の地面がたわみ、歪み、隆起し、あわや津波まで起きかけた。そのまま脳無は轟ツツ!とUSJの壁を破壊し、雄英の敷地内のギリギリの所まで吹き飛ばされた。

そのタイミングで、

「……………ここは?…死柄木弔?どう…になりましたか…?」

「……………今かよ糞が。もう遅い。帰るぞ、今回の雄英襲撃は失敗だ。脳無も連れてきたヤツらも全員やられた。ゲームオ」

———ズガアアアアアアン!!

「私が……来た!!」

一切笑っていない^{オールマイイト}平和の象徴がやってきた。

「……………つくづくタイミングが悪い……………あゝあゝゲームオーバー! コンテニューも無し!!ゲートをだせ!!」

「……………はい。直ちに……………申し訳ありません。死柄木弔」

「…たく、謝罪はあとだ…今は逃げるぞ」

吐き捨てるように言いながら死柄木と黒霧は去っていった。

「ヒロフミ!!!」

「先生!!」

その様子を睨んでいたヒロフミは力尽きたように倒れ、ヒロフミの戦いを見守っていたイレイザーヘッドも同じように倒れた。

「くっ……私としたことが情けない……！一先ず担架を!!彼らを早く医務室へ!!」

オールマイトが駆けつけ指示を出すと、一緒に来た教師達ヒーローはテキパキと行動に移した。

「ヒロフミい！ヒロフミ!!」

「黒魔君!!しっかり!!」

「大丈夫、気絶してるだけだ!!」

急いでイレイザーヘッドとヒロフミのところに集まったA組の皆は二人の大怪我をみて悲鳴に近い声をあげ、サツと顔を青くする。

特に、幼馴染でもある耳郎はこの世の終わりのような表情をしていた。

A組のクラスメイト達もただ、何もする事が出来なかった悔しさどヒロフミ、イレイザーヘッドの頑張りに心を燃やしていた。

こうして、A組の心に深く刻みこまれることとなったUSJ襲撃事件はこうして幕を閉じた。

ヒロフミ、暗躍する。副題：ヒロフミ、勘違われる。

<ヒロフミside>

いやあく退屈だ。

病院つてのは寝てるだけだから体がムズムズするな。

あ、どうも絶賛入院中の黒魔ヒロフミです。

あのあと、直ぐに救急車に乗って集中治療室に入ったんだけど……なんか輸血したら治ったらしい。……いや医者が言うには「治る」なんてもんじゃなくて「再生」だったらしい。

……俺、軽く人間辞めてね??

確かに個性は悪魔だけどさあ!!

正直そこまで悪魔っぽくする必要ある???

う、うーん……ま、細かい事はいつか!

ただ、完全に治ったとは言え検査入院であと一日はこのままだとさ。

コンコン。

ん? 面会かな?

「どうぞー」

「失礼するよ」

「お、久しぶりじゃーん!! 何してたん?」 姉ちゃん”

「ふふ、いやあ公安でキミの代わりに色々とね?」

病室に入ってきたの桃色の髪を三つ編みにまとめスーツをきっちり到着込んだ、目を見張る程の美しさを持つ女性——まあ、なんだ。俺の姉ちゃんだな。

……いやな? 初めて会った……まあ会ったでいいのか。その時に自分のことは「姉と言え」って頼まれてしまったからそう言ってるわけ……別に血が繋がってるって訳じゃあない。

だけど、存在しない記憶をいきなり語り出した時はめちゃくちゃ怖かった。

「あー……そりやお疲れ様だな。……んで? ここに来たって事は——」

「お察しの通りだよ。あと、ヒロフミが言ってた“おじさん”公安に入ったよ」

「お、これで四課は俺と姉ちゃん入れて四人かあー」

「そうなるね。…それで？」

「ん？」

「私の可愛い弟をこんな事にしたのはどこの誰かな？」

笑顔が怖い……………どうしたの……………

「あ、ああ……………と死柄木弔……………とか言ってたかな？」

「……………へエ……………」

びええええ!!怖いよおおお!!

で、出ちやつてるよ!!ラスボスの風格が!!

ど、どうする??

考えろ俺……………!はっ!!

「姉ちゃん」

「ん?何かなヒロフ————へ?」

姉ちゃんの肩を引き寄せ、抱きしめた。

「大丈夫。俺はいま元気だから怒らなくていいよ…ね?」

「……………うん」

耳元まで真っ赤にしながら抱き返す姉ちゃん。

だが、いつまでもこうしてる訳には行かないから胸元から離す。

「……………むう。あ、そうだ。もうすぐ雄英体育祭だよね?私も、アキ君も

応援してるよ」

「お、アキ兄もか。なら頑張んなきゃなー」

……………まあ、もちろんアキ兄も存在しない記憶をすごい勢いで語ってきたヤベー奴なのだけけれど。

彼らは現在俺の代わりに公安で“色々”動いて貰ってる。

「……………おや、そろそろキミのクラスメイトが来そうだ」

お暇するよ、とニッコリと笑ってから席を立つ。

「おっけー、報告ありがとう。それじゃまた今度」

そのまま姉ちゃんの手をヒラヒラさせながら病室を後にした。

その数分後に響香、切島、飯田、緑谷、麗日、上鳴の六人が俺のお見舞いにやってきた。

「はい、これは授業のプリントだ。……にしても傷まですぐ癒えるとは……やはりすごいな！ヒロフミ君の個性は」

「うん!!まず黒魔君の個性は実質複数と言っても過言じゃないくらいバリエーションが豊富だしなにより呼び出して数的不利をもものもしないって所がすごくて——」

始まったよデクくんの分析^{フツフツ}。

「ああ!強え上に派手だ!!…俺なんか硬くなるだけだし…地味なんだよなあ…」

「はは、切島個性も十分強力だと思うんだけどなあ…」

飯田からプリントを受け取る。

うげえ、意外と量があるな……。

「そういやさー!さつきピンクの髪の毛のすつげー美人がいたんだけど…誰のお見舞いに来てたのかなあ…?」

「ああ、あの人俺のねえ…じゃない…えーつと、友達…かな?」

「つえ!?マジか!!」

「……どんな関係なの?」

おつと??響香から黒い気配を感じるぞ??

あ、あばばばば!!不味い!!この前みたいにイヤホンジャックで折檻されてまうつ!

考えろ俺!!

「あー…えーつと………」

「「「「こ??」」」」

「コーンスープ大好きコミュニティの……会員です……」

「コーン………」

「スープ????」

ごまかせたな!ヨシ!!! (現場猫)

「いや訳分からんわ!!!」

「ぶっはっ!!」

切島が突っ込み、俺の訳分からない返答に遂に吹き出した麗日。そのおかげで、病室に暖かな空気が戻る。

危なκ「嘘………ついてるよね?後でちやあんと教えて貰うから」と囁いてきた耳郎。

何を見てヨシと言ったんですか? (現場猫)

その後。たわいのない雑談をした後耳郎を除いて帰って行った。

そして、俺は耳郎に向かって正座をしていた。

「で?」

「ツスウー……あの人は……ですね……その……公安の人でして……」

「へえ………そうなんだ」

「ええ、ハイ。まあ、公安の人って言ったら余計な混乱を招くと思って嘘つきました」

「……まあ、理由は分かったわ……。にしても……なんで公安の人がヒロフミに?」

「まあ、俺ってば昔の事があるし、あの人は(姉として弟の事を)観察してんだよ」

「ヒロフミの事を監察……!」

ん?なんか違和感が……ま、いつか!!

何とか誤解が解けた俺は溜め息をつき窓の方を見る。

にしても……輸血の量多すぎない??今日だけで十パック替えるよ?

昨日なんて十五パック替えたし……

あれ?そーいや医者の人が確か……

『ヒロフミ君。君は個性の影響なのか分からないけどいま生きてるのが不思議なくらいに血液が無くなってるんだよ。……まあ、ヒーロー科という事もあるから個性を使うのを辞めろとは言わないけど上手く使うようにした方が良いね』

って言ってたな。

うーん……

「にしても二十五か……」

「……う？二十五っていうのは？」

ああ声に出してしまったか。

「ああ、こつちの話。気にしなくても良いさ」

んー、さすがに輸血パック消費し過ぎだよなあ……。

「まさか……！」

お？気付いたのか？いや、流石幼馴染だなあ。隠し事は出来そうにないや。

「いやあ……勘がいいねえー実は——」

「なんで!!ヒロフミが二十五歳までしか生きられ無いなんて……！」

「なんて??？」

なんて??？なんでそうなる??？

……あああ!!あの「にしても二十五か……」

ってやつが拡大解釈されたのか!!

「違う違う！輸血の量が二十五パックって話!!別にそこまでしか生きられないって訳じゃないから!!」

「あ……なんだ……ゴメン。ウチの早とちりだったみたい」

いやあ、原作を追ってた頃は気づかなかったけど結構おつちよこちよいなんだなー。

その後、近くのコンビニで買ってきてもらったジュースとお菓子、そして漫画雑誌を受け取った後に響香は帰った。

来週辺りから雄英体育祭かあ……作戦考えないとなあ……。

？の悪魔

今にも傾きそうな古いアパートに一人——写田うった撮男とるおはいた。

写田は、写真が沢山入ったダンボールを漁っていた。

「無い…無い…無い…」

ブツブツと。生気の無い瞳でただひたすらダンボールを漁る。

彼は、元々主にゴシツプ関係を取り扱っていた雑誌の会社に勤めていた。

根も葉もない噂話をさも本当のことかのように扱い、ネタのためならでっちあげも辞さない。そんな会社で働いていた写田もまた矜持の欠片も無い執拗な取材と悪意のある記事を書いていた。

そんな日々には転機が来る。

ヒロフミの住宅街を訪れていたのは全くの偶然であった。

会社への帰り道。なんてことの無い日常や家の中から聞こえてくる幸せそうな声に内心で舌打ちしながら歩いていたその時、

爆風と共に吹き飛ばされる写田。

何が起こったのかすら分からなかった。

しかし、これはネタになると思った彼は急いで個性を発動した。

写田の個性は「カメラ」。

この個性の発動中は目がレンズの代わりとなり、瞬きする事で写真を撮ることが可能となる。撮った写真は右手から現像が出来るという個性で、ヒロフミの実家——銃の悪魔をイレイザーヘッドが個性で消すまでの間撮り続けた。

当然、ヒロフミに戻るまで撮っておりこれはネタになるとほくそ笑んだ。

後日。『悪魔の子事件』と銘打ったその雑誌は加速度的に売れていき——公安に取り押さえられるまで売り続けた。

しかし、無許可の上、相手が未成年であった事もありその会社は解体。当時の社長も逮捕された。だが、写田は逃げた。いや、正確には全ての責任を社長に押し付け脅されて記事を書いた哀れな男とし

て逮捕を避けた。

写真は全て燃やされたが、唯一ヒロフミの写ったものを隠していた。

「あ、あった!!コレだ!!確かに子供だから見分けが付きにくいが…あの日あったアイツの写真を比べれば…ああ、コイツが…しかも雄英のヒーロー科に…これはネタになる。面白くなるぞ!!…お、俺はこんな所まで堕ちたのにアイツはこんな所で未来を掴もうとしてやる!!だから…だから!引きずり下ろして…めちやくちやにしてやる!!クヒツ!ひひひひはははははははは!!」

——いつだって、人を地へ落とそうとする者の哄笑は歪んでいく。

<ヒロフミside>

「ぶえつつくしよん!!!」

おおう風邪かな?せっかく退院できたのにまた病院行かなきゃなのか…?
まあいいや。

俺が入院していた間にどうやら雄英体育祭の話があったらしくA組の空気は少しピリピリしていた。

「あ、ヒロフミ君退院できたんだね。おめでとう」

珍しく今日は挨拶をせずついてきた俺に気付いた葉隠ちゃんが駆け寄ってくる。

うっ!陽キャオーラが…いや、でも待つんだ黒魔ヒロフミ。お前もこの世界に転生してからは割とイケイケ勢だっただろ…!この程度で負けるなよ!

「ああ、傷の治りが早くてな。おかげさまで雄英体育祭には出られそうだ」

「そっか!良かったー!あの時一番怪我していたのがヒロフミ君だったからずっと不安だったから…すぐに治って良かったね!」

「うぐっ!ありがとう…」

「なんでダメージを受けたみたいなの…?」

なんでこの子透明なのに光り輝いて見えるんだよオ!!

くっ!陽キヤ力はちからこの子の方が上のようだ……悔しいが……!

「お、ヒロフミ!!元気になったのか!!良かったぜ!」

うーん、混乱した頭が元に戻る熱血具合。さすが切島君やでえ。

「おう。にしても朝から元気だねえ……」

「まあな!それにもうすぐ雄英体育祭だろ!!熱くならない方が嘘だぜ!!」

「あー…なるほどね」

雄英体育祭…か。たしか一年に一回ずつ…俺らの場合はあと三回ある行事の一つでヒーロー科にとつては様々なヒーロー事務所へのアピール期間…んで、たしか日本ではかつてのオリンピックほどのイベントって言ってたな。

んー、正直就職先は公安が用意したどこかってほぼ内定してるんだよなあ…。

……このままだと某探偵漫画で日本が恋人と言ってるあのルート間違いないんだよね…実際クソブラック(両方の意味で)だし。

そういう意味ではしつかりとここでアピールする事で抜け出すことが出来るかもしれないのか…?

ちよつと本気出してみるか……。

お、響香がきた。おーい。

「あ、ヒロフミ。もう大丈夫なんだ。……どこか痛いところとかない?」

「無いよ。大丈夫」

眉をひそめて心配してくる響香に、なんでもないように腕を振り回しながら答える。

「お前ら席につけ。ホームルーム始めるぞ」

おっと、そろそろ始まるな。

…

…

…

今日の授業も大変だったなあ。さて、と。今日はこのまま帰りたいところではあるけれど、雄英体育祭に向けて特訓するか。

とりあえず個性使用許可と運動場の使用許可を貰ってと……うーん、何使おうかなあ……。とりあえず、蛸、筋肉、狐をメインに戦って行くか……？ 武器人間は……グロテスクすぎる気もするが、タイマンだとほぼ無敵なんだよなあ……。

『ちよいちよい、ヒロフミ君』

「(ん？ どうした?? の。なんか用か?)」

『いやー、ね。実は？ ちゃんがキミに話があるってさ』

「(へえ……あ！ この前のUSJ襲撃の事か?)」

『そうそう。なんでもキミに力を一部譲渡していいってさ』

「(え!? まじか!!)」

『まじだよ。それにあたって名前もあげるってー。いやあ、まさか？ ちゃんから落ちるとは思わなかったねえ……』

落ちるってなんだよ。ギャルゲーか？

にしてもようやく？ の悪魔の名前が分かるのかー。なんだから。

「(にしても……いいのか？ その……Lvが足りないとかって……)」

『……関係……無い……私が面白そうだ……と判断した……それに闇との親和性も……上がっている……』

『そーそー……そうなんだよっ！ いやあくすつごいねえ!! 一回使っただけでここまでLvが上がるとは思ってもなかったよ!!……まあ、ボクたちの中で一番最初に頼られたのが？ っつのは気に食わないケド』

『……やかましい……?? の……』

「(あーはいはい。喧嘩は後。今は？ の名前が重要だったの)」

『……はーい』』

『ふふっ、猛獣使いみたいだね。ヒロフミ君は』

「(実際問題名前は分からんが、圧からして猛獣っていうレベルじゃないだろ君ら。もはや怪獣だよ。怪獣)」

いや、ほんとにそうなんだよな。

普通に睨んだだけで気絶させられるよ。……霸王色かな？

『……さて、茶番はこころいまでにして……私の名前は――』

禍わざわいの悪魔だ』

……うへえ、とんでもねえや。

いや、予想はしてたんだけ？ただ、外れてたっていうか…闇とか言ってたしわんちゃん闇の悪魔の擬人化かな？とか、もしかしたら俺が産まれたことにより誕生した敵ライオンの悪魔とかも有り得るなーとか思ってたけど……

禍い、いや〃災い〃でもあるのか。確かにそりや恐れられますわな。

人災、火災、水災…なるほど能力が地震の操作の時点で気付けたな……。

『……ふふん……どうだ…すごいだろ……』

「(……確かにこりやとてもすごいな)」

『……えへん……』

『ふう………良いもん！キミはボクの名前を知ったら禍のの以上に驚くだろうし！』

『あはは、まあまああ???ちゃんも落ち着いて。…それで？キミは何が渦ちゃんに質問はないの?』

「(能力……それと外見だな)」

『だってよ禍ちゃん?』

『……良いだろう……しかし……私の姿は恐ろしいすぎるから……人目のつかない所に……行くがいい……』

「(なんでそんな尊大な口調なんだ……?まあいいや。体育館裏に行くか)」

『……襲うつもりか?……』

「(馬鹿なの?)」

少し頭が痛くなってきたぞ?もしかして天然なのか…?

「(さて、着いたぞ。周りには…誰もいないな)」

『……分かった。では——』

その瞬間。その場所で。

小さく、されど強い風が吹く。

そして、黒い雲のカーテンが空を覆う。

ぽつ、ぽつ、と雨は俺の肩を打ち次第にそれは強くなっていく。

ゴロゴロと、空から雷の音がして――

目の前の木に落ちた。

木は割れ、焼け焦げた匂いが鼻につく。

そして、

「……………いや何時まで木を……………見てるんだ……………?」

「うおあつ!!」

どこからともなく俺の隣に禍の悪魔が現れた。

その見た目は白髪 of 褐色肌で黒い目をしていた。そしてなによ

り――― 幼女だった。

「……………え?ちよつと待ってくれ幼女だったん??それに恐ろしすぎる姿って何?」

「……………何を言う……………世の人間はこの姿で『きやー!変態!!』……………と言われるのを恐れるのだろう……………?」

「……………それは……………そうだけでも……………」

こてん、と首をかしげる目の前の褐色白髪禍の悪魔ロリ。

ぐ、だが可愛らしい……………可愛いと美しいがまじるタイプの幼女だ……………美少女だ……………。

正直好み……………なんか癪だから言わんけど…

「とういかなんなんだよその格好!!白いワンピースって……………!世の幼女へのイメージをほんとに地で行く姿だな!!」

「……………ふふ、……………恐ろしかろう……………恐ろしいかろう……………」

「ああ、(色んな意味で)恐ろしいよ」

何だこの悪魔……………。

ボケ要員が出来てしまったんだが…

……………でもまあ、感じる重圧というか、覇気は“本物”だ。

「外見は何となく分かった。能力もな」

「……………まあ、褒められ足りないが……………寛大なので……………許す……………」
なんか不満そうなんですけど…?

何が不満なんですかね…。

「の、能力は災害を操る、てところか？」

「……その認識で構わない……地震…津波…早魃…これらを自由に操作出来る……」

……それだけ聞くと根源的恐怖の悪魔に近いんだよなあ。

「そんで？俺はいま、”どれが”扱えるんだ？」

「……くふ、賢いヒロフミは好きだぞ……キミが使えるのは……津波だけだ……」

「へえ……？面白そうじゃん」

「……」コホン……よく聞くように……」

曰く。この津波の操作というのは全てを覆い潰してしまうほどの圧倒的な水圧と量を自由に調整、操作ができるもののだが……

この調整の部分が難しい。

暴れる水流をどうにか抑えるにはめちやくちや集中して繊細にしていないとあつという間に雄英敷地どころか周辺まで飲み込んでしまうのだ。

だったらとつとマスターしろっていう話なのだが……でもそれって自然相手に戦ってくださいって言うてるようなもんで……

「だつはあああああ!!上手くいかねー!!」

「……まあ……一朝一夕で上手く行くものでは……無い……。お手本を見せよう……」

そう言つて指先から海水を出すと、くねくねと器用に操作し――

――なんと海水で細部までこだわった西洋風の城を作つて見せた。

「すげえ……」

使つたからこそ分かるこの凄さ。

どんだけ緻密な操作なんだよ……これ……

隣では得意げに鼻を鳴らす禍の悪魔に少し腹がたつたがそれすらも忘れてしまうくらいに、それは美しかった。

「……今日はここまで……して置いた方がいいだろう……もうすっかり夜だ……」

「はア……はア……分かつ……た……」

いつしか、時間も忘れて修行に打ち込んでたみたいだ。

……この新しい力に少し浮かれすぎたか。

だがこの力をものに出来れば残り二体の悪魔の力だって使えるはず……

なら、頑張るしか無いか。死ぬ気で。

『にしても……キミからとはねえ……』

『……意外か……?』

『まあ、私はどっちからでも良いとは思ってたけど……名前を先に明かすのは???ちゃんからだと思ってたんだよね』

『くう……名明かし童貞を貰われていかれてしまった……不覚……』

『何それ……』

雄英体育祭 雄英体育祭、開幕。

——集瑛社。

そこは日本の中でもトップとも言える出版社であり、その本社で若くして専務にまで上り詰めた気月置歳は“異能解放戦線”と銘打たれた本を隅から隅まで読み込んでいた。

「はあく〜いつ読んでも素晴らしい出来だわ……さすが私ね」

「ええ!!この本が店頭に出るのは今年の冬頃ですが……これは売れますよ!!」

「間違いないわね。…あのトガヒミコの事件をまともにモノに出来なかったのは悔しいけれど…」

少し悔しそうに零したが、すぐに手元の本をみて恍惚の表情を浮かべる。

「これなら……あの方もきつと喜んでくれているはず……」

彼女は写田とよく似ており、取材対象への遠慮などとうに捨てさり、ただ良い記事を書くために躊躇の無いインタビューを行い。それによって書かれた記事は集瑛社のだす雑誌の売り上げの向上を助け、今の地位まで上り詰めた。

そんな気月置歳の個性は『地雷』。

まさに地雷を踏み抜き続けた彼女にピッタリだ。

「——気月さん!なんかお会いしたいって言ってる方が一階のカウンターに来てますが…」

「あら?今日はインタビューなんて入れてなかったはずだけれど……名前は何?」

「それがフリーの記者で……名前は写田うつしだっていう男です」

「(写田?どこかで聞いたような……)」

その言葉に手に顎を当て考え込む気月。

しかし、それを妨げるように電話が鳴った。

「はい気月です」

『ああ、どうも黒魔アキです』

「アキさん!? どうして私に電話を…?」

『気月さんに用事がありました』

「私に?」

『そうです。その前に、あの方は気月さんの本をととても気に入っていただきましたよ。観賞用、保管用、布教用と三冊予約してましたよ』

「…それはとても嬉しいです! 編集者冥利に尽きます」

『——それは良かった。さて、本題に参りましょうか。近頃裏で怪しい動きがありまして…というのも敵が徒党を組んだという情報が回っており…我々の計画の事もあります。少し探ったところ… “トガヒミコ” の影が最近出てきました』

「なんですって!?! ……失礼。それは本当ですか?」

トガヒミコの名前に過剰なまでに反応する気月。

無理もない。彼女が信奉していると言っても過言では無い“解放思想”。その正しさを立証しうる人柱となると考えていたのがトガヒミコなのである。

だからこそ、何をしてでもインタビューをしたいと気月は考えていた。

「確か、あの事件の後“誰か”に連れ去られたという話で…死亡説なんてものもまことしやかに囁かれていましたか…」

『……まあ、あの方を支える者ですから。この程度のこととは出来なければ』

「流石ですね…」

ただ、感嘆したような声を漏らす気月。

いつしか写田の事は忘れていた。

『まあ、そういうことで。そろそろ着くので下でお待ちしてくれますか? 幹部を集めて緊急の会議があるのでお送りしますよ』

「まあ。ありがとうございます」

そこで通話は終了し、部下にあとの仕事を任せた後専務の机を後にした。

——集瑛社、受付カウンター。

「だーかーらー！早く出してよ!!」

「しかし写田さま…現在気月は連絡がつかなく……」

チツ！と舌打ちと激しい貧乏ゆすりをする写田。

写田の勤めていた会社は潰れた。折角こんな良いネタがあるというのに出せないのは勿体ないと一か八か国内最大規模の集瑛社に持ち込めればと考えたのだが…現実はそう甘くない。

そうこうしていたら後ろからスーツをきっちり着込み、長い髪をちよんまげのようにまとめた青年——黒魔アキが後ろから、

「あの…どうかなされましたか？」

と問いかけた。

「ああ！黒魔様ですね？少々お待ちください！」

明らかにほっとしたような様子をした受付嬢。

それを見て余計に腹を立てる写田。

「……その、俺この会社に伝手があるのでなにか伝えたいことがあるなら…言つときますが」

何らかの面倒事を察したアキが写田に助け舟をだす。

それに、写田はぱつと顔を上げ満面の笑みでヒロフミの写真、そして『悪魔の子事件』に関して話した。

ようやく、理解者が現れてくれたと気色満面に話すが、その間のアキの表情に気づけなかった。

「……………へエ？それは面白そうだ」

「でしょ!!それにこのガキは雄英のヒーロー科にまで入って一丁前に幸せを掴もうとしてるんですよ!!そんなのって……許せないですよねえ…………?」

ニタアと笑う写田に対して仮面のような笑みを浮かべるアキ。

対照的な笑顔を浮かべる2人の内心は風邪を引くほどの寒暖差があった。

「はー良かった良かった!この資料はあなたに託しますね!!コピーはあるので!!」

「へエ…………コピーがあるんですか…徹底してますね」

「ええ！自分で言うのもなんですが…こういうことって…大好きなんですよ……」

「へエ………」

そのまま資料を渡し走り去る写田を見送ってから一人の名前に電話をかけた。勿論相手はマキマだ。

——写田は知らない。破滅への道は既に確定していることに。

<ヒロフミside>

「ぶえつつつくしよいよい!!」

うろう…風邪か？なんか前にもあったような……？

まあええか。

さて、今日は雄英体育祭本番だ。一応できることは全部した。それを今日思いのままにぶつけるまでだ。

「……ヒロフミは緊張してないの？」

「してないね。むしろワクワクしてるまである」

「……やっぱ強いやつは違うな…！俺なんてもう心臓バクバク」

「そんな時はヒロフミって十回手に書いて飲み込むと落ち着くぞ」

「いやそこは人じゃないんかい」

びしつと突つ込む上鳴と緊張からか忙しなくその長い耳を動かす響香。

いや～。原作イベントの空気感たまんねえな。

この程よい緊張感は…前世のあの日以来かな。

——『??…おめえってやつは…俺の…誇りだ……』

…ああ、親父。懐かしいなあ……

前世の記憶が薄れたとしても親父のことは忘れたくねえなー。

すると、いきなり立ち上がった轟が俺の方にまで来て、

「おい、黒魔。俺は…お前に勝つぞ。…それと緑谷も。お前はオールマイトに気にかかれてるよな？…とりあえずお前ら二人には勝つぞ」

宣戦布告してきた。

お、おお……

「轟が…クラス最強に宣戦布告だああ!!」

一気に盛り上がる一同。

これって元は緑谷にやるやつだよなあ…。

それにクラス最強という称号も元々は轟のものだし……いやあ照れる。

「上等だ。模擬戦のリベンジマッチといこうか」

「ほ、僕も！負けないよ!!」

俺は強キャラ感をかもしだしながら。

緑谷はたどたどしくもしっかりと返事をした。

その様子にクラスの雰囲気は段々と熱いものとなっていった。

…まあ、その様子が気に食わないのか舌打ちしながらそっぽ向く爆豪がいた。

さすがA組きつてのヤンキー（俺だけが呼んでる）だな。

雑談してたら時間なんてすぐ過ぎる。

視線の先には光が——観衆の大歓声が、ここまで響く。

さあて威風堂々に、揚威耀武ってか？

「——爪痕残してこーか」

不敵に笑って一歩踏み出した。

雄英体育祭——Part 1

<ヒロフミside>

——ワアアアアア……アア!!

すげえ大歓声だ。

これが一步踏み出せば一斉に集まるってのが楽しみだな。

『——雄英体育祭!!ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度のの大バトル!!』

プレゼントマイクの騒がしい煽りが場内に響く。

『どうせテメーらアレだろこいつらだろ!!? ウイラン 敵の襲撃を受けたのにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!!』

俺が、A組が、大きく一步を踏みしめる。

歓声は出口が近づくにつれて段々と大きくなっていく。

そして顔を引き締める。

少しでも俺がかっこよく写るように。

……いや、違うぞ?ナルシストって訳じゃないぞ?

俺が奪ってしまった『俺』が少しでも良い意味で歴史に名を刻むために最低限筋を通してんのさ。

光の方へと、一步また一步と進む。

『二年!!A組だろおおおお!!』

プレゼントマイクの紹介の後、一気に歓声の声は大きくなる。

凄いな。地面が揺れてるみたいだ。

みんなどこか緊張してるようでガチガチしているが、普通科の一部の生徒だけこちらをどこか恨めしそうに見ていた。あれ?心操君じゃね?
俺結構好きなんだよなあ彼。

手でも振ってみるか。

「なあおい!心操。ヒーロー科のやつがこっちに手振ってないか?」

「なに?………何やってんだアイツは?」

あれ、返してくれない……。

もしかして嫌われた……?会話すらしてないのに……?

「………何ショック受けたような顔してんのよヒロフミ」

「…別に…手を振り返してくれないだけでいじけてなんかないが？」
「子供かアంతタは」

子供じゃないしー（精神は）大人だしー。

……まあ、これから戦う相手だし馴れ合う必要もないよな…。

さて、切り替えようか。

えーつと確か…生徒代表挨拶があるんだよな。

カツカツカツ…とヒールの音を鳴らし壇上に上がる痴女——
—ではなく18禁ヒーロー『ミッドナイト』だ。

すんげえ格好してんな。この人。

「選手宣誓!!」

ムチを鳴らしながらよく響く声で話すミッドナイト。

「おお！今年の一年主審は18禁ヒーローミッドナイトか！」

「校長は？」

「校長は3年ステージだよ」

周りからザワザワと話す。

いやあ…PTAから何か言われなかったのかなあ、あの格好。

お？爆豪君が壇上に向かってるぞ。選手宣誓は変わってないんだな。

「せんせー、俺が一位になる」

「絶対やると思った!!」

いやあ、自分の追い込み方が上手いな。

俺だったらあんなこと言えないもん。

まあ、案の定ブーイングは多いよね。

「さーてそれじゃあ早速第一種目行きましよう！」

次の瞬間モニターのようなものが投影される。

「いわゆる予選よ！毎年多くの者が涙を飲ティアドロップむわ!!さて運命の第一種目!!今年は……コレ!!」

ルーレットの後に、障害物競走と表示された。

このレースは、計1ークラスでの総当たりレース。コースはこのスタジアムの外周約4kmと意外と長い。

そして1番のポイントはコースさえ守れば”何をしても”良

いってところだ。つまり意図的に妨害したとしても許されるってわけで…。

まあ、しないだけども。

スタート位置は一番後ろを陣取る。

いや、舐めプという訳ではなく人が少ないところを取っておきたいのだ。

「さあさあ位置につきまくりなさい…」

「コレ」みたら多分プレゼントマイクは発狂するだろうな。

赤いランプが一個、二個と点滅し——

「スター——ート!!」

俺を除く全員が駆け出した。

おお、入口付近がぎゅうぎゅう詰めになってらあ。

しかし、そこから勢いよく抜け出した者がいた。足元が凍ってる…轟かあ。

…とそんなことをしている場合じゃなかった。そろそろ呼び出すか。禍の悪魔の眷属——飛蝗^{バツタ}の悪魔を。

『さーてここからはプレゼントマイクが実況を……つてきやあああああああ!!!虫いい!!!』

「トノサマバツタでーす!」

蝗害というものをご存知だろうか？

トノサマバツタや、サバクトビバツタなどの種類の「群生相」という身体変化をし、大量発生する災害の事で、主に農作物を食い荒らしながら移動して住民たちの食料難を引き起こす災害の一つだ。

今回俺が呼び出したのはその名を冠する悪魔だ。

外見は…まあ、でかいトノサマバツタだな。

ただ、黒光りしているからGっぽいな。

「上に乗りに込んで…いよおし!飛んでくれ」

『御意』

バツタは足を折り曲げ——跳躍する。

ではイクゾー!デッデッデデデデカーン!!

<ヒロフミsideout>

氷で足止めされた生徒たちをすり抜けるように前に飛び出すA組の面々。

サイラン
敵の襲撃を乗り越えた彼らに立ち止まる時間は少ない。

中でも待機時間に自分を差し置いて緑谷に宣戦布告した轟にキレていた爆豪は、独走状態の轟に猛迫する。

「そう上手く行かせねえよ半分やろう!!」

しかし、爆豪の声に対して一瞥するが特に反応はせず最初の関門へと向かおうとしたその時、大きな影がコースを覆う。

——ブウウウウン!!

「なんだありやあ!？」

「……くそー！ヘラヘラやろうか!!」

「……つち」

その上を通り過ぎ、一位へと躍り出たのはバツタ——ではなく、ヒロフミだった。

「サラマンダーよりずつとはやい！」

『と、トラブルはあったが実況を再開するぜ！現在バツタに乗って一位になったのはA組の黒魔ヒロフミだー！そしてその後ろを轟が追っている——!!』

空を駆ける黒いトノサマバツタ。

地を駆ける人間達に届くことは無い。

「さてさて、確か最初の関門はと……あれか」

『さあいきなり障害物だ!!まずは手始め……第一関門ロボ・インフェルノ!!』

巨大なロボットが雄英の生徒たちの前に立ち塞がる。

「入試ポイントウイラン時のO P 敵じゃねえか!!」

ここで順調に進んでいた生徒達は足踏みする。

しかし、上空のヒロフミだけは違った。

バツタは常に飛んでいられる訳では無い。どこかで着地してから再度飛び立たなければならぬ……が、

「——コン」

狐がロボの体の半分を食らう。

『A組黒魔!!個性の力でロボを食わせちまった!!?なんじゃそりやあ!?!』

そのままロボゾーンを通り過ぎると、緩やかに着地し——飛び立つ。

「(やはり、黒魔が一番の脅威という認識は間違ってたな……)」
目の前の現状に混乱せず、冷静に場を見ていた轟は己の前に立ち塞がるロボインフェルノと対峙して、

「(折角ならもつとすげえのを用意してもらってえもんだな)……クソ親父が見てるんだから」

瞬間。

圧倒的な冷気がロボの足元を覆い、凍らせる。

「あいつが止めたぞ!!あの隙間だ!通れる!」

「やめとけ不安定な体制ん時に凍らしたから……」

ロボの脚部が浮いている部分からゆったりと——されど確かに、

「倒れるぞ」

——ズガアアアン!!

轟音と粉塵が舞い散る。

しかし、轟は一瞥すらせずとその場を走り抜ける。

『1—A轟!!攻略と妨害を一度に!!こいつあシヴィ——!!』

まだ体育祭は始まったばかりだと言うのに、既に混乱が始まっていた。

だが、だが、まだヒロフミの一位はゆらがず、余裕の表情を浮かべていた。

『たけのこだ!!』

『……きのこと一択……』

『ほらほら永遠に終わらない戦争しないの。ヒロフミ君の応援しなきゃ』

『……止めてくれるな……私のプライドが……許さない……』

『ここで決着をつけようかあ!!!』

『……上等……ヒロフミも悪魔が……少なくなれば……喜ぶはず……』

『アノー……トツポとかもいいんじゃないカナ?』

『お前は黙ってる!!』

『……え?誰?』

『……』

『あれ?……死んじやった?……反応も無い……あ』

『……誰か踏み潰したような……?』

『どこかせいせいしたような……?』

『ふくたくりくとも?』

『ひっ!』

『折檻は後にするとして……まずいよねえ……ここで殺しちやっただこととはつまり』

——— 現世に解き放たれちやっただことだね』

波乱の雄英体育祭は続く。

悪魔は笑う。まるで恋する少女のように。

——ソレは意識を覚ました瞬間に三つの強大な気配を感じ息を潜めていた。

——ソレはヒロフミの数奇な人生に興味を持っていた。

——ソレはヒロフミの高校生活を退屈に思っていた。

——そりゃア、今は訓練よ。人は死んでねエし、核兵器なんてもんは無い。たかが訓練だ……だが、これが本番だったらどうする？このビルにはここら一带を焦土にできる兵器があって、守るべき人々が居て、爆豪、轟の前には敵俺が居る。…なんのための状況設定なのか、忘れたのか？なアヒーロー。このままでいいのか？

——ああ、つまらない。退屈だ。今どきそんな良い子ちゃんした答えなんてつまらない。

——しかし、その考えは襲撃事件で一変することとなる。

——だから——黙って俺に力を貸しやがれ。

——……なるほど、そういう事か。キミはくだらない正義感を持ってヒーローになるのではなく、あくまで自分のエゴのためにそっち側に行ったんだね。

——ソレはヒロフミの前に出ることを決心した。…まあ、今まで他の悪魔にビビってた訳では無い。…断じて。

——しかし。

『『お前は黙ってる!!』』

——へぶっ!?

不覚だった。ついついき^終のこ^わた^らな^いのこ^戦争^争に第三勢力として参入したばかりにうつかり死んでしまった。

「ウウ……こんなんじやヒロフミ君に顔向け出来ないヨ」

薄暗い路地裏に一人ポツンと座り込む少女。

「お、おお？良^くい女がいるじゃねえか……それにその格好……誘^つてんのか？」

少女は薄いタオル一枚だけを身につけており、たまたま通りかかったチンピラが下卑た視線を向ける。

「ハア…外には色んな人がいるんだネ…」

「へへ…そうだなあ？ちやあんとママの言いつけ守ってねえとなあ！！」

ねっとり話しながら少女に襲いかかる。

しかし、相手はただの少女では無い——悪魔なのだ。

「ネエ。キミは確率って分かるカナ？」

いつの間にか目の前にいたはずの少女が男の後ろに現れる。

その現象にようやく自分がなにかいけないものに手を出したのでは無いかと思ひ直す。

しかしその判断は——遅すぎた。

「ウエを見てみナ？大きな花瓶があるでシヨ？…今にも落ちそうだなエ…アレが頭なんかに落ちたら死んじやうカモ」

ひゅ、喉がなる。冷や汗がたれ落ち、足の震えが止まらない。

男はもう、ただの少女では無いと感じ取ってしまった。

…窓際にある花瓶が落ちる確率は低い。

だが、彼女にその確率というものはあつてないようなものだ。

少女の能力——それは『確率操作』だ。

天秤を故意に傾かせるという理ことわりにすら干渉しうる能力。

「ワタシはね？確率を操作するノ」

「ひ、ひい……」

動けない。動かない。足が足として機能しない。

蛇に睨まれたカエルのように男はただその場に立ち尽くすだけ。

「ダケド…完全に100:0にすることは出来ないンダ。——ダカラ、賭けをしない？イマ、あの花瓶がアナタの頭に落ちる確率を80:20にしたノ。つまり、アナタの頭をかち割る確率が80%ってコトネ」

——もう20%がアナタの目の前に落ちる確率ネ。

心臓が早鐘を打つ。

恐怖と狂気が男のつま先から頭まで襲う。

怖い。恐い。怖い。恐い。

死ぬかもしれない。ここで、何も成さずに。

「ジャあ行くヨ？」

上を見ると、ぐらりぐらりと風に煽られ花瓶が揺れている。

そして——物理法則に従い落下する。

「ア—ア運が悪かったネ？死んじやつタ」

そこには頭部が陥没した男の死体が血の海に沈んでいた。

「ホントはね？90：10の確率だったノ。でも：仕方ないでシヨ？」

—— 獣が狩人の言葉を信用してはいけないのだから。

「サテと：何をしようカナ？……早くヒロフミ君が会いに来てくれないカナア：アツ！目立てばいいンダ!!ヒロフミ君が気づけるようニ！」

少女は笑う。どこまでも無垢に。

雄英体育祭——Part 2

ヒロフミはバツタの背に乗り空を駆ける。

着地して跳躍を繰り返す。

彼にとつて穴のある地面だろうと地雷が敷き詰められた危険地帯だろうと飛び越えてしまえば意味は無い。

二位と圧倒的な差をつけ一位でスタジアムのゴールテープを切った。

『さあ!!一位は黒魔ヒロフミがぶっちぎりでゴール!!でもぶっちゃけ虫無理だからどっかやって欲しいぜ!!』

『……やかましい……』

半ば悲鳴のような声で叫ぶプレゼントマイクと呆れたような声のイレイザーヘッド。

そのやり取りに苦笑しつつヒロフミはバツタを元に戻した。

「すごいな彼は……是非ウチに来て欲しい……」

「いや、ウチに……」

「だが個性がなにかまだはつきり分かってない。虫を出す個性なのか?」

ざわざわと、ヒロフミの事に関して揺れる観客達。

その様子を尻目にヒロフミはモニターに映っている生徒たちを見ていた。

モニターには地雷地帯で争う緑谷、轟、爆豪の三人が三つ巴の相を呈しており、手に汗握る展開が続いていた。

それと並行するように盛り上がる実況と観客席。

ヒロフミもまたその様子を食い入るように見ていたのだが……

『……ヒロフミ……ちよつと……お話が……』

「(そこだ!殴れ!行け!)」

『あれ?聞こえてないの?おーい』

「(デク君!?!すげえ!あんな大爆発の中で飛んできやがった!さすが主人公!!)」

『ヒロフミ君ー?』

「(んあ?何?何かあったの……ってなんてボロボロなのさ)」

『それは私がちよいと折檻をね…』

「(なにそれ怖い)」

『そんな事より!!事件だよ!』

「(事件ンン?俺いま応援で忙しいんだけど…後にしてくん…わかったわかった。聞いてやるから捨てられた子犬みたいな顔を辞めてくれ……とちよつと待っていてくれ)」

続々とスタジアムに入ってくる生徒達。

「二位おめでどう。緑谷」

「あ、ありがとう…黒魔君こそ一位おめでどう。すごいや…あれは…バツタだよね?」

「おう。蝗害つてのがあつてだな…まあ、詳しくは調べるといいさ」
「分かったよ……少し水飲んで来るね…」

と言い、その場を後にする緑谷。

「(しまった。ヒロフミで良いって言うのを忘れてた)」

『そろそろいいかな?』

「(いいけど……なんだ?かしこまって)」

『その……ね?悪魔を一体……殺しちやっみたいなんだ』

「(はあ………はあ?!え、ど、どういうことだよ!?)」

『……話は私と???!の?!!?きのことたけのこ戦争を……していた頃にさかのぼる……』

「(なんて?)」

『ついつい熱が入りすぎちゃって…喧嘩が始まろうとしていたところを巻き込んでぶちっと……』

『……すまない……』

『ごめんね……』

「(……ん、まあ減った感触すらなかったし大したことはないだろ)」

『それがヒロフミ君。そうはいかないみたいなんだ』

「(なんだって?)」

この間に、続々と選手たちはスタジアムに戻ってきており、最後

の一人でもあるサポート科の発目明が入ってきたことにより障害物競走は終了した。

『私の能力で、ヒロフミの持つ悪魔たちの名前や場所は完全に把握してただけど…今回死んじやった悪魔も一応見つけていてね。まあ、あまり姿を出したくないようだったしいつか自分から姿を出すだろうと思って監視してたんだ』

「(…なるほどな。ちなみに姿を出したくない理由って?)」

『???ちゃんがいたから、かな。理由は聞いた事ないけど名前のおそらくは』

「(…何となく察したぞ)」

『元々、私たちがここに来た時からいたみたいなんだ』

『…気づかなかったぞ…』

『ボクもだ…』

「(それを言ってしまうえば俺もだが…。ん?だとしたら相当隠れるのが上手いみたいだな)」

『だね。自分で言うのもなんだけど上位に位置する悪魔だと自負してる私ですら、能力を発動しなければ見つけれなかったし』

「(…まあ、事情はわかった。それで?名前は分かるか?俺の中から出た訳だからLvによる制限はないだろう?)」

『流石。鋭いね。…かの悪魔の能力は『確率操作』でもこれを言い換えればそれまでの均衡を変えてしまう最悪の能力だ。そんな力を持った悪魔。その名は——』

——
ライラン
敵の悪魔だよ』

ヒロフミはその名前を聞いて大きく息を吐く。

面倒だ、と思った。

なんでこんな能力なばつかりに悪魔同士の仲まで気を付けなければいけないのかと頭を抱えそうになるが、顔には出さずに心の内だけで留めた。

…周りから見ればヒロフミの今は次の策を練っているように見え不気味さを周囲に与えていた。

「まあ、姉ちゃんとかアキ兄にも伝えとく……はあ……」

『…まあ、支配ちゃんの手伝ってくれるなら案内すぐ見つかるかもね』
「(だいたい)」

悪魔たちとの会話を一旦切り、次の競技——騎馬戦についての説明を聞くことにした。

「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらわ！基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど一つ違うのが…先程の結果にしたがい各自にPが振りあてられること！」

「入試みてえなPポイント 稼ぎ方式かわかりやすいぜ」

「つまり組み合わせによって騎馬のPポイントが変わってくるよ！」

途中までミッドナイトの説明を聞いていた生徒たちだが、次第に好き勝手に(恐らく)ミッドナイトが説明したかったであろうところを全部口に出していた。

「あんたら私が喋ってるのにすぐ言うね!!」

「おー恐…」

ヒロフミがついボソリとつぶやくと鬼でも居殺せそうな勢いでミッドナイトが睨む。その様子にすぐさま降参のポーズを取りヘラヘラと笑っていた。

「…んんっ…ええそうよ!!そして与えられるポイントは下から5ずつ!42位が5ポイント、41位が10ポイント…といった具合よ。そして……」

何故か今度は優しげ笑いかけ…いや、明らかに愉しんでいるような笑顔でヒロフミを見て、

「1位に与えられるポイントは——1000万!!!」

全員がヒロフミの方を見る。

しかし、ヒロフミは余裕の表情を崩そうとせず、欠伸までしてアピールしていた。

その様子に周りは鬨志をメラメラと滾らせる。

「…案内余裕そうね?…上位の奴ほど狙われちゃう——…
下克上サバイバルよ!!」

「いえーい。下克上げこくじよつてみなー」

と、ダブルピースしながら煽るのであった。

雄英体育祭——Part 3

上^Pを行^Iく者^Uには更^Uなる受^I難^Tを^A。と言うだけあって一度取ってしまえばそれだけで個人戦進出が決定してしまう。つまり、トップであればあるほど騎馬を組むリスクが高まる。

団体戦だけあって1000万Pを持っていると、保持し続けるより終盤で奪う方が戦法において理にかなっている。

…まあ、つまりヒロフミはめちやくちや避けられている。

如何に個性が強いとは言え、この場は生徒たちにとってアピールの場。なるべく残りたいたいところだろう。

「……よ、ヒロフミ。売れ残ってんじゃない」

「まあな。こんな優良物件他には無いのにな」

「自分で言うか」

「自分で言えちやうんだなくこれが」

「……負けないから」

半分自分と組まないのだろうかと察していたヒロフミは苦笑しながら耳郎を見据える

「おう、かかってこい」

耳郎とヒロフミはバチバチと視線で火花を散らす。

一方、緑谷はチームを組む相手を探すことに難航していた。

ここもヒロフミと同じような理由だ。少し違うことがあると言えば、周りの生徒達に緑谷自身の個性について分かっていないというのがあろう。そんなところに、

「デクくん！組もわっ」

「組も」の「も」で大量の涙を流しながら

「麗日さん!!い…良いの!?!二位故に結構狙われるけど…」

「ガン逃げされたらデクくん勝つじゃん」

「そ…それ過信してる気がするよ麗日さん…」

「するさ！何より、」

そこで一旦言葉を切り、麗らかに笑いながら

「仲良い人とやった方が良い!!」

思わず顔をキュツと顔をしばめてしまう緑谷。

「うわあ…どうしたの!?!不細工だよ!?!」

「あ、いや直視出来ないくらいうららかで…」

そこから二人とほか二人をどうしようかと作戦会議を始める緑谷と麗日だったが、その後ろから

「あー良さげな雰囲気なところ悪いんだが俺も参加していいか?」

割り込むように話しかけてきたのはヒロフミだった。

実はずっと前から二人が話が終わるのを待っていたのだが、あまりにも二人が仲良さげに話しているものだからタイミングを測りかねていた。

「良さげな雰囲気?!?ちや、ちやうよ?!」

「そ、そうだよ!!」

「(じれったいな、こいつら)……まあ、その話は置いて騎馬に参加しても良いか?1000万Pだが…」

「むしろ参加して欲しかったくらいなんだ!黒魔くんは中遠距離の攻撃ができるから僕達の騎馬に必要だったんだ」

「そいつは良かった。あと、ヒロフミで良いぞ。俺もデクって呼ぶから」

「———わかった!よろしく!ヒロフミ君!」

ヒロフミは腕を組んでおう、と返事してから作戦会議に参加する。

「アタッカーは揃った…けど、機動力が不安だな…でも、一人アテが居る」

「あ!飯田くんや!」

「…機動力って意味では飯田以上に適任はいないな。賛成だ」

ここで一度作戦会議を切り上げ、飯田を呼ぶ。そこで緑谷を取り囲むようにしてから

「飯田くんを先頭に僕・麗日さんと馬をつくる!そんで麗日さんの個性で僕と飯田くんを軽くすれば機動性は抜群!騎手はヒロフミくん

で攻撃的に行こう。正直USJのヒロフミくんの活躍を見て、逃げの一手というのは逆に強みを無くしちゃうからね。ヒットアンドアウェイで行こう」

緑谷の策に皆は大きく頷き、これなら行けそうだと確信した——
「が、飯田だけは違い顔を俯けながら、

「……………さすがだ緑谷くん……………だが、すまない。断る」

まさか断られるとは思ってなかったのか、緑谷と麗日は呆気に取られた表情となる。

ヒロフミは飯田の言うことを黙って聞いていた。

「入試の時から…君には負けてばかり素晴らしい友人だが…だからこそ…君についていくだけでは未熟者のままだ」

眼鏡を掛け直し、背を向ける。

それは飯田の決意を表しているようで全員が何も言えないでいた。

「君をライバルとしてみるのは爆豪くんや轟くんだけじゃない。——
俺は君に挑戦する！」

そう言い残し、轟の方へと向かった。

その時、緑谷は思い知らされた。

全員が敵で、友だちごっこじゃいられないことを。

「フフフフ…やはりイイですね目立ちますもん！」

さっきまでの真面目な雰囲気とは打って変わって、愉快的声がヒロフミの耳に届く。

「私と組みましょ一位の人!!」

「お、いいぞ」

「「軽い!?!」」

「フフフフ話が早い人は好きですよ——私はサポート科の発目明!あなたのことは知りませんが立場利用させて下さい!」

「あっあけすけ!!」

「おういいぞ。どんどん利用しろ」

「逆にこっちは太っ腹だ!!」

すごい勢いで迫る発目とノータイムでOKの返答するヒロフミ

に緑谷は振り回され続ける。

そこから発目の勢いは止まることを知らず、自分の発明品——
—彼女は『ベイビー』と呼びその発明品達を大企業の目に留まるよう
に現在注目の的であるヒロフミに声をかけてきたのだ。

「サポート科はヒーローの個性。より扱いやすくする装備を開発しま
す！私、ベイビーがたくさんいますのできつとあなたに見合うものが
あると思うんですよ！」

「いいねえ……ただ、ちよつとこういうのの見る目がないからデク、お願
いできるか？」

「わかった……んーと、あ！これひよつとしてバスターヒーロー”エア
ジェット”!？」

「おお！中々お目が高いですね！もじやもじやの人！これを参考に独
自解釈を加え——」

完全にヒロフミと麗日は蚊帳の外といった様子で二人は会話を
続けている。

その間、ヒロフミは少し考え込むような仕草をした後、

「デク。騎馬の事なんだが——」

「あ、うん……え？」

「——の方が良いと思うんだが。どうだ？」

「………確かに。悔しいけどその通りだ。分かったそれで行こう！」

ヒロフミの提案に少し悩んだようだったが、考えれば考えるほど
こっちの方が良いと思ったのか、覚悟を決めた顔で緑谷は頷いた。

「15分経ったわ。それじゃあいよいよ始めるわよ」

腕を伸ばしながら話すミッドナイト。

『さあ起きろイレイザー！15分のチーム決め兼作戦タイムを経て
フィールドに12組の騎馬が並び立った!!』

『……なかなか面白え組が揃ったな』

その言葉に周りは顔を引き締めていく。

『さア上げてけ鬨とぎの声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!!』

ヒロフミたちの騎馬には、ハチマキをしつかりと頭に結んだ緑谷

が堂々とした様子で胸を張っていた。

『狼煙を上げる!!』

「麗日さん!!」

「っはい!!」

左翼に。

「発目さん!!」

「フッフ!!」

右翼に。

「ヒロフミくん!!」

「よっしや」

そして——中央に。

「よろしく!!」

合戦の火蓋は——

「鉄哲恨みっこなしだぞ」

「おう！」

『3!!』

「狙いは…」

『2!!』

「一つ」

『1…!』

空気がしん、と静まる。

『START!!』

——切って落とされる。

一斉に緑谷の騎馬に向かってスタジアムのほぼ全員が突撃する。
全員が臨戦態勢に入る。

「いきなりとは恐れ入るね。まずは二組だ！」

前衛のヒロフミが声を挙げる。

「さあ、どうする?」

「もちろん!逃げの一手!!」

緑谷の指示にしたがって、その場を抜け出そとしたが——抜
け出せない。いつの間にか地面が底なし沼のようになってしまった

からだ。

「沈んでる！あの人の個性か！」

前を見てみれば前の二組の鉄哲の騎馬の前衛が個性で地面を沼とかしていた。しかし、こんなところで止まることは無い。

「麗日さん!!発目さん!!——顔避けて!!」

ぴ、と小さな電子音の後に緑谷が背負っていたバックパックからエンジンが吹き出て、勢いよく空へと飛びだす。

「飛んだ!?サポート科のか!追ええ!!」

「っ耳郎ちゃん!!」

「——わってる」

二つのプラグを緑谷に目掛け飛ばす。

しかし、間合いに入る前に蛸で弾かれる。

「あまいな」

挑発的な笑みを地上の耳郎に向ける。

「その余裕はいつまでも持つか見ものだね」

吐き捨てながら方向転換する葉隠の騎馬。

「さすがだ!確かにこれならヒロフミくんが前の方が戦闘も防御もしやすい!」

「まあな。ただ、油断大敵だ」

と軽く返す。

「着地するよ!」

麗日の言葉にヒロフミは蛸で予防線を張り、衝撃に備える。

そして、発目に提供してもらったブーツを履いた麗日が緩やかに着地しそれと一緒にヒロフミと発目も地面に足をつける。

「どうですかベイビー!たちは!!可愛いでしょう!?!可愛いはつくれるんですよ!!」

緑谷の騎馬は麗日以外を浮かして総重量は麗日と装備や衣類のみのため、極限にまで機動性にこだわっている。

「機動性バッチリ!すごいよベイビー!発目さん!!」

「でしよー!?!」

緑谷は嬉々として話すが、麗日だけが不満げに

「浮かしとるからやん…」

と呟く。

「はいはい次来るからなー」

流れを切り、意識を相手に向けさせる。

フィールドの中心に着地してしまったせいも、取り囲むように複数の騎馬が緑谷の騎馬へと迫り来る。

『さくさくまだ2分も経ってねえが早くも混戦混戦！各所でハチマキ奪い合い！！1000万を狙わず2位く4位狙いつても悪くねえ！！』

プレゼントマイクの実況が観客たちを煽り、呼応するように観客席はまた一段と盛り上がる。

そんな盛り上がりの中の裏ではB組の騎馬が躍動を続けていた。

そんな中、緑谷の騎馬に近寄る黒い影が――

「アハハハ！奪い合い…？違うぞこれは…一方的な略奪よお！！」

「障子くん!?あれ!?一人!?騎馬戦だよ!」

「いや！障子のあの腕の中にいるんだ！一回距離を取るぞ!!」

そこに居たのは峰田と蛙水を覆い隠すように障子の個性――

――複腕で戦車のような騎馬を作っていた。

「何!?取れへん!」

「峰田の個性か。くそ」

「なアア!?それアライ!!」

「アライよ!」

してやられたという顔のヒロフミと障子の戦法に驚きの声をあげる緑谷達。

すると――長い舌が緑谷のハチマキを狙ってきた。

「わ!!?」

「わ!!?」

その舌は緑谷は躲し、その後ろにいた鉄哲も急いで避ける。

「さすがね緑谷ちゃん…!」

「蛙水さんもか!!すごいな障子くん!!」

「梅雨ちゃんと呼んで」

1000万
緑谷の騎馬が一箇所に固まっていれば、逆転を狙うチームに狙

われてしまう。

砂糖に群がるアリののように、騎馬たちがそこに集中する。

『峰田チーム圧倒的体格差を利用しまるで戦車だぜ!』

「このままじゃまずい…!強引にでも離脱するぞ!!」

「つわかった!」

峰田の髪が着いたブーツは地面から離れにくくなっている。そんな最中無理やり飛ばうとすれば壊れてしまうのも仕方ないことだ。

「ああベイビーが…引きちぎれたあ!!」

「ごめん!!でも離れられたよ!」

再度空へと浮かぶ緑谷の騎馬。

しかし、そこへ突撃する一人の生徒が――

「調子乗ってんじゃねえぞクソが!」

「つち!蛸!墨!――!」

ヒロフミが爆豪の攻撃から守ろうと蛸の墨で爆豪の視界を奪おうとするが

「その対策はどうに分かってんだよお!!」

そう叫ぶと、緑谷の騎馬の頭上にまで上昇する。

「てめえのそれはお前が見てる範囲に墨を吐くんだろ?ならよお…てめえの上に行きやあいい話だろ!」

「はは、さすがは戦闘センスの塊。大当たりだよちくしようめ」

爆豪の視界は閉ざされない。その瞳には“頂”のみが映っている。

太陽を背に緑谷へ迫る。

「だが――これは読めたか?」

緑谷は迫り来る爆豪に向け、指を二本立てて――

「こ、コレで良いんだよね?――コ、コン!」

狐の悪魔の前足を爆豪の腹に叩き込む。

その衝撃で、緑谷の騎馬から大きく突き放されてしまう。

「な、おいおい危ねえな!」

急いで瀬呂の個性で騎馬に戻す。

騎馬に戻った爆豪はしばらく呆然としていた。

「なんなんだ…？あれは…」

「緑谷の個性は単純な増強系だったよな!?なのにあれは…」

「ヘラヘラやろうのだ…！クソが！どんな手を使いやがった!?!」

それは最初の作戦会議の時の話まで遡る。

——「デク、騎馬のことなんだが俺が騎手では無く騎馬の方にしたいんだが…」

——「な、え??なんで!?!じゃあ騎手は!?!」

——「(まあ、主人公の出番取るのもなあ…これ確かオールマイトの師匠も見てるんだろ?なら見どころくらい作らなきゃな) デク。俺がもし騎手をした場合のデメリットがひとつある」

——「…:うー…ん…お、思いつかないや…何が…あるのかな?」

——「それはな…馬の脆弱性だ」

——「え?ど、どういうこと?」

——「デク…個性の調整上手くいつてないんだろ?」

——「うぐっ…:まあ、そうだけど…:」

——「だとしたら、周りの動きにどこかでついていけなくなる。となると致命的だ。こういう団体戦は機動力が命になってくるからな。:まあ、その個性を一部、では無く身体全身に渡らせることが出来たなら話は変わって来るが——」

——「そ、それだ!でもここじゃあ…」

——「(口が滑った…)ま、まあ一朝一夕でできるもんじゃないしな。これからはそう考えて行けばいいだろう」

——「そ、そうだね…:でも、それじゃ僕が戦う手段が…」

——「ある。いや、今からあるようにする。が正しいか」

——「どういうこと…?」

——「俺の個性の悪魔なんだが…どうやら俺以外にも力を貸すことができるらしい」

——「えっ!?!?」

——「ただ、俺との契約では無くその悪魔との契約になる。だからどんな要求をされるか分からない。正直身の安全は保証できない……と言いたるところだが、今回は実験的な意味もあるからノーリスクで一つ使わせてやるよ。まあ、この場限りだが」

——「す、すごいやヒロフミくん!!……それ以上の策もないしお願いしていいかな?」

緑谷の言葉に頷き、手を出すように指示するヒロフミ。素直に応じてから右手を差し出すと、何やら文字のようなものを書いてから、

——「はい、コレでOKだ。今緑谷に貸したのは狐の悪魔。U SJで黒いモヤのやつを食ったあれだな」

——「うわあ……すごい!!でもこれはどうやって使うの?」

——「まず、このきつねの影絵の手の形をするだろ?その中にできる空間に相手を入れて左目を閉じる。そして「コン」って言うんだ。そしたら狐の頭が出てきて食っちゃまう」

——「た、食べちゃうの!?!」

——「まあ、吐き出せって言えば吐き出してくれるさ。多分」

——「た、多分!?!」

——「それは置いといてもう一つ狐の悪魔の力がある。それが……まあ、簡単に言えば狐の前足で相手をぶん殴る技、だな。こいつは指を二本、くつつけて立てて「コン」って言うんだ」

——「す、すごい……これなら色んな騎馬にも対抗できるね!」

——「まあな。……とりあえずこれですぐ負けるなんてことは無くなっただろ」

——「……悔しいけどその通りだ。……コレで行こう!」

と、覚悟を決めた顔で緑谷は頷いた。

『うおい!?!緑谷チームがなんかモコモコした獣の足みたいなので爆豪をぶっ飛ばした!!おいおい緑谷お前の個性と違えぞ?!』

「(す、すごい……想像以上だ……これは……)すごいやヒロフミくん!!」

「(使えて良かったな。狐は気分屋だから力を貸さない可能性もあったしなあ) だろ?……もうすぐ着地だ」

そのまま一瞬ふわりと浮かんでからゆっくりと着地する。

その間にB組は結託し、A組からハチマキをひとつずつ奪っていった。

クラスぐるみの作戦で、予選をあえて捨ててライバルになるであろう者たちの個性、性格を見極めていた。

ただ、それは考えを変えてみれば緑谷の騎馬を狙うことに必ずしも固執してないと言える。

「皆逃げ切りがやりやす…」

『——さア残り時間半分を切ったぞ!!』

目の前には轟の騎馬が立ちはだかる。

「…そう上手くは…いかないか」

「そろそろ——獲るぞ」

両雄並び立つ。

互いが鎬を削り最後まで残っていた騎馬同士。

戦意は両者共に十分だ。

『B組隆盛の中果たして——1000万Pは誰に頭を垂れるのか!!!』

緑谷と轟は睨み合う。

緊張感は周囲にも影響しており、異様な雰囲気醸し出していた。

「良い策だったからあなたでも組んだのに…いつハチマキ失ったの?」

「わかんねえよ!!けどこれでもう失うもんはねえ!——あの2組のP!!全力でかすめ取るぞ!」

しかし、1000万を取りに行こうとしているのはなにも轟だけでは無い。

周囲の騎馬がワンチャンスを狙い、緑谷の騎馬へ目を向ける。

「いやあ早いねえ。やっぱ飯田がいるからかね。…厳しくなるぜ緑谷」

「時間はもう半分!足止めないでね!仕掛けてくるのは…」

「飯田、前進」

「ああ！」

緑谷の指示を出す前に轟が動く。

「八百万、ガードと」伝導」を準備」

「ええ！」

「上鳴は……」

「いいよわかってる!!しっかり防げよ……」

轟と緑谷の騎馬を取り囲むようにしていた他の騎馬たちが二組を狙いに一斉に動き出す。

「二組だけじゃない！」

緑谷が叫ぶのが先かそれとも上鳴の「無差別放電」が先か、電気がフィールド全体にほかの騎馬を襲う。

「ちっ!!」

緑谷の騎馬を守るように蝮の悪魔の足が全体を覆う。

しかし、蝮の焦げた匂いが鼻につく。

「~~~~!!」

「上………鳴………!!」

呻き声が周りからあがる。

全員が上鳴の130万Vボルトに襲われ、全身がビリビリと震え動けなくなる。

「残り6分弱後は引かねえ——悪いが、我慢しろ」

電気で痺れて動けないほかの騎馬達を凍らせる。

「ぐっ!!?」

『何だ何をした!?!群がる騎馬を轟、一蹴!』

『上鳴の放電で確実に動きを止めてから凍らせた……さすがとつか……障害物競走で結構な数によけられたのを省みてるな』

『ナイス解説!!』

その間に止まっている騎馬からハチマキを奪い取りながら緑谷の騎馬に迫る。

戦うよりも逃げを選んだ緑谷はバックパックで飛び上がろうとするが、

「バックバックがイカれた!!?」

「ベイビー!!!改善の余地アリ」

「強すぎるよ!逃げきれへん!」

「牽制する。蛸、足!」

飛べなくなっていた。焦る緑谷、麗日に^開発^品の改善点を見つけてどこか嬉しそうな発目。一旦距離を取るために蛸の足で牽制するヒロフミ。

少し焼け焦げた蛸の足が轟の騎馬を襲う。

しかし、

「八百万!」

蛸の足は八百万の^{個性}創造で生み出された板で防がれてしまう。

「創造!...!厄介過ぎる!」

「ああ、だが上鳴も厄介だ。ほら蛸の足が少し焦げてる」

「なっ!?!」

「さすがに焼き切れるってことはないが、蛸に頼れそうにないぞ。まあ、視界を遮るくらいならできるが」

「...:分かった。ここは逃げの一手だ。狐の悪魔を使って何とか立ち回っていくよ!」

全員が頷き、轟と相対する。

間違いなく緑谷の騎馬にとつては決勝リーグにあがるための高い壁になるだろう。

このフィールドは轟の騎馬と緑谷の騎馬の一騎討ち。軍配は何方に――

現状を簡潔に言うならば、どんでん返し、だろうか。

雌伏の時を待っていたB組がここぞとばかりにその実力を見せつけていた。

曲者揃いのB組はA組のハチマキを奪^とり続ける。

『残り時間約1分!!轟フィールドをサシ仕様にし...:そしてあっちゅー間に1000万奪取!!――とか思ってたよ5分前までは!!緑谷、なんとこの狭い空間を5分間逃げ切っている!!』

実況のプレゼントマイクの言う通り、この5分間の轟との攻防は緑谷に軍配が上がっている。

常に距離を取り左側へと動くことで、轟の凍結に使わせないように立ち回っていた。

しかし、それだけでは無い。

圧倒的な制圧力を持つ上鳴の放電もヒロフミの蛸によりなんとか防いでいた。

攻めあぐねている。

残り1分のこの状況で、轟は焦り始めていた。

そんな時、

「皆、残り1分弱……この後俺は使えなくなる。」頼んだぞ」

飯田はその声に秘策ありというような声で話す。

「飯田？」

「——しっかり掴まっている」

その言葉によく轟たちは身体を引き締める。

「奪れよ轟くん！」

「——トルクオーバー！レシプロバースト！」

「——来るか」

轟の騎馬は自動車と、同等のいやそれ以上のスピードで緑谷の騎馬に迫る。

風を受けながらも轟は緑谷のハチマキへ手を伸ばす。

ヒロフミを除いた全員が動けないでいた。

そう、ヒロフミを除いて。

「早いねえ……でも」

蛸の足が轟の手を払う。

「理想的なタイミングで」

そしてもう一方の蛸の足で轟のハチマキの一つを掴む。

「理想的な角度で奪り返しちまえば、速さなんて俺の前にあつてないようなもの」

『な——！！?何が起き……えええ!!?1、1000万は無事!!?それど

「ころか逆に奪っちまったよ!？」

「なん……だと?」

『轟、逆転できず!!依然として緑谷が1000万を持っているー!!』

轟の騎馬全員が驚愕の表情を浮かべる。

その視線の先には「左眼だけが変色した」ヒロフミがいた。

「早かろうが強かろうが、未来を見ちまえばあとはタイミングを合わせるだけだろ?まあ、取れたハチマキは小さい数だが」

「そ、それでもすごいや!!ヒロフミくん!」

「あとはコレで逃げ続けるだけやね!!」

「あの速さ……次の個人戦で使えますね……フッフ……」

会場が困惑と歓声が入り交じったようなもので半々だが、一つ言えるのは轟がここから緑谷のハチマキを奪うことが困難になってしまったことだろう。

一か八かの賭けはヒロフミの前で潰えた。

「すまない……僕は……僕はっ!」

「謝る事はねえ。あの状況でこれしかもう緑谷から1000万を奪う策は無かった。だから、勝負の末のこの結果なら……むしろお前はよく勝負したと褒めるべきだ」

悔しさから顔を歪める飯田とまだ平静を保っている轟がフオローする。

「デク、どうする?あの騎馬は左から攻めればハチマキを取れるぞ?」

次の個人戦のことを考えると轟を落としておいて損は無いだろ」

「……そうだね。幸いにも周りは轟くんの氷で動けない。勝負に行こう!皆!」

「了解!!」

残り時間はもう1分を切っている。しかし、ハチマキを奪うだけの時間はまだ残っている。

だが、それを許す轟の騎馬では無い。

飯田が、己が使えなくなる覚悟を決めて勝負をしたのだ。結果は負けてしまったものの、彼の緑谷に挑戦したいという想いは伝わって

いる。なら、ここでみすみす落ちる訳にはいかない。

「まだまだウイクゼ!!——無差別放電!!」

上鳴の電撃が緑谷の騎馬を襲う。

しかしすんでのところで蛸の足で騎馬を守る。

だが、追撃をしようとしていた緑谷たちは思わぬ足止めを食らってしまふ。

前の馬の飯田が先程の超加速によって足が動きにくくなってしまい、他の騎馬と比べると大分遅くなってしまうが——緑谷の騎馬の側面に移動するには十分すぎるほど、時間は稼いでいる。

「つち！凍らせるか！」

「コレで終わりだ!!」

冷気が緑谷へ巨大な壁を作りだしながら迫る。

その速度は未来を視ていたはずのヒロフミですら、対応が難しいものだった。

別方向からB組からハチマキを取り返していた爆豪の騎馬も迫っていた。

『8!』

カウントダウンが始まる。

ここで避けなければ緑谷の騎馬は一卷の終わりだろう。

ならばと、ヒロフミは声をあげる

「麗日！発目！足元に気を付けろ！デクはしっかり掴まってるよ!——

——今から跳ね飛ぶぞ!」

『7!』

緑谷の騎馬の足元に飛蝗バツタの悪魔が召喚する。

障害物競走以来の姿に周りは驚きの表情を浮かべる。

しかし、そんな事を気にかけている暇は緑谷の騎馬には無い。

勢いよく飛蝗が跳躍する——が、途中で飛蝗の足から凍りついてしまった。

だが、幸いにもこれで距離と空中での足場が出来た。

「だが——これで距離は……」

「待てや1000万ンン!!」

「っ!?!かっちゃん!!」

『6!』

まだ、まだ爆豪は諦めない。

どれだけ差があるろうが、常に一位を目指していたのはこの男なのだ。

どこまで飛び上がろうと、一番は逃さない。

「——コン!!」

狐の悪魔の足が爆豪を襲う。

だが、二度目は無いようであっさり躲すと爆破の力を強め、落下と爆破の推進力で速度を上げる。

「そこまで近づいてそのスピードなら避けきれねえよな? 蛸、足」

『5!』

しかし、1000万を奪うにはヒロフミという強力な相手を出し抜かなければならない。

今の爆豪にその壁を乗り越えることは——

「クソがっ!!」

「くっそ!危ねえぞ!」

『4!』

難しい。

危機一髪、瀬呂のテープが届き何とか騎馬に押し戻すことに成功した。

ヒロフミは飛蝗の悪魔を解除し、氷でできた足場にゆっくりと着地する緑谷の騎馬。

下の轟の騎馬は他に緑谷へ届かせる策は無いかと必死に考えるが、刻一刻とその時は迫る。

『3!』

「もっかいだ!!もっかい行くぞ!!」

「もう時間ねえって!」

『2!』

「爆豪のアレがありなら……!」

「ダメですわ!あそこまで届かせるものを創造するのは時間と体力が

…!」

『1!』

「さ、デクくん。勝った感想は?」

「は、早くないかな?ヒロフミくん」

「もう勝ちみたいなものやろ!」

「これはこれは…企業の方も注目してます!!やはりこの騎馬を選んで正解でしたね!」

『TIME UP!』

そして、波乱の騎馬戦は緑谷の騎馬の勝利で終了した。

『早速上位4チームみてみようか!!』

『1位緑谷チーム!!』

「や、やったああああ!!」

もはや涙腺が荒れ果てるのでは無いかというような勢いで涙を流す緑谷と、苦笑しつつも喜ぶヒロフミと麗日。壊れてしまったベイビーをみて少し悲しげな発目は少し不服そうな様子だった。

『2位轟チーム!!』

「……………くそっ……………」

「ヒロフミさんを攻略出来ませんでしたわね…」

「ウエ~~~~~イ (でも2位だから個人戦には行けるじゃん)」

最後の対一を制することが出来ずに立ち尽くすだけだった轟たちの表情はどこか暗い。

『3位爆豪チーム!』

「ク、ソ、がああああ!!!」

2位の轟たちとは打って変わって、まさに憤怒している様子の爆豪とそのまわりの切島、瀬呂、芦戸は不完全燃焼感からか少し不服げだ。

『4位鉄て…………アレエ!?オイ!!心操チーム!?!いつの間に逆転してたんだよおいおい!!』

何故か上位に食い込んでいたこの心操チームは、心操を除いてどうやってその順位に至れたかすらも分かっていないようで啞然としていた。

『いやあく流石はヒロフミ君だね。すごいや』

『……アレ？反応がない』

『『……ぐくふう……』』

『あれま、ちよつとやりすぎたか』

『……痛い……』

『キミは力加減とか知らないの……？』

『力加減してコレなんだけどねえ……』

『……ゴリラの悪魔……』

『ぶふっ！』

『——へエ？耐久力には自信があるんだ二人とも』

『『ピエツ……』』

雄英体育祭——Part 4

<ヒロフミside>

さてさて、騎馬戦が終わってさあ飯だつて時に轟に呼ばれた。どうせアレでしょ？個性婚の話でしょ？

何となくだけど覚えてんだ。闇深系のイケメンってずるいなーとかつて思つてたっけ。

…まあ、だからといって特別なことをするつもりはないが。

目の前じゃデクと轟がコントみたいなやり取りをしてる。…具体的にはオールマイトの隠し子かなんかと疑う轟と思いつきり否定するデク。

どうやら、デクがオールマイトに目をかけられてるのを見て勘ぐっていたらしい。

それと、デクから何かオールマイトに似た何かを感じることも。

「——まあいい。…俺の親父はエンデヴァー、知ってるだろ」「っ！」

「万年No. 2のヒーローだ。おまえがNo. 1ヒーローの何かを持ってるなら俺は……」

轟の顔に影がさす。

憂いを帯びた顔もそれはそれでイケメンとか羨ましいなあ。ま！僕ちゃんも天下の吉田ヒロフミフェイスなんですけどね！（ドヤア）

……まあ、チエンソーマンのヒロフミくんのは似ても似つかない別人なんだけど……。

こんなのがヒロフミフェイスとか解釈違いも良いところだろ。

「尚更勝たなきやいけねえ」

ああ、話してましたね。変に脳内で脱線してたわ。

んで、そこから話される轟家の闇とも言える部分。“個性婚”と呼ばれる話について聞いた。

まー簡単に言えば強い個性持ち同士で子供作ったら最強の個性持ちが産まれんじゃね？って話だな。そして目の前の轟くんはその

個性婚によって生まれた子と。おー闇深。

「記憶の中の母はいつも泣いている…「おまえの左側が憎い」と、母は俺に煮え湯を浴びせた。——ざっと話したが俺がお前らにつつかんのは見返すためだ。クソ親父の“個性”なんざなくたって…いや…使わず”一番になる”ことで奴を完全否定する」

そう語る轟の目にハイライトはなく、ほの暗い雰囲気があった。

「……闇深け〜」

とボソリと呟く。

いや、闇の深さなら俺も負けてないかも。なんてったって自分の個性で今世の親殺してるし。

……闇の深さで争うのは良くないか。

「……………」

轟も、デクも、黙ったまま目を合わさずにただそこに佇んでる。しゃーない。

「んで？わざわざ俺たちの前にそれを言うってことは自らハンデ使いますよーって宣言しにきたってわけ？」

「ちよ、ヒロフミくん…！流石に…」

「ああ、そうだ。そう捉えても構わねえ。何であろうと俺は右だけで緑谷と黒魔の上に行く。時間取らせたな」

轟はそう言つてとつととその場を去っていく。

正直、人様の家庭環境に関してとやかく言うつもりもないしな。まあ思うところが無いかと言われれば違うけど、でも首を突っ込むほどお人好しじゃない。だけど。その、轟の態度が気に入らない。

「僕は…ずうっと助けられてきた。さつきだつてそうだ…僕は——誰かに救^{たす}けられてここにいる」

デクくんはそう言いながら——今までのことを思い出すように、手を胸に当てた。

名言だねえ。

しみじみとデク君の言葉に耳を傾けながら、壁にもたれかかる。

「オールマイト…彼のようにになりたい…その為には1番になるくらい強くなきゃいけない。君に比べたらささいな動機かもしれない…で

も僕だって負けらんない。僕を救けてくれた人たちに応える為にも…！さつき受けた宣戦布告。改めて僕からも…」

顔を上げ、しっかりと轟を見据えるデク。その表情は、まさにヒーローの顔だった。

「——僕も君に勝つ！」

その前に俺が勝っちゃうかもね。

組み合わせによってはだけど。

轟は緑谷の宣言をじつと聞いた後に方向を変えて去っていった。

「いやあ男らしいねえデクくん」

「そ、そうかな？…僕に言えることはなんだろうって思った時に自然と出ちやっただっていうか…調子乗りすぎだったかな？」

「いんや。デクらしいよ」

「そう、かな？」

「そうさ。胸を張れよ主人公」

俺の言葉に嬉しそうに照れるデク。

うーん、デクくんは自己評価が低すぎると思うんだよな。

OFAを使うために凄まじい努力を重ねて、今の段階にまで上り詰めている。

それに、なんてったって天下のジャンプで掲載されている漫画の主人公なのだし。…まあ、このことはデク自身は知らないだろうけど。

でもポテンシャルは誰よりも高いんだ。

本人がそれに気付けてないのが少し残念だな。

「さてと。…腹も減ったし飯くいに行こうよデク」

「うん！」

こんな時間か…一緒に食べようって言った響香怒るかなあ？

…そういう姉ちゃん^{キマ}が応援に来てるとか言ってたような……嫌な予感がする。変なこと吹き込まなきやいいけど…。

<ヒロフミsideout>

「——いずれ貴様をも超えるヒーローにする。そうするべく

……つくった仔だ」

と、エンデヴァーは口を歪ませる。

オールマイトとしては次世代を育てるためのコツを聞きに来たつもりが、どこか——狂気の宿ったエンデヴァーを見て後退りする。

「……………何を……………」

「今は下らん反抗期だが必ず超えるぞ……………超えさせる……………！」

そう吐き捨てると、エンデヴァーは去っていった。

「エンデヴァー……………君は……………一体……………」

底知れぬ何かを感じ取ったオールマイトは眉を顰めさせる。
すると、

「おや。そこにいるのはオールマイトさんではないですか」

「…ん？ああ！君は——マキマさんじゃないか！…君も雄英体育祭に来ていたとは、意外だね」

「ええ、まあ。気にかけている子がいますので」

微笑みながら返す女性——マキマは、口に手を当てながら

「先程までエンデヴァーさんがいたのでは…？少々話したい事があったのですが…」

「あ、ああ。彼は少し御手洗に行ったよ。しばらくは帰ってこないんじゃないかな？」

「おや、残念。……………あの様子だとこの事はまだ早いみたいだ…。可愛い弟の言う通り、まだ様子見が正解かな…」

最後の部分だけオールマイトに聞こえないように小さな声で呟くマキマ。

オールマイトもその言葉に気付かなかったようだが目の前のマキマについて少し複雑な気持ちを抱く。

「（この目の前の彼女——マキマさんは少し苦手だ。……………どこか人じゃ無いような雰囲気があつて……………。敵の中サイランでも危険な部類を見つけ出し監視する組織の長でもあり、私自身も何度も色んな情報を彼女たちから教えて貰ってはいるが…公安の中でも最も謎に包まれている組織でもある…。彼女は同志だ。平和を守るものとしての。——

「だがやはり…どこか警戒心を抱かずにはいられない」

互いに少し気まずい雰囲気は漂うがそれも一瞬だけ。ヒロフミから電話が来るとマキマはすぐに顔を明るくしニコニコと笑いながら話し始める。

その様子はまさに姉弟と言えるものだった。

「うん、うん。じゃあご飯は友達と食べるんだね。わかった。……たまには一緒に食べたかったけど…うん。頑張つて」

電話を終え、お辞儀してからマキマはその場を去っていった。

「対特殊敵^{サイラン} 対策チーム、チーム長マキマ…か。謎めきすぎてるな。彼女は」

頭を掻きながら呟くオールマイトの声は誰に届くでもなく虚空に消えていくのだった。

場面は変わり、今にも傾きそうなオンボロアパート——写田の部屋にて気月からの連絡をいまかいまかと待つ写田の姿があった。

「くそっ！遅い、遅すぎるー！」

激しい貧乏ゆすりは床を揺らし、下の階にいる部屋に埃を落とすほど。

いつまでそうしていただろうか。いつの間にか写田は眠ってしまった。

夢を見た。

実家の扉の前に立ち尽くす。

ただそれだけの。

一つ変わったことがあるとするのならば、扉の向こうから「開けるな」

と、亡くなったはずの母の声がした事くらいだ。

何の変哲もない。つまらなく、寂しい夢を見ていた。

——ピンポーン

いつの間にか眠ってしまったのだろうか。

インターホンの音で目を覚ます。

「……宅配便か？頼んだ覚えは無いんだが……」

ギンギシと廊下の床を軋ませながら廊下を歩む。

「……はい」

「写田さん？俺です。黒魔アキです。…例の“ネタ”についてお話を」

「っ、やつとか！待っててくださいいね！いま開けます！」

勢いよく扉を開こうとドアノブに手をかける。

——開けるな。

夢の内容を思い出し、手が止まってしまう。

バカバカしい。夢の内容に引っ張られるなんて。

さっさと開けないと。

——開けるな。

「おーい。聞こえていますー？」

——ピンポーン

再度インターホンが鳴る。

それと同時に扉を強くノックする。

ああ、急がなければ。

このネタをものであれば俺は大金を手に来れる。そうすれば

…母さんにもいい報告が…

——開けるな。

何故。何故。いまになって躊躇っているのか？

あのガキへの配慮？ありえない。

ノックがやまない。

インターホンも止まらない。

開けなければ。開けなければ。

——開けるな。

なぜ自分は記者になりたかったんだっけ。

……最初は…確か…：父さんの冤罪の真実が知りたく——

「…あれ？気配はするんだけどなー」

「……………ああ！すみません。少し考え事をしています。いま、今すぐ開けますから」

いまになって原点を思い出すなんて。
いまになって——後悔するなんて。

あの時、自分の家族がバラバラになったきっかけとなった。冤罪報道と同じようなことをしようとしていることに——気付いてしまふなんて。

まだ、まだ間に合うはず。

ここから変わるはず。

まずは、断らなければ。

扉を開く。

目の前にはあの日見た優男。

身長は意外にも高い。見上げる位。

「ああ、良かった。居ないのかと思いましたよ。それで例の件ですが——」

「その件はなかったことにできますか?…思い直したんです。自分が如何に愚かだったか。思い知ったんです」

「反省した、と。……素晴らしい話だ。落ちぶれた男が再起を誓う。サクセスストーリーとしては十分面白いかも。でも——」

——さようなら^死

——パシユン。

サプレッサー特有のどこか気の抜けたような銃声が写田の耳に届く。

「……………え?」

「いやあく仕方ないんだよ。これは。だってヒロフミに手を出すからさ」

右手を拳銃に変化させたアキがどこまでも邪悪で純粋な瞳で写田を見下ろす。

「兄として、守ってあげなきゃな。…そう言えばコピーがあるんだっけ?」

血溜まりに沈む写田を踏み越えて部屋に入るアキ。

「(ああ……遅すぎた。全てが)」

いつしか、写田は、心臓を貫かれ生気の無い瞳で倒れていた。

「お、あったあった。……記事としてはよく出来てるなあ。ま、死んじやったし世間に出ることはないけど」

無情にも言い放った。

しかし、しかし、それに答える者は居ない。

そこには、確かに悪魔が居た。

「もしもし〜？マキマ？俺だよアキだ」

『……全く。さつきまでとても良い気分だったと言うのに』

「酷くない？悲しいんだが」

『あなたの扱いなんてこれで十分でしょ。……で？』

「はあ。殺^やったよ。彼」

『……苦労。って言っとくわ』

「それだけ？……ま、良いや。そういやヒロフミの活躍は？」

『それはもう。ヒロフミの一挙手一投足全てが完璧で——』

「——やっぱり流石俺の弟だな」

『いや、私の弟ですが？』

「は？？」

『は？？』

雄英体育祭——Part 5

<ヒロフミside>

お、おおう…何故か悪寒が…。最近俺と関係ないところで色々起こってたし虫の知らせってやつかもしれないな。

それはそうと、個人戦——その前にオリエンテーションだ。

正直飯を食べたばっかだから今すぐには戦いづらい。脇腹痛くなるじゃん。

まあ、つまりはこのオリエンテーションはサボるって事になるな。

その前に個人戦のトーナメントが発表される訳だが……

「なあおいヒロフミ、上鳴…上手くいつてよかったな!」

「まあ俺は提案しただけなんだが」

「いやでもその提案のおかげでこれから理想郷を拝められると思えば……ヒロフミもファインプレーだぜ!」

ニヤニヤと笑う俺と上鳴と峰田。

何をしたかと言うと、峰田と上鳴に『クラスの女子連中に……チアガールの衣装…着せたくね?』と雄英体育祭の前に相談していたのだ。

二人はもちろんノリノリで「誘導は任せておけ!同志ヒロフミ!」と答えていた。

いやあ、別に俺は女子たちの“チアガール”姿を見たいなんて気持ちには二割くらいしかないんだわ。むしろチアコスをして恥ずかしかつてる皆の姿に愉悦をするために提案したのだ。

「にしてもあつさりといったもんだな」

「いや偶然よお本場アメリカのチアガールも来てたからよ、上手く引き合いに出して説得してみたら案外上手くいったよな!」

「おう!いやあくこれは天が俺たちに味方しているとか思えないな!!」

相当ゲス…ではなく紳士な会話をしているとフィールドに続々と昼飯を食い終わった生徒たちが入ってきた。

さてさて……楽しみだなあ。

『あくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさー』

「……………」

『本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ…』

お、ようやく入ってきた。

『ん？アリヤ？』

『なーやってんだ……？』

『どーしたA組!!?』

横並びで入ってきたチアコスをしたA組の女子たち。

騙されていない周りからは不思議そうな目でその格好を見ていた。

そして俺たちはどう言う…

「チア……いいよね……」

「いい……」

「ぶっぶぶぶははははははは!!!!」

ひょーっとサムズアップする二人と大笑いしながら腹を抱える

俺。

まあ、犯人は明らかに分かるもので。

「峰田さん上鳴さん!!騙しましたわね!」

恥ずかしさと怒りの半々の入り交じった声で叫ぶ八百万。

「うはははは!!お、お似合いですね！……」

「ヒ、ヒロフミさんも一枚噛んでましたの!!?」

「くく…そうさ！この提案をしたのは俺！黒魔ヒロフミさ!!」

「~~~~!!バカフミ!!」

驚く八百万と耳まで真っ赤にした響香が非難の声をあげる。ふははいくらでも言うが良いわ！

笑いながらもスマホのシャッターを切り続ける。この写真はこの雄英体育祭の後に俺、峰田、上鳴のLONEグループ『A組紳士の会』で共有するつもりだ。

「まあ本戦まで時間空くし張り詰めてもシンドいしさ……いいんじや

ない!!? やったろ!!」

「透ちゃん好きね」

開き直った葉隠がこれからの応援に力を入れようと腕をぶんぶん振り回す。

さてさて、十分笑わせて貰ったしあとは二人と存分にあんなこと(意味深) や、こんなこと(意味深) について語ろうかな。

ん? あれ? 響香と八百万がこちらに……

「ふん!!!」

響香のイヤホンジャックと八百万のハリセンが俺たちを襲う。

避ける暇も無いわ。あれこれ当たっ——

あ、あばばばばばば!!!

「悪は滅びましたわ」

「バカフミ!! この、アホ!」

い、痛え……。

同志たちは無事……あれ無事じゃないわ白目向いてらあ。

にしても響香さん酷くない? 何も足蹴に

しなくても……

「ちよ、長い長い。悪かったって」

「このっ!! アホフミ……!!」

「新しいあだ名もできて……。そんなことより……痛、痛いつて」

「どうどうですわ。響香さん。お気持ちは分かりますが今は引きましよう」

「ふーっ、ふーっ!」

狂犬じゃんこわあ……。

なんか地雷になるようなことしたっけ……?

「そこで心底理解できないみたいなの顔できるのは才能だぜヒロフミ……」

「……?」

何言っただこいつ……?

俺はただ恥ずかしがる皆を見て愉悦してるだけだと言うのに。未成年でなかったらワインを舌で転がしながら見てたな。

俺のその顔を見てさらに腹を立てた響香、八百万によりもう一度折檻されてしまった。

とても楽しかった痛です（小並感）。

そんなふうにはふざけているうちに生徒たち全員が集まったよう
で前に出てきたミッドナイトがくじの箱を持って前に立つ。

そこで話された内容っていうのが、個人戦進出者16人のレクへの参加は個人の判断に委ねる、というもの。

これはありがたいな。

昼飯を食べすぎて腹がつかいってのもあるが、他に使っていない悪魔たちや、使えそうな悪魔たちの選定の時間に使える。

手数は恐らく世界一の自負があるからな。

個人戦で某青い狸のようにアワアワするのだけは避けたい。

……まあぶつちやけ筋肉の悪魔と蛸の悪魔が優秀過ぎてほかの悪魔いる？って思い始めてるんだがな…。

使い勝手が良すぎるのが悪い。

「んじや1位チームから順に…」

お、始ま……いやまだあつたわ。

「あの……すみません……俺辞退します」

手を上げつつ顔を俯かせながらそう宣言する尾白の姿があつた。

そうそう確かこんな事もあつたな。

周りほどよめきながら尾白の判断に困惑した。

まあ無理もない。ヒーロー科にとってはこの個人戦というのは他のプロヒーロー事務所に対して一番のアピールポイントとなる場面なのだから。これを尾白はみすみす手放すという事になる。

「騎馬戦の記憶……終盤ギリギリまでほぼボンヤリとしかないんだ……多分〃奴〃の個性で……」

確か組んでたのは心操くんだけ。

別に俺は気にすることでは無いと思うけど。

「チャンスの場だったのは分かっている。それをファイにするなんて愚かな事だったのも……！」

「尾白くん……」

握りしめた拳を見ながら尾白は決意を宿した目で

「でもさー皆が力を出し合い争ってきた座なんだ。こんな…こんなわけわかんないまま並ぶなんて…俺は出来ない」

自分の思いを吐き出す。

周りはそのなことない、とか自分もそうだったから気にする事はないとか尾白に言っているがこれは彼自身のプライドの問題だからな。

尾白が嫌と言うなら無理強いする必要は無いよな。

似たような理由で同じ騎馬だった庄田くんも辞退した。（ちなみに青山君は辞退しなかった。俺だったらそうする）

「男らしいやつらだぜ…」

「まーぶつちやけもつたいたいような気もするけど、あっちの言い分にも理解出来るんだよな」

「そう…だね…」

感心したような、少し残念そうな顔で答えるデクくと二人の決意を見て思わず目をうるませる切島。

そこまで来て、気になるのはやはり監督でもあるミッドナイトの判断。彼ら二人はまだ辞退を申し出ただけ、だ。つまり、ここでミッドナイトがノーと言えばこの話は無し、尾白くんと庄田くんは個人戦に行くことになる。でも結果は知ってるけど。

「そういう青臭い話はさア…好み!!」

ピシヤんと、ムチで派手に音を鳴らしながら二人の棄権を許可した。

その代わりに鉄哲チームがくりあがった。

「———というわけで鉄哲と塩崎が繰り上がって16名!!組はこうなりました!」

そう言つてモニターに映されたトーナメント表。

俺の相手は……

「八百万かぁ…」

「よろしくお願いいたしますわ。ヒロフミさん」

「はは、お手柔らかに頼むよ」

「……それはこちらのセリフですわ……」
苦笑いしながら頷き返事する八百万。

さてさて、対戦カードが決まった今俺は姉と兄に詰められています。

なんでえ？

雄英体育祭——Part 6

<ヒロフミside>

えー現在アキ兄とマキ姉に迫られています。

……それも血まみれの二人が。事案かな？

「それで？ヒロフミは私の、弟ですよね？」

「寝言は寝て言え。俺の、弟だよな？」

「ちよーつと何があったのか教えて欲しいかなあって。いきなり血まみれの二人にそんな風に来られると少しビビっちゃうから」

そこで語られたのはとても壮大かつ高遠な理由が……という訳ではなく、とてもくだらないものだった。というのも、どうやら電話した頃に俺のことを取り合ったような会話をしたらしく、派手に喧嘩をしていたみたいだ。

……ん？銃と支配の悪魔の二人が…喧嘩？……もしかしなくともこれってやばいのでは？

「ち、ちなみにどこで喧嘩したのか教えて欲しいなあ…って」

「ああ、安心してくれ。亜空間——まあ『胎』の中でやったさ」

「さすがに現世で暴れたら私たちの計画もおじゃんですからね」

「よ、良かった…：良かねーよ。余波でほかの悪魔が死んだらどうするんだ。現世に出てくるじゃねーか」

「大丈夫。大丈夫。気を付けたから現世には来てないよ多分」

「私を誰だと思ってるんですか？心配りくらいできますよ。なんてつたって私、強いので。現世に解き放たれることなんてありません多分」

し、心配だあ〜〜。

あと小さい声で「多分」って言ってるのが聞こえてるぞ!!不安になるだろうがよ!!

…禍わざわいの悪魔たちの三悪魔や『闇の悪魔』といった上位存在はそうそう殺されることはないだろうけど、武器人間とかの悪魔とかは分からないな。

「……ん……大丈夫だと……??のは言ってるぞ……」

「おおっ!?いつの間に……?」

「……会話を聞いててな……現世に……いる間……は胎からの……言葉は聞けないだろう……から……メッセンジャーとして来た……」

「禍わざわいの悪魔か……。実物は初めてみるな」

「……ん。……それはそうと……自ら……メッセンジャーとして……キミの前に来た私を……褒めろ……ヒロフミ……」

「はっ!?妹ポジに収まろうとしますねこの悪魔!!」

「……なっ!?……支配の悪魔……勘のいい……女め……」

……なんかだいたい愉快な感じになってるぞこのマキマさん。

それはそうとどうしようか。

自我がある連中の血の気が多すぎる。このままじゃ『胎』の中の悪魔たちが現世に間違えて現れてしまう可能性が高くなってしまう。

『胎』の外に出てしまった悪魔は全て俺の支配下から抜け出してしまう。その場合俺が再度調伏たおしてしまえば良いのだが……。

「……ヒロフミ、何か考え事?何やら百面相してるみたいだけど……」

「あ、ああ。このままだと俺の『胎』から出てしまう悪魔が増えるなど思っ現てさ。いっその事公安対特定敵サイラン対策課としてこ現っ世ちに何体か呼び出そうかなって」

「それは良い案だね……っは!?じゃ、じゃあ私の最推しの『チエンソーマン』も……?」

「……まあ、出すとしたらその辺りかなあ……」

いきなり様子が豹変したマキ姉に少し引きつつこの個性の元ネタとなった漫画の名前であり、主人公デンジくんが変身する悪魔でもある『チエンソーマン』と『レゼ』を現世に出そうかなと考えている。

この世界における『チエンソーマン』はなんとデンジくんとポチタの二人で一人となった珍しいタイプの悪魔だ。

それは『レゼ』に關しても一緒だ。

……まあなんで同じ姿形なのかは何となく予想が付いてる。

悪魔というのはそれぞれに名前があり、その名前を恐れられれば恐れられているほど強くなる。

ならば造形は？

漫画 世界が変わればデザインも変わるはずだ。

というかまんまその姿のままというのがまずおかしいのだ。

チエンソー世界の悪魔たちがヒロアカ世界に行くのならヒロアカ世界で恐れられている形で悪魔の姿が変わるはず。しかし、それは適用されなかった。

何故ならば——両方の原作を知っている俺という存在がいるのだから。

というのが俺の考察……いやメタ推理だな。

もし、まっさらな状態……つまり原作を知らない『黒魔ヒロフミ』という存在がいたのなら今の悪魔たちはこの姿をしていないだろう。

(原作に登場しなかった悪魔たちに関しては微妙なところではあるが)

「……ポチタとデンジくんに変なことするなよ」

「し、しませんよ？写真とか、一緒にお風呂とか入ろうみたいなのは考えてませんからね!？」

「色々とアウトだからやめてくれ……」

「……まあ……俺が引き取れば良いだろ」

「アキ兄が？」

「マキマに任せてられないだろ」

「……それもそうだね」

「むう……」

アキ兄なら任せられる……ちよつと待てよ!？」

そ、それって早川家が見れるってコト!？」

パワーちゃんも現世に連れてこよう!!

応急処置要員として残しておくつもりだったけど早川家が見られるなら現世に出した方が良い!!

「血の悪魔も!!お願いします!!アキ兄!!」

「なんでそんなに必死なんだ……まあいいけど」

「ヤッター!」

思わず飛び上がりながら喜んでしまう。

早川家も見れてデンレゼも見れるとか楽園かよ。

喜びはしゃぐ俺を微笑ましそうな目でみるアキ兄とマキ姉だったが、ふと思いついたようにこう言った。

「そうそう、写田撮男は殺つといたぞ」

「あー…あのゴシップ記事の?」

「そうそう。あの戦犯の」

死んだんだ。へー。

まあいずれ邪魔になっただろうし手間が減って助かったわ。

「ん? そういや情報統制の方は?」

「そつちに関しては問題ないよ。既にマスコミに対しての情報統制は完了。警察関係の方の書類も差し替えが済んだ。「悪魔の子事件」の首謀者は『黒魔ヒロフミ』ではなく『中村』になったよ。打てる手は打ったって感じかな」

「中村ア?」

「……誰?……」

「誰だよ中村」

いやほんとに。

マキマさん曰く、「自然とその名前が浮かんできた」らしい。誰なんだよ。

「…とはいえ、相当昔の事件なんだし忘れられてるんじゃないかな? なんでそこまでして隠そうとするの?」

「うーん。まあ、念には念をというか。バレたら困る連中がいるんだよ」

主に敵 サイラン 連合とかね。

記憶は薄れているが特徴的な場面は今でも覚えている。

連合の一人である茶毘が、エンデヴァーの実の長男であったことを明かした場面のことだ。

あれは衝撃的だった。

当時は恐ろしいもんだな。と思っていたけど今回はそうはいかない。
ない。

同じことをされると色々動きにくくなるからな。

そのための一応根回しをした。

え？エンデヴァーはいいのかつて？

……曇らされる時の顔って良いよな（愉悦）

「さて、報告は以上で良い？」

「あ、最後に一つ」

「なにアキ兄？」

俺が問いかけると何故か少し答えづらそうにしつつ、口を開いた。

「その…任務として保護を指定された女子高生に毎度の如く血を求められるんだけど…これが人間の普通なのか？」

「その子の普通が違うだけだね。世間一般ではしないよ」

「そうなのか……」

どうやらよつぽど気に入られたらしい。

まあイケメンだしな。

「あ、じゃあ私からもいいかな？」

「なにマキ姉」

「あの“おじさん”妙に動きが良いんだけどなんかした？」

「あー、一応公安に入るに当たってホークスさんの元で修行させたんだ」

「ああ、鷹見くんがね。どうりでどこかスタイリッシュだなんて思ったんだ」

あの二人は仲が良いんだよな。よく一緒に飯に行ってるし。

俺からしたら親戚のおじさんって感じがして親しみやすい。

するとオリエンテーションがもうすぐ終わるといいうアナウンスが流れる。

そろそろ行かなきゃな。

「じゃあ俺はもう行くから。…喧嘩しないでね」

「…うぐっ！上目遣いは俺に効くっ…！」

「私も…っ！」

「……同じくっ……」

…二人がブラコン気質なのは知ってるけどなんで禍のまでそんな

な反応するんだ…？

考えても埒があかなさそうだしとつとと行くか。

作戦も何も立てられなかつたけど蛸と筋肉の悪魔をメインに戦っていけば勝てるでしょ（脳死）。

優勝目指して頑張るぞー！

えい！えい！むん

!!!!!!!

雄英体育祭——Part 7

<ヒロフミside>

さてさて、フィールド中央では個人戦の第一回戦、デクくん対心操くんの試合が始まっている。

フィールドのデクくんは既に心操くんの洗脳にかかっており、ここに在らずといった様子だ。

まあ、大丈夫でしょ。主人公だし。：にしてもちよつとやってないうちに色々変わったなーこのゲーム。

「…ヒロフミは見なくてもいいの？あの試合」

「ん？ああ。ま、デクが勝つでしょ」

「私の目が正しければむしろ緑谷は追い詰められてるように見えるんだけど」

「ん、まあデクは——強いからな」

「……へえ？」

にしてもこのTOMURAってやつ…いやらしいところにいるがる。

さつきからずつと味方が狩られてる。

裏取りは…：お、よしよし。進めてるな。

時間稼ぎをして…

『緑谷!!とどまっただああ!!?』

お、個性の暴発によって心操くんの洗脳を解いたのか。

うわくく指痛そう…

「あれは…?」

「んあ。デクの個性で強制的に解いたんだろ。個性の制御もままならないってのによくやるよな」

「…：確かに。痛そうだもんねアレ」

「大丈夫やろかデクくん…」

「まーあのばあさんがいるし多少の無茶はしても大丈夫だろうよ」

うっし、何とか勝てたぜ…。

久々にやると楽しいよな、LOL。
さて、そろそろ意識を試合に戻そうか。

原作通りデクくんは勝った。

ただ、負けた心操の表情は、暗い。

本人たちにしか分からない気持ちがあるのだろう。

「結果によつちや心操もヒーロー科に編入してくるかもな」

と小さく呟いてから席を立つ。

「あれ？ヒロフミ、もう試合は見なくていいのか？」

「見たいもんは見たいし、試合に向けて精神統一でもするさ」

「へー！飄々としてるヒロフミでもそんなことするだな！」

「んー、まあやるからには優勝取りたいじゃん？」

質問してきた切島に薄く笑いながら返すと、そのまま控え室の方へと向かう。

ストレッチをしたり、暇つぶしに悪魔たちと話していたらあつという間に時間が過ぎた。

相手は八百万。推薦組で個性は『創造』。

序盤から強敵だが――

「ま、勝てるでしょ」

『そして相手は…：無数の手数にもはや隙なし!!障害物競走、騎馬戦共に一位通過の今大会の優勝候補!!ヒーロー科黒魔ヒロフミ!!』

八百万は顔を強ばらせているのに対し、俺はにへらにへらと笑みを浮かべる。

『レディイイイ!!START!!』

試合開始のゴングが鳴る。

まずは相手の動きを―――と思っただけど八^相手^手も同じ考えのよう
うで、同じ距離をキープしている。

俺から仕掛けてもいいんだけど、相手は創造という個性を持っている。
手数だけなら互角、いやそれ以上は行くと行っていい。

ただ―――精度じゃ俺の方が上だ。

「きやつ!」

「別に蛸の悪魔は俺の付近に現れるって訳じゃないぞ?」

仕掛けないのならこつちから行つてしまえ。

うだうだと考えても仕方ない。

「蛸、そのまま場外に引つ張りだせ」

「くっ!!……ならっ!」

苦い表情を浮かべつつ八百万が創造したのはサバイバルナイフ。すぐさまそれを蛸の悪魔に突き立てる。すると、蛸の悪魔は痛みに悶えながら八百万から離れてしまった。

無理もないか。さっきの騎馬戦相当頑張らせてしまったし、ここから少し休ませるか。

八百万はそのまま、剣先を潰した剣と盾を創造してから、構えて突進してくる。

「剣の扱いに慣れてなさそうだけど?」

「余計な、お世話ですわ!!」

上から剣を振り下ろす八百万。

その剣を躲し、叩き落とす。

下に落ちた剣を蹴飛ばし、遠ざけるとフリーになった八百万の右手を掴み捻り上げながら背中に押し付ける。

「いあっ!?!」

『八百万が押されてるぞー!?!このまま負けてしまうのか!!』

「くっ……このままではっ!」

何とか、といった様子で俺の手を振りほどく。

うーん、それは悪手じゃないかな?

強引に振りほどいたせいで、バランスを崩し、倒れこむ。

その様子を見てからすぐさま押さえ付けてから動けないように拘束すると――

「八百万、試合続行不能!勝者!黒魔ヒロフミ!!」

ミッドナイトがこれ以上八百万が戦えそうにないということを判断して試合を終了させた。

ふいふ。何とか悪魔を温存させつつ倒すことができた。

次の試合からは蛸ではなく蛇の悪魔の方をメインに使って戦お

うかな。

「ナイスファイト、八百万」

と言つて手を差し伸べ立ち上がらせる。

「ありがとうございますわたくし…私は手も足も出ませんでしたわ…。ヒロフミさんから見て私に何が足りなかったと思えますか？」

「んー、判断は、早くて良かったね。ただ、近接戦に持ち込もうとしたのがいただけなかったかな。中距離で距離を取りながら戦ってきたら分からなかったかも。手数って意味じゃA組一なんだから次はそれを活かしてみたらいいんじゃないかな？」

「なるほど…勉強になりますわ。ヒロフミさん」

「ハイハイ感想は後で。次もあるから怪我がなければ早く席に戻りなさい」

おっと、少し話し込み過ぎたかな。

とつと戻つてゲームでもしよーつと。

<ヒロフミside out>

ヒロフミは観客席でゲームするには周囲がうるさく感じ、待合室へと向かおうとしていると、いま入ろうとしていた部屋から緑谷が出てきたのを見て声を掛けることにした。

「ありや？デクじゃん。どうしたそんな目を赤くして」

「あ、ヒロフミくん。…これは…まあちよつと思うところがあつて…」
「ふーん」

緑谷は麗日の悔しさが、己の無力さが、情けなさが、涙となって零れかけていた。

そんなところにヒロフミが現れたのだから、少し驚きつつも目を擦りなんでもないように、平静を装う。

そんな様子を見て眩しそうに目を細めるヒロフミ。

すると、角の方からぬるりと、炎を纏った男——No. 2ヒーローであり、轟の父親のエンデヴァーがその姿を現した。

エンデヴァーは二人を見つけると「おオいたいた」と呟いた。

「エンデヴァー…何でこんなところに…」

「……………どうも」

轟から話を聞いているためか、二人がエンデヴァーを見る目はどこか怯えと軽蔑に似たものが浮かぶ。

そんな様子も歯牙にもかけずエンデヴァーは口を開く。

「君たちの活躍見させてもらった。素晴らしい」個性だね。指を弾くだけであれほどの風圧……そしてヒロフミくん……と言ったか？君の“個性”も素晴らしい……手数に加え体術も完璧だ……」

プロヒーローに褒められているはずなのに、褒められている感じがしない。ヒロフミは悪態をつく。

「（ホークスさん……コレ”のど”が良いんですかねえ……）」

そしてエンデヴァーはおもむろに緑谷を指さしながら「パワーだけで言えばオールマイトに匹敵する”個性”だ」

核心を突いたエンデヴァーの言葉にそれまで顔が青かった緑谷の顔面は青くなるを通りこしてもはや真っ白になっていた。

バレてはいけない力。オールマイトとの秘密。それを見透かされたような錯覚に陥った緑谷を見て可哀想になったヒロフミは、

「何が言いたいのかよく分からないですね。……緑谷も俺も次の試合があるんでここら辺で失礼しますね」

と助け舟を出した。

緑谷はヒロフミに「助かったよ」と視線で感謝して、ヒロフミも「どうってことない」と返した。

しかし、通り抜けざまに

「ウチの焦凍にはオールマイトを超える義務がある。君との試合はテストベットとしてとても有益なものとなる。——くれぐれもみつともない試合にしないでくれたまえ」

それだけ言い残すと、エンデヴァーはその場を去っていった。

「……………はあ……あの、本当にヒーローなのか？」

「あ、あはは……敵ライバルっぽい顔ヒーローランキングで一位取ってたし、そう見えちゃうのも仕方ない……かも？」

「それもそうだけどさ……」

苦虫を噛み潰したような顔のヒロフミと苦笑いを浮かべる緑谷。

先程の張り詰めた空気は嘘みたいに霧散し、ようやく和やかな霧

困気へと戻る。

「次は轟と試合だよな？……勝ってこいよ」

「——うん!!」

元気よく頷いてからフィールドへと続く廊下を駆け出す緑谷を見送ってから、ヒロフミは待合室へと向かっていった。

「(闇深い一家だよな。轟家)」

そんなことをボヤキながら待合室に入りゲームを開くと、

「あれ？フレンド申請来てる……あ、さっきのTOMURAじゃん。了承しよーつと」

と言って、ゲームと試合観戦を交互にしつつ静かに時を待つことにした。

雄英体育祭——Part 8

<ヒロフミside>

『——君の！力じゃないか!!』

おお、名言。やっぱいいな。

轟対緑谷は既に佳境に差し掛かっただけで待合室のモニターには必死の形相で轟に挑むデクと、どこか泣きだしそうな表情の轟が睨み合う。

そして——激突する。

いやあ大迫力。もうとんでもないね。

なんて軽い感想を抱きつつガチャを引く。

：うーん賢い方の王様かあ：俺的にはじいじか金ピカの方の王様が良かったなあ：。

また石貯めなきや：。

——ゴオオオオ：!!

お、揺れた。：あー轟とデクが本気でぶつかった時の余波か。封印していた左も使ってるし地震みたいだ。

やっぱりバグだよな。二つ卍解があるようなもんだもん。：威力って部分で違うけど。

そんでまあ：原作通りデクくんは敗退と。

いや、よく頑張ったよ。さすが主人公。さすが主

轟の勝利。これが轟にとっての転換点となり、オリジンとなる。そう考えるとイレギュラーが少なくて良かったな。：：：常闇くんの枠に俺が入るっただけだったか。

悪いことしたなあ：。別に原作厨ってわけじゃないから必要に応じて動きを変えていくつもりだったけどこういう場の活躍を奪ってしまったのは申し訳ない。今度ジュースでも奢るか。

さて、俺の次の対戦相手は、芦戸だ。

いやー女の子と連戦とはねえ。正直眼福だから楽しいんだけどなんつーかなあ：趣味じゃないんだよね。女子と戦うの。

とはいえ、他と他で競い合う大会なんだ。全力でやらなきゃ相手に失礼だ。だからまー、手加減は無し。本気で行く。

「……あー、なんでこのタイミングで箱イベントが来るかねえ……」

!!
こんな大事な大会に周回必須のイベントを開催する運営許さん!!

——さて、結論から言おう。俺、大勝利!!

相性の差とかあるかなーとか、どの悪魔使えば勝てるかなとか色々考えてたけど、なんだかめんどくさくなつて筋肉の悪魔で脳死突撃してたらなんか勝てた。

筋肉の悪魔鬼つええええ!!これからずっと筋肉の悪魔使つてこうぜえ!!!

「くっ……何もできなかったよお……ヒロフミくんつよすぎい……」

『酸を避けるに避けて続けて芦戸の攻撃を完封。その後疲労した芦戸の背後を取り、フィールド外へと投げ飛ばす。…文字に起こして見れば地味だがこれが案外難しい。技量の差が出た試合だな』

『解説サンキューだぜイレイザーヘッド!!さア!残る試合はあと一つ!それが終わればベスト4が出揃うぜ!!』

騒がしい実況と観客の歓声を受けながら倒れ込む芦戸に手を差し伸べて立ち上がらせてから、待合室に戻る。

時間にして十五分しかかからなかったな。

「なんの個性なのかはまだ掴めないが…黒魔ヒロフミくん……文句なしの逸材だ……」

「ちよつとまで轟くんも素晴らしいぞ。個性も強いしルックスも申し分ない。そして何よりNo.2ヒーローエンデヴァーさんの息子さんだ。人気も出るだろう」

「いや、個性の扱いっていう意味では爆豪くんは頭一つ抜けてると思う。…ガラは悪そうだが実力は相当なものだ」

「私としてはあの飯田くんを推したいね。個性の汎用性はもちろんのこと性格も実直で良い子そうだ」

ヒーローからの評価は上々。良い感じに「黒魔ヒロフミ」の名前

が広まってるな。

よしよし。自己肯定感の高まりを感じるぜ。

のんびりと廊下を歩き待合室にまで行くとするか。…お、前から来るのは…切島くんか。

「お、切島。そっぴや次か」

「おう！ヒロフミ!!さっきは凄かったな！」

「まあね。そっちこそ鉄哲との勝負。熱かったぜ」

「ありがとな!!…じゃア時間になるから行ってくる!!」

「頑張れよー」

いやあ、暑苦しいな。

善戦して欲しいものだ。

さて、とつとと待合室へと入りますかね——ん？なんでここにオールマイトがいるんだ？あなた今確か保健室にいるはずでしょ？

あ、こつちに気づいて近づいて来た。

…え、何で？

<ヒロフミside out>

現在、ヒロフミの前には筋骨隆々の男——No. 1ヒーローオールマイトが立っていた。あたかも偶然見つけたかのように話し掛けてくるオールマイトだが演技が下手なのか嘘っぽく見える。

その様子にヒロフミは「何かあるな」と確信したと同時に「何かしたっけ？」と内心で首を傾げる。

オールマイトはいつもの笑顔を浮かべながらもまずはヒロフミのことを労わってからこう切り出した。

「——時に黒魔少年。君の個性は悪魔の使役。そしてその悪魔達には名がありその名が恐れられれば恐れられるほど強くなる…この認識でいいね？」

ひとつひとつ確認しながら質問してくるオールマイト。

ヒロフミは薄く笑いを浮かべながら頷くがその裏で、オールマイトの質問の真意が読めないでいた。

「(この人は何が言いたいんだ？わざわざここまで来て何が言いたい

んだ?」

「(：ウソをついて無いように見えるが：彼はこういう腹芸は得意そうだからな：)」

こうしてオールマイトがヒロフミに対して疑念を抱く事になったのは自分の力の継承者の緑谷が騎馬戦において明らかにOFAでは無い別の力を使っていたからだ。

騎馬戦の後、オールマイトは急いで緑谷の元へ行き、事情を説明してもらった。

曰く。自身の悪魔の力の一部を緑谷が使えるように受け渡してくれた、と。

その話を聞いた時、オールマイトは一人の男を思い出した。

宿敵にして仇敵——AFOの事を。

いや、いや、ありえない。と心では否定するが倒しきれていなかったのではないかと、懸念はあった。

もし、倒せてなかったとして己と同じように継承者を育てていたとしたら？

：もし、その継承者が目の前の少年——黒魔ヒロフミだったら？

仮定の話だ。考えすぎかもしれない。

だけど、悪い想像が頭から離れられずに結局こうして探し回ってしまった。

「……………それだけですか？」

「いや——うん、聞いてみるしかないかそれでだね？君の個性——どうやら他人に力を貸すことが出来るそうじゃないか？」

「(——ああ、なるほど。そういうことか) まあ：俺の個性は“悪魔”ですからね。契約して力を得ることだってできるんですよ」

ヒロフミはオールマイトの2回目の質問で「オールマイトは自身のことをAFOまたはその継承者では無いかと疑っている」という答えに行きついた。

その誤解を解くためにヒロフミは正直に言った。しかし、

「(……………確かに筋は通ってるようにも思えるが……………どうにも胡散臭

いな……。あまり生徒は疑いたくないんだが……」

まだその誤解は解けそうにない。

だがこれ以上の追求は無駄と考えたオールマイトはとりあえずここで一度話を終え、緑谷の応援に行くことにした。

「時間をとってしまったね!!では!応援してるよ!!黒魔少年!!」

「(よかった。つたわったっばいわ) はい。頑張ります」

二人のすれ違いは続く。

オールマイトはそのまま観客席に向かい、ヒロフミは待合室に入り次の試合に備える。

「塚内くんは彼のことを調べて貰おう。彼の情報自体は公安から来ているが……最近どうにもきな臭い……」

「(やっぱりAFOを知ってる人から見れば俺の個性って“そう”見えるんだろうな)」

『……これってさ……』

『……うん……』

『勘違いしてるねえ……』

『言った方がいいんじゃない……』

『面白そうだし黙っとこうよ』

『……同意する……たまには……ヒロフミが……慌てふためく姿……見たい……』

『それもそうだね!くふふ……楽しみだなあ……』

『いやあ全く。その通りさ』

雄英体育祭——Part 9

<ヒロフミside>

さあ爆豪との試合だ。

爆発さん太郎とやるのは最初のヒーロー基礎学のあの一戦以来だな。

正直まだまだ俺と爆豪には実力差があると思ってる。この試合も問題なく勝てるだろう。

まあ油断も慢心もするつもりはないけど。

『ギアー・お次はどちらも優勝候補の試合だぜ!!爆豪勝己VS黒魔ヒロフミ!!』

互いにフィールドに立つ。

めちやくちや怖い目で睨んで来るじゃん。…あ、そういえば???の悪魔が体乗っ取った時にめちやくちや啖呵切ってたしそれで目の敵にしてるのかも。

……めんどくさい…。

爆破の個性には爆弾の悪魔——『レゼ』を使ってもいいんだけどあれグロいからなあ…うん、やっぱなしで。だったら蛇の悪魔と筋肉カゴソバツの悪魔で行くか。

じゃ頑張るぞ「おい。ヘラヘラ野郎」

「なんだよ爆豪」

「…い、ま、は!!てめえがA組の中で強え。だがな。俺はNO.1ヒーローを目指す男だ!とつととお前をぶっ殺して一位になってやる!!」
「……前々から思ってたけどぶっ殺すとか無理に言ってる?キャラ付けだとしたら失敗してない?」

「キャラ付けじゃねえよ!!素だわ!!!つうか話そらすなや!!」

「素なんだ……」

『素なんだ……』

「オイ!てめえクソ実況ゴラア!!」

いやそりゃ引きますわな。日常的にぶっ殺すとか言ってるやつ

なんて関わりたくないよな。

にしても意外だな。爆豪が俺をA組の中で強いって言うなんて。いや彼は天上天下唯我独尊男ではあるけどこういう分析は冷静にできるタイプだったつけ。

厄介だよなあ。馬鹿な不良タイプかと思えば論理的な思考をもつインテリヤンキーなんかもん。

「まあいいや。で、俺を倒すんだつけ？」

「……………ああ」

「倒せるもんなら倒してみろよ」

「は？てめえ…」

みるみると顔が怖くなってくる爆豪。

「既に一度俺は勝ってるんだよなあ…お前に」

「は、だからどうしたんだよ。確かにてめえは俺に勝った。だが…同じ結果とは限んねえだろうがよ!!」

「だから言ってるのさ。今まで爆豪の試合を見てきた上で、だ」

「アッアッ!?てめえ…言うじゃねえか…!!その余裕を絶対に崩してやる…!!」

「そうやって挑発に乗ってるうちはまだまだだねえ…」

目が吊り上がりもうなんか別の生物へと変わろうとしてる爆豪を見ながら呟く。

だが、その声も爆豪に聞こえたようできさらに人外へと進化…じゃなくてMK5マッでキレる5秒前となった。

いやあ反応がいい爆豪くんはいじってて楽しいなあ。

『まだ始まってないのにヒートアップ!!!戦意は互いに十分!!ならもうとつとと始めちゃうぜ!!!レディイイ!!スタート!!!』

始めんの早すぎな——「オラア!!死ねえ!!」

「切り替え早くてびっくりだ、よー!」

爆破の推進力で一気に距離を詰めてからの視界を隠すように顔スレスレで爆破。

動きの迷いの無さは素晴らしいけど——、

「後ろに回り込もうという魂胆が透けて見える」

未来の悪魔を使って予測するまでも無い。

「蛇、尻尾」

蛇の悪魔による尻尾での打撃技。

腹部に当たった攻撃は爆豪をそのまま地面に叩きつけようとする。

しかし、地面にめり込む前にするりと抜け出し、1度俺と距離を取る。

「中々アクロバティックに動くじゃないか」

「く、そが。蛸じゃなくて蛇かよ…」

「ご名答。こいつは蛇の悪魔、強いぞ?」

「ハ、関係無え。むしろ丁度良いわ!!」

強がりでは無く本心でそう思ってるんだろうな。そのメンタリテイは尊敬に値するよ。

今度はこっちの番だ。

蛇の悪魔を爆豪にけしかける。

「蛇、喰らえ」

人の手が重なったような見た目の口が大きく開き、爆豪を喰らわんと地面をなめらかに這いながら迫る。

爆豪の間合いに入ろうかという寸前で、爆豪は飛び上がりそのまま蛇の背中に飛び乗ってから――

——BOOM!!!!

爆破した。

蛇は先程の意趣返しで逆に地面に埋まってしまった。

やっぱ手強いわな。でも、まだまだ、だ。

「蛇、吐き出せ」

「……………何だ、あれ」

蛇から吐き出されたのは複数の手を持ち、首からその体全体にかけて大きな花畑のような体をもつ悪魔——幽霊の悪魔だった。

『…手数でゴリ押ししてまともに戦わないつもりか。まあ、今の爆豪にとっては有効な手だろう』

幽霊の悪魔の出現にどよめく観客と実況席。唯一この悪魔を見たことのあるクラスメイト達は体をブルリと震わせていた。まあ、怖いもんな。

そんなもってさすがイレ先だわ。俺の狙いをバツチリ分析してる。

俺の作戦はこうだ。

まず、爆豪を煽るだけ煽る。プライドの塊な彼は黙ってられないだろう。

それに爆豪は逆境であればあるほど、煽られれば煽られるほど熱くなっていくタイプだ。それは騎馬戦で確認済みだ。そしてそれを俺は利用する。

冷静になる暇を与えずに次々と悪魔を投入する。

今も幽霊の悪魔で拘束させようと命令を出しながらも場外に押し出せるチャンスがあれば問答無用で狐の悪魔の右足でぶん殴る。

そうやって追い詰める。

如何に個性が強かろうとそのゴリ押しばつかじや芸がない。だから頭脳を使って戦ってみたんだが…面白いくらいに嵌ってるな。

「クソが!!この花畑モドキが!!邪魔なんだ、よ!!」

「ほらほら、そんな場所にいたら危ないぜ?———コン」

「だああああ!!毛むくじやらアア!!」

滅茶苦茶焦ってる。まじワロタ。

ただ———コレで注意は引けたかな?そろそろ終しまいにしようか。

幽霊の悪魔には拘束するようにと命令していたけどそれはあくまで第2の目標だ。本当の目的は誘導。搦手を持って爆豪を倒す。

「チイっ!!そオいうことかよ!!」

「さすがにもう読めるよな」

現在、爆豪はフィールドの線上付近、その直線にまで追い詰められている。

爆豪の後方からは幽霊の悪魔、前方は俺、側面と上空には体を半分以上起こした蛇の悪魔。

どこへ動こうと絶体絶命の場面を作り出した。

さて、どう動く？爆豪勝己。

「(このままじゃ詰む：!!フィールドの外に出たとしても地面に足がついてなきやセーフだがそこをあの野郎が見逃す筈も無^ねエ!!：……アイツまでの距離は10mかそこら：……なら、一か八か大技で事態を打開するしか策が無い。……：……ああクソ。ここまで追い詰められてるのに気づかなかつた俺に一番腹立つ：!!)」

爆豪は一瞬下を向いた後に獰猛な笑顔を浮かべ

「絶体絶命：でもそれでいいんだよ!!ヒーローはなあ!!最後は必ず、勝つ!!」

その叫びは爆豪にとっての信念であり、目指すヒーローのカチ。

格好良い。素直にそう思った。

それと同時に負けたくないとも思った。

……柄にも無く熱くなってきたな。

だけどもあ——悪くない。

「来い、爆豪。俺を倒してみろ」

「言われなくともやつたるわア!!」

爆豪との距離は10mとちよつと。そこまで遠くは無いけど近くもないという微妙な距離。

爆豪は：爆破の力で回転し始めてる……？

：アレか。大技か。

どうしたもんかな。現状、あれを受け止めるのは厳しい。

筋肉の悪魔を発動させる。

……すぐに筋肉の悪魔で解決しようとするあたり段々脳筋になつてる気がする……。

ま、気にしていてもしょうがないか。

「思いつきりぶん殴る。最後は作戦もクソも無い一発限り。：お前に乗ってやったんだ。足掻いて見せろよ?」

「……ケツ、そうやって舐めた態度でヘラヘラ笑ってるからヘラヘラ野郎なんだよ……!」

意外な所で俺のあだ名のルーツがわかってしまった。

いやこれヘラヘラしてると言うか元々こういう顔というか…と、そんなにふざけてる時間はないかな。

とりあえず筋肉の悪魔で俺の右腕の身体強化を急がなきゃ。

そうこうしてるうちに結構距離を詰められてるし。

『さア！両者の距離も縮まって来た!!もはやぶつかるのは確定事項!!この状況!!爆豪が勝つためには黒魔を上回らなきゃならねえ!!』

『単純な個性で言えば爆豪…だろうが黒魔の個性ちからは何分、分かってない部分が多い。本当に、どっちが勝つんだろうな』

距離がどんどん縮まる。それと同時に爆風も近付いて来る。

横を直進しつつ回転して迫る爆豪の顔は嗤っていた。

「榴弾砲……」

「——未来視」

「着弾インパクトツツツ!!」

その一撃爆発は余りに強く、余りに重いものだった。

『麗日戦で見せた特大火力に勢いと回転を加えまさに人間榴弾砲!!!対して黒魔は芦戸戦で見せたあの巨大な筋肉が山のように盛り上がっていたが、一歩間に合わなかったか——!!?』

だが、だが!!俺を吹き飛ばすにはまだまだ軽い!!!

『爆風さかまく粉塵の中から出てきたのは黒魔!!!少し食らったのか頭から血が出ているがその目は、体は!!死んでいない!!』

「デメエ……!どうやって…」

「未来を見ればお前の攻撃なんてそよ風みたいなもんだ」

ギリっ!と音が出そうなまでに歯を食いしばった爆豪が俺を睨む。悪いな。この試合は——

「俺の勝ちだ」

——SMASH!!!

筋肉の悪魔で増強された俺の右腕が、爆豪の顔に叩き込まれる。

地面が割れ、視界の端には焦ってるセメントスが写る。

地面にめり込まれたのは爆豪。そして、苦悶の表情を浮かべて少しだけ俺に向けて悔しさと怒りが混じった視線を向けて、気絶した。

「——勝者!!黒魔ヒロフミ!!」

一瞬の静寂の後、割れるような歓声がスタジアムに響く。そんな中で俺は小さくガッツポーズをした。

……やっぱすげえや。爆豪。

慢心も油断もしてなかった。策もびったしハマってたしここからの巻き返しは無理だと決めつけてた。

そよ風なんて言ったけどあれはその場に出てきたハツタリだ。本当は言葉に出来ない程の暴風で、正直地面に足をめり込ませて俺の体を固定させていなかったら吹き飛ばされていた。

それに最後の気を失う前に俺を睨んでから倒れやがった。

：勝った気がしねえなあ、コレ。

雄英体育祭、裏。

「いやあ、やっぱとんでもないよね」

「さすがね。ヒロフミくんはどんな姿でも素晴らしいわ。ヒロフミくんは私が育てた」

「……後方母親面エ……」

「何か、言ったかしら？」

「いいえ、ナニモ」

首を竦めてモニターへと顔を戻す鷹の翼を持つヒーロー——
ホークスとヒロフミの活躍に自分のことのように喜ぶレディ・ナガン。

「まあく〜ナガンさんはこういうけど戦い方の基礎を彼に教えたのは、俺なんですけどね〜。…にしても扱い方がどんと上手くなってきてるねえ……小さい頃は個性に振り回されていたのに今になってはもうプロレベルで上手い……まあ俺には及ばないけど」

他人事のように言っていたホークスではあるが、内心では誇らしげに腕を組んで頷いていた。

このままレディ・ナガンのヒーロー事務所で雄英体育祭を見ようとしていたところ扉の向こうからバタバタと騒がしい足音が聞こえてきた。

「ナガンさん!! 奴が……ヒーロー殺しが……!」

レディ・ナガンのヒーロー事務所に所属する相棒サイドキックが扉を蹴るようにして部屋に入ってくる。

「……今度は誰が？」

ヒロフミの活躍が全て見れそうにないな、とため息をつきながらレディ・ナガンは入ってきた相棒サイドキックに静かに問いかける。

「ターボヒーローインゲニウムです!!」

「彼か……ホークス。お前は来るか？」

「……分かりました俺も行きま——…電話? 少し待ってもらえますか？」

……ハイ、ホークスです。……え? 『ヴィラ』か? ……はい。…なるほ

どそりや随分と派手に動いたモンですね。…分かりました。じゃあ俺はそちらの応援に…ハイ」

ホークスの電話で聞こえてきた『ヴィラ』という言葉に少し目を見開くレディ・ナガン。

今日一日で既に圧倒的な存在感を出している敵で、この時間に至るまでなんと銀行を占拠し、今なお立てこもっている。

そもそも、ホークスがこのレディ・ナガンのヒーロー事務所にしたのもヴィラが関係している。

公安直属のヒーロー、ホークスには常に様々な情報が入り込んできており、様々な敵の特徴や個性がホークスの手元にやってくる。

しかし、ヴィラに至っては別であった。

ヴィラが行動を起こす少し前にとある公安の部署から極秘回線にて連絡が来ていた。

曰く、『黒魔ヒロフミの悪魔がトラブルにより現世に現れた可能性がある。』と。

この連絡はレディ・ナガンの所にも来ていて、ホークスはそのことで話そうと訪れていた。

しかし、レディ・ナガンの事務所に移動したそのすぐ後に事件は起こった。

最初にヴィラが起こした事件が銀行強盗。個性飽和社会となつて一時期は増えた銀行強盗であったが、ヒーローという存在が現れた事もあり、年々事件の件数は減っていった。

そんな中で起きた銀行強盗。その銀行も首都近くにある大きな銀行だけあってヒーロー達も近くにいたはずなのに思うように動くことが出来ずあつという間に銀行は占拠されてしまった。

その鮮やか過ぎる手際。しかし、特筆すべきはそこでは無い。

この銀行強盗、この事件はヴィラ、たった一人で引き起こされたものだった。

閑話休題。

電話を終えたホークスが翼を広げ、窓から飛び出そうとしていた。

「……電話ではなんと?」

「ヴィラが逃げたそうです。金をたんまり持って」

「現場には十数名程のヒーローがいたはずだろ? どうやって切り抜けたんだ?」

「そりゃあ、全員倒してでしょう」

「なんだって?!」

レディ・ナガンは驚愕する。

あの場にはヒーロービルボードには載ってないものの、経験豊富なプロヒーローが沢山いたはずなのに、それを全員打ち倒してから無傷で逃げ出したという事実がにわかにも信じられなかった。

「……とりあえず、情報は伝えました。ナガンさんもヒーロー殺しの方、任せましたよ」

「ああ。…任せておけ」

ホークスはレディ・ナガンの返事を聞くと直ぐに空へと飛び立つた。

「——サイラン敵の悪魔。その名を冠するだけはあるみたいね」

☆☆

ホークスはレディ・ナガンと別れたあと凄まじいスピードで件の事件の場所へと向かっていった。

「(能力は既に聞いている。『確立操作』に『影踏み』。…相当強力な能力だが——物量で押せば何とかなるか…?)」

思案しながら飛んでいると事件の場所に着く。

「……………なんだ…これ…………」

そこには、銀行であったものがあり、そこかしこに血痕と瓦礫が散らばっていた。

「う、うう……………はっ!? ホークスさん!? 応援…ですか!?!……………奴は…奴はっ!?!」

「お、落ち着いて! ヴィラは…この近くには居ないようだけど…どうしたんだ? これは…」

近くで倒れていたヒーローがホークスの姿を見つけると怪我し

た体を無理に引きずりながら近づいて胸ぐらを掴みながら叫ぶ。

「奴は……ヴィラは……!!——悪魔だ!!僕たちヒーローには目もくれずに!!民間人を!!あろうことか!!目の前で!!あ、あんな風に……!!」

自分の外聞などをかき捨てながら泣き叫ぶ。

そのヒーローの様子に気圧されながら指を指したところを、恐る恐る見るホークス。

そこには——、

「……………っ!!」

むき出しの鉄筋コンクリートを十字架のようにして貼り付けられた老若男女全ての人たちの姿。

その、人であったもの達はなにかに貫かれたり、焼かれたり様々な様子の死体。

「……僕たちのせいで、僕たちのせいでっ……!!」

そう言ったヒーローは鋭利な形をした手のひらサイズの瓦礫を首にかけて搔つ切ろうとした。

慌てて止めるホークスだったが、「なんで!!なんで止めるんですかあ!!?」と叫ぶばかりのヒーロー。

「……一体……どこで何が……?」

自分の体がいっしか震えていると気がつかずにホークスは答えることのない十字架に問いかけた。

☆☆

所変わって雄英高校のスタジアム。

観客席に座る観客たちはとあるニュースに釘付けになっていた。

「ねえ見た?このニュース…ヤバくない?」

「見た見た。全く、ヒーローは何やってるんだ?」

「ま、まあまあ!オールマイイトもいるし!何とかしてくれるでしょ!!」

そのニュースはA組が座る場所にも届いていた。

「オイ、これヤベーよ……」

わなわなと震えながらスマホを見せる峰田に皆が覗き込む。

「被害者全員が民間人でうちほぼ半数が死亡って…」

「ケロ…最近はヒーロー殺しなんてものもいるし…物騒な世の中になつて来てるわね……」

「いつの間にかエンデヴァーもいなくなってますしさすがにこんな事件が起きたら子供の試合を見てる場合じゃないですわよね……」

「それにしてもこの敵…^{サイラン}どんな個性なんだろう…?」

「おつそろしいよなあ……十字架に貼り付けて……」

輝かしい青春の汗が散る雄英体育祭の裏で、確かに暗雲が覆ろうとしていた。

雄英体育祭——Part 10

<ヒロフミside>

現在、俺の目の前には正座している禍の悪魔と??の悪魔がいる。別にそういう趣味ってわけじゃない。理由がある。

それは——、

「どうしてくれるのさ……この敵の悪魔サイランって言うやつめっちゃヤバイやつじゃん……」

雄英体育祭の、その裏で起こっているとある事件。その犯人というのがくつつつつつそくだらない喧嘩のせいで現世に行ってしまった悪魔、敵の悪魔サイランによって引き起こされたものだつた。

当初はそこまで警戒していなかったけどまさかここまで行動が早かつたとは……。

「……ごめんなさい……」

「ゴメンね……」

「はあ……こりゃあマジで調伏たおしに行かないとなあ……」

油断していた俺も悪いところがあるしそこまで怒らないつもりだがそれはそれとして反省して欲しい。

今のところ雄英体育祭は続行するらしいけど……少し時間が早まって表彰式は後日、ネットにて配信ということになった。

多分オールナイトもこの事態を受けて動き出したんだろうなあ。

つべえよ。やつべえよ。俺の個性やつべえよ。

……なんてふざけて言ってる場合でもないんだよなあ……。

クソが（直球）。あー……。めんどくさい。

「ヒロフミくん。切り替えなきゃ。優勝するんでしょ？」

宥めるように話してくるのは??の悪魔。

そうだな。そうだよな。とりあえずはこの雄英体育祭を全力で乗り切つてからだだよな。

………頑張るかあ。

色々と鬱屈とした気持ちを飲み込んで、そう意気込んだのだつ

た。

<ヒロフミside out>

☆☆

『ギアギア盛り上がりつけてオーディエンス共!!最終試合!!轟焦凍VS黒魔ヒロフミ!!』

『この試合で雄英体育祭の優勝者が決まる!!』

プレゼントマイクの煽りによって沈みかけていた会場の雰囲気は一転し、元の熱気が戻ってきた。

ここで雄英高校一年生の頂点が決まる。今年是谁がその世代の顔となるのか、とマスコミはカメラの用意をして、ヒーロー達は最後まで残った選手達を見極めようと静かにその試合を待った。

『まずはコイツ!!個性：半冷半熱を持ったヤベエやつ!!殆どの相手を氷ブツパで倒してきた男!!異次元の点数を持つヒロフミにどう対抗するのか!!?』

プレゼントマイクの紹介の後にフィールドに上がる轟。しかしその表情は暗く、どこか悔しげだった。

「俺は：使っちゃまった：緑谷に気圧されて：自分の制約を破って…)」

自分の不甲斐なさか、それとも意志の弱さか。

自問自答しても答えが出ない轟はいつしか拳を強く握りしめていた。

『轟の相手はー！ー！黒魔ヒロフミ!!さっきも言ったがコイツの強さは異次元の点数!!轟の圧倒的な火力にどう対抗するのか!!?』

同じようにプレゼントマイク of 言葉のあとからフィールドに上がるヒロフミも普段の飄々とした態度は崩していないが目だけは所在なさげに動かしていた。

「(直接的ではないとはいえ間接的には一般人の命を奪った事に変わりない。ははっ、笑えるよな。元の『黒魔ヒロフミ』が出来なかったことのために色々頑張ろうって決めてたのにさ)」

これが転生した彼にできる唯一の事だと考えていた。しかし、これでは、これでは。

黒い感情が心の中でぐるぐると渦巻き、何を考えようにも事件の事が頭をよぎる。

「——らしくない。らしくない俺。…よっし、めんどいことはとりあえず未来の俺に任せようっと」

後にどうなろうと、未来の自分に選択を放り投げた。現実逃避とも言う。

しかし、それでもやはりヒロフミの目は暗い。

『じゃアもう始めちゃうぜ!!?』

待ちきれないという気持ちが溢れているプレゼントマイクの声がスタジアム一帯に響く。

その声と共に上がり始めていた観客席の声も大きくなっていった。

普通の話し声すら聞こえなくなりそうな歓声の中で耳郎だけが、ヒロフミの様子に気付いていた。

「(……何を思い詰めてるの…?ヒロフミ…)」

ヒロフミの起こした事件の時からほぼずっと家族同然のように暮らしていた彼女だからこそ気付いた違和感。どこか嫌な予感を抱き、手汗の滲む手を握りしめていた。

両雄並び立つ。

互いが一時の思いや後悔を飲み込み、気持ちを切り替えた。

轟は二、三度肩を回してから試合開始と同時に個性が放てるように構える。

ヒロフミは自然体のまま、ポケットに手を突っ込み試合開始の合図を待っていた。

『早速始めんぞー!!?レディイイイイイ!!』

「なア、轟くんよ。今更どうこう言うつもりは無いから簡潔に言うけどやい」

「……なんだ」

ポケットに突っ込んでいた右手を引き抜き、体は轟の方へと向け

たまま、ヒロフミは表情を崩さずに問いかけた。

「本気で来いよ。でない」と――」

『スターーーート!!』

プレゼントマイクの声と同時に審判でもあるミッドナイトが試合開始の合図としてムチを振り下ろした。

「――ッ!!!」

「ぶっ飛ぶぞ」

その瞬間。

轟は大出量の海水に呑み込まれた。

雄英体育祭——Part 11

<ヒロフミside>

禍の悪魔。この悪魔の能力は災害の操作だ。

地震、津波、早魃かんぼつの三つである。

その他にも障害物競走で活躍した飛蝗の悪魔や台風の悪魔竜巻の悪魔は、禍の悪魔の眷属となっている。

その中でいま試合開始と同時にぶっぱなした能力が、『津波』だ。コイツは日本人にとって最も馴染み深く、そして恐れられている災害の一つだろう。

本気を出せば東京どころか関東全域を海に沈めることが出来る。本当にとんでもない。

ただ難点は制御が死ぬほど難しいことだ。

荒ぶる海流を精密に狙いを定めて放つなんてことはまだまだ俺にはできない。

そのため俺はこの雄英体育祭にまでに禍の悪魔がみせたような操作ではなく方向の指定と量の調整の練習に全力を注いだ。

完全な操作が出来なくても相手を殺さないように使えればいいのだ。

そう考えて俺は轟に水平に海水の水柱をぶつけた。

それにこの力を使うのは——、

『黒魔の個性が轟を飲み込ん——でない!!到達したと同時に力チコチに凍っちまった!!』

半冷半熱を持った轟と決めていたしな。

轟のような力を持たないA組の皆に津波をぶつけたら危ないしな。あえて相性の悪い轟戦のみにだけ使うことにした。

「……しよっぱい?海水か……?」

「そう、海水。——違うこと考えていいのかな?」

「ツーまたかよ!!」

海水だからな、完全には凍らない。正確には海水に含まれる水分

が凍っただけ。塩分は凍らずにドロドロのお粥みたいになる。

だからまあ、津波が届く直前で凍らせた轟はその塩をもろに被っちゃった形になる。

追撃にもう一回抜け出した轟に同じように津波をぶつけると轟の左に行く。

俺の知ってる知識だと轟は緑谷戦以降火は使わない。

「知識はフルで使わせて貰う……よ!!」

二度の津波を凌いだ轟だったが、二度とも塩を被ってしまったっており、視界不良とドロドロとしたお粥のような塩が轟の服にベツタリとくっつく不快感たまったもんじゃないだろう。

距離を詰めたことを悟らせないように静かに移動しつつ、左側から轟の鳩尾へ蹴りを叩き込む。

もろに食らった轟は顔を苦悶の表情を浮かべてフィールドの境界線の所まで吹き飛ばされる。

「ぐっ……!!」

「寝てる暇あんの?」

『黒魔! 一切の容赦なし!! 轟はどんどん追い込まれてるぜー!!』

『……轟の戦い方をよく観察した戦い方だな。それに立ち回りも上手い』

火を使うつもりがないならそこを徹底的に、粘着質に突くまで。

「———これでも本気でやらないつもりなのか? なら………終わりでもいいか?」

「は、冗談だろ……っ!」

俺の挑発に軽く返した後に氷壁が俺に迫る。

まだ、足掻くか……!

何とか躲しながら再度津波を発動させようとした瞬間。

くらり、と目眩を覚え足元がふらつく。

「……クッソ……使いすぎた……」

俺の個性悪魔の使用には体力を消耗する。

だからここここまで蛸の悪魔だったり蛇の悪魔などの消耗の少ない悪魔を使い続けてきた。

最終戦だからな。大盤振る舞いで最後の最後まで出し切つてやるつもりだったが……疲労が溜まつてたか……

……ここまできても火を使わないのか……

これはもう使わないって考えても良いんじゃないか？

残り、撃つて三回程か。もう少し追い込みたい。勝てる盤面になるまで温存が正しい判断か……

「使うなら——サムライソードでギリか？……使うっきゃないな」

前言撤回。少し焚き付けすぎたみたいだ……！

俺が見たのは轟が不敵な笑いを浮かべて左を浮かべて火を左から放出させてる姿だった。その後ろには——なにやらスツキリしたような顔をしたデクくん。大方なにか言つたんだろうな。

「ハイハイさす主さす主。……はア……」

「——悪いな。ここから本気だ」

「もしかして轟君ってスロースターター？着火まで遅くない？」

「は、あいにくと今まで湿つてたモンでな」

「おつと上手い返しをされちまつた」

軽口はここまで。サムライソードは……間に合うか……っ！

問答無用かよおい！！火と氷の同時攻撃が左右から挟んでくる。

えげつない攻撃をするもんだなクソが。

この距離じゃ津波を放つたとしても火と氷の力で届くまえに防がれる。

だが、幸いにも今は直線上に轟がいて火の壁と氷の壁の迫る速度も計算に入れても間に合う！

「真正面を突つ切る!!」

居合いのように手首を掴み、引き抜く。

そして——、

「アレ、は……!」

「USJでヒロフミ君が使つてたやつだ……!!」

サムライソード
刀の悪魔。高機動、斬撃とチェンソーマンじゃ中ボスとして現れた悪魔で根源的恐怖の名を持つ悪魔と三体の悪魔を抜けばトップクラスに強い。……まあ武器人間たちのは総じて同じくらい強いんだ

ラスに強い。……まあ武器人間たちのは総じて同じくらい強いんだ

もうちよい。もうちよつと言葉で時間を持たせる…！

「……決めに来る気か」

轟が俺の右手に浮かぶ海水を見ると察したようにフ、と笑いながら構える。ちくしようイケメンだなおい。

「ああ。……ぶつちやけ、コレをぶつ放したらどうなるか俺にも分かんらん。——だからまあ…精々悔いのないように頑張れよ？」

「——上等だー！」

互いにニヤリと笑いを浮かべる。

俺は制御できる限界まで。轟は冷気と熱気を全力で放出する。

そして——、

「——往くぞ」

「——来い!!」

激突。

「まずいー！」

熱気と冷気に晒されながら、俺は手を掲げ続ける。

ただ、俺もやられ続けている訳じゃない。轟に届いているのは海水の奔流。自然の猛威。タダでは済まないはずだ。

まだだ。まだ、まだ。

後ろへ下がり続ける足を必死に押し留める。

「ぐツ…!!うツ!!」

思わず苦悶の声が口から漏れる。

キツツいなあ…！

「——頑張れ!!!ヒロフミ!!!」

……………。

は、俺ってやつは…存外単純らしいな。

たった一人。響香の応援でさらに力が増すなんて。

「わかってるっての!!」

上がるはずだ。もつとだ。力を引き出せ。

限界を越えろ。

轟に届く津波は瞬時に凍るか蒸発する。なら、キャパオーバーになるまであげていくまでだ。

時間にして30秒程。でも、俺にとってはもっと長く感じたその攻防は呆気なく終わった。

雄英体育祭最終戦。轟対黒魔ヒロフミ^俺は轟がフィールド外へと吹き飛ばされた事によって決着。

轟が俺との個性のぶつけあいによってフィールド外へと放り出された所を見てから俺は意識を手放した。

夕焼けの道で。

<ヒロフミside>

激動の雄英体育祭が終わり、賑やかだった雄英高校も今は一般の客も居なくなり静寂に包まれていた。

「まあ、これはただの疲労さね。とつとつと帰ってご飯食べて寝たらすぐ治るよ」

「そうですね。ありがとうございます」

気にする事はないよ、と言ってキャンデイを渡す保健室のバーさん。キャンデイを口で転がしながら俺は雄英スタジアムに出来た出張保健室を出る。味はコーラだった。

もう皆帰ってるだろうし、俺もとつと荷物まとめて帰るとしようか。

…………と、あれは……?

「響香じゃん。…あれ?待っててくれたの?」

「…ん。そうだけど何?」

「…いつになくツンツンツンツンじゃん」

「ツン多すぎでしょ」

俺のボケにすぐさまツッコむ響香だったが、その表情は暗い。

俺が出張保健室で診て貰ってる間に荷物をまとめておいてくれたのか、響香の分とは別の俺が使ってる通学カバンを投げて渡してくる。

「サンキュ。いやぁー勝った勝った。正に圧勝だったな」

「……最後の方とか結構ギリギリだったじゃない。何が圧勝よ」

「はは、違くないな」

軽く笑いながらスタジアムを出る。

外は、茜色の夕日が空を染め、建造物を照らし、人々を優しく照らしていた。

ほんとに。綺麗な夕日だなあ…。

俺の心とは反比例するようだ。

——
敵の悪魔。

今の俺の頭の中にはこいつしか考えられなかった。

最終戦の後、保健室のベッドの上で見た情報だと死者は少なくとも二十数名程。その全てが一般人という最悪の結果となっており、駆けつけたヒーローに見せつけるように銀行に埋め込まれた鉄筋を十字にして磔にしていき目の前で殺害していった。

……と、言うのが表向きの情報だ。

マキ姉からの情報は全く違う。ニュースではウイルスこと敵の悪魔が殺害した事になっているがその実情は違う。

本当はウイルスが殺したのでは無く、ヒーローが殺したのだ。いや——正確には殺させた。

ウイルスの力は『確率操作』だ。

ウイルスは自身の力で自身への攻撃を逸らして人質に取った民間人に当てさせたらしい。

……まだ詳しいことはわかっていないが、俺の元へと回ってきた情報だとそうなっている。

さて、どうしようか。恐らくだけど奴は俺を誘ってる。目的は不明だが——上等だ。乗ってやろうじゃないか。

この事件は俺の不注意から引き起こされたものだ。ケジメはきっちりつけなくちゃならない。

「———そういやさ。今日ご飯つくるの誰だっけ？」

「ん、ああ、俺だな」

「何作るの？」

「お好み焼きかな。帰ったら米研いでくんね？」

「ええーヒロフミって関西圏の人だったっけ？」

「違うけど……でも美味しいよ？ソースがまず米に合うからな」

俺が居候させて貰ってる耳郎家の両親はミュージシャンとだけあって出張が多く、夜ご飯を俺たちが作ることもしばしばだ。

そのため夜ご飯は当番制で作ってる。

「でも炭水化物と炭水化物じゃん……太る……」

「野菜多めに入れるし大丈夫じゃね？」

「そういう問題じゃない！」

ううむ…よく分からんなあ。女子というのは。

夕焼けに染まる帰り道を二人並んでゆつくりと歩く。

いつもの、何気ない日常だ。

でも、でも。

今日のうちにその日常を奪われた人達が大勢出た。直接的ではない。間接的に、俺が、俺の個性が奪ってしまった。

その事実で貧血で倒れる時のように視界が真っ白になってしまった。

…ああ、クソ。本当にクソだ。

俺が何気ない日常を歩む度に俺が奪ってしまった人達の命を踏んづけてしまっているようで嫌になる。

「……………ねえヒロフミ。何か…あった？」

響香が優しく聞いてくる。

そんな顔に出てただろうか。……………出来れば、この気持ちは響香にもA組の人達にも言いたくはないな。

「いんや。何も無いよ響香」

「…嘘。怖い顔してた」

「俺はいつも同じ表情だよ」

「……………嘘つき」

「……………なにか言った？」

俺は嘘つきだよ。大嘘つきだ。

だって見せられないじゃないか。こんな情けない俺なんて。嘘でもついてないと隠せないからさ。

「……………言う気がないなら良いよ。アンタと私の仲でしょ？」

「……………」

「でも!!なにかあったら言ってよ。……………家族……………なんだし」

隣で歩いているから横顔しか見えないけどそういった響香の顔は確かに真っ赤に染まっていた。

それを見た俺はそれはそれは悪い笑顔を浮かべていたと思う。

「おやあ？照れてるんですかあ？」

「っ！うっさいバカ！！バカフミ！！」

そういうと響香はイヤホンを俺に突き刺し爆音を流してきた。

……………痛かった。けれど——どこか救われた自分が居た。

閑話編

レディ・ナガンは光を見た。 P a r t 1

この仕事は虚無だ。

でっかいハリボテをさも立派のように見せるための——汚れ仕事。

どうして、どうしてこんなことになったのだろう。

この個性を持ったから？ ヒーローに憧れたから？ 才能があると
言われて、ヒーローになれると言われて、ただ、嬉しくて何も考えず
に公安の誘いに乗ってしまったから？

……………この、憧れは、間違いだったのだろうか。

「や、やめてくれ……………俺たちが悪かった……………か、金が必要だったんだ
……………事務所を運営するには……………これしか……………」

—— ダンツ！

最後まで言葉を紡がせること無く私——レディ・ナガンとし
て、“ヒーロー”を殺した。

このヒーローは、事務所の維持費を稼ぐ為に地域の敵と結託し、
あらゆる手で市民から金を巻き上げていた。

「こちら、レディ・ナガン。作戦完了した。“掃除屋”の手配を頼む」

『こちら本部、了承した。ただちにレディ・ナガンは帰投せよ』

「……………了解」

耳元のインカムで公安本部にある作戦室への連絡を終えると事
務所の屋上から別の建物の屋上へと移動して、隠してあった移動用の
車に乗り込むとその場を後にした。

これで今日の仕事は終了だ。…せめてなにか食べて帰ろうか。

☆☆

「委員長。レディ・ナガンより例のヒーローの暗殺任務の完了を受け、
帰投の命令を下しました」

「……………うむ、……………苦労」

重々しく頷いてから部屋に入ってきた部下を下がらせる初老の男——現公安の委員長で、レディ・ナガン：筒美火伊那^{つつみかいな}を公安直属ヒーローへと推薦した者でもある。

部屋から出ていく部下を見てからその高そうな椅子に背もたれを預けつつ自身の見出したヒーロー——レディ・ナガンの仕事ぶりを思い満足そうに髭をさする。

彼女の個性は遠距離系個性の中でもトップクラス。その才能を公安に持ってこれたのは男の最大の功績であり、男自身もその目利きを心の中で自画自賛していた。

—— p r r r r

自身の功績や築いてきた地位に酔いしれていると机に備え付けられた電話が鳴った。

「——はいもしもし……おおっ！これはこれは——社の！ええ！はいはい……」

男の口から出てきたのはとあるサポート器具の会社の社名。

大手とは行かないまでもそこそこの名知れた会社で、男との関係は、

「……それは法的には違反してます……が、ええ

はい。……くく、古い言い回しがお好きなのです……そうですね？……そうです。

“山吹色の菓子”を……ほお、そんなに。では——」

完全な黒。疑いようのないまでに真っ黒だ。

親が有名な政治家一家で、コネと力を使い公安の委員長へと上り詰めた男は、大した能力はないものの、金と地位への執着はすさまじく今もこうして賄賂を貰う代わりに“色々”と見逃したり、政府関係者——それも相当高い地位の者に媚へつらい将来の政界参入も計算立てている。

男は嗤う。自分ももつと、もつと上へと行ける。金を、地位を、名声を、もつと得られるはずだ、と。

……しかし、男は気付かない。

窓が開いていたこと、そしてその窓に——一羽のガラスがいた事に。

「へえー。ふうん？これは…上手く使えば救済できるかも」

☆☆

——私がその子に会ったのは『悪魔の子事件』の被害者に対して聞き込み——いや、いま思えばあれは、尋問の時の事だった。

黒魔ヒロフミ、という当時まだ五歳の子供だった彼は聞き込みという名の「危険分子への尋問」で、中々本人が“個性”について話さなかつたものだから少し趣向を変えて女である私からアプローチをすることにした。

…この頃の私は一般の人々に向ける手が血まみれになっている錯覚を見ていたものだから、最初は全くと言って乗り気じゃなかつた。

「やあどうも。私の名前は“レディ・ナガン”。名前くらいは聞いたことあるだろう？」

「…どうも。ナガンさん。おれの名前は——」

「ああいや、知っているから言わなくていい」

「そつすか。…はく、で？なんの用ですか？個性の話ならまだ、“待つて”ください。…こつちもまだ把握に時間がかかってるんですよ」

「………君は本当に五歳児なのか？」

「はは。よく言われます」

大人びた口調で話す目の前の少年に少し驚いた。

私が、この頃はこんなにしつかり話せていたのだろうか。………そういえばこのくらいの時はまだ…。

「あれ？ナガンさん顔が暗いですよ？折角の美人さんなんですからもつと明るく行きましょーよ」

「…その歳で大人みたいな口説き文句を言うね」

「映画で見たんです。………で？何かあつたんですか？」

「………何も無いよ」

私の返事に納得の言つてなさそうな顔をする黒魔。しかし、「話したくなさそーならいいや。それよりもさ、ナガンさんって普段休みは何してるの？」と聞いてきた。

察しの良い子なのだろうか。私の話したくないという気持ちを察して話題を変えてきた。

それにしても…休みの間何をしているのか、か。

「……休み……休み？」

「え、そういう話になるのやばくないですか？」

「い、いやヒーローにも労働基準法はあるから休みはあるから」

「じゃあ何を…？」

「…睡眠？」

「…だけ？」

い、いや…ちゃんと買い物とかも行ってることが…一番しているのが睡眠ってだけで…

「…もしかして…休み方が寝ること以外知らないんじゃない？」

「うぐっ………」

み、認めたくは無いかけどその通りだ…。

そもそも、私と同じような仕事をしているヒーローが少なすぎるのもあって毎日が激務となっていて、学生の頃にはできていた“休み方”すら出来なくなっていた。

「…この話はやめとこう」

「そ、そうですね。じゃあ、好きな物とかありますか？ちなみにおれはこのオールマイトのシャツです」

「…かっこいいね。…私は…キレイな物と………くらいかな」

オールマイト
正義の象徴の顔がデカデカとプリントされたシャツをみて少し複雑な気持ちとなる。

彼は——正義の象徴。

なら私は——このヒーロー社会を維持するための歯車。

まさに白と黒——いや“赤”かな。それもどす黒くなってしまうった、赤。

ああ、吐き気がする。

沢山殺した。偽りの社会を守るために。

目の前に少年がいるのにも関わらず、腹の底からなにか込み上げてきそうになる。

「……顔色が悪いですね。大丈夫ですか？」

「……問題ないよ。……さて、お喋りはここまでだ。きみも分かっているだろうけど——個性について話してもらおうか」

話を露骨にさらそうとする彼の試みは分かっている。だから、ここで強制的に聞き込み^{尋問}に移る。

それを聞いた黒魔はうげえと舌を出してからパイプ椅子の背もたれにのしかかってからジト目になる。

「その前に……きみ、敬語苦手でしょ？いつもの感じで構わないよ」

「……そうさせてもらおうか。でも——それはそつちも同じじゃない？なんだか無理してお姉さんっぽい話し方してるけど……ナガンさるって元は結構男勝りな感じで話すんじゃない？」

「……は、観察力が高エことで」

「そつちの方が魅力的だねえ」

「……変なやつだな。お前」

素直に驚いた。まだ若干五歳の子供が、プロヒーローである私を出し抜いたのだから。

油断のならない相手だ、と認識した。

「じゃア始めるが……単刀直入に聞く。ありやなんだ？」

この尋問を始める前に見た映像。

そこには銃が腕のように生えた怪物が、周辺一帯を吹き飛ばそうとしているように見えた。

どうしてもその怪物の正体を知りたくて最初に質問してみた。

「んー……まだ個性が発現したばかりで何も言えないけど、そうだなあ……名付けるなら『銃の悪魔』かな」

『銃の悪魔』……。確かにあれは“悪魔”っぽいな」

なるほど。確かに悪魔と言われればアレは悪魔だ。

納得して頷き、次の質問へと移った。

大体時間にして一時間ほど経っただろうか。黒魔は淡々と答え、これはすぐ終わるなと思った時に。

……そこでふと、違和感に気付いた。

確か黒魔はその銃の悪魔の力——いや初めての個性の発現によつて自身の両親を巻き込んで殺したはずだ。

なのに何故、目の前の少年はここまでして飄々としているのだろうか。

もしかして——”何も思っていないのだろうか”

その推論に至るとしてもたつてもいられなくなりこう、質問した。

「少し意地の悪い質問をするぞ？……おまえは、自分の個性のせいで親を……殺してしまったようだが……それになんか思うところとかないのか？……今の様子を見てるとどうも親しい人を無くした人のそれには見えない」

その質問に黒魔は少し考え込んだ後に

「思うところが無い、と言われれば嘘になる。おれの親は確かにおれが……殺したも同然だ。その事実は変わらないし、変えられない。きつと、おれには一生親殺しの咎がついて回るだろう」

目を伏せながら、何かを思い出すように話す黒魔。

どこか淡々と事実を受け入れている様に痛々しいものを感じた。

…少しキツめに言いすぎたか、と少し後悔し始めていた。

もういい。と言おうとした私を遮るように黒魔は続けた。

「それでも……それでも。世間からおれをなんと言おうと、あの両親がおれを愛してくれたのは知っている。だったらさ。なるしかないじゃん。最高最善のヒーローに」

「それ……は……」

なんとという覚悟だろうか。

きつと、彼は後悔してる。我慢してる。

強大すぎる力を持つてしまったからこそこの悲しい事故が起きた。

今にも泣きたいだろうにそれをおくびにも出さずに耐えて耐えて耐えている。

この少年は強い。きつと、いいヒーローになれる。

そう、言っ
てあげたか
った。

でも——私
は言えない。
私は、すこ
し、汚れす
ぎてる。

「……………
今日はここ
までにする」

だからこそ、
私はこんな
ふうに逃げ
ることしか
出来ない。

ああ、本
当に吐き気
がする。

レデイ・ナガンは光を見た。 Part 2

☆☆

転生したと思ったらまさかのヒロアカで知らんうちに自分の親をぬつ殺してしまって公安に聞き取りという名の尋問を受けた件について。

うおい!!!なんでこうなるんや!!!

クソ神がよおっ!!!大体こういう異世界転生ってこんな始まりにするんじゃないだろうがクソが!!!

……さて。これ以上やるととも地上波では言えないような罵詈雑言が出てくるから辞めよう。

今の状況を整理しよう。今世での名前は『黒魔ヒロフミ』。：名前からして誰かに似ている。というよりもろだよな。黒魔って名前が違うだけで彼だよな？

鏡で自分の顔見てみたけどどうわ、顔がいい。シヨタフミくんちよつと美少年すぎない？

そんでもって歳は五歳。幼稚園児だったらしく事件が起こったのはあろうことか誕生日。

パーティの準備が整った家でこんな悲しい事件が起こったらしい。

確かこの世界の個性って五歳頃から発現するんだよな。

：個性の確認は後にしよう。色々怖い。

俺の転生したタイプはいわゆる憑依ってやつだろう。こう、なにかにぶつかったショックとかで前世の記憶を思い出すタイプではなくクソ神が転生させた時点で相手の自我が無くなるやつ。

……大方予想は着く。

丁度いい人間がいて、原作登場キャラでは無いのを選んで転生させたのだろう。

それも最悪な形で。

前の『黒魔ヒロフミ』という人間はもう居ない。いや、“消滅した”と言っている。

この肉体の持つ記憶を見る限り、最後の『彼』の記憶は見るも無惨な両親の死体。

ここでぶつりと『彼』は消えてる。

クソつたれ。本当にクソだよ。あのクソ神。

確かに転生したからにはチートは欲しいしいケメンにもなりたいがどうしてここまでした。なぜここまでする必要があった？

肉体のスペックは高いらしく前世の俺よりも頭の回転は早いから直ぐにこの答えに至ったさ。

そのときはリアルに頭を抱えたね。

次に会えたなら殴るじや済まされないぞ。

……だが、ここでいつまでも頭抱えても仕方ない。

元の『黒魔ヒロフミ』が消えてしまった。俺のせいだ。…いやクソ神のせいだ。

なら——この名前でなにか悪さをするわけにもいかない。

幸いにもここはヒロアカの世界。

ヒーローとなり序列を上げてけばいくらかでも名声は集まる。

せめて、『黒魔ヒロフミ』という人間がいることを世界に覚えて貰わなくてはいけない。

これは仁義だ。そして俺にできる唯一の贖罪だ。

……よし。ならこの公安の尋問を何とかしなくちゃな。

原作じゃどの辺か分からない。ちよつと質問してみるか。

「——だから！お前の個性はなんだ！その裏には何がいるんだ!？」

「はあ、さつきから言ってるじゃないですか。個性はまだ把握出来ないし裏に何かがある訳じゃないって。そんなことよりレディ・ナガンってヒーローはいますか？ファンなんですよね」

「なっ、（公安直属ヒーローであることを知っているのか!?!）い、いたらなんなんだ?」

「いや、普通にファンなんですよ」

「レディ・ナガンはいるが……話をそらそうとするのか!?!」

「……」

「本当にオールフォーワンと繋がりはしないのか?」

「誰です？その…オールインワンって」

「化粧品じゃない。オールフォーワンって奴は…ライラン敵だ」

この反応を見るに原作はまだっぽい。恐らく主人公と同世代か少し歳上くらいかな。

オールフォーワンは倒されてまだ残党を恐れている…のかな？

だとしたら俺を尋問するのは違うんじゃない？

「お前の殺した両親——いや父方の祖父祖母はな、オールフォーワンと繋がりがあったんだよ」

「……………へエ？」

う、うえええええ!!?

なにしてんの今世のジジジとバツバ!!

面識無いけど本当に何してんだアンタら!!

だとしたら公安が俺を怪しむのも分かるな。

オールフォーワンは個性を与えることが出来る。

元々俺の体は個性が出るはずのない体で…えっとたしかどっかの指が少ないんだっけか？いや多かつたんだっけ…？まあどつちでもいいけど、そう診断されていたらしい。

そこに突発的に発現した強すぎる個性…うんクソ神のせいですねありがたいございました。

じゃねーよ。アホか。あー、めんどくせえ。

「そのオールインワンって奴は知らないですね。…ちなみに祖父たちは何を…？」

「活動資金を流していた。そこそこでかい企業の社長だったからな。相当な金がオールフォーワンの元へと流れてたよ」

それとオールフォーワンだ。と警察を装う公安職員が答えてくれた。

はああああああああ…何やってんだよ本当に。

「本当に、その個性はもらったものじゃないのか？」

「貰ってないですよ。賭けてもいい」

「……………はあ。今日はここまでだ」

「ちよ、本気ですか!？」

「本気だ」と言って公安職員AはBの首を引つ張るようにして取調室から出て行った。

はあくくくく。ああも高圧的だと話すもんも話したくなるわ。まじ塚内さん見習え。爪の垢煎じて飲みやがれ。

先が思いやられるぜ。

☆☆

さて、俺が戻って来たのは警察の寮の一室。ここ最近はずっとここで過ごしてる。

小さいテレビに簡易ベッドと簡素だ。

ご飯は寮の食堂で済ませてる。

だけど許可なく外に出ることは禁じられていて出るにしても寮の管理入室に連絡し担当の人と一緒になければならぬ。

ほぼ拘置所と変わらないんだよなあ…。

さて、うだうだと文句を言っても仕方ない。とりあえず個性の把握から行こう。

…と、言っても何をすればいいんだ？

そもそも自分の個性がなんなのかすらまだわかってない。銃の悪魔を使うことの出来る個性なのか？だとしたらいま発現させるのはダメだろ。…いや銃の魔人になれば実家のようにはならないだろうけど…。

うーん…あ、そうだ。瞑想でもしてみよう。ジャンプの漫画なんだし、修行と言えばまずは瞑想だよな！

まずは座って…目を瞑ってから…いざ行かん！瞑想の世界へ！！

レディ・ナガンは光を見た。 Part 3

☆☆

「……んあ？」

気づけばヒロフミは何もない草原のような場所に居た。

ヒロフミはこの光景を一瞬夢かと考えたがそれにしては草などの質感がどうも夢には思えない。

「ほんとにどごやねん(´▽｀)」

思わずぼやき、上を見上げた瞬間——ここがどこだか“理解”した。

草原の上空——そこは無数のドアに埋め尽くされており、それは遙か先にまで続いていた。

そんな空だというのにも関わらず、不思議と明るいこの場所は——

「地獄、か」

ヒロフミは顔を歪ませながら呟く。

地獄。それは『チェンソーマン』において登場した人間では到達出来ない異次元の空間のことであり、存在する全ての悪魔が居住する場所でもある。

「(……俺の個性ちからはなんなんだ？チェンソーマンに関することは確定としてこのヒロアカの世界はクロスオーバータグが…違う違う変な電波を受信するな。ええつと…今使える疑惑があるのは『銃の悪魔』ただひとつ…。まさか俺が“銃の悪魔”となってしまったのか？…いや、そんな感覚は無い…気付いてないだけかもしれないが…)」

ヒロフミは顎に手をおいて思考する。

どれほどまでそこに佇んでいただろうか。

ヒロフミはその優秀な頭脳で様々な予測を立てていた。しかし、その全てに決定打となりうる確証は無く延々と思考のるつぼに嵌っていた。

そんな時。

「……貴方が——私の主人でしょうか？」

凜とした鈴のような声が——静かに体に染みゆく様な——
——そんな声がヒロフミの耳に届く。

ヒロフミは飛び上がるほど驚きながら後ろを向くとそこには、桃色の髪に金のように輝く渦巻きの目の女性が立っていた。

ヒロフミは彼女を見た瞬間に固まってしまった。

「……うわぁ。美人さんだなぁ……」

遠い目をしながら呟くヒロフミ。

彼は彼女の事を知っていた。彼女の名前は——マキマ。そしてまたの名を——、

「失礼しました。私はマキマ。——支配の悪魔です」

「……ちよつと整理させてくれないかな？」

「分かりました」

ヒロフミが絞り出すように言った言葉に従いそのまま口を閉ざすマキマ。

支配の悪魔。かの悪魔はこの世界ではなく別の世界のラスボスだった悪魔だ。
これにはヒロフミも思わずフリーズしてしまった。

先程の「主人」というキーワード。初対面のはずなのに丁寧口調のマキマ。段々とヒロフミの頭の中で点と点が繋がり始めていた。

「……ん？手紙……？」

一旦落ち着くために辺りを見渡すとそこに『転生者君へ』と書かれた手紙が落ちていた。

封筒に書かれたその文字を見て何やら嫌な予感がしつつも封筒を開けた。

『やあやあ転生者君。君がこの手紙を読んでもという事は無事地獄に入れたということだね。さて、長々と書くものも無いし早速転生特典について教えるでしょう。キミの転生特典は『個性・悪魔(チェンソーマン世界+α)』だ。まあ読んで字のごとくって訳でチェンソーマン世界の悪魔を使い放題！オマケにデメリットは体力の消費のみ！というチートっぷりさ。アメコミよりも治安が悪いことで有名なヒロ

アカの世界でも安心だろう？ああ、そうそう。忠告を最後に一つ。キミが使える悪魔はキミが成長することによって増えていく。間違っても未熟な状態で『闇の悪魔』なんて使うのはやめたまえよ。

——追伸——

支配の悪魔と銃の悪魔はサービスさ。キミはどうやら原作キャラの救済とか好きそうだからネ』

神を名乗るロリコンからの手紙を読み終えたヒロフミは意外と手厚いサポートに複雑な思いを抱きつつも一応心の中で感謝だけしました。

「(……:チートだなあ。コレ。……:さてよ?だとしたら俺:AFOに目を付けられる事にならないか?!?!こんな強力すぎる個性、奴からしたら欲しいに決まってるだろ!!)」

内心では荒れまくりつつもそれをおくびにも出さずに手紙をポケットにしまうと再度マキマへと向き直り、こう言った。

「とりあえず…マキマ…さん?は、何ができるんですか?」

ヒロフミの言葉に少し考え込む仕草をしてからマキマは答えた。

「私の力は『支配』。契約した者を支配下に置くことができます。——

——後は動物達もその力の対象内です」

「俺の知ってるマキマさんと変わらない訳だ) …なるほど。なら早速、力を見せてもらっても?そうですね…対象は…カラスなんてどうです?」

「いいでしょう。…では一度外に出て貰えますか?ここで能力を使うより実際に見た方が早いかと」

マキマの言葉に数秒程逡巡してから頷いた。

頷いた瞬間、眠りから覚めるようにヒロフミが現在住んでいる殺風景な部屋へと戻った。

☆☆

さてとんでもドツキリな展開になってからはや数時間。

俺の目の前で力を見せて欲しいと頼み、色々な事をしていたら公安の委員長の秘密を偶然にも知ってしまった。

今日の尋問でレディ・ナガンがまだ監獄——タルタロスに収監されてないことが分かった。

ならまあすることは一つ。救済だ。

転生オリ主にしか許されない特権よな。

マキマの力を使う際に何故か俺がマキマになるのは不思議だったがまあts要素も含む転生だったのだろうと割り切った。

まずは現在のレディ・ナガンを確認しなくては。病みメーターがどのくらいかによって俺の動きが結構変わってくる。

個人的な偏見だがヒロアカ世界のキャラ達ってメンタル強い者が多いけどその分追い込みられまくった時の反動がとてつもない。エンデヴァーとかがいい例だろう。

なんかギャルゲーをしている気分になるけど仲間を増やすのは俺にとってはプラスになるだろうしな。とりあえず一旦地獄に戻って作戦会議しようか。

「まずは情報収集が大事だな。よし、姉ちゃ——間違えた、マキマさんお願いしていいか？」

しまった。マキマさんが前世の姉に雰囲気似ていたからつい言ってしまった。

「……………いま、なんと？」

「え？聞こえてなかったの？情報収集を「いえ、そこではなくその前で」……………んえ？」

その前って言う……………ああ。

「お姉ちゃん？……………これは間違いみたいなもの——ってあれ？おい。マキマさん……………」

その時。

支配の悪魔——マキマの脳内に溢れ出した存在しない記憶。

『ねえねえ!!』

『…おや、ヒロフミ。どうかしましたか？』

『ん!!』

『これは…花の冠?…私に?』

『うん!!』

『ふふ…ありがとう、ヒロフミ』

黒魔ヒロフミ、3歳。可愛い可愛いこの弟はいつも自分にとって嬉しいことをしてくれるな、と微笑むマキマ。

貰った花の冠を頭に載せるとぱあつと花が広がるように笑う弟の姿を見て限界に達したのかぎゆうつと抱き締めた。

『苦しいよおねえねえ…』

そう言うヒロフミだったが声音からは嬉しさと恥ずかしさが混じっていた。

『他の誰よりも——大好きですよ。ヒロフミ』

『ふふ、おれも…将来けっこんするならねえねえと——』

淡い、昔の記憶。

思い出した。思い出せた。と噛み締めるように天を仰ぎ見るマキマ。

俺は何をすれば良いのか分からずオロオロとしながら細かい声で、

「マ、マキマさん?どうか…したの?」

俺のその言葉にマキマは天女の如き笑顔で、「お姉ちゃんです。詳しくは昔みたいになえねえでも構いません。ふふふ照れてるんですね?そんな所も可愛いのですが姉と呼んでくれないなら私、拗ねちゃうな。力貸さないかもな」と怒涛の勢いで俺に詰め寄りながら話しかけて来るマキマに圧倒された。つて今なんて言っただ?お姉ちゃんって言わないと力貸さない…って?え??まじ??

……………背に腹はかえられん…言うか…

「マ…マキマ姉ちゃん…」

「はーい」

音符がつきそうな程に上機嫌で返すマキマの知らない一面を知ってしまったなあと他人事のように考える俺とそっくりいえば家族が欲しいみたいなこと言ってたなあ、と変に納得している俺がいた。

「と、とりあえずコレで協力してくれるん…だよな?」

「勿論。姉ベストパートナー弟ですから。ずっとずっと、永遠に協力するよ?ふふふ…」

ん？ルビがどっかおかしかったような……ま、ええか！！

レデイ・ナガンは光を見た。 Part 4

☆☆

レデイ・ナガンに会えた。それも随分早くに。噂をすれば、つてやつかなー。昨日の段階で会うためにどうしようかと考えていたのだけど…まあ運がいいって考えていこう。

にしてもあの様子だと…そこそこ疲れてるなあ。

仕事内容もそうだけどやっぱ量とかも多そうだからブラックそう。まあ、ブラックなのは普通のヒーローもそうか。世知辛いのお。

さて、レデイ・ナガンに会えた俺はこれからどうしたものかと思いでいた。

と言うのも――、

『先日――市で起こった事件について、とある週刊誌が――』

このニュースのことである。

小さいテレビに映るのはモザイク処理された俺の写真と俺の実家を吹き飛ばす『銃の悪魔』の映像。

どこかで撮られたのか、俺の写った写真は近所に住む人なら一発で分かるような代物でモザイク処理されてたとしても隠しきれ無さそうだった。

これを見た途端頭を抱えた。

AFOに見つからないために色々と画策している段階でコレだ。

奴は恐らく俺と接触してくる。住所なんかも抑えてるはずだしな。そして、俺を敵へワイランと勧誘してくるはずだ。勿論この身に転生した以上悪名を広めるなんてことはしないから断るつもりだけど断つたら断つたで個性を奪うつもりで強硬手段を取るのが目に見えてる。

……でもそれをしたら仲間にならない。個性も渡さない。そして自身と敵対することが確定する。となればすることは一つだ。

――危険分子の排除。すなわちそれは俺の抹殺ということになる。

「……………はア……………」

思わず俺の口から溜息が漏れ出る。

仕方ないだろう。だってラスボスが動くんだから。オールマイトが倒したとはいえその影響力は未だ健在だろうし間接的にも働きかけてくるだろうし。

これは公安内部に取り入ってなんやかんやして守って貰おう作戦の段階を早めるしかない。

そのためにマキマ姉に現世に出る事を許したんだ。

内部から公安を支配し情報統制の徹底。

それを外部から悟られないようにする。

ネームド ヴァイラン 敵やそれになり得る者たちの監視と保護。それをマキマ姉と話し合って決めた事だ。

とりあえず公安のことは姉に任せて目下の問題であるレディ・ナガンすることに注力しよう。

☆☆

その日の公安はヒリついている——いや殺気立っているとってもいい。

それが私——レディ・ナガンが率直に思った感想だった。

それもそのはず、保護対象であり監視対象でもある黒魔ヒロフミの引き起こした事故がどこぞの週刊誌によって公になってしまったのだ。

罪も無い少年がさも凶悪な人間のように書かれた記事を読んだ私は怒りからその週刊誌を握りつぶしていた。

当然私の所属する公安も私と同じような怒りを抱いていたのだろう——と、思っていたのだけど——、

「クソっ！たかが週刊誌如きに情報が漏れただど!!?ふぎけるなよ!!」

「早くその出版社を潰せ!!我々の威信にかけてだ!!」

「そうだ！奴らは俺たち公安の面子を潰したんだぞ!!?」

自分たちが守るべき子どものためには無く、自分たちの公安としての誇りを傷つけられたために怒る職員達をみて——ああ。ダメだ。

私が——ヒーローレディ・ナガンがやって来たのは一体、なんだっただろう。そう思ってしまった。

勿論、全員が全員黒魔少年について思うことはあるのだろう。だけど、だけど。

流石に、これは……………。

あんまりな状況に絶句していると見かねたのか、一人の女性職員——桃色の髪の綺麗な女性が話しかけてきた。

「レディ・ナガンさんですね？今日の業務は、先日と変わりません。黒魔くんの聞き取り調査をお願いします」

「……………了解した」

新人なのだろうか。そこそこの間ここで仕事をしていただけ彼女のような美人は知らないな。

「あ、申し遅れました。私は黒魔マキマ——今日付けでこちらに赴任することになりました」

「……………黒魔？」

「ええ。彼とは遠い親戚でしてね。と、言っても顔を見たのは書類に貼られていた写真を見た程度ですが」

つまり知らない、と。

社会というのは狭いですね、と笑うマキマ。

その笑顔に少しの違和感を感じつつも、案内に従い部屋へと進んだ。

☆☆

ドアが開く。

この前と同じように、黒魔はパイプ椅子に腰掛けていた。

気だるげで、いつも通りの姿を見せる彼に少しほっとした。

「お、またナガンさんだ」

私に気づいた黒魔がニコニコと笑いながら言う。

「別の奴が良かったのか？」

「いんや。ナガンさんがいいね。他の人さー威圧感凄いなだね。本当に電灯で照らされて『お前が犯人だろ！』ってやられるとは思わなかった」

「……………そうか」

何をやっているんだ。相手は子どもだぞ？

彼がいくら監視対象とはいえやっていいことと良くないことがあるだろう。

「いやあ。にしても凄いことになってるよなー」

「…大丈夫か？その………」

「ん？顔バレのこと？それならまア…覚悟してたつて言うかき、ホラ、よくいうじゃん？人の口に戸は立てられないってさ」

ニコニコと笑いながら話す黒魔を見て何か悩んでいた自分がバカバカしくなってきた。

本当に黒魔にとつては特に気にすることでもないのだろうかと思つて何となく人となりを理解し始めた。

「逆境からヒーローになるつてもう主人公じゃない？」

「…ふ、はははは!!そうだな。ああその通りだ」

どこまでも強い彼のそんな姿を見ていたら、たかが週刊誌に遅れをとつて顔を真っ赤にさせていた他の者達がなんだか滑稽に見えて、いつの間にか笑っている自分がいた。

こんな気持ちは久しぶりだ。

楽しい、と思えたことがこんなにもありがたかったなんて。

「——主人公ならこの後の聞き込みもきつと余裕で切り抜けられるのだから？」

「うげえ………」

「と、言つても話すことがあんまりないんだけどな」

そう、現状黒魔に構つてる暇は公安にはない。

そのせいか普段は記録係がいるはずのこの部屋にも私1人しかおらず、二人つきりで話すこととなっている。

「お、じゃあ退屈しなさそうだねえ。他の人たちつてさあ壊れたラジオみたいと同じことばっか繰り返すの。質問してくる奴が壊れたラジオならおれも壊れたラジオみたいに話さないと会話が成立しないじゃん」

「くく、確かに言えてんな」

でしよーとはにかむ黒魔。

久々に、誰かと笑いあえた。

いつも感じていた無気力と吐き気はいつの間にか感じなくなっていた。

☆☆

目の前で穏やかに笑うナガンさんを見て俺は少し気を緩めるところにした。

この調子だったら問題なさそうだな。

懸念事項のひとつでもあったこの問題も緩やかになりそうで安心だ。

ナガンさんとの会話は楽しい。正直他の公安の人たちは馬鹿の一つ覚えのように「お前はAFOの手先なのではないか」とか「その個性を使って何をするつもりなんだ」とかを繰り返し言ってくる。その全てに「いいえ」と言うのは簡単だけれど会話が単調すぎてあくびがそうだった。：いや実際出てたな。

久々のまともな会話に心を踊らせているとあつという間に時間が過ぎていった。

いやー楽しい時間っていうのはあつという間ですなあ。

職員の人——というか潜入していたマキマ姉が呼びに来たのでそれに従ってあの殺風景な部屋へと戻ろうとしたら——、

「ああ君が黒魔くんだね。私はこの公安委員会の委員長なのだが——」

白髪の混じった黒髪のおじさんが部屋から出た俺に話しかけてきた。

確か汚職の人だよな。

一緒に出てきたナガンさんはその人を見て顔を強ばらせていた。

「君を監視対象から危険分子として保護施設へと移送することにした」

……………え？

レディ・ナガンは光を見た。 Part 5

保護施設。だが、そんなものは名ばかりで強力な個性を持った少女達を隔離する施設で、噂によれば暴力などといった良くない噂しかない場所だ。

個性黎明期に建てられたその施設は時代が進むに連れて無くなっていき、今は負の遺産として残っている。

保護施設など今は昔の事、だと今の今までレディ・ナガンは思っていた。

だが、目の前の委員長の表情からそれは今も尚、存在していることが分かる。

「……それは…決定、ですか？」

レディ・ナガンはその事実が受け入れ難くて絞り出すようにそう聞いた。

「ああ。決定だ。私が、彼を危険分子だと判断した」

無慈悲にも現実を知らしめるように委員長はそう言った。

「些か強引では？会議なども行っておりませんし——」

「くどいぞレディ・ナガン。それにはある程度の裁量権がある強引も何も私はその権利を使ったまでだ」

食い下がろうとするナガンを突き放すように言い放つと今度はヒロフミの方を向いてこう言った。

「話の通りだ。…今日荷物を纏め明日にも出立だ」

「……………え、あはい。分かりました」

あまりにも突然の出来事ただ返事するしか無かったヒロフミはふと、自身の姉（自称）を見た。

そこには——、

「（あ、このおじさん終わったな）」

そう、確信に至る程の怒りを滲ませて委員長の後ろから微笑むマキマがいた。

恐らくえげつないことが今からこのおじさんに降りかかるのだ

ろう、とヒロフミは思った。

未だ、レディ・ナガンと委員長の言い合いが続く中、ヒロフミは遠い目をして今晚なにを食べようか考えていた。

「(っ：!!大丈夫だ黒魔——いやヒロフミ!私が:私になんとかしてなければ:!せめて:ヒーローとして!)」

「(:待てよ?ラスボス^{マキマ}に目を付けられるおじさん:…もしかしておじさんは主人公だった!?)」

そんな馬鹿なことを考えているとは露知らず、レディ・ナガンは遠い目をするヒロフミをなんとか救おうと委員長の説得を続けるが——委員長は心の中で嘲りながら——その全てを一蹴した。

焦りが顔に浮かぶレディ・ナガン、余裕の表情の委員長、微笑んでるのに怖いマキマ、そして一般転生者のヒロフミが四つ巴となっていた。

しかし、その均衡は長く続く事は無かった。

「さて、(っ)にいつまで立ち尽くしても仕方がない。彼の今日の役目は終わったのだろうか?ならもとの部屋へ戻りたまえ」

まあこれで会うのは最後になるだろうが。という言葉で委員長は最後に言ってから去っていった。

「(嵐のようにきて嵐のように去っていったなあ)」

遠くなつてゆく背中を見てそんなことを思ったヒロフミだった。

☆☆

何故だ。何故なんだ。

なんで何も悪くないヒロフミがあんな場所に入れられなければならないんだ。

危険だから?

いいや違う。

個性^{ちから}というのは使う者によってそれは変わってくる。力の恐ろしさを、強大さを知っている彼は危険なんかじゃない。

むしろ——無闇矢鱈に権力を振りかざし、よく分からない強引な理由で権力を振りかざす人間こそ——危険じゃないか。

ニコニコと笑うヒロフミの顔を思い出す。

陽だまりのような——歳相応の笑顔だった。

あんなことがあったとしても強く笑う彼を思い出し、もう感じなくなつたはずの吐き気が込み上げてくる。

最悪だ。

……………私は、もう、疲れた。

疲れてしまった。

——だからこそ……こんなバカげた事を実行しようとしているの
だろう。

委員長の殺害なんて事を。

☆☆

時は少し遡る。

まだヒロフミとレディ・ナガンが尋問談笑していた頃、委員長にとある電話が来た。

——曰く、『黒魔ヒロフミを外に連れ出して欲しい』と。

疑問に思つた委員長は電話の向こうの主に理由を尋ねた。すると——、

『いやね。実の親を殺した彼に興味があつてね。……その個性にもだけどね』

朗らかに。優しく男は言つていた。

委員長は流石に渋った。電話先の人間がどういう人物なのかは知らない。よく取引をする人間の関係者とだけしかよく分かつていない。

だが、『連れ出せ』ということはつまりはそういうことなのだろうと察していた。

渋る委員長に電話の向こうの男はなんでもないように言った。

『そういえば——遠い話になるけど、選挙があるね？僕はそつちにもパイプがあつて——君がいいのなら……紹介してもいいよ？』

勿論、君がこの話を飲んでくれるならね。と付け加えた。

「……………分かりました。受けましょう」

長い沈黙と少しの葛藤の後に委員長は受ける事にした。

『そうか。ありがとう』

男はそう言うのと電話を切った。

電話を離し、机に置いた委員長は思わぬチャンスに小躍りしながら誰もいない委員長の執務室の机の周りを回っていた。

「なるほど。電話の向こうがラスボスというやつですか。私のヒロフミに手を出すのであれば——徹底的にやらねばなりませんね」

☆☆

オイオイ。死ぬわ委員長^{アイツ}。

俺が抱いたのはもはやその感想だけだった。

どんだけフラグおつたてるんだよ。派手な花火が見れそうだ。

「まあ。自業自得って事で」

「そうだね。なるべく苦しむように努力しよう」

「コワ〜」

怒りの効果音すら聞こえてきそうな様子のマキマ姉を尻目にラーメンを啜る。

さて。俺はどうやら保護施設なるものに入れられるらしい。孤児院みたいなものかな?と思っただけどナガンさんと委員長の話を聞く限りどうやらそんな生易しいものでもないらしい。

それに——、

「ナガンさんの目死んでたなあ」

委員長と別れたあと、青い顔になっていたナガンさんの顔は死んだ魚の目すらもつとハイライトがあると思ってしまうくらい目が昏かった。

暗いじゃない。昏いのだ。

短い時間だったけど、直ぐにわかった。

ナガンさんはとても良い人だ。ヒーローの一人として立派でかっこよかった。

俺がこの世界に転生して初めて見たまともな人だ。

一ファンとしても絶対に助けたい。

「よっしゃ。行こう。姉ちゃん」

「ええ。初めての姉^{パートナ}弟同士の共同作業、頑張りましたよ」

………やっぱルビおかしいよな？

………気のせいって毒にしとこう。

「よっしゃ!!えいえいむん!!!」

レディ・ナガンは光を見た。 Part 6

「なっ——「黙りなさい」——はい」

出ていこうとする俺たちを止めようとしていた一般職員がマキマ姉の支配により一瞬で沈黙する。

支配の悪魔ってやっぱ相当強いな。

目のハイライトが消え、その場に突っ立つ職員を見ながらそんな事を思った。

警察署から出る。外は紅く、夜に近い夕方になっていた。

前世を含めて初めての脱獄だな。

……まあそれに何も感じる事はないけど。

さて、現在のナガンさんの様子はマキマ姉曰く相当危険らしい。もはや導火線のついた爆弾のようだと言っていたな。俺たちに時間は残されていない。ちよいと急ぐか。

歩くスピードを早めてマキマ姉が用意した車に乗り込む。

ここから公安まではそこまで遠くない。

俺は助手席に座り、マキマ姉が運転席に座ると車を直ぐに出す。

「間に合うといいな」

「弟の頼みだからね。間に合わせるよ」

………まあもう、マキマ姉って呼んじやってるし姉弟でいいや。

☆☆

——公安警察。

ここでは夜中にも関わらず忙しなく職員達が働いていた。

それもそのはずこの夜中というのは敵が躍動する時間帯だ。ならばそれに対応する公安や警察などはむしろこの時間帯からが本番となる。

そんな騒がしい場所から遠く、高く離れた15階にまで一歩ずつ向かっているヒーローがいた。

彼女の名はレディ・ナガン。

その目は昏く、足取りは重い。

別にこれからする事になにか引け目を感じてる訳では無い。
自分の人生が、憧れが、憧れに、至るための努力が、全てが無意味になってしまった。

——疲れてしまった。全てに。

正義のためにヒーローを殺し、安寧を守った。

その結果がこのザマだ。

守りたかった少年の事すら自分ではどうすることも出来ない。

自分への怒り、情けなさ、公安への不満。

複数の感情がナガンの心の中で渦巻き、黒く、黒く染めていた。

無気力な人形のように歩き続け——とうとう委員長長の執務室にまで来てしまった。

ドアノブに手をかける。

開ける。

そこには——、

「ハロウィン！ハロウィン！ハロウィン！ハロウィン！ハロウィン！」

「あれ？ナガンさん？どうしたの？」

「え……っ？なん……で、おまえ……が？」

そこに居たのは、ヒロフミだった。

なんでもないような顔でこちらを向くヒロフミにナガンは絶句する。

そもそも、今ここにヒロフミは居てはいけなはずなのだからこの反応も仕方の無い事だろう。

口をパクパクとさせながら立ち尽くすナガン。

「——驚くのも無理はないか。…まあおれがここにいられたのは……」

「私が手引きしました」

「………確か…マキマと言ったな」

「ま、私は姉ですからね。弟を守るのは当たり前です」

そこまで交流はないはずじゃないのか、とナガンは思った。

だが、その疑問が掻き消える程のことがいま目の前で起きていた。

「ハロウィン！ハロウィン！ハロウィン！ハロウィン！」

ハロウィンという単語を狂ったように叫び続ける男——もとい委員長が虚ろな目で暴れていた。

「…この、惨状は？」

「色々姉さんに教えて貰ったんですよ」

「なんだって？」

ヒロフミの言葉に驚きながらマキマの方を見るナガン。

マキマは小さく微笑んでヒロフミの言葉を肯定するように頷く。

訳が分からなかった。なぜ自分のためにこんなことをしてくれるのか。人殺しなのに。ヒロフミの憧れるヒーローでもないのに。

なぜ。なぜ。

疑問がナガンに蛇のように巻き付く。

その様子を見たヒロフミは優しい声で言った。

「色々っていうのはナガンさんの仕事含めて、だよ。おれの意見としては…というか単純な想いだけ——」

自然な笑みを浮かべながらナガンの手を取るヒロフミ。

「頑張りすぎなんだと思う。かつての憧れは思ってたものとは別物だった。それでもあなたは正義のためだと頑張って頑張って頑張り続けた。それがいけなかったという訳では無いけど、やりすぎだったんだと思う」

いつしかヒロフミの言葉に涙を零すレディ・ナガン。

彼女は理想と現実の差で苦しんでいた。

それでも、それが正義のためになると信じてがむしやりに努力を続け頑張り続けた。

しかし、それがあある日から全て無意味に感じるようになってしまった。まるで地面が抜け落ちたような——無気力さを味わった。

——私はヒーローなんかじゃない。ただの…人殺しだ。

それが彼女にとってどれほどのものだったかはヒロフミには分からない。

だけど、その苦しみはきつと身を焦がし焼き尽くしてしまう。

だからこそ——救うために、ヒロフミは言葉を紡ぐ。

「あなたが何をしていたかについては何も言わないし言うつもりもない。けどこれだけは覚えていて欲しいんだ。

——嫌な時は、逃げてもいいんだ」

「あ……………」

無理をして、歯を食いしばって、やりたくないことをしなくてもいい。

優しい夜の雨のような声でそう語りかけるヒロフミ。

その言葉に、声に、堰き止めていた涙がとめどなく溢れ——こぼれ落ちる。

それは止まる事無く、ヒロフミに抱きつき彼の着ていた服を濡らした。

ヒロフミはそれを拒絶すること無くただ、受け入れた。

しばらくして。自分が何をしていたのか自覚し、顔を赤くしながらパツと離れるレディ・ナガン。しかし、その顔はどこか晴れやかであの昏い目から希望の宿った目があり、ヒロフミは内心で胸を撫で下ろした。

「とりあえずマキマ姉は予定通り委員長の傀儡化よろしく。もうすぐまともな人がこの座に就くと思うからそれまでの繋ぎよろしく」

「……………」

「あれ？マキマ姉？」

ヒロフミの言葉に無言を貫くマキマ。その様子は全身で不満を表しているように見えた。

本気で何でそうなっているのか疑問を覚えさっきの行動を思い出すと——すぐに察したヒロフミは面倒だと心の中で言葉を吐きつつそれをおくびにも出さずにただ、手を広げた。

手を広げたヒロフミに満足気な顔で抱擁するマキマ。その様子を見たレディ・ナガンは若干引いていた。

一通り満足した後で。マキマはようやくヒロフミから離れ委員長の支配を開始した。

すると一瞬で暴れ叫んでいた委員長がすん、となりマキマの言う

ことに従順な人形へと変わってしまった。

「な、!?」

その様子を見たレディ・ナガンは驚きの声を上げるが、マキマの個性だと知ると半分納得、半分疑念の顔で頷いた。

敵とヒーローの終わりなき戦いが続く闇夜にて、公安委員長が傀儡となったなんて誰も気付く事は無い。

それと同時に、たった一人のヒーローが救われたということも、気付かれることは、無い。

☆☆

結局の所、俺がナガンさんにかけてあげられる言葉は少ない。

ナガンさんは表では言えない薄ら暗い事をやってきた。本人は嫌だと思っていたとしても、やっている事は正しい事なのだ。だから彼女は耐え忍び続けた。

だけど彼女は人間だ。

嫌なことをし続ければどこか壊れてしまうのは仕方ない事だと思う。

原作も壊れてしまった結果がアレだからな。

言葉は慎重に選ぶ事にした。

公安に潜入し、委員長の部屋にまで行く間うんうんと唸り続けた。

それは委員長の無力化をするまでずっと唸っていた。

…委員長？アイツはハロウインの刑だよ。

そしてとうとうナガンさんが部屋に入って来た時、ようやく何を言うべきか浮かんだ。

……まあ、アニメの名言だったのは前世がオタクだったからだろうけど。

「嫌な事からは逃げてもいい」

それが俺の言った言葉だった。

無責任と思うかもしれない。けどこれ以外の言葉は俺には紡げなかった。

変わってあげようか、なんてことは言うつもりは無かった。だっ

てそれはナガンさんが必死に守ってきたものを否定する事になるから。

一緒に戦おう、これも言うつもりはなかった。

だってそれはナガンさんにとって罪の片棒を背負わせるようになってしまいうから。

まあ、いつになくシリアスモードで悩みまくった結果逃げ道を用意するってのが情けない話だが。

それでも——大変そうに、だけどとても生き生きとしながらヒーロー事務所の設立のために奔走するナガンさんを見て、俺の判断は少なくとも間違ってたなかつたと思う。

☆☆

私は救われた。

出だしたからなんだと思われるかもしれないが、実際そうだ。

全てに絶望していた私に手を差し伸べ、光へと連れ出してくれたのは彼こと黒魔ヒロフミに他ならない。

ありがとう、ではもう足りない程に彼に助けてもらった。

本人は「逃げ道を用意しただけ、いまのあなたがいるのはあなたが前を向くことが出来るようになったから」なんて言うが——違う。違うんだよ。

お前が、ヒロフミが、あの日、あの言葉を言ってくれなければこんな事にならなかった。

切っ掛けは間違いなくお前なんだ。ヒロフミ。

だから、だからさ。

今度は私がヒロフミを支える番だ。

ヒーローとして、今度こそ守りたい者をきっちり守る。

血に染まってしまったこの個性ちからを使って、人を救ってみることにするよ。

そうすれば——この無意味な人生も好きになれる。

そんな気がするんだ。

なあヒロフミ。お前のためならたとえ火の中だろうが水の中だろうが喜んで行こう。

そこで私が死んだとしても、それはそれでヒロフミのためになるなら本望だ。

だからさ——ヒロフミ。

時々でいいから、私を見てくれ。私と話してくれ。その元気な様子を私に教えてくれ。

私はそれで十分だ。それだけで私は戦える。

決意を胸に。

力をこの腕銃に。

意志を原動力に変えて突き進もう。

他ならぬ——お前のために。

設定用語解説回

黒魔ヒロフミ——主人公（オリ主）

『吉田ヒロフミ』の肉体そのものでチート持ちのテンプレ主人公。性格は善性ではあるものの頭はイカれていてネジの何本かは飛んでる。人の生き死にに関しても同じことで写田の死の際にも「あ、死んだんだふーん」くらいしか思っていないし身内の誰かが死んだとしても悲しみはするけど3日で元に戻る。頭良い。（作者が頭良い設定にすればどんだけ無理ある展開でも大丈夫だろとか思ってる節がある）

前世ではヤクザ（任侠を大事にする昔気質な所の）息子で料理人。和洋中全部作れるしお菓子作りも得意だった。

個性：悪魔。

チエンソーマン世界の全悪魔が使える。ただ、このヒロアカ世界に来て増えた悪魔も存在する。

作者コメント：一番解釈違いを引き起こしてるのは作者。ヒロフミ君と同じ顔にしたせいで「吉田君はあ!!こんな事言わなあい!!」って思いながら執筆してます。

黒魔マキマ——支配の悪魔（姉の姿）

黒魔ヒロフミの自称姉正真正銘真の姉。存在しない記憶で結婚の約束をしてる。原作マキマさんは愛が欲しかった。抱きしめて欲しかった。なら愛を与える存在、つまり弟か妹が出来たらどうなるんじやろって気持ちで登場させた。愛を与えたら愛が帰ってくるからこの世界のマキマさんは愛に満たされていて原作のマキマさんのようにはならない。ヒロフミSECOMの一人

作者コメント：でろでろに甘やかすマキマさんが見たくて登場させました。ゲロ甘マキマさんの小説増えろ増えろ…!

黒魔アキ——？の悪魔（兄の姿）

黒魔ヒロフミの自称兄正真正銘の真の兄。マキマとは弟を取り合うライバル。早川アキの顔を被った雪合戦の悪魔。過去回で出す予定はあるので乞うご期待。性格はほぼオリ主みたいなもん。アキ君

要素が欲しかった方はごめんなさい。ノリが良くいい兄貴って感じ。
(ただし存在しない記憶がある) ヒロフミSECOMの一人。

作者コメント：あの悪魔をアキくんにしようって思い至った時に悪趣味すぎて思わず笑ってしまいました。

禍の悪魔——ヒロフミの個性粹

白髪褐色ロリとかいう作者の性癖の塊。性格は悪よりだけどヒロフミの指示には従順。物静かだけど頭がおかしいからほぼボケ粹。厨二病拗らせているから「……闇の……」とかそういうワードが大好き。ある意味でミスリードさせる存在。能力は文字通り災害の操作。現在は津波しか操作出来ないけど成長を重ねて行けば地震、早魃なんかも。眷属に飛蝗、台風の悪魔がいる。ヒロフミの兄と姉たちとの仲は普通。いがみ合う事は無い。ただ????の悪魔とは仲が悪い。本能的にソリが合わない。

作者コメント：原作で出てきてない、かつめちやくちや強そうな悪魔を考えた時に浮かびました。

????の悪魔。——ヒロフミの個性粹。
登場はしているもののまだまだ謎の存在。

ヒロフミの事は好ましく思ってる。ヒロフミの将来の夢のために全力でサポートするつもり。

作者コメント：こいつをAFOにぶつけたらすぐにこの小説は終わると思います。

??の悪魔。——ヒロフミの個性粹。

????の悪魔と同じく謎の存在。ヒロフミに力を貸す悪魔で他の上二体の悪魔の纏め役的存在。ヒロアカ世界において????と言っても過言じゃない。

作者コメント：一言で表すなら????へのトップメタ。

^{ヴィラン}敵の悪魔。——ヒロフミの宿敵。

喧嘩に巻き込まれて死亡。後に現世へと行くことになり好き放題している。能力は『確率操作』と『影踏み』。影への潜伏と移動。影のある場所ならどこでも行ける。性格は悪辣で根本的な所で人間を見下している。(ヒロフミは別)

ヒロフミに見つけてもらいたい。

作者コメント：金髪ギザ歯の美少女です。語尾をいちいち変換するのはめんどくさい。

～用語解説～

『悪魔の子事件』

これはヒロフミが転生したことによって生じた事件。辺り一帯を銃の悪魔の完全顕現によって吹き飛ばした事件であり、その際に今世での両親が死亡している。

公安が揉み消した案件のはずが写田のファインプレーファインプレーによって公になった。さすがに名前は隠されているものの顔写真とかは写っており近所の住民は察しがついており、ヒロフミのことは避けられ嫌っている。(しかしヒロフミは全くと言っていいほど気にしていない)この事件のせいでヒロフミは親戚中をたらい回しにされそうになるけど今世の親と交流が深かった耳郎家に拾われ居候することになる。

『公安特定 敵 対策課』

別名ヒロフミSECOMとも言う。ヒロフミを守るために作られた組織でありAFOの足取りを追う組織。現在三名が所属しており、マキマを除く全員がどこかしらへと潜入操作中。デンジ、ポチタ(犬の姿)、レゼ、パワーが配属予定。

『公安』

別名マキマの傀儡。過去編の委員長は変わり別の人間が委員長をしているもののマキマによって思考誘導される。ホークスは気付いているがホークスにとっても都合がいいので知らないフリをしてる。作者コメント：色々都合のいいように進めるためにこういう設定にしました。

ヒロフミによるヒロアカキャラたちへの評価。

芦戸三奈——よく話す。話も弾むし仲の良いクラスメイトだと思ってる。

蛙吹梅雨——梅雨ちゃん。意外と仲が良く休憩時間では良く話す仲。

青山優雅——……。なんか重大な事を忘れてる気がする。

なんだっけ？おもしれー男だと思ってる。

飯田天哉——想像の三倍はカクカク動いていて笑った。真面目だし話しやすい。

麗日お茶子——麗らかだなあ。餅のアレンジレシピを教えた。

尾白猿夫——よく相談される。主に個性の無さについて。普通で何が悪いのか分からないけど面白そうだから一発ギャグを教えたい。おいた。

上鳴電気——多分クラスの男子の中で一番仲が良い。A組紳士の会のメンバー。なんか一時だけバツの悪そうな顔をしていたけどどうしたんだ？

切島鋭児郎——暑苦しい。でもそういうところは嫌いじゃない。むしろ好き。よく二人でトレーニングしてる。

口田甲司——偶に猫と会話してもらってもふもふしてる。

砂藤力道——お菓子を互いで作って品評会のような事してる。

耳郎響香——『悪魔の子事件』の真相を知ってる。一緒に住んでいるからほぼ家族みたいなモン。気心知れた仲。二人の口数自体は少ないがツーカーの仲なので「ん」「おう」で言いたい伝わる。

障子目蔵——たまに話す程度だけど仲は悪くない。イケメンだからマスク外せばいいのになあ。

瀬呂範太——一緒になって賑やかしたりする。あとはあだ名も一緒に考えたりしてる。

轟焦凍——雄英体育祭を経てなんとなく仲が深まったと思ってる。最近の轟から話しかけてくれるから嬉しい。

常闇踏陰——たまに一緒に厨二病ロールプレイしてる。乗ってる時は楽しいし。性格も良いからいつか一緒に遊びたいと思ってる。

爆豪勝己——ヤンキーすぎる。でもイジると面白いくらいに反応してくるからついつい上鳴と一緒にイジってる。

葉隠透——その格好（ヒーローコス）は女の子としてどうなの？度々不安になるけど仲は良い。

峰田実——A組紳士の会の会員。一緒に猥談したりと男子高校生っぽいことしてる。

緑谷出久——個性についてアドバイスすることが多い。ヒーロー談義にはついていけないから半分聞きながら無視してる。八百万百——でっか。どことは言わないけど。それはそれとして豊富な知識量は素直にすごいと思ってる。

オールマイト——大変そうだなあ。画風が違いすぎてウケる。

相澤消太——良い先生だなあ。合理的な所とかは割とヒロフミと

性格が合うので世界線が少し違えば相棒とかしてたかも。

筒美火伊那——救済出来た人。頼りになるし月一で会う仲。ただ

なんか最近どろりとした目線を感じるんだけど気の所為だよな…？

鷹見啓悟——個性を使わない戦闘においての師匠。良く組手をしてる。焼き鳥屋のバイトの紹介をしてくれた。

作者コメント：よくいる陽キャを目指しました。周りからの好感度は高い。

周りからのヒロフミへの評価。

芦戸三奈「良く話すよ！会話も面白くてイケメンだよね！」

蛙吹梅雨「ケロ：ちよつと危うい所があるわね。そこが心配だわ」

青山優雅「彼はとてもクールだと思うよ☆まあ僕ほどじゃないけどねっ☆」

飯田天哉「彼は努力家だ。彼の個性は強力だがそれ相応の危険性もある。しかし模擬戦等ではそれを感じさせなかつた所を見るに相当個性について鍛錬したのだろう。一クラスメイトとして尊敬するよ」
麗日お茶子「ヒロフミ君は餅料理を良く教えてくれるから師匠って呼んでるんよ！」

尾白猿夫「良く自分の個性の無さで相談する。聞き上手だからついつい色んなことを聞いてしまうんだ」

上鳴電気「ヒロフミとはもうマブよマブ！確かにちよつとビミョーな時はあつたけど今やもうマブダチよ！」

切島鋭児郎「ヒロフミは熱い男だぜ！良くトレーニングするんだがストイックですげえと思う！」

口田甲司「……………猫好きだよ」

砂藤力道「菓子作り仲間だな。ヒロフミの作る菓子は甘すぎない感

じでコーヒーによく合うんだ」

耳郎響香「ほぼ姉弟みたいな感じかな。どっちが姉かって？ウチに決まってるでしょ。あいつは家じやぐうたらだしウチが引つ張ってあげなきやダメダメなんだから……」

障子目蔵「……………アイツは俺と同じ感じがする……………個性で何かあつたクチだろう」

瀬呂範太「一緒になって賑やかすのは楽しいな。あいつあんな顔して一緒になってふざけるから面白い奴だよな」

轟焦凍「……………コロツケ蕎麦というのを教えてもらった」

常闇踏陰「悪魔を操りし者、か。彼は中々わかつている男だ。いつか共に遊興に浸りたいものだ」

爆豪勝己「ヘラヘラ野郎。それ以上でもそれ以下でもねエ」

葉隠透「ヒロフミ君は良い人だよー！だけどたまに私を見る度に複雑そうな顔をするんだ！なんでだろうーね？」

峰田実「あいつは俺の同志にして紳士の会会長だ。イケメンだからモテ放題なのは羨ましいけどオイラは嫉妬なんか…しない…くう、羨ましい…」

緑谷出久「ヒロフミくん？凄いやね！あんな強い個性は初めて見たよ！実質複数個性みたいなものだし個性についての知見は深いから良く相談に乗ってもらってるんだ！こないだなんかも——（以降五分以上にわたってブツブツが続く）」

八百万百「戦闘技術に優れ個性の扱いが上手く、また性格も素晴らしい方ですわ。流石は絶対指名者と言うだけあります」

オールマイト「……………彼はA組の中心人物で実にヒーローらしい少年だね！（ただ、宿敵の後継者の可能性がある。要警戒だ）」

相澤消太「……………まあ一年の中ならプロに近いだろうな。ただ謎が多いのは事実だ。例えば公安の肝いりな所とかな」

筒美火伊那「この前出掛けた時に間違つて私のことを母さんと呼んできたのだけどこの時からなんだかすこしおかしいんだがなんでだ？」

鷹見啓悟「ナガン先輩マジでそっちに行くのはやめてください俺の

胃が死にます。…にしてもヒロフミ君は強くなったなあ…。ま、早さ
じやあ負けるつもりは無いけど」

この世界線の読者——闇の深そうなイケメン。内通者考察の筆
頭候補。

作者コメント：好感度は高いですね。ヒロフミは割とどんな人にな
りも気さくに話しかけるので当然かなと。

余談：ナガンの過去回を友人に見せたら「これおねシヨタやん」っ
て言われて笑いました。

閑話について：閑話は活動報告にて募集します。気軽にリクエスト
どうぞ。

あの人は――。

そいつは俺が橋下で『俺』と話してる時にいきなり現れた。

「おじさん。なにしてんの？」

「……ああ？んだよ……ガキはどっか行ってろ」

そいつはいいじゃんかー。とか言いながら焚き火の前に座り込んだ。

「はあ……お前なあ……こんな時間にこんなところにいる男の所に来るもんじゃねえぞ？この辺は物騒だしよ。……それに俺はまだお兄さんだ」

「おじさんがいるじゃん。俺はわかるんだ。おじさんが良い人つてね」

「お兄さんだつて……はあ？何言つてんだお前？見ず知らずの他人だろ？」

「そうだけどさ。んー……俺の勘つてやつが告げてんだわこの人は大丈夫だーつて」

「…………だとしてもだ。ほら、帰って寝てろ」

「まあまあ、おじさんお金無さそうだからご飯あるし一緒に食べようぜ？」

と言つてそいつはコンビニの袋を見せつける。中には弁当が二つ入っていた。

……というかお金無さそうだしつて失礼なガキだなおい。

ただ、ここでキレるのは大人気ないし大人しく受け取っておくか。

「…………貰つといてやるよ」

「お？つてことはお金が無いのを認めただ？」

ニヤリと笑いながら弁当と箸を渡してくる。

こいつめ……

「生意気なガキだなおい。……つたく……」

「よく言われる」

ほんと、良い性格してやがるな…。

頬を引きつらせながら弁当を開け箸を割る。

そこで食った弁当は普段食う飯よりも美味かった———ような気がした。

その様子を見ながらそいつもその小さい口で弁当を頬張っていた。

その日から、そいつはよく来るようになって名前も黒魔ヒロフミって事も後々教えてもらった。

今思えば不思議なヤツだった。

元から悪人顔でよく怖がられていた。この顔のせいであらぬ誤解を生み人生を転がり落ちていった。決定的に躓いたのは16の頃だ。俺は法廷速度を守っていたのに向こうが飛び出してきたせいで事故が起きちまった。

相手は腕を骨折してしまっていて入院だったそうだ。

この時の警察はまだ躓いてもやり直せるって言っていた。もちろん、俺もそう思っていた。

でも、そうは行かなかった。

轢いてしまったやつは俺が当時働いていたところの取引先———それもお得意様の役員だった。

社長もそのお得意のヤツらも怒り心頭で俺を会社から追い出した。

両親も中学の頃に敵^{サイラン}犯罪に巻き込まれて亡くなった。

親戚付き合いもなかったから本当に一人だった。

この現代社会で根無し草になるなんてな。

ああ、あいつは「ボツチじゃんウケる」とケラケラ笑ってやがったな。まあその後ぶん殴ったが。

ああ、何が言いたかったんだっけ？

そうそう。

あいつは———ヒロフミはそんな孤独の中で俺を一人にしないでいてくれた。

きつとあいつがいなかったら俺はきつと楽な方へと落ちきつて

いただろう。

あいつは俺の唯一の友達で、仲間だ。

だから、ヒロフミのやる事ならいつだって着いてくさ。

え？俺の名前？そんなの聞いてって——分かったよ教えるから。

俺は分倍河原仁。特定敵^{サイラン}対策課。

裏での名前は「トウワイス」だ。

その人は私が我慢出来なくなっつてつい斉藤くんの血をチウチウしていた時の事でした。

「…おや？何をしているんだい？」

その人はたしか個性を持つ人をサポートするアイテム売ってる会社の人で私の通う学校に来てました。

なんで来ているのかは忘れちゃったけど、足がすらつとしていて髪も長くてなんだかカッコイイ人だなあと思ってました。

「斉藤くんの血をチウチウしていたんです！」

「へえー。面白い事してるんだね。でも…なんでそんな事をするんだ？」

「好きだったからです！」

「ふーん。人間は好きな人の血を吸うのか」

私の答えに関心したように頷いたその人の様子がなんだか心がムズムズして、ヘンな気持ちになっていました。

「……………変だとは言わないんですか？」

「ん？それがキミにとっての“普通”なのだろう？」

「……………ふふっ、面白い人ですね！私のコレは気持ち悪いって、普通じゃないって、異常だって言われてきたんです！でも、でも！これは私にとつては好きな人にキスするように、“私”は好きな人の血を啜るんです！なのに…お父さんやお母さんは分かってくれませんでした…だから、ハジメてです！この行為を“普通”だって言ってくれたのは！」

気付けば捲し立てるようにその男の人に話してました。

「お、おう……これがヒロフミが言ってたヤンデレってやつかな……？
えーと、そうだな……俺が思うに普通ってやつは存在しないって思うん
だよな。世間の言う普通ってやつは大多数の言う“常識”ってやつ
で……個人が思う普通と結構乖離していて当たり前なんだよ。だから
キミのその行為はなんらおかしいことではないんじゃないか？」

まあ、たいして生きていないから偉そうなことは答えられないん
だけどなと頬をかきながら話すその人にいつしか目を奪われていま
した。

ありのままの私を受け入れてくれた。

そんな人は血の繋がった両親でさえしてくれなかった。

「……………血が吸いたいです……」

「おおう大胆な告白だねえ……」

好きです。この人が好きです。

ああ、でも困りました。

この人の名前を知りません。

「貴方の名前はなんですか!?好きな人は?彼女はいますか?」

「俺の名前は黒魔アキ。好きな人……ってか弟がいてな。ヒロフミって
言うんだがとても良い弟がいてな。まあ、大事な人だな。彼女はいな
いぞ」

どうしようどうしよう。

笑顔が止まりません。欲求も止まりません。

この人は私にとって運命の人なのでしようか。

今にも心臓が飛び出しそうなくらいにドキドキしています。

ああ、

「血が吸いたい……………」

「そこまで言うなら構わないよ。ただ——ここじゃ人の目がある。

……………俺の手を取ってくれるか?」

そんなの、答えは一つしかないじゃないですか。

「もちろん!」

鏡は見えないけれど、私は今最高に可愛い笑顔で答えた。

私の名前ですか?私の名前はトガヒミコです。

将来、アキ君のお嫁さんになるため頑張ってます！

職場体験篇

ヒーロー名とヒロフミ

☆☆

視線を感じる。ジロジロと見られているような———というか
実際見られているな。

この前の雄英体育祭のおかげで俺への視線が集まってるぜ。い
やあ照れる。

「何ニヤニヤしてんの」

「まあ人気が出て嬉しいなあって」

「……………はあ」

大きくため息をつく響香。

周りの人達は俺を見て「ほら：雄英体育祭の：」とか「生で見ても
イケメンなのね……………」とか「ちくわ大明神」とか……………いや誰だお前。

まあ、色々と熱い視線を貰いながら通学路を歩く。雄英体育祭で
活躍するだけでこんないいことがあるとは。ここにくるまでに他
校の女子と何回も握手したのは役得だな。

握手する度に響香が引いたような顔をするのは面白かった。

そんなこんなで。

皆の視線を集めて満更でもない気分のまま雄英にまで歩く。

「お、雨か」

ぽつりと俺の頭を打つ水滴に反応して空を見上げると雨が空を
濡らしていた。

「うわ：最悪。傘持ってきてない……………」

「降水確率30パーセントはなあ。持っていくか悩む確率だよな」
嫌そうに顔を顰める響香。あ、そういえば……………」

「折り畳み傘があつたんだったわ。一緒に使おうぜ」

「……………相合傘……………」

……………どこことなく恥ずかしげに呟く響香。

「ンなこと気にしてる場合かい。風邪ひくぞ」

多少強引になるが開いた傘の下に響香を入れ、それに抵抗することなくすんなりと収まった。

いやあ折り畳み傘を常備しておいて助かった。やっぱり雨に濡れる不快感っていうのはいつになってもなれないからねえ。

「…肩が少し濡れてるみたいだけど」

「ん？ああ。大丈夫よ。こんくらいすぐ乾く」

別にそこまで気にすることでもないような気がするけど。

そんな他愛のない話を続けながら雄英へと向かった。

A組の教室に入るとクラスメイト達は皆雄英体育祭の反響を感じたらしく、声をかけられたなどの事を自慢げに話していた。

「超声掛けられたよ来る途中!!」

「俺も!」

「私も凄いじろじろ見られたよ!」

各々が雄英の凄さを実感している中、窓側の最後尾の席で八百万と話していた。

「にしても今日は何するんだろうな」

「確かプレゼントマイク先生の英語の小テストがあると仰っていましたわ」

「うげ、マジかよ…」

あの人の英語の授業、先生自体が特徴的過ぎてあんまり内容が頭に入って来てないんだよな。

…ん？そういえば雄英体育祭の次のイベントって確か…

「——おはよう」

A組の教室に相澤先生が入ってきた。その瞬間に、さつきまでの喧騒が嘘のように静まりかえった。

まるで軍隊みたいだな。なんて思いつつ、先生の話を聞く。

「相澤先生、包帯とれたのね。良かったわ」

「婆さんの処置が大ゲサなんだよ。んなもんより今日の“ヒーロー情報学”ちよつと特別だぞ」

あ、思い出したかも。確か——

『『コードネーム』ヒーロー名の考案だ』

『胸膨らむやつきたああああ!!』

そうだそうだ。そんな事があるんだった。

どうしよう。何も考えて来てない。…何が良いだろうか…。

ヒーロー名を決めるという一大イベントに沸き立つA組を一睨みで黙らせてから相澤先生は続けた。

「———というのも先日話した「プロからのドラフト指名」に関係してくる。使命が本格化するのには経験を積み即戦力として判断される2 3年から…つまり今回来た“指名”は将来性に対する“興味”に近い。卒業までに一方的にその興味が削がれたら一方的にキャンセルなんて事は良くある」

なるほど。中々シビアみたいだ。

………まあ、俺がこの“指名された”事務所の中で行く所は決まっているのだが。

「頂いた指名がそのまま自身へのハードルとなるんですね!」

「そ。でその指名の集計結果がこうだ」

葉隠の言葉に首肯しながらモニターを表示する先生。そこには四位と圧倒的なまでに差をつける三本のグラフがあった。一位は俺、二位に轟、三位に爆豪とありこの結果を見た二人がこちらを見てきた。特に爆豪なんかは射殺さんばかりに睨んで来るもんだからヘラヘラと笑ってかえすと舌打ちしてから黒板に向き直っていた。さすがヤンキー。やることが輩だぜ。

「例年はもつとバラけるんだが、三人に注目が偏った」

「だ———白黒ついた!」

「見る目ないよねプロ」

諦めたように溜息をつくように天井を見上げる上鳴と不満げな青山。

青山はそもそも大した活躍してないし見る目無いつて言うのは違うんじゃないか…?

「まあ納得の順位だよね」

「仮にこれが爆豪一位だったとしても同じ結果になってたと思うわ」

「ああ!!?ならねえわ!!圧倒的なまでに俺が一番指名来てるわ!!」

「いやそういう所があるからだと思っぜ！」

それな。原作だと爆豪一位だったけど表彰台に固定されていたせいか順位逆転してたしプロヒーローってやっぱり実力もだけ性格も見てるんだろな。

「さすがですわ黒魔さんに轟さん」

「それほどでも——ある」

「ほとんど親の話題ありきだろ……」

八百万の賞賛に俺は胸を張りながら、轟はうんざりしたような様子で答える。

轟のは……まあ……親がアレだし仕方ないっちゃ仕方ないよな……。

「——これを踏まえ……指名の有無関係なくいわゆる職場体験つてのに行つてもらおう」

浮ついた空気が一度静まる。

「お前らは一足先に経験しちまったがプロの活動を実際に体験してより実りのある訓練をしようつてこつた」

「それでヒーロー名か！」

「俄然楽しみになってきたア！」

うー……ん。どうしよう。本当にいいのが思い浮かばない。

「まア仮ではあるが適当なもんは……」付けたら地獄を見ちゃうよ!!この時の名が！世に認知されそのままプロ名になってる人多いからね!!」まアそういう事だ。その辺のセンスをミッドナイト先生に査定してもらおう」

途中で派手に登場してきたミッドナイト先生に教壇を譲りつつ「俺はそういうのできん」と言つて寝袋を取りだした。

「将来自分がどうなるのか名を付けることでイメージが固まりそこに近付いてく。それが「名は体をあらわす」つてことだ。

——オールマイトとかな」

なるほどね。……下手な名前は付けられんな。

相澤先生の言葉を最後に、クラスメイト達が次々に色んなヒーロー名を出していく。

しかし、俺だけはどうにも決めきれずに頭を悩ましていた。

ダークナイト、ルシファー、イブリース、捻りすぎかな？ならシ
ンプルにデビルマン、デモンズとかシンプルすぎかなあ。シンプル路
線は在り来りか？ならもう少し捻ってゴエティア、レメゲドン、クリ
フトト、ディアブロ…候補が多すぎていけないな。どれもかつこい
なあ。

いつその事芸名として吉田ヒロフミと名乗ってみたい…。いや
いや漫画違うしなあ。

悩みに悩んで。

——決めた。やっぱ、悪魔を統べるものとしてはこの名が一番
かな。

ボードにその名を書くとか壇にあがる。

「俺のヒーロー名は——」

——ソロモンだ。よろしく頼む」

「良いわね！確か…「平和な人」や「平和に満ちた」って意味もあるか
らヒーローらしい名前だと思うわ！」

そんな事を考えて付けた——って訳ではないが、悪魔を操る者、
ということに関してこの名前が浮かんだのだ。

他のクラスメイト達のウケも良さそうだし俺も気に入ってる。
自信のある名前だ。

この名で、頑張っは！いきますか。

えい！えい！むん

!!!!!!!

蠢く悪意。

☆☆

「それではヒロフミはそちらの事務所に——という訳ですね」
『ああ。今日連絡が来たんだ』
「分かりました。では」

そこまで言うとは桃色の髪を三つ編みにまとめた女性——マキマは通話を切った。

そのまま椅子に深く腰を沈める。

正直に言えばヒロフミと数日間とはいえ常に一緒にいられるとは羨ましい。

ちよつとした嫉妬を抱いているとドアノックがマキマの部屋に響く。

「どうぞ」

「失礼します」

「おうおう！この部屋はワシのじゃ！盗人がおるぞ！！女！その席をむぐうつ！」

「し、失礼しまアす…」

「わふっ！」

一人は黒髪を後ろにまとめた少女が、金髪の赤いツノのようなものを着けた少女の口を塞ぐようにして入ってきた。少し間を置いて、もう一人は金髪のトゲトゲした髪に赤い目の少年と、その彼に抱えられているチェンソーと犬の合体したような不思議な生物が入ってきた。

その一人と一匹を見たマキマは内心の興奮を押さえながら微笑んだ。

「ようこそ、公安へ。」

——レゼちゃんに、パワーちゃん、そしてデンジ君。ポチタ君」

☆☆

さてさて、ようやく俺のヒーロー名が決まったので今度は職場体

験で行く事務所について決める訳だが…まあここにするって前から決めてたしな。

「そういえばヒロフミ君はどここの事務所に行くとか決めてるの?」

と、デクくんがブツブツから復帰して俺に聞いてきた。

「俺?俺はレディ・ナガンの所に行くよ」

「ええっ!!あの!!」

「おう、あの」

どの “あの” か分からないけどナガンさんの事務所に行く事になっている。

ヴィラとの事もある。ナガンさんも追っているから丁度良いしな。

ならホークスの方がいいんじゃないかと思うかもしれないがそこは原作の流れを汲むために行かない事にしたのだ。

あ、一応原作通り常闇君にホークスの事務所から指名が来ているから一安心だ。やっぱ修正力ってやつかね。

「レディ・ナガンと言えばやっぱり遠距離系の個性では日本一っていう所が——」

右から左へと。デク君のヒーロー語りを受け流しながらプリントに書き込んだ。

そういや、いまヴィラってなにしてんだろ…大人しくしててくれると嬉しいな。

そしたらこのクソみたいな気分も収まるのに——

☆☆

「ヘックしょん!…アレ?今誰かが噂しているヨウナ…」

保須市の市街地、薄暗い路地裏に少女の影が一人。小さいくしゃみをして辺りを見回す。

少女の名は——ヴィラン ヴィラ。ヒロフミの元個性であり、またの名を

敵の悪魔。

ぽつんと一人誰も居ない路地裏にぼーっと立っていた。

誰もいない。いや、もう居なくなつたという方が正しい。

なぜなら——彼女の足元には無謀にも挑もうとしたヒーロー

が血溜まりに沈んでいたのだから。

「なるほど…これは想定外ですね…」

「ン？誰カナ？」

「おっと失礼。私の名前は——黒霧と申します」

バーテンダー風の服をまとい、顔全体を黒い霧のようなもので覆い隠している黒霧がその一部始終をじっと観察していた。

「クロギリ…あ、USJでヒロフミにボコボコにされてた子デショー」

「……………どうして知っているのかは今問うことは辞めましょう」

黒霧という名前を聞いて考え込んでから思い出したように話すヴィラ。対して黒霧は苦虫を嘔み潰したような声で返答する。

両者が睨み合う——までは行かないものの、どこか険悪な雰囲気が始める——が、ここで黒霧が本来の目的を思い出し、複雑な感情を押し殺しながらこう言った。

「今日は貴女を勧誘しスカウトに来たんですよ。そう、我らが——

ヴィラン
敵 連合に」

黒霧の言葉をヴィラの中で咀嚼し、考え、そしてこう言った。

「……………ソレってさ。目立ツ？」

「——それはもう、とびつきりに」

その返事を聞いたヴィラは満足そうに笑い、黒霧のワームホールへと入っていった。

——ネエ、ヒロフミ。ワタシがこっちに行けば目立つんだツテ。だから待っててネ？オタガイ強くなってそうして——殺しあオーネー！

「アア、楽しみダナア!!」

レデイ・ナガンヒーロー事務所

☆☆

駅構内。

都市部な事もあつて人がごった返している。

そんな中で同じ制服を着ている一団。そりゃあ目立つ訳で。

ざわざわ取り囲むように色んな人が俺たちを見てなにやらヒソヒソ言っている。

「……なるほどな。上鳴。お前制服のズボンのチャック開いてるつてよ」

「はあ!!?ちよ、おま早く言えよ!」

朝会った時から苺柄のパンツがチャックから見えてたもんだから一緒にいた響香と共に大爆笑したな。当の本人はそんな俺達を不思議そうに見ていたけど。

「コスチューム持ったな。本来なら公共の場じゃ着用厳禁の身だ。落としたりするなよ」

俺の場合ただのスーツにしか見えないからバレないような気がする。

まあそんなことはしないけど。

「はい!!」

「伸ばすな「はい」だ芦戸。くれぐれも失礼のないように!じゃあ行け」

そう言うのと周りが各々の事務所に行く準備を始める。

ナガンさんのところは確か:東口か。

ヴィラを目撃情報のある保須市に近いし、もしもの時は即応できるだろうな。

「うっし、行くか」

「ん、ヒロフミ:怪我には気を付けて」

「おう。そっちもな、響香」

響香に親指を立てて返す。

さて、どんなことがあるのやら。

☆☆

新幹線に揺られて一時間程。

目的地の駅に着いた俺は改札で切符を切り、外に出る。

「えーと、車が…とあそこか」

駅を出てすぐ近くにある駐車場に連絡にあつた車の窓をノックする。

「お、その制服…ヒロフミ君だね。よろしく、僕はレディ・ナガンの相棒サイドキックのスコープピオン」

「よろしくお願いします」

にこやかな返事を窓越しに話しかける黒い雨合羽のような服装のヒーロー、スコープピオン。

顔は隠れておりよく見えないが声の高さから女性だと何となくわかる。

車に乗り込み、助手席に座る。

「にしても雄英体育祭見てたよー。録画だったけど」

「ありがとうございます。…プロから見えてどうでした？俺の戦いは…」

「いやあ…凄かったね。プロ顔負けだよあれは…」

お、そいつは良かった。ある程度実力がないとこの先はキツくなるからな。

出てくる敵ライバル的にな。パワーインフレとかあるからね…。

だからこそプロにもそう見られてるってことはまだまだやれるってことだし、これはいいことを知った。

「さて、ここが——我らがレディ・ナガンヒーロー事務所だ」

三階建てのビルにかっこいいロゴで『レディ・ナガン』と銘打たれた看板が掲げられている。

「おお…」

「さき、中に入った入った。一番上の部屋にナガンさんがいるから」

「は、はい」

押されるようにして、入る。

中では色んなコスチュームを着たヒーロー達が忙しそうに受話

器を取ったり、書類を運んでいたりした。

「この事務所ではね、遠距離系の個性のヒーローが多いんだ。なんてたってこの所長は日本の中でも遠距離系トップクラスのヒーローだからね」

なるほど。確かにあの人の元だったら学ぶことも多いだろうな。

「所長室は…上だから階段登らなきゃね」

「はい」

ほえー、意外と広いんだな。よくあるビルって感じだったけど内装しつかりしてるしやっぱヒーローってこういうところも大事なんだな。

ちゃんとしてるわ。

「さ、ここだよー。ナガンさん、昨日からずっとそわそわしてたから早く入っちゃいな！」

「分かりました」

コンコン、とノックをする。すると中からナガンさんの声で「どうぞ」と聞こえたので入る。

この前会ったのが…三週間前だったかな？

「どうも。三週間ぶりです」

「ああ、久しぶりだな——ヒロフミ、いやソロモン」

「ええ——レディ・ナガン」

中に入ると椅子に腰掛けたナガンさんがにこやかに微笑みながら話しかけてくる。

実務の途中だったようで眼鏡姿のまま書類を持っていた。

「忙しい所すみません」

「イヤ、いいんだ。大丈夫。ソロモンの事なら全ての事を優先しよう」

「……そっすか」

重お……

まあ自分が（矢印を）重くさせてしまった自覚はあるんですけどね！

「そ、それよりも…今日は俺何をすれば？」

「そうだな…今回は私のパトロールに付き合っただけか。コス

「チュームを着てきてくれ」

「分かりました！」

大きく頷き、更衣室へと入る。

さてさて、どんな敵がいるのか、楽しみだな。

☆☆

コスチュームに着替え、ヒロフミが向かったのはビルの屋上。

そこでレディ・ナガンとスコープオンが待っており、ヒロフミが来るのを待っていた。

レディ・ナガンはヒロフミが屋上に来たのを確認すると近くに来るように手招きをしてから口を開いた。

「早速で悪いが、ウチのパトロールに参加してもらおう。戦える奴は多い方がいいんでな」

「はいー」

ヒロフミの返事に満足げに頷きながら、レディ・ナガンは事務所が現在やっている事を簡単に説明する。

「まず、特徴としてウチの事務所は遠距離系の個性を持ったヒーローが多い。理由は色々あるが：やっぱり私のネームバリューが一番上の大きな理由だろうな」

「僕もナガンさんに憧れてここを志望したんだよー」

「(成程。やっぱりナガンさんってすごいんだなあ)」

ヒロフミがそう心の中でウンウンと頷いている間にもレディ・ナガンの話は続く。

「遠距離系の個性持ちが増えると同時に探知系の個性を持ったヒーロー達も入って来るようになった。まあサポート系のヒーローは何かに行く場所に困ってたりするからな。主に街の何かしらの異常を探知するヒーローがな。だからソロモンには私たちに着いてきてくれ」

「了解しました！」

指示の一つ一つを頭に入れ、少しおどけて敬礼の構えを取るヒロフミ。

日中のビル街を渡り歩きながら。唐突にスコープオンがヒロフ

ミに話しかけてきた。

「うーん、ただ街を歩くのも暇だしここは一つ、ナガンさんのすごい所を僕が教授しよう!」

「そういえばナガンさんってどんな活躍していたのか知らなかったかも…。教えて欲しいです!」

「お、おい。恥ずかしいから言わなくても——」

レディ・ナガンが慌ててスコープピオンの口を閉ぎそうとしたが、遅かった。

「ふふん!よかろう…まずは——」

レディ・ナガンの事務所のある街は彼女自身がヒーロー事務所を建てるまでは敵による犯罪も多かった。しかし、レディ・ナガンの事務所が出来た事によってがくとその数を減らしていった。

どこからともなく飛んでくる弾丸。

回避しても追ってくるその一発が街を我がもののように支配していた敵^{サイラン}達を一網打尽にしていた。

そんな逸話があるからか、いまやレディ・ナガンヒーロー事務所は遠距離系個性のヒーロー達の憧れの事務所となっていた。

「——と言うわけさ!」

「なるほど…そりゃあすごいですね」

「そうなんだよっ!ナガンさんはすごいんだって…あれ?ナガンさん…?」

割と熱中してレディ・ナガンの話をしていたスコープピオンはナガンの異常に気付き近寄る。レディ・ナガンは顔を少し赤らめてどこか遠くの方を見ながらスコープピオンの顔に合わせないように歩いていた。

「あれ?あれれ?もしかや…照れてるんですか?」

「て、照れてない!」

「(あんな風に手放して褒められたら誰だって照れるよなあ…)」

スコープピオンはレディ・ナガンのガチオタクであった。

故にオタク特有の手放しに——もはや神聖化すらしているよ
うな——褒めかたで話したものだからナガンは顔から火が出そう

な程に恥ずかしかった。

しかし、ヒロフミの前だ。安易にニヤニヤなどしてははしたないと思っただのか、そっぽを向くことで隠そうとしていた。

だが——何度も言うが、スコープピオンはレディ・ナガンのガチオタクなのだ。

推しの照れ顔を生で見える機会などはそうそう無い。ここはゴリ押しでも見たい。

仁義なき——オタクと推しの戦いが始まっていた。

……その様子をヒロフミは苦笑しながら見ていた。

☆☆

「いやー……申し訳ない。反省はしてます……しかし！後悔はしてないです！」

「……………はア……………」

「あはは…お疲れ様です。ナガンさん」

ごつつあんでした！と満足げなスコープピオンとまだ少ししか歩いていないのに既に疲れ果ててるレディ・ナガン。それをフォローするように笑うヒロフミ。

スコープピオンを宥めるのに時間を要してはいたが、そこはプロヒーロー。その間も色々と周りを見て、こまめに異常がないか見ていた。

そんな様子を見てヒロフミは感心していた。

「まあ、いつも通り平和な——」

スコープピオンがそんな事を言おうとした、その時。ヒロフミ達の耳に付けられたインカムから緊急連絡がはいった。

『西地区で強盗発生！付近にいるヒーロー達は直ぐにそちらへと向かってください！』

「ソロモン！スコープピオン！」

「はい！」

連絡が来てから直ぐに三人は動いていた。

西地区と言えばここからすぐの所で現在の状況的にはヒロフミ達が一番事務所の中で近い場所だった。

角を曲がり、西地区の銀行がある場所に着くそこでは――

「オラオラ!!道イ開けるオ!!この鎌風に切り裂かれたくなかつたら――

泣いて、喚いて、命乞いしろ」

竜巻のような風が吹き荒れている大道路の中心部で敵はいやらしく笑っていた。

「ひ、ひいいいい!!どうか、どうか命だけは!!」

「うええんうええん!!ママー!!」

「畜生……こいつは酷い……!」

「しかも奴は指名手配も出されている凶悪敵……!厳しいですね……!」
「さて、と。どうしたもんですかね……」

現場に着いた三人はその様子に顔を顰める。

そこにいたのは額から血を流し、泣いている少女と、その母親と思われる女性がそばで倒れており、敵の手には人質と思われる男が首を掴まれていた。

「……まずは人質と周辺住民の安全確保だ。スコープオン、ソロモン、避難の指示を頼む」

「了解しました!」

「……ナガンさんは?」

ヒロフミの問いにレディ・ナガンはニヤリと獰猛な笑みを浮かべた――

「――何、当たればごっちのモンさ」

と言い切った。

ヒロフミは敵の近くにいた親子を安全な所まで送りつつ、ナガンの戦いを見ていた。

そこでは――

「クソ・クソ・クソ!何でこんな竜巻の中を正確に狙撃できる!!?」

レディ・ナガンの圧倒的な狙撃力により翻弄される敵の姿があった。

敵の個性は自身やその周りに竜巻を起こすというもの。足の裏で竜巻を起こし飛ぶのもいいし、その竜巻で攻撃するのもできるといふ汎用性の高い個性だった。

しかし、いかに風が強かろうと、いかに素早く移動しようとして、レディ・ナガンの弾丸からは——逃れられない。

最初の一発で左肩を撃ち抜かれ、脱臼していた敵は自身の身を守る為に人質を盾にしようとしていた。だが、そこに針を通すような一発。

自分の周りに展開している竜巻と竜巻の僅か数センチほどの間を縫って放たれた弾丸は正確に鎖骨に直撃していた。

痛みに悶え、おもわず人質を離してしまった。

そこを見逃さなかったのが——彼女の相棒、スコープピオンだ。スコープピオンの個性はサソリの尻尾のような形状の手に変化するというもので、先端部分はフックのようになっておりそこから相手を刺すことで痺れさせたり麻痺させることが出来る。

スコープピオンはそのフックのようになっていいる部分に人質の服を引っ掛けて引き寄せた。

「ナガンさん！今です!!」

人質もいなくなり邪魔は消えた。

あとはヒーロー、レディ・ナガンの独壇場だ。

慌てふためく敵とは対象的に、冷静にレディ・ナガンは狙いを定め——引き金を引く。

腕の狙撃銃——その銃口から発射された弾丸は正確にその脳天に直撃した。

そのまま敵は強い脳の揺れにより、気絶し、地面へと倒れこんだ。「凄い……連携が上手い具合に取れてる……」

感心したように呟くヒロフミ。

これがプロかと。思い知らされたような気分になった。

日も落ちかけてきて、夕暮れ時。

警察に敵を引き渡した後で。

ヒロフミは助けた親子に飴を貰い、それを口の中で転がしている

と警察官と話し終えたナガンがヒロフミの元へと歩みよってきた。

「…今日はどうだった？」

「凄かったです。これがプロかって思いました」

「———そうか」

心底嬉しそうに、レディ・ナガンはヒロフミの言葉を聞いて笑っていた。

☆☆

とあるバーにて。

カウンター席に座った死柄木が黒霧から紹介された二人の敵ヴァイランと相対していた。

「……………オイオイ黒霧…俺は “ヒーロー殺し” を連れて来いって言ったよな？何でガキがいるんだ？」

極めて不愉快そうに人の手を顔を被せている男———死柄木弔が言う。

「ですが死柄木弔。彼女は巷を賑わしている凶悪敵ヴァイラン———その名も『ヴィラ』。今の我々には十分すぎるほどの戦力になるかと」

「……………はア。まあ良い。…とりあえず自己紹介しろよ」

「ドモ—！ヴィラちゃんだヨ！！イツパイ悪いことしよ—ネ！！」

「……………はア」

ガリガリと、首を掻きむしる死柄木弔。

ヴィラはその様子を興味深げに観察している。

「ネエネエ、なんで死柄木君はそんなに首を掻きむしってイルノ？ニンゲンなんだから皮膚が傷つくヨ？」

「どうでもいいだろそんな事……………んで？その包帯目に巻いてんのが———ヒーロー殺しか」

これ以上ヴィラに構うのを嫌がった死柄木は興味の対象をヒーロー殺しへと移した。

「なるほどなア…おまえたちが雄英襲撃犯…その一団に俺も加われと」

「あア、頼むよ悪党の大先輩」

虚でいてしかしどこか怒りが滲むような笑みを浮かべて死柄木

は自身のグループ、敵^{ヴァイラン}連合に入るよう勧誘する。しかし、ヒーロー殺しはそれを断る。

そもそも。根本的な思想の部分において両者は乖離している。

ただ、破壊衝動のままに付き動く死柄木と、“英雄^{ヒーロー}”の偽物が蔓延る事を良しとせず、『信念なき殺意』になんの意義を持たないと主張するヒーロー殺し——ステインとは、油と水のように乖離している。

故に、死柄木はステインの反感を買い、床へと組み伏せられていた。

——しかし。

「口数が多いなア…信念？んな仰々しいもんじゃないね…強いて言えばそう…オールマイトだな…」

——あんなゴミが祀り上げられてるこの社会を、滅茶苦茶にブツ潰したいなアとは思ってるよ」

ステインのナイフをボロボロに崩壊させながら啖呵を切る死柄木。それを見たヴァイラは——嗤っていた。

「(イイネ。スゴクイイ。純粋なまでのあの悪意。黒い黒い重油のような重い悪意。最高ジャン!!)」

ヴァイラの行動原理はヒロフミに見つかり、殺し合うこと。しかし彼女は敵^{ヴァイラン}の名を冠する悪魔。死柄木の持つ純粋な悪意は彼女にとつては好感の持てるものだった。

なればこそ、彼女は敵^{ヴァイラン}連合に入る事を決意した。

死柄木の、悪意の果てをみるために。

死柄木と、ステインの目的は全く違う。

しかし、『現在^{いま}を壊す』という点において共通している。

そのため、両者は一度手を組む事を決めた。

一応の約束が成ったステインは直ぐに黒霧に保須に戻すように言う。

何故なら、彼にはまだやるべきことがあるからだ。

——偽物を排除するという、おぞましい目的が。

「ヴァイラねえ…」

「なんじゃ？気になるんか？オールフォーワン」

「いやまあ、特別って訳じゃないんだけど々彼女からはなにやら面白
そうなの匂いがするね」

「フム……少し探りを入れるとするかの」

「頼むよ博士」

ヴィラとヒーロー殺し

☆☆

ヒーロー研修三日目。

日も落ち始め、今はPM5:00。

俺とナガンさんとスコープオンさんは保須市に来ていた。

ここで何と『ヴィラ』と『ヒーロー殺しステイン』の目撃情報が多数寄せられたのだ。

元々追っていたナガンさんはこの情報を公安から受け取り、捜査を開始するのがこれまでの流れってわけよ。

……誰に向かって話してんだ？

まあいいや。

そんなことよりも気になるのが寄せられた情報の中でヴィラとステインが二人並んでいた、という話が一番疑問だ。

ヴィラに関しては何も知らないけど、ステインは所謂一匹狼スタイルだろ。なんでヴィラなんかと行動しているんだ？

そもそも——ステインにとってはヴィラも “ 敵 ” のはずだし。

うーうーん。分かんないな。

「…なにやら浮かない顔をしてるな？」

「顔に出てました？——まあ、なんとというか、今日は長い夜になりそうだなと思っただけです」

「確かに。この規模を搜索するのは少し骨が折れそうだな」

「ナガンさん。もう少しウチから探知系の子引っ張れなかったんですか？」

「担当地区が近いとは言え他所様の所にそんな何人も連れてこれるわけないだろ…」

確かになあ。

ヒーロー事務所っていうのは基本地区ごとに割り振られている。今回の保須市も近いとは言え、他所のヒーロー事務所の土地。申請や応援が来ない限りはそんな大人数で行くのはマナー的な問題がある

だろう。

保須市の中で一番高いビルの屋上から見下ろしながら異常が無いか目を凝らしながら見張り続ける。

「……さて、どう動いてくる？ ヴィラ」

そんな俺のつぶやきは、吹き付ける風にかき消されていった。

☆☆

それは、ステインが保須に戻るために黒霧のワープホールに入ろうとした時まで遡る。

両者の思想は違いど目的は一致している。目的の達成の為に、それまでステインは死柄木弔と——敵^{ヴィラン}連合と手を組むことにした。

しかし、ステインにはまだやることがある。

本物の英雄^{オールドマイト}以外の贖物^{キロー}を殺すという——使命が。

しかしそこで待ったをかけたのが今のままで黙って状況を見ていたヴィラだ。

ヴィラは言った。

「タブンだけど私のヒロフ……じゃなくてヒーロー見習いもいるカラ——ワタシも、ステインについて行きたいんだケド」

その言葉に、ステインは苛立ちを隠せなかった。

——ヒーローというのは見返りを求めてはいけない。その称号は自己犠牲の果てに得られる物でなくてはいけない——とステインはそう——原理主義的な——思想を持っている。

だが、あくまでもステインの行動理念は『贖物が蔓延る世界の粛清』だ。

本来ならヴィラのような徒に個性を振り回す敵^{ヴィラン}も粛清対象になる。

自分と同じようにスカウトされた者であろうからあえて無視をしていたが割り込もうとするならば話は別。

容赦なくここで粛清しても——

「ハアイ。殺気は隠そうネー？」

動けなかった。いや、動かなかった。

背中に背負った刀を引き抜き、ヴィラへと迫ろうとしたその瞬

間。

足と地面を縫い付けられたように動けなくなっていた。

「……………何?」

「ワタシの個性ちからダヨ」

「オイオイ。ここで殺り合うな。外でやれ」

「ソノ必要はナイヨ。タダチョーつと話したい事があつたダケ」

本当に戦うつもりはない、と。苛立ちを隠せずにいる死柄木に降参のポーズを取りながら首をすくめるヴィラ。

そのまま向き直り——ステインの耳元まで近付いた。

「ヒーロー殺しサン。一つ“契約”をしまシヨウ」

「……………契約?」

「ソウ。契約」

「……………それをしてなんのメリットがある?」

「スクナクともあなたの邪魔はしません。ソレと——」

「いや、それだけで良い。……………お前は何かと危なそうだ」

「ナラ契約成立というコトデ!」

ステインがヴィラの言葉を遮るようにして契約を受諾するとヴィラはニツコリと笑いながら握手をした。

ステインの戦闘技術は卓越している。

それは『ヒーロー殺し』という二つ名で呼ばれていることでその高さが分かることだろう。

思想を、信念を通すためには強くなければいけない。

だが、そのステインが、自分の身が危機であると理解するほどの実力差を感じ、自分の思想を通すために渋々契約を受けた。

「(ヴィラ…危険すぎる…俺ももっと強くならねば…いずれ対峙する可能性もある…)」

「内緒話は終わりか?ならとつと行つちまえ」

さつきまで一触即発の雰囲気だったのに何故か和解し、握手した両者に疑問と苛立ちからぶつきらぼうに言い放つ。

これ以上話すこともないためそのまま二人は黒霧が広げるワープホールに入り外へと出て行つた。

「あークソ。ヒーロー殺しはともかく、ヴィラって奴はうちに正式加入してくんだよな……はア……」

「死柄木弔。飼いやせきれないのならばヴィラを追放しますか？」

「イヤ、それはしねエ。あんなんだが強い。今は仲間を集めている段階なんだ。追放するなんて馬鹿のやることだろ」

「承知しました」

ガリガリと、いつもの癖で首を掻きむしりながら返事する死柄木。

その様子はいつもよりすこしくたびれていた。

しかし、それは一瞬で、直ぐにイタズラを思いついたような笑顔で言った。

「——お前らがそのつもりなら俺も暴れてやるよ。大暴れ競争だ」

☆☆

なにやら嫌な予感がする。

保須市の中でも一番大きいビルで見張りをしていたヒロフミは何故か、そう感じとっていた。

そしてそれは奇しくも当たることとなる。

「破壊音……?」

「せ、線路を見てください!」

「な!?!あれは——」

新幹線の通っている線路に響く破碎音。

そこでは側面を破壊された新幹線が脱線しており、破壊したと思われる箇所からちらりと人の脳髓のようなものが見えた。

「ナガンさん!!アレは——脳無です!」

直ぐに思い至ったヒロフミがナガンに伝える。

ナガンもヒロフミの言葉で察したのかすぐさま腕を銃に変形してその場所に狙いを定める。

既に捉えている。あとは引き金を引くだけ——

「…ヒーローが乗っていたのか」

脳無と共に、外へと飛び出すヒーローを確認し銃を解除する。

「ソロモン。スコープオン。私たちも移動する。そこそこ近いから間

に合うだろ」

そう言うのと二人は頷き、そのまま隣へのビルへと飛び移り、現場へと急行した。

☆☆

叩き付けられた白い脳無。そしてそのまま瓦礫を払い、立ち上がる。

その硬さに驚きつつもゆうゆう空を飛ぶヒーロー——グラントリノ。

「——ガチ戦闘は何年ぶりかな。まったくんだ巻き添えだ！はっちゃけやがって！何だおまえ!!」

思わず愚痴をこぼすグラントリノ。その様子を好機と見たのか、脳無はその大きな腕をグラントリノへと叩き付ける。

——早い。

「くっー！」

すんでの所で交わし脳無の後ろを取る。

「(が、まだまだ対応圏内……)」

振り返り、どう攻撃しようかと考えていたその時だった。

四足歩行で逃げ遅れていた市民に向かい突進する脳無。

「うわっーちよっ……わああ!!?」

「(見境なしか!) やめとけ、この……!」

市民を守るために、ジェット噴射しながら突進し、脳無を背後から攻撃しようとした瞬間。

左から豪炎が、脳無の全身を。

真正面のビルの上から弾丸が脳無の脳を。

ほぼ同時に燃やし、直撃させた。

「ヒーロー殺しを狙っていたんだが……タイミングの悪い奴だ。存じ上げませんがそこのご老人。俺に任せておけ」

「援護はさすがにいらなかったか」

「いや、助かったよ。——レディ・ナガン」

「あ！あなたたちは!!マジ!?何でここに——……」

「——ヒーローだからさ」

不敵な笑みを浮かべて燃え盛るエンデヴァーがそこにはいた。

激突。ソロモン VS ヴイラ

☆☆

ストーリー進行って感じだな。
想定通りエンデヴァーが来たことをナガンさんの隣で確認しつつそんなことを思った。

さて、ここに脳無がいるってなると……やばいな。ヒーロー殺しはもう飯田の前に現れてるはずだ。

…どうにか、ここから抜け出すことは出来ないだろうか。

「……………ん？」

ふと、違和感があった。

確かエンデヴァーの所には轟がいたはずだ。

なぜ、いまここにいない？

—。そういえば——移動している時に携帯が震えていたような—

なにか嫌な予感がして、急いでスマホを確認する。そこには、とある路地裏の道の位置情報。

差出人は——緑谷出久。

…まずい。

「つすみません！ナガンさん！俺、行かなきゃ行けないところがありました！」

「な、おい!!」

「すみません！ただのパトロールです！だけど——なんか、不穏な感じがするんです！」

ナガンさんの制止を振り切るようにして。

俺はその場所目指して駆け出していた。

「間に合ってくれよ——！」

☆☆

「サテサテ、ドンな感じになるのカナア？」

『『ヒーロー殺し』、ステインが緑谷出久——デクと対峙し戦闘になった頃。』

ヴィラはその様子をじーっとビルの上から見ていた。

ヴィラは本能的な直感で、ステインについて行けば恐らくはヒロフミと会えるだろうと確信していた。

しかし。

待てども目的のヒロフミはやって来ない。

轟が到着し、二対一の構図になったとき、ヴィラは飽きたように頬杖を付きため息をこぼしていた。

——その時。

「——よう。そんなところで何やってるんだ？」

ヴィラの後ろで声がした。

その声は最も聞きたかった声で、そして最も傍で聞いていた声だった。

ヴィラはゆっくりとその声の方へと向く。

そこには——。

「アア、ヒロフミ……会いたかつタヨ……」

「俺の名を……そうか。お前が」

——ヴィラン 敵の悪魔だな。

そこにはデクを救げるためにビルからビルを飛び駆けて来ていたスーツに黒いロングコートのヒーロー——ソロモンが立っていた。

滲み出る殺気を隠すこともせず、ソロモンは言い放った。

ゾクゾクつと。その殺気に当てられたヴィラは自分を抱きしめながら恍惚の笑みを浮かべる。

「ソウ、もつとワタシの名前を呼ンデ……」

まるで小さい子どもが親におもちゃをねだるように、ヴィラは言う。

蝨の悪魔をソロモンの背から展開しながら。

ヴィラは手を大きく広げ、攻撃を待っているかのような態度を取る。

「………どういふつもりだ？」

「ドウモこうも、ワタシはただ——キミと愛殺し合いしたいだけ」

その言葉にソロモンは不快げに顔を歪ませる。

これ以上、ソロモンにはヴィラと話すものもない。
腕を回しウォーミングアップをしてから一步進み出した。

「ここで——潰す」

「オイデ——ヒロフミ」

あつという間に距離を詰め、蛸の悪魔の触手による腹部への殴打。

しかし——当たらないし当てられない。

まるでそこになにか別の大きな流れがあるかのように、するりと蛸の悪魔の触手は流される。

ソロモンは思わず舌打ちをする。

別にヴィラの能力を忘れていた訳では無い。言わばこれは先制のジャブ。様子見だったのだが——

「(これが”確率操作”!!実物を見たらこんなにも…厄介だとは!)」

三発ほど、蛸の悪魔で殴るが結果は同じ。

これは不利だと判断し、攻め手を変えようと距離を取ろうとした。

後方へと飛び蛸の悪魔を仕舞う。

「モウ終わり? ナラ——コンドはワタシカラ」

「っ——!」

三日月の様に口を歪め、距離を取ったソロモンに至近距離まで迫る。

「かはっ!」

抉られたかと錯覚するほどの痛みが、ソロモンを襲う。

ヴィラの拳がソロモンの腹部にめり込んでいた。

——痛い。

後ろへ吹き飛ばされ、声にならない悲鳴をあげながら転がる。

ヴィラは止まらない。

転がり、柵に体を叩きつけたソロモンに追い打ちをかけるべく迫

り、そして——蹴る。

間一髪で。その蹴りを体を振り回避した。

ヴィラの足は鉄で出来ていた柵を破壊し、穴を開けていた。フラフラと立ち上がりながら、血の滲む口を拭う。

——痛い。

ソロモンの肋骨が既に数本折れており突き刺す様な痛みが胸にジンジンと響く。

痛みに耐えながら、ヴィラを見る。

ヴィラは愉悦の笑みを浮かべてニヤニヤと、心底愉しそうに笑っていた。

ソロモンの胸に焦りと苛立ちが沸き起こる。

このままでは——負ける。

そう確信したソロモンだったが何弱気なことを考えているんだ、と。一度足を叩き、心を落ち着かせようとする。

「イタそうダネー？」

「子猫が撫でてるみたいだったぜ」

辛うじて。ヴィラの挑発に意地を張って返す。

まだだ。まだ、行ける。

心を奮い立たせて、また、ヴィラ目掛けて走り出す。

「ナンドやっても無駄ナノニ」

現実是非情だった。

蛇の悪魔を使い飲み込もうとしても。

幽霊の悪魔で掴もうとしても。

石の悪魔で石化させようとしても。

狐の悪魔で飲み込もうとしても。

刀サムライソードの悪魔で切り刻もうとしても。

当たらない。掠りもしない。

寧ろ、当たらない度に、カウンターを食らいソロモンの傷は増えていった。

「…………モウ、死んじやウヨ?」

　　ヴィラがそう言う通り、ソロモンはもう立つのもやっとなぐらいの状態、その顔も、苦しげに歪んでいた。

　　ヴィラとしてはここで自分がソロモンを殺してしまってもいいのだがこれではあまりにも——詰まらない。

　　失望を抱きながら止めを刺そうとした時。

　　不意に、ソロモンが右手に海水を収束させ始めた。

　　ヴィラはそのことを訝しんだものの、無駄だと思い、ソロモンに突進した。

「——サヨウナラ」

　　ヴィラは飛び上がり、項垂れているソロモンの頭に踵を落とそうとした。

「——綿津見^{ワダツミ}」

　　下から上へ。

　　まるで勝利を掴もうとするののように、ソロモンはヴィラへ振り上げた。

ぶつちぎりでイカれたヒーロー

☆☆

恐らく、ウイルスは攻撃が『当たる』と『当たらない』で確率をねじ曲げている。そしてこれまでの俺の攻撃回数的に9：1の割合だろう。

ウイルスの能力を聞いてそんな風に考察していた。

そしてそれはウイルスと対峙して確信に変わった。

血を多く流しすぎた。意識が朦朧とし体がフラフラしている。

歯を食いしばり、だけど顔は笑顔で。

クソ痛え。背中がジンジンと血が滲み出してきたり、骨が折れる感覚にも慣れてきた。ここまでするともうやばいな。

危機感と、焦燥感で汗を頬から垂れ流す。

痛みと苦しみでどうにかなりそうだ。

だけど――。

「綿津見」

こんなところで死ぬ訳にはいかねえんだよなあ……！

☆☆

ウイルスの踵落としがソロモンへと迫る。

――殺った！

頸部への必殺の一撃。これが当たればソロモンの命は無くなる

はず、だった。

「ッ!？」

瞬間。振り上げた足ごと、ソロモンが放った海の槍がウイルスを貫いた。

噴き出す鮮血。驚きから目を見開く。

だが、ここでウイルスは止まらない。

瞬時に足を再生させ距離を取る。

何故、何故当たった？当たらないはずなのに、当てられないはず

なのに――！

感情を隠そうともせず、ソロモンを見るヴィラ。

ヴィラが見たソロモンは先程と変わらずフラフラとしていた。

——しかし、その顔は狂気に満ちた——笑顔が浮かんでいた。

「——禍ワザワイの悪魔カツ!!」

「当たり。…そんで? お前は——こいつらから逃れられるのか?」

ソロモンの背後に浮かぶ無数の海槍。その全てがヴィラをロツクオンしていた。

「お前は——俺の攻撃が『当たる』と『当たらない』で確率をいじっていた、だろ? そしてその確率は9:1……ここで俺はお前を倒すために考えた。そりゃあ沢山考えたさ。——そこで二つ程思いついた。一つは、大量の側面からの一斉攻撃。必中状態にしちまえばいくら確率操作とはいえないつかは当たる」

「……ソレがどうしたって言うンダ。ベツ二面攻撃した所でワタシには効かナイヨ」

「ああそうだな。どれだけ数を用意しようとお前に届くのは9:1の1。お前なら難なく捌ける数だろう。だからこそその二つ目だ。——

これは自分でもどうかしてると思うよ——それは、お前の力を逆手に取る事。言い換えちまえば、リスク覚悟で文字通り当たるまで攻撃をし続けるって訳だ」

ふらり、ふらり、と。

血を流し、今にも倒れそうな雰囲気フキのソロモン。しかし、その顔は狂氣的なまでの笑みを浮かべていた。

悪魔である筈のヴィラでさえ、冷や汗をかく程にその姿はイカれていた。

「蝮の悪魔による先制攻撃で一発。その追撃の三発。蛇の悪魔、幽霊の悪魔、石の悪魔、狐の悪魔、刀の悪魔。どれも当たらなかつたが、それで良かった」

「ッ……!」

ヴィラの顔から余裕が消える。

拳を構え、ソロモンの隙を伺う。

「——お前を殺すための一撃を叩き込められるなら」

「——フヒッ」

思わず。笑いがこぼれてしまったヴィラ。

そのイカレ具合が見たかった。悪魔ですら恐れてしまうほどのぶつちぎりにイカれた——ヒロフミが見たかった。その視線を独り占めしたかった。そしてソレが今——叶っている。

これ程嬉しいことは無い。

「デモ——ザンネンながらワタシは殺せてないみタイヨ？」

「嘘つけ。体が震えてるぞ？」

「ムシヤブルイって奴ヨ」

「——じゃあこれから俺を思い出す度にそれは止まらなくなるだろうな」

言葉にせずともヴィラにはその言葉の次の意味が分かった。分かった上で——「ナマイキな」と一蹴した。

一陣の風が吹きぬけて。

ビルの屋上にて、ヴィラとソロモンはほぼ同時に動き出す。

ソロモンは大量の海槍をヴィラめがけて射出した。

ヴィラは確率の壁を突破して自身を貫かんとする海槍を叩き落とす。

その間も、ソロモンはヴィラによる反撃というリスクすら無視した突撃が敢行される。

落とす、弾く、躲す、殴る。

殴る、殴る、殴る、殴る。

攻撃する度にボロボロになるソロモン。しかしその行動はヴィラの体に徐々に増えていく小さくない怪我という形で功を奏する。

「アア……タマンナイツ!!!」

「そうかよーならもつと……楽しんでつてくれよなアっ!!」

二人は笑う。

痛みや、苦しみの痛みを感じさせない狂気の笑いが辺りに響いていた。

「はあ…はあ………。こ、れが最後…:か」

「ソウ…………ダネ…………コレで…決めヨウ」

二人は既に満身創痍。もはや攻撃を受けてないところはもう無いのでは無いかと思うくらいあちらこちらを負傷していた。

もはや両者とも限界。

力を振り絞った、この一撃が最後になるだろう。

ソロモンはそんなことを思っていた。

拳を握る。強く。強く。

敵を見据え、睨む。

笑顔も忘れずに。

後はもう——渾身の一撃を叩き込むだけ。

「…………行くぞ!!」

「——コイツ!!」

筋肉の悪魔によって増強されたソロモンの右拳が。

圧倒的な重みのあるヴィラの右拳が。

両者の顔に叩き込まれていた。

☆☆

吹き飛ばされる。

痛い。痛い。痛い。痛い。

血がもうこれまでに無い程流れてるしこれ…や…ば…い…………か…………も…………

ふと、視界の端に同じように俺の拳が叩き込まれ吹き飛ばされていたヴィラがゆっくりと、しかし確実に立ち上がった。

「嘘…………だろ…………?」

「…ソウトウ危なかったケド…ネ」

よく見れば。ヴィラはフラフラしており、相当ダメージを受けていると分かる。だが俺の負けという事実は変わらない。

…………畜生…………!

「タノシかった、ヨ。…………バイバイ」

ヴィラの足が俺の頭を振りぬこうとして——

「お前、私の、ソロモン^{ヒロフミ}に何してるんだ？」

怒れるヒーローが、弾丸と共にやってきた。

後味の悪い結末と病院

☆☆

飛び交う弾丸。逃げ回るヴィラ。

追尾機能があるナガンの弾丸は『当たらない』という確率を持つてしても、避けるのは難しい。

「ナニゲ、にー！天敵、カモネー！」

「うるせエ。いい加減当たれ」

「ソレは——出来ない相談、ダネ」

ヘラヘラと。笑いながら躲し、逃げ続けるヴィラ。

対してレディ・ナガンは無表情に、しかし激しい怒りを湛えてヴィラを追い回していた。

何度目かも分からない射撃の後で。

無数の弾丸を躲しながら突如として、影に消えたヴィラ。

「っ!?どこに消えた!!」

焦りが声に滲むナガン。

「っ、ソロモン！大丈夫？……酷い怪我だ……」

「——くそ」

スコープオンの悲鳴のような悲痛な声で振り返るナガン。そこではぐつたりと意識を失ったソロモンがおり、とてもこの状況で追撃は出来ない。

『ジャマされちゃったカラ逃げるネー！ヒロフミにヨロシク！』

辺りにヴィラの声が響く。

みすみす逃してしまったことと、徒にソロモン——ヒロフミに酷い目に合わせた奴を捉えられなかった悔しさで顔を歪ませる。

しかし、それよりも今は自分にやることがある。

「救急車を呼んで！病院へ急ぐぞ！」

☆☆

さて、あれから丸一日過ぎた。俺はどうやらとんでもないくらいに怪我をしていたらしく、集中治療室に入れられた。

——しかし。

「いや、君のあの大量にあった傷跡ね、一夜にして何故か全部消えてしまったんだよ」

と、お医者さんが心底不思議そうに言っていた。……その後、見舞いに来たナガンさんが深夜、マキマ姉が来ていたらしく俺の怪我を見ると

『ふふ……ヴィラン敵の悪魔……私の弟に手を出したこと……後悔させよう……』

つてハイライトの無い目で言っていたらしい。

「怖いな」なんてナガンさんも言っていたけど……いやあなたも大概だからね？公安時代のあの昏い目とは別ベクトルで恐ろしい目をしてるから。

ま、まあ俺の身の回りの事についてはここまでにしておいて、他のA組——つまりはステインと戦った飯田、轟、デク君についてだけど——まあ、ここは原作通りだったらしく、スマホで動画配信アプリを開いて見ればステインの思想だったりとかの動画が沢山回ってきていた。

俺も見たけど……まあ感想としては『拗らせてんな』くらいしか出てこなかった。

それは良いとして、もう一つ、世間を賑わすニュースがあるのだ。それが——

『突如として、タルタロスに収監されていた囚人達が体の一部分の骨が折れるなどの事件が起こっており警察は未知の個性による襲撃の可能性があるとみて調査を進めています』

……心当たりがありすぎる。

一体どこの支配の悪魔の仕業なんだろうか……。

そうそう、俺とヴィラとの戦いの件だけどそれは偶然、ヴィラと出会ってしまった俺が自衛のために戦ったということになった。

ヴィラには逃げられた。……くそ。ほんと、上手くいかねえな。

ステインの件は仕方ないにしても俺は完全な私怨だ。法で裁かれてしまう。それを回避するためにマキマ姉が色々手を回してくれ

たみたいだ。感謝感謝。

スコープピオンさんは公安の事情とかも知っているみたいで黙ってくれる方針らしい。

ただ、その際にちやんと説教を受けた。

いい人だ。きつと立派なヒーローになれるだろう。

今は怪我は治ったけど様子見のために入院中だ。ただ、病院がデク君と同じだったらしく廊下でばったり出会った時はそれはそれは驚いたものだ。

まあ包帯でぐるぐる巻きにされていたし車椅子だったから驚くのも無理は無い。

ただ俺を見た三人がなんか表情曇らせていたのはなんで……？

☆☆

その日、ヒロフミに出会ったのは偶然であった。

ヒーロー殺し、ステインを倒し同じ病室にいた緑谷は麗日の電話を切り、未だ心臓鳴り止まないまま、病室へと戻ろうとした時だった。

「あれ？デクじゃん。デクもこの病院だったんだ」

「……………ヒロフミ、君？」

後ろから聞こえて来たのは聞きなれた声。——クラスの中でも良く話すヒロフミの声だ。すぐに緑谷は思い至り振り返った。

そこで緑谷は自分の目を疑った。

そこには、大量の包帯に巻かれ車椅子に乗ったヒロフミが居た。

「いやー凄い偶然だなー！あ、また個性暴発させたんだろ？全くデクは——」

相も変わらず、よく話す個性について、笑いながら——なんでもないように——話すヒロフミ。

いつもなら、話に乗るだろうが今回は違う。

その様子はどこか痛々しく見えた。

まるで心配をかけさせまいとしているような——。

「……………何があったの？」

「あー……………やっぱ気になっちゃう？」

「いや、嫌なら言わなくてもいいんだけど——うん。ちょっと気になつて」

歯切れ悪そうに、慮るようにヒロフミを見る緑谷。

ヒロフミは頭を掻きながら話し始めた。

「まー…なんだ。俺も実は昨日、保須市に来ててさ。それで、デクの連絡受けて急いで行こうとしたんだけど……そこにヴィラが居てな……戦闘になつて、このザマだ」

ただ、強かった。

と語るヒロフミ。

それを聞いた緑谷は思わず、顔を曇らせた。

ステインにいいようにやられていた飯田やまだ自分の個性を扱いきれていない自分も酷い怪我だった。

しかし。

それ以上にヒロフミの怪我は痛々しく、思わず目を逸らしたくなるようなものだった。

「まあ、こんな暗い話はやめてさ！デクの病室行っていい？俺話し相手いなくて暇で暇で…」

「う、うん！沢山、色んなこと話そうね!!」

「お、おう……びっくりした……」

辛く、痛いはずだろうにそれを感じさせないヒロフミに尊敬の念を抱き、「僕が押すよ」と行ってヒロフミの車椅子を押しながら二人は病室へと向かうのだった。

病室にて。

☆☆

職場体験は大変だけど、自分にとっては実りが多い——と職場体験先の強面のヒーローの後ろを歩きながら、イヤホンジャック、もとい耳郎響香は思っていた。

「今日はもうこの辺にしておこう」

「はいー」

パトロールも無事に終え、事務所に戻る。

日も落ちきり、辺りは夜になっていた。

「ん？緑谷からの……メール？位置情報だけ……？」

普段の服装に着替え携帯を確認すると緑谷からの一斉送信で送られた位置情報だけを送る文も何も無い奇妙なメール。

耳郎は首を傾げ、『どうしたの？』とだけメールを打ち、返信する。

——ふと、ヒロフミに電話を掛けたくなった。

別に構って欲しいわけではないが、何故か猛烈にヒロフミの声が聞きたくなった。

ヒロフミのアカウントを探し、見つけた。

ヒロフミのアイコンは耳郎家と旅行に行った時の家族写真。耳郎は普段そんなに写真に写る方ではないものの、この写真はせっかくだからと、一緒に撮った思い出の一枚だ。

響香の隣でにこやかに笑うヒロフミ。後ろでは大きくピースをしている両親の姿。

まだ、こんな古い写真を大事にアイコンにしているんだ、と微笑みながら電話を掛けようとしたその時。

——父親の番号だ。

「……どうしたの？」

割り込まれたような、邪魔されたような気がしてムっ、となりながら電話が出る。

しかし。それはすぐに、焦りへと変わった。

『どうしたもこうしたもない！ヒロフミ君が!!』

「……え？ど、どうしたの？ヒロフミになにかあったの？」

思わず立ち上がり、声も大きくなる。

『——意識不明の重体なんだ!!』

『俺たちはいま沖繩にいる上に今から飛行機に乗ってもそっちの病院には遅くなる！響香！すまないが先に行ってくれ！大丈夫、職場体験先のヒーローには父さんから先に言っておくから!』

信じたくなかった。でも、普段聞いた事のない程の父親の必死な声が現実だと訴えかけてきているようで——。

『頼む……ヒロフミ君の元に居てやってくれ……響香!!』

「……分かつ、てるっ……!」

まだ、現実を受け止めきれず居ない自分が居る。

でも。でも!

行かなくてはならない。

最低限の荷物だけ持って、耳郎は走りだした。

ヒロフミのいる、病院へ。

☆☆

ピツ、ピツ、ピツ、と心電図を表示するモニターの音が響く病室に、ヒロフミは眠っていた。

隣にはそんなヒロフミの頭を撫でるレディ・ナガンと、やり切れない表情を浮かべるスコーピオン。

「現段階で出来る事は全てやりました。しかし……」

「……怪我が多すぎると?」

「ええ。その通りです……。私も数十年医者をやっていますがここまでのは中々無いですよ……」

渋い顔をする医者。

無理もない。現在のヒロフミの容態はもはや怪我をしている場所が無いのではないのかと言うくらいに酷いもので、命があるのが奇跡だという状況だった。

「恐らく彼は頑張つて戦っていたのでしよう。足の数箇所が酷く傷つ

いており、骨折した状態で長い間戦っていたことが分かります。……
考えたくはないですが後遺症の可能性も……」

「……………そう、ですか」

その言葉に声が暗くなるナガン。

その顔も暗く、もっと早く駆けつけてあげられなかった自分と、
ここまで痛めつけたヴィラへの怒りを募らせていた。

そんな時。

病室のドアが勢いよく開けられた。

そこに居たのは——耳郎だった。

「君は……………」

「ヒロフミは!?!」

「病室だから静かに。君がヒロフミ君の関係者かな?彼は…あまり…
良くない」

肩を上下させ、汗もかいている事から走ってきた事が分かる。

医者はとりあえず耳郎に落ち着くように言い、椅子を出してヒロ
フミの容態を伝えた。

それを聞いた耳郎は顔を青白くして、思わずヒロフミの顔を見
た。

その顔は、いつも見るヒロフミの寝顔とは違うように見え——
どこか消えそうな、儂い感じがした。

「そんな——!後遺症は……………どう、なるんですか?」

先程、ドアから入ってきた時の声よりも静かに、しかし、必死な
声で医者問いかける。

そんな耳郎の様子に医者は澁面になりながら「酷な話になるかも
しれないけど」と前置きをしてから

「……………また色々と検査してみないとなんとも言えないけど…足が…動
かなくなる可能性が…あるね」

「……………ただ、これは確定じゃない。あくまでも可能性が高いってだけ
だよ。まだ、希望はある。……………そろそろ次にも行かなくちゃ行けない
からこの部屋から出るけど、何かあったらそのナースコールを押して
ね」

急に足場が無くなり、真つ暗な闇に突き落とされたような錯覚を、医者の居なくなつた病室でナガン、スコープオン、耳郎は感じた。

「なんで…こんな…こんな酷い目に…」

「…私の責任だ。私がつ…！」

「……………何が、あつたんですか？」

耳郎が、それまでずっと辛そうな顔をしていたナガンにヒロフミに何があつたのかを聞いた。

「……………保須市をパトロール中に、脳無に会つたんだ。脳無自体は倒したものの、その後ヒロフミが携帯を見たかと思うと急いでそっちに向かつて…当然、私たちも急いで追おうとしたんだが、そこで新たな脳無がやってきて戦闘が起こつたんだ……………」

ナガンの状況を説明する声は悲痛なもので、失つた者特有の、掠れたようなそれで、話す。

説明してる間にもナガンは後悔で頭が一杯になる。

あそこで邪魔が入つてこなければ。あの脳無をすぐに倒せていたら。あの場で止められていたら。そんな”もしも”がナガンの脳裏にこびりついて離れない。

だけど、そのもしもは来ない。

現実として、ベッドに横たわるヒロフミが直にそれを知らしめていた。

「君は…ヒロフミのクラスメイトだと聞いている。…知っているだろう？あの黒い脳無を…」

耳郎にも思い至る節があり、息を呑む。

実際に、その脳無を直接見た事がある為、その規格外の強さを知っている。

「……………何とか現地のヒーローと脳無を倒し、ヒロフミの元へと向かつた。ヒロフミは『ただのパトロールだ。だけど、少し不穏だから』と言っていたが…それが実際に当たっていた。そして、そこで見たのが……………」

ボロボロになって死にかけていたヒロフミの姿だ」

思わず。

耳郎は、声を荒らげそうになってしまった。

しかし、ナガンのその様子を見て、言葉が引っ込んだ。

昏い、昏い、目。

そしてそこからこぼれる涙。

それを見た耳郎はナガンもまた自分と同じくらいに辛いのだと悟った。

「……なんで……ヒロフミが……こんな目に会わなきゃ……いけないの……？」

耳郎の目からこぼれ落ちる涙が、ヒロフミの寝むるベッドを濡らした。

☆☆

「——おや、皆揃ってるようだね。…そちらの女の子は……ああ、ヒロフミのクラスメイトの子か。……眠っているようだから……ええとシーツを……」

静まり返った病室に響く声。ナガンにとってはよく知った声で、ドアの方を見ると、マキマが表情の読めない顔で立っていた。

「……その声は……マキマか……？」

「こんばんは。ヒロフミが大怪我したっていうから大急ぎで北海道から来ちゃった。…身体の状態は……うん。大分マズそうだね……」

「……マズい所の話じゃないぞ」

時刻は深夜をすぎ、病室にいたスコープイオンは飲み物を買いに外に出ていた。

疲労からか、泣いていた耳郎は眠ってしまっており、マキマがその肩に余ったシーツをかけていた。

「ふふ……許さないよ敵の悪魔め。私の最愛の弟に手を出しておいてただで済むと思わないで……」

淀んだ瞳で、ヒロフミの包帯を撫でてつぶやくマキマ。

「しかし何故ここに……？本来なら今はタルタロスに視察に行ってた筈だろ？」

「さつきも言ったけど、ヒロフミが大怪我したと聞いてね。君なら分

かると思うけど、ヒロフミの事に関してのことならさ、何を優先してでも行かなきゃじゃない？」

「…それに関しちゃう同感だが……」

「それに。ヒロフミの怪我なら私の力で治せるしね」

「……………本当か!？」

寝ている耳郎を起こさないように、驚くナガン。

「本当だよ。タルタロスに行ったのは別の為だけど……ヒロフミのためにならないかな」

最後の部分だけナガンには聞こえないように呟いてからマキマは、自身の能力で出した鎖をヒロフミに繋いだ。

すると、見るに耐えない生傷やその跡がまるでそこになかったかのように、消え去った。

「な、何を…!？」

「これで大丈夫かな。……はあ。もっとヒロフミの顔を見たかったのだけど……まだ仕事は残ってるし……ここで帰るね。……はあ」

ナガンの驚愕をスルーして一度だけヒロフミの頭を撫でると、そのまま出ていった。

名残惜しそうに、最後までヒロフミを心配そうにチラチラ見ながら。

☆☆

夢を見ていた。

真っ黒な空間と真っ白な空間があって、ウチ——耳郎響香は白い空間の方に立っていて、ヒロフミだけは黒い空間を見て、私に背を向けていた。

黒い空間は何か嫌な感じがして、「こっちにきなよ」ってヒロフミに言うけれど、ヒロフミはこっちを見向きもせずになんと黒い空間を

見ていた。

なんで、なんでヒロフミはウチを振り返ってくれないの？

なんで、そっちに行こうとするの？

ウチを——置いてくの？

そんなふうには声をかけてもヒロフミは最初から聞こえてないよ
うな感じで、ずっと、黒い空間にいる。

そして、ウチのいる白い空間が徐々に黒い空間から離れた。
ウチは叫んだ。

こっちに来て。振り返って。手を取って。

なんだか——黒い空間は“死”という概念そのものがある気
がして。

そんな嫌な空間にヒロフミはいて欲しくなくなつて。

懸命に、手を伸ばした。

けれど、届かない。

離れてゆく。

最後にだけ、顔だけ振り返って、ウチにいつものようにフ、と笑
いかけてから黒い空間に歩き出した。

「嫌だ。嫌だ。ヒロフミ……こっちに！早く!!間に合う……から!!」

このままじゃ、ヒロフミが死ぬ。直感的にそんなことを思った。

……ヒロフミが、死ぬ？

……嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

いやだいやだいやだいやだいやだいやだ——「何が嫌なんだよ」

……あ、れ？

なんか眩しい——。

☆☆

「寝言でブツブツと…何が嫌なんだよ」

ゴキブリとかか？と呆れたように背中を叩くヒロフミ。

「……………ウチ寝て……………つてえ？……………ヒロ……………フミ……………」

「おう。おはよう響香」

「ヒロフミっ!!」

「うおあっ!!」

思わず、抱きつく耳郎。

強く、強く、しかし優しく。夢でないことを確認しながら。

「——バカっ」

目に涙をためて、ヒロフミの胸で言葉を吐いた。

ヒロフミはその言葉を聞き、微笑んでから頭を撫でて、

「ごめん」

と言った。

しかし、その後すぐに。

「抱きつくのは良いんだけどさ。お医者さんとかもいるし人目もあるから……………その……………」

「ふあっ！あ、ああああ……………!!」

医者と看護師は生暖かい目でその様子をみていた。

視線に気付いた耳郎は顔をりんごのように真っ赤にさせて大急ぎで顔を離した。

「私たちはいいから、もう少し抱きしめていても……………」

「ハハ、それじゃあ先生達が診察出来ないでしょうから」

パクパクと、口を開けたり閉じたりさせてから

「ば、馬鹿!!」

という声が病室に大きく響いた。

しかし、耳郎の表情はもう、思いつめたような青白い顔ではなく、心の底から安心したような、嬉しそうな、そんな表情をしていた。

閑話編（リクエストあり）
暗躍。

☆☆

「……………黒魔……………黒魔……………そういえば名前を聞いた事があるなあ」

「なんじやAFO。あのUSJで脳無を退けたという少年に興味でもあるのか？」

「無い、と言えば嘘になるね。なんせあの脳無を倒した子どもだ。はは、将来有望じゃあないか」

「…他に何か彼奴に何かあるのかの？」

含みのある言い方に疑問を持った白衣を着た老齡の男はそうAFOに問いかけた。

「まあね。彼の祖父が昔僕のシンパだったことを思い出してさ。昔の事だけど、その祖父に

——個性を与えた事があるんだよね」

「ほう……………なんとも数奇な縁じゃな」

興味深げに顎を触りながら頷く白衣の男。

所は薄暗い研究施設のような場所で、大量の管に所狭しと部屋を埋めつくし、その管の中心にゆったりと座る男——AFOがそこにいた。

「とはいえ、その繋がりもその祖父の死によって途絶えちゃったけどね」

なんでもないように。虫の命などどうでも良いというようにAFOは嘲笑う。

「にしても……………気になるな。博士、黒魔ヒロフミ、という少年についても調べておいてくれないか？」

「ああ、シンパだった祖父の孫か。あい分かった」

「情報次第では……………こちらに引き込みたいね」

☆☆

「——うん、うん。わかった。ヒロフミは無事なんだな了解。こっちは？こっちは…まあ順調だな」

髪を後ろにまとめ、紺色のスーツに身につけた青年——黒魔アキが料理をしながら電話に頷く。

「肉じゃ肉じゃ！肉だけを入れよ！チョンマゲ！」

「な、テメーパワー！それじゃ野菜農家の人に失礼だろうが！ちゃんと野菜も食え！」

「わふっ！わふっ！」

アキは大きいため息をつきながらギャーギャー騒ぐ二人と一匹の様子をチラリと見てから諦めたように電話と料理に意識を向ける。

「あーと、それで何の話だっけ……そうそう、彼女の話ね。一応ヒロフミの指示通りになんだかんだ理由をつけて敵^{サイラン}連合に行くようにしたぞ。ヒロフミの言う原作通りって奴だな」

「すんすん……この匂いは……なんじゃ？」

「は？オマエ知らねーのかよ！カレーだよカレー！」

「は？知っておったが？ワシはカレーを作らせたら宇宙一なんじゃが？」

「………わふう……？」

「………さつき知らねえって言ってたじゃねえか……」

カレーのスパイシーな匂いが三人の住む部屋に充満し、空腹を刺激する。

一度取り皿に少しだけカレーを注ぎ、十分に冷ましてから味を確認する。

「良し。………んで？そっちはタルタロスの掌握完了と……。順調だな。それじゃ飯も出来た事だし切るぞ。——マキマ」

炊いた米を皿によそい、カレーをその上からかける。

皿は大きいのが三枚と、ポチタ用に小さい皿を一枚。

出来たカレーを一つずつパワーとデンジに渡してリビングの机に向かう。

床に座り、用意しておいたスプーンを持ち——

「いただきます」

手を合わせてカレーをすくい、口に含む。

いつも通り、美味しく出来た……はずなのだが。

「ウワツ！野菜が入っておる！ポイじゃポイツ！」

「あ！テメー！！野菜投げんな！！」

「わふ！！」

普段とは違う賑やかすぎる——いやもはやこれは騒音だろう。

段々と、青筋がアキの額に浮かぶ。

今頃になって、引き取るだなんて言ったことを後悔しだったが、もう遅い。

苛立ちから、机をバン！と叩きながら二人に向かう。

「うるせえ！飯くらい黙って食え！この——悪魔どもが！！」

「てめえもだろーが！」

☆☆

街の中華店に二人の男が、座ってラーメンを食べていた。

一人は、鷹のような翼を持ち、一人はカジユアルな格好の男が並んで座っていた。

「それで？ヒロフミの容態は……」

「うん、無事だ」

「はあああ……そりや良かった良くないぜ！」

ちぐはぐな返事をする男——トウワイスは心底安堵したような表情になる。

少し聞くと違和感を覚える口調だが、隣に座る鷹の翼を持つ男——ホークスはなんでもないように話を続ける。

「怪我が一夜にして治る……不思議なこともあるもんだね」

「なににせよ！俺の友達が友達じゃねえよが無事でよかった……良くない」

「……だね」

スープを飲み干し、机に置いてあった爪楊枝で歯に挟まったものを取る間に、トウワイスはホークスにとある報告をした。

「動き、あつたぜねえよ」

「…ということは……」

「ああ。敵サイラン連合とやらが接触してきたしてねえって…まあ正確には違法なヒーロー道具を流すブローカーからだが…」

その説明を聞き、少しの間黙り込んでから、

「分かった。じゃあ手筈通りに」

「ああ。」

—— 潜入任務、だな」

そのまま、会計を済ませると二人は背を向けあいホークスは空へと、トウワイスはその足で路地裏へと入っていった。

ヒロフミ・ぎ・ろつく!

☆☆

いっだったか、L^ロOL^ルでフレンド交換したTOMURAってやつと協力しながら試合をしている。

やっぱ相手方から見たらこいつ厄介プレイばっかだけど味方にいるとやりやすいな。

おかげで裏取りが捗るわー。

「よっし勝った……ん?」

ノックの音。

「ヒロフミ?ちよつといい?」

響香か…。

一体なんの用だろうか…?

「どうしたー?」

「……その……買い物、行かない?」

ふむ……買い物か…。

特に何かある訳でも無いし……しゃーない付き合いますか。

「OKー。……そういや二人だけ?おじさんとおばさんは?」

「あー……二人はちよつと用事があるみたいで……その……」

「ほーん……分かった。じゃあ着替えるわ」

なんか歯切れが悪いな。まあ鈍感系主人公じゃないんでね。さすがに察しますよ。ええ、はい。

これって、言葉にしないだけでデートですよね?

なんてこったLOLやってる場合じゃねえ。

急いで外に着ていく服を引っ張り出し、着替えていく。

それと、イヤリングを付けて髪も整えてと。

女の子とデートなんだから身だしなみには気をつけて無いとな。

……前世ではそんな経験なんてついぞ無かったな。

はー自分で言ってる悲しくなるな。

さて、色々と準備は終わったし外に出るか。

「お待たせ。んで…何買うの?」

家の外の壁にもたれ掛かるようにして、響香は待っていた。

響香の格好はいつものロック風ってやつかな?

かっこいい系で良く似合ってると思う。

「ギターストラップと弦、それと…ピックかな」

なるほどね。ギター小物の買い出しだったか。

彼女の特技に全楽器が弾けるって所がある。

その買い物に俺が行くってことね。

完全な余談だけど俺もベースは弾けるようになった。響香は教えるのが上手いから割と早いペースで色々覚えられた。

「となると…隣町のショッピングモールが一番近いか」

「だね。電車で行こっか」

いつも行ってる所だ。道は完璧に覚えてる。

にしても意外だな…。響香が俺を誘って出かけるなんて。そ

もそも二人きりってのも。

こういうのは恥ずかしかつてあんまり自分から行くって感じじゃないだろう。

電車に乗る。

今の時間帯は正午過ぎなだけあって、人は結構多い。

満員、とは言わないまでも余り空間は無さそうだ。

幸いにも隣町へは三駅で、時間にして15分くらいだからこの圧迫感がそんなに長引くことが無いってくらいか。

『次は——駅——駅——』

おっと?予想よりも…この電車に乗ろうとしてくる乗客多くな
いか?まだ駅があるぞ?」

「ちよつと失礼」

「…へ?」

乗ってきた乗客に流されるようにして、響香を扉側に誘導して俺
がその前に守るように立つ。

いわゆる壁ドン、っていう状態だけど…まあ仕方ないだろ。この
満員電車じゃ何があるかわかんないからな。

「すまん、こうするしかなかったわ」

「……………」

あれ？反応がない？ただの屍のようだ？

「ほんと……………そういうとこ……………」

ボソリと響香が呟いた。

しかし、その呟きは俺の耳には届くことなく、ただ首を傾げるだけだった。

『次はく——駅——駅く』

「お、着いたな」

「……………降りよう」

響香が背にしていた方向の扉が開く。さーとつとと出よう。満員電車とはおさらばだ。

そしてそのまま一緒に俺たちはショッピングモールへと向かった。

「いやー買った買った。買う予定なかったのにまんまと乗せられてしまったわ」

「あの店員さん話が上手だったからつい買っちゃうよね」

「あれはもはや才能だな」

いやほんと凄かったんだよなあ…。

購買意欲が服を着たような人だった。きっとビッグになるぞ。

さて次はどこ行こうか…。

——ぐう

小さい、腹の鳴る音。

俺では無い。しかし、聞こえるってことは近くに居るって訳で。

会話をそのまま何事もなかったかのように続けつつ、一瞬だけ横を見る。

やっぱり。

恥ずかしかったのか頬を少しだけ赤くさせながら同じように何事も無いように話す響香。

……………ふむ。逆に話の話題をガラリと変えてさっきの空腹の音

をからかつて見るのも楽しいだろうな。

…普通に可哀想だしやめとくか。

「そういやさ、このショッピングモールで有名なイタリアンがあるらしくて、テレビとかでも『行列の出来る店』として紹介されてたんだよな。」

ちやうど俺腹減ってきたし行きかない？」

「……そうだね。ウチも丁度お腹減ってきたし」

そうしよう。と頷いてからその件の店へと入る。

俺はカルボナーラとピザ。響香はナポリタンを頼んだ。

ピザは結構大きかったが一緒に食べる分には丁度良くてとても美味しかった。

カルボナーラも濃厚なんだが飽きの来ない味で行列が出来るのも納得できる。

「ふいー…美味しかった」

「うん。まさかここまでとは…」

「これは並びたくなる美味さだったな」

響香にも好評だったようでナプキンで口を拭きつつ満足そうに食後のコーヒーを飲んでいた。

さて…お会計は…お、結構安い。コスパもいいし。これはリピート確定だな。

「ちよつと…お手洗い行ってきていい？」

「はい」

響香が席を立つ。

トイレに入って行ったのを確認してしてから店員さんを呼ぶためのボタンを推す。

これってつい「越○製菓ー」って言いながら押したくなるよな。

「お呼びでしょうか？」

「会計お願いしても？あ、電子決済で」

「かしこまりました。——彼女さんですか？」

「はは、いや違いますよ。…まあ妹みたいなもんです」

「…そうは言っても相手方はそういう風には見てないのかも知れませ

んよっ。」

と、その女性店員がふわりと笑いながらバーコードを読み取る機械を差し出してくる。

俺は「そういうもんですかね」と言いながらスマホで読み取ってもらってから決済の確認をすると丁度響香が帰ってきた。

「あ、払っといってくれたんだ。ありがと。帰ったらウチの分だけお金返すから……」

「いや、いいよ。折角のデー……じゃなくてあー……お出かけだし、ここは俺の奢りつてことで」

「(こいつらこれで付き合ってないとか嘘だろ)ふふ、優しい方ですね」
なんか目の前の前の女性店員さんから変な視線を感じた気がする

けど……気のせいかな。
「でも……」

「じゃあさ。次出掛ける時は俺の行きたい所に行こうぜ」

「……本当に？本当にそれだけで……いいの？」

「おう。響香と一緒に来てくれるのが一番のお返しだ」

「っ……………」

「(「はよ付き合えや!!」)」

あれ？視線が俺らに一気に集まってる気が……。

まあそらそうか。俺ってばイケメンだからな。

とりあえず。ここで突っ立っているのもなんだし帰るか。

響香の手を引くようにして俺たちはショッピングモールを後にした。

☆☆

夜。

ベッドに寝転び、今日あったことを思い出す。

『——響香と一緒に来てくれるのが一番のお返しだ』
「~~~~~!!!」

思わず、ヒロフミの言った言葉を思い出してしまいゴロゴロと悶えるようにベッドを転がる響香。

「っはー……………ほんと……………人の気も……………知らないで」

恥ずかしい。顔が赤くなる。

何故か口元がニヤけて、変な笑い声が出そうになる。

このままじゃ眠れない。

そう考えた響香は一人、ギターを弾いて心を落ち着かせようとベッドから離れた。

「おはよう響香…っておいおいすごい限だな…いつ寝た？」

「分からない…けど…あんたのせい…だから…」

「理不尽く〜」

林間学校編 救助レース

☆☆

さて、職場体験も無事……では無いけど終わり、学生の本分でもある勉強の日々が帰ってきた。

職場体験の時はなんか常に体を動かしていた気がするからこうしてじっと勉強していると日常に戻った感じがして、なんか良いな。俺のヴィラとの遭遇は不運な事故として報じられたらしく、しばらく心配する声のLINEが多かった。

意外だったのが爆豪君からも同じLINEが来てたことだな。……まあ内容はプライド丸出しの俺、負けない宣言だったけど。

まあ彼らしいと言えば彼らしいな。

「ほんとに怪我が無くなっちゃったのか？」

「そうなんだよ。不思議なことにな」

「奇跡があるもんだなあー」

登校中、上鳴と会ったので一緒に並んで歩く。

怪我については……まあうん。

マキマ姉の残機が増えた、とだけ言っところかな。

ぶっちゃけタルタロスの件は保健みたいなものだ。既に俺というバタフライエフェクトが発生している以上、ストーリーがどう転ぶか全くわからん。もしかしたら原作より平和になるかもしれないし、はたまた過酷になるかもしれない。

この辺のバランスがほんとに大変だ。

——もうすぐ学校に着く。人と話しながら何かを考える、やってみたら結構やれるもんだな。

今日は確か……ヒーロー基礎学があるんだっけ。

☆☆

——運動場γ。

ここは複雑に入り組んだ迷路のような細道が続く密集工業地帯。えらく金をかけてんなー。

「——私がどこかで救難信号を出したら街外から一斉スタート！誰が一番私を助けに来てくれるかの競走だ!!」

オールマイトが今回のヒーロー基礎学についての説明をした。俺だったら…蛸の悪魔か飛蝗の悪魔で上空を飛んで行くかな。

「では…緑谷少年！尾白少年！飯田少年！芦戸少女！瀬呂少年！黒魔少年は位置についてくれ！」

…あれ？俺も行くの？まあいいけど…。

じゃあ…飛蝗の悪魔、行くよ。

——御意。

しやがれた声が俺の耳元で囁くように聞こえる。なんだか知らんけど禍の悪魔曰くレベルアップしたらしい。

四足歩行と二足歩行が切り替えて使えるようになったのと、フォームがだいぶ人間っぽくなった。それと前足が剣みたいになっており、かまいたちのように切り刻むこともできるようになったとの事。いや〜強くなったのは嬉しいね。

切れる手札は多い方が良い。

この世界のラスボスに対抗するためにな。

「比較的機動力が高い組が割り振られたな」

「強いて言うなら緑谷さんが若干不利かしら……」

下馬評は大本命瀬呂、飯田。本命に芦戸に俺と尾白。注目、というかよく分かかってない梓でデクくんか。

この段階じゃ厳しいだろうね。でも……

『START!!』

合図と同時に飛蝗の悪魔にまたがった俺の隣を一陣の風となつて駆け抜だしたデク君がいた。

「やっぱすげーや」

——負けてられませんな。主殿。

「フ、そうだな」

うちの《騎士》だって速さなら負けてないぜ？

☆☆

いやあ…ほんとに瀬呂君は強敵でしたね……。

救助訓練レースのゴール前で肩で息をしながら倒れ込む俺以外の競技者を見ながらそんなことを思った。

結果？一位だよ。でも……映像判定しないと分からなかったくらい僅差だったから悔れないねえ。

デク君に関しては……まあうん。ドンマイ。

冷静だったらもしくはって所だったな。

ただ、伸び代自体はめちやくちやある。さすがはジャンプの主人公。さす主。

オールマイトの総評も終わり、コスチュームを着替えるために男子更衣室に入っていた。

いつも通り、ただ着替えながら授業の反省の時間……だったのだが。

我らが峰田大魔神がその異常とも言える嗅覚で見つけてしまったのだ。女子更衣室を丁度覗ける小さな、穴を。

現代に蘇りしショーシャンク。希望の穴。天から地獄に垂れ落ちる蜘蛛の糸。

期待と、夢を抱きながら峰田はその穴へ目を近付け——

「あ、あ、あ、!!」

響香のプラグがそのまま峰田の目に突き刺さり、爆音を流し込んだ。

仕方ない。覗きの極意、てやつをこの峰田に教えてやるかね……。

「ほら言わんこつちやない。こういう時はな小さいカメラを仕込むのがあばばばばば」

更に覗き込もうとした俺に追撃をかけるようにプラグが突き刺さり、そのまま爆音が俺の体を駆け巡る。

「一体何をしているんだい君たちは!!」
飯田のツツコミにより、事態は収拾が着いたのであった。

☆☆

オールマイトは自身の力について継承者である緑谷出久にほぼ全てを話した。

緑谷を見送り、どうしようもない悔しさからソファに沈むようにもたれ掛かる。

ふと、緑谷にワンフォーオールのオリジンの話の中でオールフォーワンの持つ与える力に関連して思い出すように緑谷が呟いた言葉が引つかかっていた。

『——与える…まるでヒロフミ君の悪魔による契約みたいだ…!』

……………気になる。

そもそも。ヒロフミの個性自体が謎過ぎる。

世にある全てのの名前に関する悪魔が使える個性。

悪魔によって能力は多種多様。また契約という条件でその力を貸す事が出来る。奪う能力に関しては確認されていないが、隠しているという可能性は十分ありうる。

もしそうだとしたらそんな個性…ちから本当にオールフォーワンみたいじゃないか。

手を組み、思わずため息をつくオールマイト。

「——何はともあれ。塚内君からの情報が無いことにはまだ決めつけられないよなあ……」

平和の象徴と呼ばれたヒーローにしては随分と弱々しい声で呟いた。

その声は誰にも届くことなく、窓の外ではカラスが飛び立っていた。

テストに備えて。

「——えー…そろそろ夏休みも近いがもちろん君らが30日間休める道理は無い」

授業開始そうそうとんでもないことを言い出したなおい。

相澤先生は相も変わらず気だるげに眠そうに話す。

そんな中、上鳴のほか数名が気付いたのかソワソワしだす。

「まさか…」

「夏休み林間合宿やるぞ」

「知ってたー！！やったー！！」

あーそういえばそんなイベントもあつたな。

確か敵^{サイラン}連合が攻めてくるやつ。色々面倒そうだ。とりあえず

…マキマ姉に連絡と連携だな。あとは…まあおじさんとは知らない
いでいくし多分あつたとしてもバチバチにやり合うだろうから間
違つても倒さないようにしないとだな…。

というかその前に期末テストがあるんだよな。座学と実技で。

…あれ？この場合どうなるんだ？A組は本来なら20人のはずだ
けど21人だからなあ…。もしかして俺だけタイムン…。つてこ
とはないよね？

むしろあつてくれるな。

「その前の期末テストで合格点に満たなかった奴は…学校で補習地獄
だ」

恐ろしい話だな。でも、こんくらいやらないと本気出せないとい
うか、全力を出さない人って一定数いるよな。

切島が焦りを浮かべながら「みんな頑張ろーぜ！」と言うなか近
い期末テストと実技試験に向けて攻略の算段を立て始めた。

☆☆

時は流れ6月最終日。期末テストも残すところ一週間を切つて

いた。

「…全く勉強してねー!」

教室の中心でそう叫ぶのは上鳴。頭を抱え、さすがに焦り出した。芦戸はもはや諦めの境地に達したのか穏やかな表情で笑っていた。

中間テストならばまだ入学したばかりというのもあつて範囲は狭く、そこまで大変では無かったのだが、この期末テストはこの期間に至るまでに様々な行事があつたために勉強が出来なかつたのだ。

しかし、

「実技試験もあるのが辛えところだよな」

峰田実——21位中10位。

余裕の笑みを湛えながら足を組む峰田。

許せない。味方だと思つていたのに。どこに需要があるんだ。

上鳴と芦戸がワーワー言いながら峰田に嫉妬に似た目を向ける。しかし峰田は何処吹く風。「あえて言うなら世界かな」なんて返せる程に余裕があつた。

「芦戸さん上鳴くん!が…頑張ろうよ!やっぱみんなで林間合宿行きたいもんね!」

緑谷出久——21位中5位。

「うむ!」

飯田天哉——21位中3位。

「普通に授業受けてりや赤点はでねえだろ」

轟焦凍——21位中6位。

3コンボ。秀才たちの言葉の刃に心をズタズタに切り裂かれた上鳴が胸を抑えていると追い討ちをかけるようにヒロフミが上鳴の肩に手を置き悪魔のように笑つた。

「ほんと、頑張れよな〜?」

黒魔ヒロフミ——21位中2位。

「(っ)はあっ……………」

「っ、ついに上鳴が倒れたー!!?」

吐血……………まではいかないものの咳き込みながら倒れ込む上鳴。

予想だにしなかった追撃により大ダメージを追う。芦戸は「ヒロフミの人でなしー！」と涙目を浮かべながら抗議した。

しかし、ヒロフミは薄ら笑いを浮かべ二人の声は届く事は無い。
そんな時。

「お二人とも座学なら私、お力添えができるかもしれません」

様子を見ていた八百万が救いの手を二人に差し伸べた。

「演習ではからつきしでしょうけど……」

ヒロフミと轟を見て心を沈ませる八百万。

轟は頭に？を浮かばせながら。ヒロフミは何となく察して苦笑した。

そんな二人への八百万の提案が周りのA組の生徒には魅力的に写ったようで次々に他の生徒が勉強について分らないところを彼女に教えを乞おうと話しかける。

頼られている。と実感した八百万は周りに分かるくらい張り切ってなんと実家の講堂を開ける気になっていた。

八百万の元に来た生徒たちはその育ちの差を見せつけられてしまったが、あまりにも張り切っていることから暖かい目でその様子を見ていた。

☆☆

「ロボット演習……」

ヒロフミはB組の拳藤という生徒から教えてもらった話を聞き、誰にも聞こえないようにボソリと呟いた。

ロボット演習、というのが違う事をヒロフミは知っている。それ故のつぶやきだ。

ロボット演習なら余裕だと先程まで座学の分野で心配そうにしていた上鳴と芦戸の二人はふうと肩の荷を少し下ろす。それが間違いだとは知らずに。

「(ここで教えてもいいんだが……ぶつちやけ攫われる奴が増える可能性ってのもある。ここは申し訳ないが補講を受けて貰う事にしよ

う」

無情にも、二人を見捨てる判断をしたヒロフミは心の中で合掌しながら教科書を用意した。

——
????の悪魔。用意しといてくれ。

『はいはーい!! やつと出番だね!!』

——
……まだ先だし、使うとしても敵地^{てきち}のど真ん中^{まんなか}になるぞ。

『それでいいのさ。それこそが——の本懐だからね』

——
頼もしい事で。

『任せてよー!』

実技試験 P a r t 1

☆☆

期末テスト演習試験当日。俺はコスチュームに着替え外に出た。いた。

筆記は余裕だったな。思っていた通りの問題が出て楽勝だったぜ。チートボデイに感謝。

視線が……爆豪からひしひしと感じる。

試験日前日にわざわざ俺の所にまできて宣戦布告してきたもんだから驚いた。彼らしいと言えば彼らしい。やるからには勝たなくちやな。

……そういえば朝にホークスさんから『楽しみだね』とだけLINE来たんだけど何が楽しみなんだろう……？

嫌な予感がする。

☆☆

嫌な予感というのは当たる物だ。これは前世も合わせた人生の教訓だと俺は思ってる。

それを今——痛い程感じている。

実技試験、その内容は予め教えてもらっていたロボとの演習では無くプロヒーローでもあるヒーロー科教師陣との模擬戦。

別にここまでは良かったのだ。原作通りの展開で特に思うところはなかった。……まあ芦戸と上鳴はピシリと固まっていたけど。

そんなことより問題はその次だ。

あらかた説明し終えた校長先生が何やらおもむろにソワソワしだして「今日はスペシャルゲストもいるよ！」と思わせぶりな口調で咳払いをし、こう告げた。

「プロヒーロー……ホークスさ!!」

「……………は？」

俺の呆けた声をよそに空から一つの影が降ってくる。

「やあどうも！知ってる人は知っているだろうけど……ウイングヒーローホークスです！今日は一日ヨロシクね！」

ウザったい程にいい笑顔と俺にだけ伝わるようにしてきたウイソクが俺の神経を逆撫でる。

何してんだあの人!!?

顔には出さずに動揺を心の中にだけ留めつつも、視線はホークスに釘付けになっていた。

隣ではデク君がいつものようにヒーローオタクっぷりを発揮しているがそれも気にならない程に驚いていた。

ただ——驚くのはここからじゃない。

「これからは対人戦闘・活動を見据えたより実践に近い教えを重視するのさ！というわけで…諸君らにはこれから二人一組^{チームアップ}

でここにいる教師一人と戦闘を行ってもらおう！」

「先……先生方と……!?!」

「ああそうさ……ただ…このクラスは21人いるからね……」

嫌な予感がしてきたぞ。

「絶対指名者である黒魔ヒロフミ君は、特別ゲストであるホークスとの一対一をやってもらおうよ!!ただし——これはひとえに彼をいじめたいとかそういう意図がある訳じゃない。ではなぜか？それは、既にその実力が君たち以上だから彼にだけひとつ上の試験をしてもらうのさ！」

ほらな。

ヒーロー辞めたくなってきた。

☆☆

「——では次。黒魔ヒロフミですが……」

雄英高校会議室。ここでは雄英高校ヒーロー科一年の実技試験での組み合わせを考えるための会議が行われていた。

抹消ヒーローイレイザーヘッドが資料を捲りながらヒロフミに

ついでに簡単な個性の説明と実力について語る。

「個性が強力なのはもちろんの事なんですが俺が1番に評価したいのは連携、の部分です」

「ほう？と言うところ？」

興味深げに髭を揺らす根津校長。

「先のUSJでの事件で脳無と戦った際、プロである俺と即興でチームアップしきれていたんです」

「それは……」

「おかげで脳無も……まあ無傷という訳には行きませんでした。が倒しましたし……黒魔にとつてはこの実技試験は簡単なものになるでしょう。たとえば誰と組んだとしても」

「オイオイ、イレイザーがそこまで言うなんて珍しいな？」

「……客観的に評価したまでだ」

「ふむ……君が言うならそうなんだろうさイレイザーヘッド。ならば……別の形式で彼を試験しなくては行けなくなるね」

「具体的には何を……」

別の形式。という言葉に引っかけかりを覚えたイレイザーヘッドは、そう質問した。

根津校長はニヤリと笑い、イタズラをするような顔でこう言った。

「彼がプロ顔負けの実力を現時点で持っているとしたら……いつそのことプロヒーローと1対1で戦わせてみるってのはどうだい？」

「……正気ですか？」

ヒロフミがいくら強いとは言え、さすがに問題がある。

イレイザーヘッドは思わず低い声を出してしまった。

ただ、同じように話を聞いていた教師陣も同じ事を思ったよう。怪訝な視線を根津校長に向ける。

「何、もちろんハンデは付けるとも。それに……もし、彼とA組の生徒と組ませるにしても人数からして組めないし、なんと言つても“絶対指名者”だ。入学時点で既にプロに匹敵する程の実力を持つ生徒なの

だからこのくらいの試練は超えて見せなきゃね！」

「しかし——」

「いや、校長先生に賛成だ」

納得出来ずなおも食い下がろうとするイレイザーヘッドに横槍を入れるように口を挟んだのはいつもの超筋肉質状態ではなく、ガリガリの骨のような姿のオールマイトだった。

「私も——黒魔少年の実技試験の内容に賛成だ。理由は………校長と同じだけど」

「それに！絶対指名者として選ばれたものは元来、他の生徒よりも試練を課すと決めていたじゃないか！」

立ち上がったはいいものの声が萎んでいくオールマイトに変わるように立ち上がった根津校長がそう話す。

「……それは………そうですが………」

何か引つかかる。言葉にできないモヤモヤを抱えるイレイザーヘッド。

「しかしその一対一の実技試験をするにしても教師側の人員が足りないのでは？」

「それは問題ないのさ！既に1人、頼んである！」

セメントスの質問に根津校長は待つてましたと言わんばかりの声で返す。

「当日来てくれる事になったのは………ホークス君だ！」

皆心当たりがあったのか頷く。

ヒロフミの試験内容に疑問はあったものの制度の話は本当の事なのでなにも言う事が出来なくなりそのまま議題は次の生徒へと移っていった。

☆☆

嫌な予感はしてた。朝からな。でも………こんな形とは………。

「まさかヒロフミがタイムマンとはね………」

「世界は俺にやさしくない」

「絶望してる……」

地面に手をつきながら絶望する俺。マジ辛いつすわ……。

ちくしようニヤニヤしているホークスさんが憎い。絶対指名者なんてなるもんじゃなかった。なーにが「既にその実力が君たち以上」だよ。俺はあと何回プルスウルトラすればいいんだ。

なんの意図があつて俺にソロを強要させるんだ？

…考えれば考える程変な話だな。この試験の目的はチームアップによる連携だろ？そこを見ないでどこを評価するんだ？

別に連携を見る、てんなら二人に限定しなくても三人だとしてもいいはずだ。ヒーローの卵が一つ増えた所でそう厳しくなるわけでもないだろうに。

「さア！移動するよ皆！」

………考えてる暇は無さそうだ。とりあえず…頑張るか。

えい！えい！むん

!!!!!!!!!!!!

実技試験 Part 2

☆☆

舞台は大型ショッピングモールを模したステージ

ヒロフミとホークスはいつものようにリラックスしながらステージへと歩く。

「にしても、メールの内容ってこれですか…」

「そ。おどろいた？」

「それはもう、本当に」

実感のこもった真面目な声に笑いを噛み殺しながら歩くホークス。しかしすぐに取り直して先程の和やかな雰囲気とは打って変わって顔を引き締める。

「とは言え。頼まれたからには全力でやらなくちゃね。今のヒロフミ君がどこまでやれるのか見てあげる」

「なら——簡単に負けないで下さいよ？」

「言うねえ」

一定距離を取ってから。

ホークスは背中の中を羽を取り刀のようにして構える。

ヒロフミは蝮の悪魔を呼び出し、スタートの合図を待つ。

『それじゃあ今から雄英高一年期末テストを始めるよ！レディイイ——』

拳を握りしめ、狙いを定めるようにホークスを見る。

『スタート!!』

開戦の鬨の音がスピーカーから響く。

瞬きすら許さない一瞬の時でホークスとヒロフミが激突した。

翼の刀と蝮の足がぶつかり合い、弾き合う。

力、という点では二人は互角だが、スピードはまだホークスが上回っている。まるでハンデ用の重りを身に付けていないようなスピードで上昇、旋回し、ヒロフミの背後を狙う。

間一髪。蛇の悪魔を出現させ、盾の様にして身を守る。

蛇の悪魔の腹部に翼の刀が刺さり、そのまま切り下ろそうとする。

だが、蛇の悪魔を出した瞬間にヒロフミはすぐさまその影に隠れ、蛇の悪魔の腹部にホークスの武器が刺さった瞬間に飛び出した。しかし。

「甘いね」

ヒロフミの策はお見通しと言わんばかりに刀をあっさり手放し、回転蹴りで迎え撃つ。

これもヒロフミはギリギリの所で避けるものの、ホークスはその間に既に飛んで空へと飛び立っていた。

「……早い……」

と、ヒロフミは忌々しげに呟く。

ホークスはそんなヒロフミの様子をみて見せつけるように重りを指さす。

——挑発している。

重りを付けているのにも速さで負けているぞ、と示されているようだった。

「その余裕が崩れるのを楽しみにしててくださいよ」「来るならね」

言ってくる。売り言葉に買い言葉のようで、ヒロフミとホークスは掛け合う。

「まずはその空に浮いてる所から潰してやる……!」

ヒロフミは人差し指と中指の二本を立て——、

「——コン」

狐の悪魔の前足をホークスの上空に出現させ、地面にたたき落とす。

だが——、

「それは知ってる。よく使うよね、ソレ。汎用性が高いのは認めるけど——まだだね」

ひらりひらりと、空で踊るように狐の悪魔の一撃を躲す。

だが、ここで終わりでは無い。

「蛇の悪魔、丸呑み」

「石の悪魔、固めろ」

「飛蝗の悪魔——」

次々と悪魔を召喚しその全てをホークスに向ける。

流石にこの数は焦らざるをえないのか冷や汗を一つだけ浮かべながらそれら全てを捌ききった。

しかし、最後の飛蝗の悪魔の刀のような形状の前足による唐竹割り翼の刀で受け止め地面に叩きつけられた。

「——ん!!」

叩きつけられた今を好機と見たヒロフミがその急速に詰める。

「——まだまだあ!!」

ヒーロー、ホークス。個性：剛翼。その翼の一本一本は全て己の操るがままにでき、スピード、パワー、精密性、物量、感知能力、それら全てにおいて高性能な個性である。

そして、今——ホークスの剛翼の全てが展開された。

その翼は——早く、速く、疾い。

叩きつけられた際に辺りに漂う粉塵の中から無数の翼がヒロフミを襲う。

「(ヒロフミ君は成長してる。それも恐ろしい速度で。だけど、こつち側と言うにはまだ早いし、青い。一皮剥きたいのならこの攻撃を防いでみろ!)」

「(くっそ!本気だ!本気で俺と相手するつもりになったんだ!この数にこの速さはマズい!俺にはまだ……まだ……!)」

無理だ、なんて言葉は吐かなかった。

それはヒーローらしくないから。

ヒロフミの信ずるヒーローはどこまでいっても無理だ、なんて言わないはずだから。

いくら刺されようとも、切り裂かれようとも、ホークスの元へと一直線に走って行くつもりだった。

「(何か策は……!手数だけなら俺には沢山あるっ……!何か!何か!!………手数?)」

手数、という言葉であの日、ヴィラと戦った日を思い出す。

あの時ヒロフミは確率を操作するヤツを倒すために大量の海槍を出現させ、ヴィラを追い込んだ。

あれが使えれば。この状況を打開出来るかもしれない。

「(禍の悪魔!!あの技するぞ!)」

『…………ええ?…………その体力…………で…………?』

「(凌ぎきつたら気合いで何とかする!!)」

『…………ジーマーで…………?』

「(ジーマーでバイヤーだから使うんだろうが!)」

『…………わかったわかった…………』

ヒロフミの周りに翼と同じ数の海槍が出現する。

——ズズ…ズズズズズ!!

海槍が次第に高速に回転しだした。

ホークスは粉塵の間から除くようにヒロフミの様子を見るが未だ、向かってくる足を止めていないことに驚愕し、翼の刀を二本急いで構えた。

しかし、海槍に気付くことは無かった。

「——撃ち抜け、綿津見」

ヒロフミの号令と共に無数の海槍が、同時に翼を撃ち抜いた。

「——ッ!!?」

それを感知した時には既に遅かった。

超えることは難しいだろうと考えていたその攻撃が全て防がれ、

あまつさえ相手はもうすぐ近くに迫っていた。

見通しが甘かったと言わざるをえない。

ホークスは痛感しながらも二刀の刀を携え、向かってくるヒロフミを迎え撃つために身構えた。

しかし。

「あれ?来ない…………?」

もう来るであろうタイミングで来ない。

そろそろ攻撃が届いてもいい頃だと言うのに。

不気味さと、一抹の不安を覚え粉塵が晴れるのを待つ。

そこには――。

「……誰もいない?」

思わず困惑の声と共に武器を下ろすホークス。誰もいない。それは有り得ない。なぜならさつきちらりと見えた時には確かにヒロフミはいた。いたはずだった。

それが今はどうだろう。どこにも居ないのだ。まるで陽炎のように――。

「――しまった!」

ホークスは急いで出口へと駆けた。

比較的遠くはない。しかし、今のホークスは翼がない状態。走らなければならぬ。

出口が見える。馬鹿げたテーマパークのような看板のある場所には不自然な揺らめきが近くにあった。

――間に合わない。

ホークスは本能的にそれを悟り徐々に速度を下げる。

「あー……一杯食わされたなあ……」

ヒロフミはふらり、ふらりと足元を揺らつかせながら――何とかゴールした。

合格と呼ぶ音声を聞いてから疲労からか、その場に倒れ込むヒロフミ。

その後ろからホークスが手を叩きながら近付いた。

「いやー。お見事」

「は、はは……やったりましたよ……」

「最後のはさしずつめ陽炎の悪魔って事かな?」

「……はい……まあ、そうです。当たりです」

「てつきり倒しに来るものだと思ってたよ。君の性格からしてね」

「そんなバトルジャンキーな感じしますかね?俺って」

「してるよ?自覚なかった?」

「……ええ……」

納得のいかない声を出すヒロフミと負けたのにも関わらず楽しそうに笑うホークス。

ホークスはそのままヒロフミを担いでモニタールーム兼出張保健室へと向かった。

個性を押しすぎた代償の疲労と慢性的な頭痛を堪えながらヒロフミは実技試験を突破した。

実技テスト、後

☆☆

まじで疲れた……。あの人は本当に容赦無いんだから。組手する時とか切り傷が増えて困る。まあすぐ治るんだけど。

そういや響香突破できたかなあ……。俺がいるからどんなイレギュラーが起きるか分からないからな……。

そんな事をホークスさんにおぶられながら考えていると――

「少し、おかしいと思わない?」

「…何がです?」

「実技テストの内容」

「あー……」

ホークスさんも思ってたんだ。

気付いてるだろうとは思ってた。普段組手する時より手を抜いていたし、思うところがあつたのだろう。

やっぱりおかしいよな。

なんだか取ってつけたような理由と理不尽な内容。まあチートがあるし負けるつもりもなかったけど…不可解な点が多い。

「依頼を受けた時に少し探りを入れてみたんだけど『彼は絶対指名者で実力がある事』以外の理由を話さなかったんだよね。…まあ公安が無理言つて枠を作ってもらつたこともあるしこつち側はそんなに強く出られなかったけどね」

「だとしても、ですよ。今回の実技テストは二人一組の連携を見ることに重きを置いてるはずなのに今回は俺だけが1 on 1。評価基準が無茶苦茶だ」

「うん。だからおかしいんだ。一体雄英高校側はなんの意図があつて……」

ここまで話してホークスさんは考察モードに入ってしまった。

こうなるとうんともすんとも言わなくなるから諦めて保健室に

まで連れて行ってくれるのを待つしかないな。

……今度、オールマイトにでも話してみようか。

と、言うのもだ。

一度オールマイトは俺にわかりやすい程の探りを入れてきたことがある。

それが——『黒魔ヒロフミはAFOの後継者ではないか』と。

無論、絶対無い話なのだが第三者から見れば複数の個性を持っているように見える俺は一番怪しい候補だろう。

過去にもそういった話があつたからな。

俺は雄英体育祭で既にその誤解は解けたと思っていたが——

……どうやらまだその誤解は続いてるらしい。

この仮説が正しければ、わざわざlonelyにした理由も分かる。個性を確認したいのだろう。

うーん……となると……いや放置でいいかこれ。俺がなんだかんだと頭を悩ませる必要がないな。

だってあつちが勝手に勘違いしてるだけだし。

いつかは気付くでしょ。

気付いて欲しいなあ……。

☆☆

あつという間に時間が経った。

その後ホークスさんは少し他の雄英高校の先生達と話した後どこかへ行ってしまった。

最近忙しそう……まあ俺のせいなんだけど。

おっと他のクラスメイトのことも見てないとな。えーと、どれどれ……?

「うーん……大体原作通りってやつだな。対して変動はなし、か」

この調子なら例の作戦も問題無さそうだ。

「虎穴に入らずんば虎子を得ずとも言うしね」

にんまりと笑いながら俺は、爆豪と緑谷ペアの一戦を見た。

☆☆

「根津校長、これをどう見ますか？」

「……確かに似ているのさ。けど……まだ似てるってだけな気もするね」

「……ええ。私もそう思っただけなんですけど……やはり、嫌な予感がするのです」

「まあ、君が言うならもう少し見てみる事にしようか、オールマイト」

モニターに映るのはヒロフミとホークスとの一戦。

根津校長とオールマイトは渋い顔をしながら大きいため息をつく。

オールマイトにとっては脳無、というかつての宿敵の影が見え隠れし始めている上に、死柄木弔や敵連合といった存在。そして宿敵と酷似した個性を持つ生徒が現れた。

盛大な勘違いではあるのだが、状況的にも疑ってしまうのは無理もないことだろう。

うんうん、と悩むオールマイトを見ながら根津校長は一つ息を吐く。

根津校長にとってヒロフミはそこまで怪しく見えない。

とは言え平和の象徴の言うことには耳を傾けるべきでもあり――

板挟みのような形で根津校長もどうしたものか、とまた更に、先程とはまた大きく息を吐いた。

「本当に、何も無ければいいんだけどなあ」

☆☆

「場所はどこ？」

「抑えています」

公安対特定敵^{サイラン}対策課に割り振られた部屋にて、マキマにレゼが

報告していた。

「オイ！それは俺のガムだ！よこせ！」

「わふっ！わふっ！」

「いやワシのじゃー！床に落ちたからワシのじゃー！」

部屋の隅ではデンジとパワーがアキからもらったガムの取り合
いで取っ組み合いの喧嘩が起きていた。

しかし、それを無視してレゼは続ける。

「主人より提示されたBAR…この二店舗ですね。こちらはウチでの
捜査、そして内部からの報告により裏も取れています」

「なるほどね…。当日は相当ヒーローが来るらしいけど…大丈夫？」

「変装なら得意ですから」

「そっか。じゃあよろしくね」

封筒に入った書類をマキマに渡し、そのまま踵を返してデンジの
方へと向かうレゼ。

「ほーら！もう終わったからデンジ君にポチタ君にパワーちゃんも私
と帰ろ？ね？」

「お、おう！いいぜ！（この娘…俺の事好きなんじゃ…）」

「わふっ！わふっ！」

先程の凜とした表情とは打って変わって至って少女らしいにこ
やかな笑みを浮かべてデンジの腕を引くレゼ。

その様子に面白くなさそうな表情を浮かべるパワー。まるでデ
ンジを取られたような、そんな感じがして思い出したように落ちたガ
ムをデンジに差し出した。

「ホレ！ワシは優しいからのオ…特別にワシのガムをウヌにくれて
やろう！」

「いやそれ俺の落としたガムじゃん…」

「受け取らんか!!」

「…ハイハイ…」

渋々、といった様子で受け取るデンジ。

ガムを押し付けるように渡したパワーは満足気なドヤ顔で「優し
すぎてワシはノーベル賞取れるんじゃないかのお？」といったものよう

に虚言を吐きながらデンジ、レゼ、ポチタを押しようにして部屋の外へと出ていった。

「仲良さそうで何よりだね。——チエンソーマン」

林間合宿、開始。

☆☆

実技テストも終わり、翌日。いつものように面白ギャグ挨拶をしながら教室に入る。

すると芦戸、砂藤、上鳴、切島が絶望した表情で固まっていた。

…まあドンマイだな。相性の問題とかもあるし、相手はプロだしでまだまだ生徒には厳しいところがあるよな。

悲しみの声と表情でその場だけしっとりとしている。正直ウケる。

愉悦の表情を押し殺しながら自分の席に座ると、少ししてから響香もやってきた。

「お疲れ。中々いい活躍してたんじゃない？」

「ん、ありがと。そっちもね」

「おう。……一対一だとは思わなかったけどな……」

「あ、そーだよ！大変だったらしいじゃん!？」

「まあ…上鳴程じゃない。だってさほら…林間合宿が…」

「グハツ……」

地面に手をつき倒れこむ上鳴。まだだ…まだ笑うな……!

俺からすればこの後の合理的どんでん返し虚偽を知っているからこそこの愉悦なのだが、生憎とこの四人衆はそれを知らない。

まあ、ワインはないから紅茶でも飲んでその先を楽しみますか。

勢いよく開かれる教室の扉。

そこから入って来たのは我らが担任の相澤先生だ。

先生の顔を見て察した4人は沈痛な面持ちで項垂れる。

「おはよう。今回の期末テストだが…残念ながら赤点が出た。したがって……」

罰を受ける囚人の様に次の言葉をまつ四人。

「林間合宿は全員行きます」

「」「どんでん返しだああ！」「」

良かったね。でも、キツイ補習が待ってるよ。

☆☆

響香に「どうせ休日はゲームかバイトにしか行かないんだから出掛けない？」と言われたので木塚区のショッピングモールへとやってきた。

人が多いなく。

さて何買おうかな…あ、そういえば俺靴が野外用の奴ないから買おうと思ってたんだった。

「とりあえずウチは大きめのキャリーバッグ買わなきゃ」

「あら、では一緒に回りましょうか」

「…ヒロフミは？」

「あー、俺はアウトドア用の靴ないから上鳴と回ろうかなって思ってるぞー」

響香の問いにそう答えると、財布の中を確認する。よし、こんくらいあればそこそこ良いの買えそうだな。

なんてったって下ろして来たし。

「目的バラけてっし時間決めて自由行動すつか！」

それが良いな。

と、言うことでバラバラに行動するということとなった。

何買おっかな。

☆☆

「ありあとごぎっしたー」

定員の適当な挨拶を背に、店から出るヒロフミ。その手には買ったばかりの靴とそれが入った袋が握られていた。

一緒に回っていた葉隠、上鳴はまだまだ悩んでいるようで店内をウロウロと回っていた。

そんな2人を待とうかと近くにあった椅子に腰掛けようとして、ふと視界の隅に違和感のあるものが移りこんできた。

全身黒一色の衣装に身を包んだ、少し背の高い男らしき人物。

別に、ここだけならばどこにでもいそうなのだが、問題はその男から発せられる異様な空気感。

触れるものを壊していきそうな、脆い、危機感を抱かせる。

そして何よりも——その男が、緑谷の首を拘束しているように見えた。

「……………ああ。そうか」

一人納得したような声を漏らすヒロフミ。

座っている場合じゃない、と思い、その椅子から立ち上がり急いで緑谷の元に近づく事にした。

ヒロフミが来た頃には黒い服の男——死柄木弔は既に立ち去っており、緑谷の近くには心配そうな顔をして駆け寄る麗日があった。

「あー…悪い。俺来るの遅れた」

「ヒロフミくん…もしかして君も…」

「ああ。見えてた。急いで来たんだが…逃げられたか」

とりあえず。怪我や被害がないにしても敵が現れたことサイランに変わりはなかったため、すぐさま麗日が警察へ電話を掛けた。

「デク、奴は…その、どうだった？」

「さつき少しか話したばかりで僕も何が何だか混乱してるけど、あいつには…底知れぬ悪意、てやつを感じた、かな」

「……………そうか。災難だったな」

ヒロフミは労うようにデクにそう言うと、あとからやってきた皆に事情を説明するために向かった。

「……………さて、ここからが本番だな」

☆☆

夏休み、林間合宿当日!!

何かとトラブルがあったけどちよつと楽しみにしていたイベントだ。

精神年齢は大人な俺でもやっぱり、『夏休み』『林間合宿』の言葉に対するワクワク感はいつになつてもあるもんだ。

バスに乗り込みクラスメイト達とワイワイガヤガヤしながら目的地まで進む。うーん、これも青春だねえ。

一時間ほどして。

何も無い所で降りるようになると言われ、バスの外に出る。そこは別にパーキングでもなんでもないただの駐車場みたいな所だった。

皆が困惑の声を挙げる中、引率の先生である相澤先生だけが冷静に告げる。

「何の目的もなくでは意味も薄いからな」

ほほーん…?」

「よ——うイレイザー!」

「ご無沙汰してます」

あの相澤先生が頭を下げる相手…? 珍し——

「煌めく眼でロックオン!」

あれ?

「キュートにキャットにステインガー!」

あらら?

「ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ!」

そんなヒーローもいたな! 原作に!

ビシツと決めポーズをする2人組を見て思い出す。

デク君がテンション爆上がりで2人の解説をしてる。

あ、余計なことを言いかけて突っ込まれてる。

「——ここら一帯は私たちの所有地なんだけどね」

隣で起きてることを無視して話を続けるプツシーキャッツの一

人、マンダレイ。

そして指を駐車場の下から広がる山奥を差してから――、

「あんたらの宿泊施設はあの山のふもとね」

「遠っ!!」

話の読めない状況にクラスメイト達はざわつき出す。

俺はこの後何か起こるのかだんだん思い出してきた。

「相澤先生…マジ?」

俺の問いに相澤先生は答えない。しかしその表情にはあくどい

笑みが浮かんでいた。

あ、ダメだコレ。

「今はAM9:30早ければまあ…12時かしらん」

「ダメだ…おい…」

「戻ろう!」

「バスに戻れ!!早く!!」

「無駄だと思うけどなあ――」

「12時半まで辿り着けなかったキティはお昼抜きね」

地面が揺れ動く。

さて。落下体制を取る準備でもしますかね。

「わるいね諸君。――合宿はもう、始まっている」

土砂が俺たちA組を飲み込み、そしてそのまま下へと滑り落とされる。

「私有地につき」個性の使用は自由だよ!今から3時間!自分の足で施設までおいでませ!」

「この…」魔獣の森を抜けて!!」

鬱蒼とした木々気が辺り一面に広がるまさにThe森林に投げ出されて、始まるのがドラクエのクエストみたいな内容の試練。

流石雄英。やるのが違うぜ(白目)。

落ちた先で人数確認を行おうとしたその時。

峰田が一心に走り出した。股間を抑えているところを見るにもう限界なんだろうな。

しかし。

ガサリ、と音がなり草木を掻き分けて出てきた四足獣——大きな牙に石のような体つき、足には木の根が巻き付いたその姿はまるで

「マジユウだー!!?」

魔獣としか言い表せない。

「静まりなさい獣よ！下がるのです！」

口田が個性を使い、足止めをしようとするが、見た限り効果は無い。

既に三人、飛び込んでいるから俺はサポートに徹するか。

視界があるかどうかわからんが、やるしかない。

「——蛸、墨」

吐き出された蛸の悪魔の墨が魔獣の視界を塞ぐ。

そして——、飯田の足が、轟の氷が、爆豪の爆破が、緑谷の拳

が——魔獣を貫き、粉々にした。

林間合宿——Part 1

☆☆

PM5:20。

森を抜け、ようやく開けた場所へと出る。

汗と泥で汚れすぎた。早く風呂に入りたいところだ。

「腹減った…死ぬ…」

「何が「三時間」ですか…」

他のA組も既に限界を迎えており、立っているのもキツそうだ。

かく言う俺ももう空腹と疲労のダブルパンチでフラフラだ。俺はこの魔獣の森の中では遊撃と索敵を担当し、魔獣達を適度に狩りつつ、未来の悪魔の力で次どこに魔獣が出現するのかの情報伝達をした。

あんなに叫んだのは久しぶりだな……。

「——私の土魔獣が思ったよりも簡単に攻略されちゃった。いいよ、君ら……特にそこ5人」

見定める様な目をしながら俺と、デク、爆豪、轟、飯田を指さすプツシーキヤツツの一人ピクシーボブ。

「躊躇のなさは経験値によるものかしらん？」

それはあるな。ヒーローの現場つてのは一瞬の時でも命取りだからな。守りたい人を守ろうとするのに足踏みしてちゃあヒーローの存在意義が分からなくなっちゃう。

ただまあ、それがただのヒーローの卵にできるかってなると話は別だ。

ある程度の実践経験が無いといざという時の行動、瞬発力が育たないからな。

……ってホークスさんが言ってた。

まあその通りだと思う。

「部屋に荷物を運んだら食堂にて夕食。その後入浴して就寝だ。本格

的なスタートは明日からだ。さア早くしろ」

相澤先生が急かすようにそう言つて施設へと入つていった。

俺達も着いていくか。

…気になる、つて程じゃないがマンダレイの従甥の洗太が少し気がかりだ。緑谷の股間にいいのを食らわしてたもんだから驚いた。

確か…この洗太絡みで厄介なのがあつたはずなんだよなあ……。

ダメだ。やっぱり前世の記憶は薄れてらア。

こうなると事前に立てた策とかが崩れるかも分からんね。気をつけなきや。

☆☆

「お早う。諸君」

翌日。合宿二日目。

A M 5 : 3 0。まだ日が昇り出した頃合いで、山の裏から微かに太陽が顔を出している。

薄ら明るい朝にヒロフミは大きなあくびを1つ零してから広場にて、集合していた。

「本日から本格的に強化合宿を始める。今合宿の目的は全員の強化及びそれによる“仮免”の取得。具体的になりつつある敵意に立ち向かう為の準備だ」

記憶に新しい、USJと関わった者だけが知っているヒーロー殺し。その恐ろしさを知るA組の面々は緊張からか、顔を引き締める。「という訳で黒魔、これ投げてみる」

と言つて相澤から投げ渡されたのはソフトボールのような大きさの計測機器。

「……了解」

「前回の…入学直後の記録は666。6m…どんだけ伸びてるかな」

「おお！成長具合か！」

「この一ヶ月濃かつたからな！1kmとか行くんじゃないやねえの？」

「…にしてもいつ聞いてもあの記録、不吉だわ……」

ボールを握り締めたヒロフミは個性把握テストでやった様に筋肉の悪魔を発動させながら腕を肥大化させる。

狙いは高く、遠く。

思い切り腕を伸ばして――

「どっっっいしょっっー！」

投げる。

ゴウっ！という風を切る音と共にボールが飛んでゆく。

次第にボールは見えなくなっ行って行き、少しした後相澤が持っている端末に結果を知らせる通知音が鳴る。

相澤はその結果を確認してから見せつけるように周りにその画面を見せた。

「668.6m」

「あちゃー……」

「あれ……？思ったより……」

「不吉では……無くなっただけ……」

にわかにザワつくA組を遮るように相澤は続けた。

「約三ヶ月間様々な経験を経て確かに君らは成長している。だがこれは精神面や技術面あとは多少の体力的な成長がメインで“個性”そのものは今見た通りでそこまで成長してない。だから――」

そこまで言う一旦区切つてから、ニヤリ、と口角を上げる。

「今日から君らの“個性”を伸ばす。死ぬほどキツイがくれぐれも……死なないように――……」

そう、宣言した。

A組のクラスメイト達はそれぞれ顔を見合わせ、これから始まる“特訓”体をブルりと震わせた。

しかし、そんな中で大きく首を傾げる生徒が一人。

「あれ……俺って……どう個性を伸ばしたらいいんだ？」

☆☆

そもそも。俺の個性の強さ、というのは伸ばして強くなるもんじゃない。その悪魔に対する恐怖こそが強さの指標だ。

そう考えるとこの後にある地獄の個性伸ばし特訓で何をすればいいのか全くわからんぞ…。

でも待てよ？さっき筋肉の悪魔でボールを投げた時には微小だが成績は上がっていた。恐怖によるパワーアップか？筋肉の悪魔が？

……いや、違うな。

個性としての悪魔がパワーアップしたのかもしれない。

だとすれば——一定の悪魔を使い続ければ更にパワーアップするって事か。

この仮説が本当なら、凄いことだぞ。

この特訓期間に検証するべき事が一つ、できたな。

☆☆

林間合宿二日目。この日ヒロフミは一人、森の中でひたすらに悪魔を呼び出しては仕舞うというただ、個性を伸ばす訓練をしていた。

ヒロフミの個性である《悪魔》はヒロフミ自身の体力を消費することにより、様々な力を扱うことができる。

つまり、走り込みやランニングをすることにより、肺活量が高まるように個性を使い続けることにより扱える悪魔が増え、また更に強い悪魔の力を使うことができるのだ。

ただし、その使い続けることが大変な疲労感を伴うという点を考えなければ、の話だが。

大粒の汗が大量に体を濡らす。

個性の使用による疲労感もあるが加えて、じりじりと照らす強い日差しにも晒され、タオルで拭いても拭いても止まりそうには無い。

隣では個性伸ばしの一環で岩壁にイヤホンジャックを突き続けたいた耳郎がへたりと座り込んでいた。

「あゝゝゝゝ……キツツいなコレ」

「そうだね……」

覚悟していたとはいえ、想像の何倍も辛い合宿の内容に二人の顔には疲労感が漂っていた。

とはいえ、ここでもただだらけている訳にもいかない。水分補給をしてから息を整えると、またひたすらに悪魔を呼び出し始めた。

「(……ヒロフミも頑張ってるし、ウチもやらなきゃな!)」

決意新たに。耳郎は拳を握りしめると立ち上がり、さつきよりも強く、石壁の方を向き、個性伸ばしを再開した。

時も過ぎて夕暮れ時。

空腹から既にフラフラのA組の前に置かれた野菜や肉などの具材。

丁度この具材ならカレーが作れそうだな、とヒロフミが考えていたところにプツシーキャッツの二人が現れ、こう言った。

「シア昨日言ったね「世話を焼くのは今日だけ」って!!」

「己で食う飯くらい己で作れ!!カレー!!」

元氣よく話す二人に対してA組の反応は薄い。

無理もない。今までオーバーワークとも言える量の訓練を行っていたのだから。

とは言え。何かを作り、食べなければ限界が来て倒れてしまう。そのために、重い体に喝を入れて、A組は具材に向かうのであった。

「わー!ヒロフミ君って包丁の扱いが上手いんだね!」

「一応飲食店でバイトしてるからな。包丁を触る機会は沢山あった」

「轟ー!こっちも火イちよーだい!」

「皆さん!人の手を煩わせてばかりでは火の起こし方も学ばせんよ!」

「……………」

「いや……………」

芦戸に頼まれて呼ばれた轟は「火をおこして欲しい」という要望に応えて、今まで忌避していたはずの左火を使い、薪に火を着けた。

その表情はいつかの憎むような物ではなく、どこか穏やかな、頼られていることに喜びを感じているような、そんな表情だった。

「……………良かったな)」

☆☆

「それで?なんでお前は開闢行動隊に同行しなかったんだ?———
ヴィラ」

BARにて、自身の隣に座る金髪の少女、ヴィラに対して、そう疑問をぶつける死柄木。

「マア…怪我が治りきってナイツてのはあるケド…ホントウの理由は

キミの『先生』とやらに興味がアルカラ……オット、コワイコワイ
ヴィラの口から『先生』、という言葉が出た途端に首に手を掛け、
何時でも『崩壊』できるようにしてから睨みつける死柄木。

一方のヴィラは恐怖すら感じてないような顔でニヤニヤと笑っ
ていた。

「何が目的だ？あの雄英の生徒に固執する理由は？全て答える……さも
なくば——『辞めなさい』

……ちっ

『全く。死柄木弔。おぬしは少し直情的がすぎるな。……だが、言い
分も分からなくは無』

モニターから死柄木を静止するように話しかける男の声。年老
いているようでしゃがれていた。

『……ふむ。面白そうじゃないか。ヴィラ……と言ったかな？直接は無
理だが……話すくらいならしてあげようじゃないか』

しゃがれた声とは別に、優しく、しかしどこか掻きむしりたくな
るような邪悪を孕んだ声——『先生』ことオールフォーワンがヴィ
ラに興味を示した。

「オヤ、応じてくれるとは思わなかつタナ」

『はは、キミには僕に似た匂いがするからね』

「先生！コイツは……！」

『大丈夫さ。弔。大丈夫だから』

念押しするように、オールフォーワンは死柄木に話しかける。す
ると焦る様に立ち上がっていた死柄木はストン、と椅子にすわり、や
がて不貞腐れたようにカウンターに突っ伏した。

『……それで？何があるのかい？』

「ソウネエ……こんなに見られてると話にくいカモ。二人きりにしてく
れない？」

『……構わないよ。悪いが……博士に弔、黒霧も一度席を外してくれ』

オールフォーワンにそう言われ、渋々ながらもその場を離れる3
人。

そして、ようやくヴィラとオールフォーワンは二人だけとなっ

た。

オールフォードは画面越しに、ヴィラのことを注意深く監視していた。

一日にして異様な程に注目を集めたヴィラン。既にネットやテレビではその脅威を散々と言つていいほど報じていて、オールフォードもそれは認知していた。

^{ヴィラン}敵連合はオールフォードの目的を達成するための集団に過ぎないのだが、それを阻害するような存在であれば排除しておきたい、そう考えていた。ヴィラがその対象であるかどうかは未だに分らないが、警戒すべき、油断出来ない存在であることに変わりはない。

「——さて、三人は居なくなつた訳だけど……」

「アラ、コソコソと聞き耳立てているネズミがいるジャナイ」

オールフォードのすぐ隣から声がした。

ヴィラの声だ。

博士が、驚愕の顔と共にヴィラを見る。

それはオールフォードも同じで、外には出していないものの内心では激しい動揺に襲われていた。しかし、それと同時に興味がむくむくと湧き始めていた。

ヴィラという、自身に並びうる可能性が出てきた敵^{ヴィラン}に対して。

「へえ……興味深いね。どうやってここに？」

「ダツてこの場所……影が沢山あるんだモノ。ソクノ入つてつて言うような物ジャナイ？」

影渡り。ヴィラの能力のひとつだ。

人知れず、すぐ側に現れる。ただそれだけの力、しかしそれが綿密に隠されていた本拠地を突き止められてしまった。

オールフォードは分からなかった。

ただ、それだけの力を持つているのにも関わらず、自分に戦闘ではなく、対話をしに来た理由が。

「……何が目的かな？」

単刀直入に。少しだけ語気を強めて、目的を聞こうとするオールフォードにヴィラはぞつとするほど綺麗な笑みで近寄る。

「ハナシが早いネ。カンタンな事ヨ？コノ、黒魔ヒロフミは私の獲物。誰にも、渡さない。貴方にもね」

「…彼に執着する理由は？」

「ソーネエー…強さ、性格、野心、本性、イロイロあるけど…今、一番私の中を閉めている理由は…恋、カシラネ？」

近寄りながら、凄みを見せた笑みとは違って、恋をする十代ティーンエイジャーのようににかむヴィラ。

オールフオーワンはそんなヴィラの様子に少し、戸惑いながらも考察を始めた。

「(黒魔ヒロフミ。益々興味深い存在だ。そして…ヴィラ。彼女もまた、興味…いや、注意が必要な相手だ。下手に触れて火傷は出来ないな)」

なぜか、オールフオーワン達がヒロフミを独自で調査し、こちらに引き込もうとしていた事を見抜かれていた事や、黒霧のワープの様に現れたその力に警戒し始めたオールフオーワン。

目の前のオールフオーワンが徐々に警戒しだしていることを察知したヴィラだったが、そんなことはどうでもいいように、それにと続けた。

「ソレに…貴方と戦うよりヒロフミと戦う方が熱くなれるノヨネ」

——だって彼、貴方の上位互換だもの。

それを聞いた瞬間、今までの考察や予測、警戒などが全て消え失せた。

「へエ……それはそれは……」

——少し、不愉快だね」

☆☆

二日目の夕食を終え、布団に入ろうとした時、ヒロフミのポケットに隠し持っていた定期連絡用のスマホが鳴った。

「ちよいとトイレ」

「おう。早く戻って来いよー。トランプ始まっちゃうからなー」

「ああ。すぐ戻る」

男子トイレ、の外に出てから周囲に誰も居ないことを確認してからスマホを取り出す。

「どうした?」

「よう!ヒロフミ俺だ!」

「おじさん?どうかしたのか?」

「あ!それがさ!大変なんだよ!もしかしたらヒロフミの計画の根本的な所が……無くなってしまいかもしれない!無くならねえよ!」

「……………ええ……………」

林間合宿——Part 3

☆☆

林間合宿三日目。相も変わらずヒロフミは悪魔を召喚し続ける訓練をしていた。

ただ、身の入り方は昨日とは比べ物にならないほど落ちていて、呼び出すスピードや量などが明らかに違う。

理由は簡単だ。昨日の緊急連絡の内容が色々としょックだったから、である。

その緊急連絡の内容が今回の林間合宿における襲撃の目的である『爆豪勝己、常闇踏陰、黒魔ヒロフミ』の誘拐リストが『爆豪勝己、常闇踏陰』に変更されたのだ。ヒロフミとしては、ここは原作通りにはなつて欲しくなかった。

だが、公安職員として潜入しているトウワイスからの情報で信憑性は高い。

ヒロフミら公安組は変更される前のリストを元に考案された『襲撃事件にわざと誘拐されて敵の本拠地を叩いてしまおう作戦』がこの変更により、頓挫してしまった。

これまでわざと目立つことでオールフォーワンの目に映る事をしていたヒロフミにとつては肩を落とす結果になった。

しかし、ヴィラを討ち取るというチャンスを逃す訳には行かない。

訓練を続けながらも頭の中では即興で対応できる作戦を考えていた。

この襲撃まで一日を切ったこの状況でヒロフミは焦りと共に、過ぎたのであった。

☆☆

三日目の個性伸ばしの訓練も終え、夕食も済ませたA組の一同。いよいよお楽しみみの肝試し大会が始まる。

…補習組の悲痛な声と共に引きづられていく姿がなければ、だが。

哀れみと同情の視線が引きづられている四人に集まる。

とは言え、自業自得。引率のプツシーキヤツツ達は今回の肝試しの概要を説明しだした。

この肝試しは脅かす側と回る側に別れ、先攻はB組となっており、先にスタンバイを済ませていた。そして、回る側であるA組は二人一組で3分おきにスタートし、ルートの真ん中にある名前の書かれたお札を取ってからゴールに行く、というものだ。

脅す側は直接触れるのは禁止だが、個性を使って脅かしネタが出来るようになってる。

「——創意工夫でより多くの人数を失禁させたクラスが勝者だ！」

最後に台無しになってしまう説明をしてから、二人組を決めるくじ引きが始まった。

ヒロフミと組むのは…耳郎となった。

「お、響香とペアか。……いつかみたいにしがみつかないと良いなあ？」

「……………うっさい！」

ヒロフミのからかいに小さく小突く響香。

「仲、良いんやねえ…」

そんな様子を見ていた麗日は微笑ましいものを見るように話す。

そう、まるで恋人同士を見るような——。

「そ、そんなんじゃないからね!?ウチとヒロフミは!!」

「ふ、照れるなよ」

「ヒロフミも乗るな——!!」

さつきよりも強く、脇を小突かれ倒れ込むヒロフミに一同はどつと笑いが起こった。

この時までには、皆、これから楽しい時間が始まると思つて疑わなかった。

ただ、一部を除いて……………。

☆☆

幸せは、楽しい時間は、薄氷が割れるようにすぐに終わる。

しかし、それは音すら無く、ただ意識した時にはすぐそこに迫っているものだ。

「あー、結構びっくりしたな」

「そうだね、結構みんな本気で驚いたっていうか…」

暗い夜道を二人は歩く。

空には星空が浮かび、月の淡い光と懐中電灯の光が周りをそして足元を照らしていた。

二人して、あれが怖かった、今度脅かす時はこんなことをやろう、なんて雑談をしていた時、何かが焼けている様な匂いがヒロフミの鼻につく。

「(ツ！始まったか！)」

「なんだろうこれ、変な匂いが——」

ヒロフミは一瞬で、痛みもなく耳郎の意識を刈り取った。

「悪いけど、響香を危険な目に合わせる訳には行かないんでね」

すぐにハンカチをマスクの様にして自分の口を覆いながら倒れ込む響香に呟いた。

——ガサツ

後ろの草むらから足音。

聞き間違いでなければ一人分の音しか聞こえない。

「誰だ。答えによっちゃあ……タルタロスにぶち込まれる覚悟が必要になるぜ？」

蝮の悪魔と蛇の悪魔を同時出現させ、音のなる方を睨むヒロフミ。

「タイムタイム！俺だよ俺！」

「……なんだ、おじさ……いやトウワイスか」

草むらから出てきたのはヴィラン連合にいるはずのトウワイス

の本体。

殺気すら感じる視線に耐えかねてあつさりと正体を明かしたのだった。

「ここにいるってことはつまり……」

「ああ。ヒロフミの作戦に乗るぜ……乗らねえよ！……とりあえず俺はお前をコピーすればいいんだな？……だが、あまり完璧にできる自信は無いぞ？」

「いや、大丈夫だ」

「…ヒロフミもヒロフミで大変だと思っぜ？」

「大丈夫だって、何年トウワイスと友達だと思ってるの」

「……………それもそうだな！」

ヒロフミの言葉に、トウワイスは心底嬉しそうに笑っていた。

☆☆

「ごめん！俺トイレ！」

戦場に似つかない明るい、能天気そうな声、トウワイスだ。

ヴィラン連合の先遣部隊、開闢行動隊に参加しているヴィランで、闇の個性サポートアイテムを売るブローカーから紹介された、頭のおかしい男——と、茶毘は分析していた。

これまでの言動から見ても、何をやるにしてもハチャメチャで、頭のネジを落とし続けているとしか思えない。

茶毘はバカトウワイスの行動に舌打ちをしながら、「勝手に行け」と冷たく返した。暫くして、いやー悪い悪い、トウワイスはヘラヘラしながらベルトを直しながら草むらから出てきた。

その直後。

『開闢行動隊！目標回収達成だ！短い間だったがこれにて幕引き！！予定通りこの通信後五分以内に〃回収地点〃へ向かえ！』

「おい茶毘！無線聞いたか!?テンション上がるぜMr.コンプレスが早くも成功だってよ！遅えつうんだよなあ!?もう眠っちゃまいそうだよー！」

賑やかに囃し立てながら茶毘と共に“回収地点”へと向かい出した。

「そう言うな。よくやってくれている。あとはここに帰ってきてくれるのを待ただけだ。……予定じゃ炎とガスの壁で見つかりにくいハズだったんだがな——……ガスが晴れちまったら」

……二人のすぐ横の草むらに一人、ガクガクと震える少年が一人——青山だ。

何も出来ずに、恐怖で固まっていた彼は手で口を抑え、必死に息を殺す。

「ガスが晴れた：誰かがヴィランを倒したんだ：！戦ってる：！僕は……」

思い出すのは青山に、ガスで気を失った葉隠を託す時の八百万の言葉。

『私はB組の方々をお救いしなければいけません！青山さんは葉隠さんを施設へ運んで下さい!!』

そうだ。やらなければ、自分にも何かできることを……
草むらから少しだけ顔を出して見る。

——ッ!?

「(目合った!?)」

青山が顔を出した瞬間、茶毘も青山の方向を見ていた。

すぐ隠れたおかげで見つかることは無かったが、茶毘は少し異変を感じその方向へと確認のために向かいだした。

「あー…おい茶毘！…そういやどうでもいいことだがよー！」

青山の方へと歩き出していた茶毘に後ろから大きな手で手を挙げながらトウワイスは質問し始めた。

そして、青山にとつて幸いなことに茶毘はその足を止めることとなった。

「脳無ってやつ呼ばなくていいのか!? お前の声のみ反応するとか言ってたろ? お前の声のみに!! 大事なことだから二回言ったぜ!」

「ああいけねえ。なんの為に戦闘加わんなかったって話だな」

トウワイスの方へと向き変える茶毘。

「感謝しな！土下寝しろ！」

「死柄木から貰った俺仕様の怪物……」

喉のインカムに手を当て、少し期待を込めた声で

「——一人くらいは殺してるかな」

と、言った。

「そうだといいな!!良くねえ!!」

そんな茶毘とは対象的に、トウワイスは平常運転だった。

☆☆

緑谷、障子、轟の三人は空を飛んでいた。

いや、正確には吹っ飛ばされていた、が正しいだろうか。

麗日の個性により軽くなり、蛙吹の下によって空高くへと、開闢行動隊のいるポイントへと投げ飛ばした。

絶対に負けない。爆豪と常闇を取り返す。痛みも、今だけは無視して、突き進む。

そして——

「(見つけた!そこだ!)」

空中から、Mr. コンプレス目掛け、飛び降りた。

轟音、そして、砂埃。

幼なじみと、クラスメイトを助けるために、絶対に助けるという気概を持って、ヴィラン連合——開闢行動隊の前に降り立った。

「知ってるぜ!!このガキ共!!誰だっけ!?!」

緑谷に踏みつけられたコンプレスは身動きが取れなくなっていた。

「Mr、避ける」

「!了解」

状況を判断し、左手を掲げた茶毘と、その意図を察し、個性を発動させるコンプレス。

見事な連携で、地面を抉り、茶毘の蒼炎を躲し三人の拘束から抜け出すことに成功したコンプレス。

「うあつー！」

緑谷だけがモロに蒼炎にぶつかってしまい、ほか2人も間一髪ではあるが逃げ出せたものの、どこかしら火傷を追ってしまう。

「死柄木の殺せりストにあつた顔だ！その地味ボロ君と半々!!無かつたけどな！」

腕のメジャーを引きながら、轟の後ろに回り込むトウワイス。しかし、蒼炎に吞まれた訳でもなく、炎も服を焦がすだけにとどまった轟がすぐ様方向転換し、舌打ちをしながら氷壁を貼り、遠ざける。

「熱っちい!!」

全く正反対の事を言いながらトウワイスは吹き飛ばされた。

一方の緑谷もトガヒミコというヴィランに詰め寄られていた。

「トガです出久くん！お兄さんに言われて入りましたがなるほどなるほど!!スゴいいイです!!ところでさつき思つたんですけどもつと血出た方がもつとカツコイイよ出久くん!!」

「はあ!!」

素っ頓狂な声をあげる緑谷の上に馬乗りになってから注射器のような武器で緑谷を突き刺そうとするトガ。しかし、間一髪のところ障子が横から妨害する事で難を逃れた。

しかし、それと同時になんてことないように立ち上がり、土埃を払うコンプレス。

そして、茶毘に近付くと爆豪、常闇の二人を渡そうとポケットをまさぐる。

「……………!?!」

見つからない。感触が無い。

「二人とも逃げるぞ!!…今の行為でハッキリした…!」個性は分かんらんがさつきお前が散々見せびらかした——…!」

障子の左手に転がる2つのビー玉のようなものを見せつけて、「右ポケットに入っていたこれが常闇、爆豪だな！」

言い放った。

思わぬフラインプレーに沸き立つ緑谷と轟。

茶毘は思わず舌打ちし、取り返そうと蒼炎の準備をする。が、そ

れをコンプレスは手で制した。

その瞬間。

緑谷のすぐ側に脳無が現れ、更には黒霧もそのワープゲートを広げて現れた。

その間に、トガは名残惜しそうに緑谷に挨拶してワープホールに入っていた。

「合図から五分経ちました。行きますよ、茶毘」

「待てまだ目標が…」

まだ、達成出来ていない、と若干の焦りを見せる茶毘。しかし、奪われた側であるコンプレスは落ち着き払っていてまるで取られていないかのような——そんな、様子だった。

「ああ…アレはどうやら走り回る程嬉しかったみたいでプレゼントしよう」

種明かしをするように、仮面を外していく。

「悪い癖だよ。マジックの基本でねモノを見せびらかす時ってのは……」

仮面の下の目と口の部分だけ開いた目抜き帽が露出し、口元から出された舌には二つのビー玉の様なものが——

「見せた^トくないモノがある時だぜ？」

「口の中に隠してたのか！すげえな！キショい！」

「ま、なんとでも言えばいいさ。これもマジックの為だからな」

トウワイスのガヤに手を振って応えてから、トリックの説明を三人にする。

悔しそうに、顔を歪ませる三人を尻目にトウワイスは勢いよくワープホールへ入って行った。

「そんじゃーお後がよろしいようで…」

いそいそと、ワープホールへと入ろうとしたその時、横から一筋の光が、青山のネビルレーザーがコンプレスの仮面を破壊した。

その衝撃の拍子に口から圧縮された常闇と爆豪がこぼれ落ちる。

この瞬間を、逃すはずもない。

三人は一斉に駆け出し、障子は、常闇を掴み取る事に成功したが、

轟は爆豪を後一步のところで茶毘に妨害され、奪われた。

緑谷も駆け出す。二人に負けないぐらいに必死の形相で。足が思うように動かなくとも、懸命に、前へ、前へ。

「確認だ。解除しろ」

「つだよ。今のレーザー…俺のショウウが台無しだ！」

指をパチン！と鳴らし、茶毘の持っている玉を解除する。

そこには、白いツンツンとした髪の毛が特徴的な少年、爆豪勝己が首を掴まれてワープホールに引っ張られていた。

その様子に茶毘は満足そうにニヤリと笑うと、

「問題、無し」

と言つてそのまま黒霧のワープホールへと消えていった。

「かつちゃん！」

引きずり込まれる爆豪に向かって懸命に叫ぶ緑谷。しかし、爆豪はその様子を睨みつけながら、

「来んな、デク」

とだけ言い残し、そのままワープホールの中へと引きずり込まれていった。

「あ……」

後一步及ばず、その場に取り残された緑谷はその場にへナリ、と腰を落とすとその顔を絶望へと変えて、

「……っ…ああ……!!!」

行き場の無い怒りと、絶望と、無力感をぶつける様に、叫んだ。

☆☆

「……ん、ん……」

目を覚めます。どうやらベットで寝ていたようだ。視界いっぱい映るのは白い、見知らぬ天井。

「おうー起きたか…ええ…と響香！」

「っ！ヴィランは!!」

ガバリと、起き上がり体を勢いよく起こす。

昨日のことを思い出した。確かヴィランが林間合宿に――。

「落ち着けて。病み上がりなんだからさ」

「う、うん……でも、みんなは!? A組や…B組の人達は無事なの!？」

「……………爆豪が、攫われた」

「…………え…」

声が出ない。

同じクラスメイトだった爆豪が、ヴィラン連合にさらわれるなんて。

「…………でも、大丈夫だ! きつとプロヒーロー達が何とかしてくれるはずだ!! そう信じようぜ!!」

「…………うん。そう、だね」

ヒロフミの言う通りだ。プロに任せる…………べきだ。

ただ、爆豪が攫われたという話とは別に、響香の中では病院のベッドの横に座るヒロフミに言葉に出来ない違和感を感じた。

どこことなく、変なのだ。

例えば今ヒロフミが着ている服装。

事件が経って時間が経っているのにも関わらず林間合宿着ていた時のまま。

そのまま一緒に病院まで着いてきてくれたという可能性もあるが、あまりにもそのまま過ぎる。

シワの位置も、汚れも、髪の毛の荒れ方も。

気を失う前に見たヒロフミと全く同じ。

本来なら有り得ないはずなのだ。

襲撃事件があった時、ヒロフミはなんの行動をしていないはずがない。

むしろ、誰よりも原因収束のために動くはず。

そのヒロフミが、何も無かったような様子であること自体が、おかしく感じた。

「……………誰?」

「誰って……黒魔ヒロフミだけど？」

「（気の、せいだよな？でも、何かヘンなんだ……。どこが、何が、とかは言えないけど……。でも……。この人は、ヒロフミじゃないようにも見える……。）」

慌ててなんでもないと誤魔化し笑いをするが、不安を隠しきれない。

「（……。きつと、大丈夫だ。少し、疲れているだけだ）」

そう思いたい耳郎は「ちよつと疲れてるのかも」と言ってから横になる事にした。

「……。ああ、そうした方が良く。色んなことが、沢山あったから……」

相対。

☆☆

バーに置かれた小さなテレビ。その画面の中では、林間合宿での誘拐事件という不祥事を起こしてしまった雄英高校一年の担任二人と校長が揃って謝罪している映像が映っていた。

死柄木は嘆かわしそうに話す。

何故、ヒーローが責められるのか、と。ヒーロー達は対応が少し間違っていただけであり、たった1、2回のミスは誰にだってあると、芝居がかった動きで縛られている爆豪に語りかける。

「守るという行為に対価が発生した時点でヒーローはヒーローでなくなった。これがステインのご教示!!」

死柄木の言葉を汲むようにヴィラン連合の一人、スピナーがつづく。

「お前らは完璧でいろ」って!?!人の命を金や自己顕示に変換する異様!それをルールでギチギチと守る社会!敗北者を励ますどころか責め立てる国民——」

死柄木の勧誘の言葉は続く。

爆豪なら乗ってくれると思っているからだ。

しかし、それは大きな間違いだ。爆豪はヒーローが、オールマイトが勝つ姿に憧れた。

シンプルでいて、爆豪らしい考え。それだけは絶対に曲がる事は、無い。

「——君も、勝つのは好きだろ」

ヒーローとは、正義とはを問う戦いであり、この社会を一人、一人の考えて貰うために戦おうと、話す死柄木。

耳障りがよく、言葉だけ切り取って見ればその話は思想犯のそれである、が——死柄木の目は思想犯に共通している静かに燃えるような目では無く、どこが愉快そうな、そんな目をしていた。

あらかた、話を終えて爆豪の様子を見てみるが、その表情には変化は無くただじつと死柄木に向き合うのみだった。

「(……取り敢えず、今は黙って聞くとして……隙がどつかのタイミングで必ず来る。そこを狙ってまずはあの手男をブツ殺す)」

冷静にしかし戦意を滾らせながら思考を回す爆豪。

「荼毘、拘束外せ」

「(——来た!)」

「暴れるぞ、こいつ」

尚も表情を変えない爆豪にアプローチを変えざるに拘束を外すようにと命令する死柄木。一方の荼毘はその考えはあまり得策とは思ってないようで、警告する。

「いいんだよ。対等に扱わなきゃな。スカウトだもの……それにこの状況で暴れて勝てるかどうか、分からない男じゃないだろ? 雄英生」

周りを見て見れば凶悪なヴィランばかり。多勢に無勢で勝てる筈もない。

雄英生、の部分だけ少しだけ声を強めて語りかけることで威圧する。

荼毘は少し考えたあと、襲われるリスクを考えて近くに居たトゥワイスに鍵を投げ渡して代わりに拘束を外すようにと命令する。

「はア! 俺?! 嫌だしん!」

否定の言葉を言ったのにも関わらず、拘束を解くために爆豪へと向かうトゥワイス。

「強引な手段だったのは謝るよ……けどな」

コンプレスが、爆豪を引き込む為に最後のひと押しをしようと語りかける。

「我々は悪事と呼ばれる行為に勤しむただの暴徒じゃねえのを分かってくれ」

カチャカチャ、と音を立てながら拘束を外し——ながら、爆豪の指に文字を書き始めるトゥワイス。

『にがしてやる』

「……………」

何が目的か。聞かずに次に書かれる言葉を待つ爆豪。

「君を攫ったのは偶々じゃねえ」

『あばれるな』

「……………」

拘束が解ける。

爆豪は俯いたままのトウワイスと自分の腕を見比べる。

「ここにいる皆は事情は違えど人に、ルールに、ヒーローに縛られ…苦しんだ。君ならそれを——…」

「くつくつく……………」

死柄木は椅子から降りてから、歩み寄り孤独から救おうとするように爆豪に近付いた瞬間、爆豪の口から笑いがこぼれる。

「……………何がおかしい？」

「いやア…黙って聞いてりやダラツダラよオ……………馬鹿は要約出来ねーから話が長え。要は「嫌がらせしてえから仲間になってください」だろ!?無駄だよ…俺はオールマイトが勝つ姿に憧れた。誰が何を言つてこようが、そこアもう曲がらねえ」

交渉決裂。大胆不敵な笑みを浮かべ啖呵を切る爆豪。そして—

「にしてもヴィラン連合…随分と杜撰じゃねえか。こんなネズミに潜り込まれるたアな？」

「……………なんだって？」

爆豪から聞き捨てならない言葉が飛び出してきた。

ネズミ、つまりそれはヴィラン連合の中に——

「スパイがいるってことかよ!!?誰だ!?俺だ！」

「なアトウワイス…。いつもの狂言なら後にしてくれねえか?事情が変わっ——」

うんざりしたように話す死柄木がトウワイスに近づく——の
をコンプレスが止めた。

「…オイMr. なんで止めた？」

「いやー、コレさ俺いつ言おうか迷ってたんだけどね。このトウワイス。偽物、だよな」

「なんだって?!」

驚きの声を上げるスピナーとマグネの二人。トガは興味深げに
していて、黒霧は顔を覆う霧を深めて居た。

死柄木は尚も怪訝そうにしており、コンプレスは探偵が種を明か
しをするように言葉を続けた。

「マジシヤンの習性って言うのかな、行動の隅々まで観察してしまう
癖があるんだわ。んでもってこのトウワイスもどきは声と体はすつ
げー似せてるし、話し方もモノホンそっくり。だけど：微妙に大袈裟
すぎんだよ。動作がな」

コンプレスが語っている途中もトウワイスは黙ったまま、ゆっく
りと立ち上がり死柄木の方へと向きなおり、爆豪を庇うように立つ。
「本物のトウワイスの動きは狂人そのものだが、このトウワイスは違
う。こいつは狂人を真似てる人間の動きだ」

「……ああ、今のでわかった。誰だ。お前は。本物トウワイスはどこ
へやった」

「……………」

まるで、ヒーローのように爆豪を背に立つトウワイスの動きを見
て死柄木は全てを察した。

そして、臨戦態勢を取り今度は本気の殺気を込めて睨む。

しかし、トウワイスは喋らない。

さっきまでの饒舌が嘘のように、言葉は紡がれない。

だが、それが答え合わせとなり一拍遅れて他の連合のメンバー達
が構える。

緊張が張り詰める。

得体の知れない仲間の皮を被るアンノウン。

その一挙手一投足に注目が集まっている。

「ターダイマー!!オヤツを買ってきて……アリア?取り込みチュウ
?」

空気をぶち壊すように、ビニール袋を掲げて入ってきた金髪の
フードを被った少女——ヴィラがやってきた。

一同の視線がヴィラへと集まる。

その瞬間。今まで沈黙を守っていたトウワイスが動く。

「――役者は揃った。じゃア行こうか」

トウワイスの声でいて、そうでない声。

彼を良く知る人物であるならば、絶対にしないであろう話し方。

いきなり雰囲気が変わった偽物に対してヴィラン連合も、トウワ

イスの指示に乗った爆豪でさえも、警戒するように、睨む。

「――アハッ」

ただ一人だけ、正体に気付き満面の笑みを浮かべる。

「皆々様、上をご覧下さい。」

――地獄行きでございます」

全員に訪れる感覚。

天井、いやそれよりも遙か上空からの違和感と、何か不味いものが来ているという直感。

黒霧が急いでワープゲートを開こうとするが、もう遅い。

六本の指のある大きな手が、バーのあったビルごと地獄へと送り込まれた。

☆☆

「なんだ……あれ……」

爆豪勝己奪還チームの一人、エッジショットが我を忘れて現実離れしたその光景を眺めていた。

六本指の巨大な手が、突入予定のビルを呑み込んだ――いや、

抉りとつたとも言っていない。

「……何が目的で……どこへ……」

誰が言ったか、ただこの場にいる全員の心を代弁していた。

誰も彼もが呆然としている中、一人だけ笑みを深めているスーツ

姿の女性――マキマが少し離れた所で観察していた。

『こちらレディ・ナガン。ヴィランの影は跡形もない』

『こちらホークスも同じくー。無事全員送れたようだね』

「了解。帰投していいよ」

耳のインカムからの報告に返事を返すと、踵を返して本部へと戻ろうとした時、後ろから「おい！」と声を掛けられた。

「あれは、なんだ!!！」

「マキマ部長、答えてくれますか!？」

同時にやってきたエンデヴァーとオールマイトに詰め寄られる。

マキマは少し離れてからニコリと笑い、誇るように言った。

「あれが私たち公安の言っていた切り札です」

「しかし——」

「あの得体の知れんものを切り札と？ふざけるのも大概にしろ！いきなりでしゃばって来たかと思えば——」

オールマイトの言葉を遮るようにエンデヴァーが体に纏っている炎をメラメラと燃え上がらせ、怒りを露わにする。

オールマイトも言いたいことを全部言われたものの、途中からうんうんと頷きながらエンデヴァーの言葉を肯定していた。

「申し訳ありませんが——機密ですので」

「だ、だが！現に救出対象である爆豪少年もっ……」

「機密、ですのぞ」

ぴしやりと言葉を返すマキマ。しかし、納得のいかないオールマイトは食いさがらうとするが結果は変わらず、今度はさらに語気を強めて言われ思わず口ごもってしまった。

険悪な空気が流れ始めたその時、ヒーロー達に緊急連絡が入る。

「——候補にしていたポイントの一つに主犯と思われるヴィラン出現!!既に戦闘が開始されており状況は劣勢……!!被害は壊滅的です!!」

オールフオーワンだと直感したオールマイトはこの場に相手になるのが自分しかないと分かると「シットー」と言いながら報告のあった場所へと超スピードで向かっていった。

当然エンデヴァーも続く……つもりだったのだが、未だに納得出来

ずにさらに食い下がろうとする、が。

「我々は内閣より独自行動権及び秘匿命令が課されています。何を言われようと、どれだけ積まれようと機密ヒロフミの事は言えません」

と、毅然に返し、そのまま車に乗り込みその場を去っていった。

エンデヴアーはどうしようもない苦味と、苛立ちに舌打ちしてから、きな臭くなって行く公安に対して不信感を募らせるのであった……。

ヒーロー、参上。

☆☆

なにも無い草原。風すら無く、そこには緑の大地が続いていた。空を見てみれば無数のドアの大群。それなのにも関わらず昼間と変わらないくらい明るい。

されど、地獄。一見平和そうに見えて、悪魔共が巢食う地の底。その異常な光景にヴィラン連合、そして爆豪すらも圧倒される。ヴィラン連合の正面には偽トウワイスが立っており、その後ろに爆豪が居る。

「……何者だ…テメエ……」

「…俺が何者か？別にどーだっていいだろそんな事」

呆れたように首を竦める偽トウワイス。

「そーだな…俺の事はアンノウンとでも呼んでくれよ。名前は大事だからな」

軽い口調で、自己紹介でもするように名乗った。

死柄木はバレバレの偽名に舌打ちをしながら、注意深くアンノウンを睨みつけていた。

「本物のトウワイスはどこへやった」

「あー…返すの忘れてたわ。ほれ」

パチン、と指を鳴らすと上の扉の一つが開き、その中からスーツを剥ぎ取られ、頭に紙袋を被せられたままの状態のトウワイスが落ちてきた。

急いで向かうスピナーとマグネ。トガは興味深そうに辺りをキョロキョロと見回し、茶毘はいつでも蒼炎を放てるように待機していた。

一方のヴィラはと言うと。

「アー…実家に帰ったキブン？どちらにせよ、トットとでたいネ」

居心地悪そうにしながら頬を掻いていた。

最初の指の動きはゆつくりと、スローペースで掻いていたが、時間が経つに連れてそのスピードは早くなって行く。

「アンノウン。お前を殺せば——ここから出られる、その認識でいいか？」

茶毘が確認するようにアンノウンに聞く。アンノウンは頷くが、「殺せるもんならな」と言って煽り返す。

「めんどくせエ…。やるぞ、お前ら」

死柄木が首を回しながら一歩、二歩、三歩と歩みを進める。

死柄木に引かれるように、他のヴィラン連合のメンバーも各々の武器や個性を準備し、臨戦態勢のままアンノウンへと近づく。

そして——

「掛かれっ!!!」

スピナーの号令と共に駆け出した。

統率もバラバラな突撃にアンノウンはそのマスクの下でほくそ笑んだ。

「と、その前に…目潰し！」

「ぐあっ！な、なに…!?!」

戦闘開始する直前で後ろにいる爆豪の意識を借りとった。

アンノウンとしては見られては困る戦いだからだ。

「数は…五人。女の子の方は…ちっ、そっちに残ったか」

トガは参加せずに後方でトウワイスと共に待機。ヴィラは様子見といった状況であった。

「余所見してる暇アねえぞ!!」

アンノウンが状況を確認している間にスピナーが目の前に飛び出してきた。

巨大な大剣を脳天目掛けて振り下ろす——が、遅い。大剣よりも先にアンノウンの拳がスピナーの体を貫き、吹き飛ばす。

スピナーはクルクル回転しながら後ろへ吹き飛ばされる。その隙にマグネの磁石がアンノウンを捉え——なかった。

やられる前にやる。磁石で固定されるよりも先にマグネを蝸の足を用いて捕まえて、地面に滅茶苦茶に叩きつけた。

「ヒーロー様つてのは大変だよなア!!?後ろにいる足でまといも守らなきやいけねえんだからよお!!」

マグネとスピナーでの戦闘を見た死柄木と茶毘とコンプレスはヒーロー、という人間の性格を利用して庇っている爆豪の方を狙った。が、そう易々と渡す訳は無く。

圧縮しようとしたコンプレスの腕をへし折った後に蒼炎でアンノウンを攻撃しようとした茶毘に投げつけ、自爆させた。

「やらせる訳ないんだよなあ…」

「ならコッチはどうだ?」

「もちろん。お前も含めて、だ」

茶毘の蒼炎によって燃える草むらから生まれる煙を利用してアンノウンの側まで近寄る死柄木。そのまま顔を五指で崩壊させようとした瞬間、アンノウンは大きく体を仰け反らせ躲し、状態を起こしながら回し蹴りの要領で死柄木の腹部を蹴り飛ばす。

「ぐはっ…!!」

あまりの痛みと衝撃から血を吐く死柄木。

追撃に入ろうとしたアンノウンだったが、黒霧によって別地点へとワープさせられてしまい、遠くへと投げ出された。

しかし、それも時間稼ぎにしかない。

なぜならば、アンノウンを倒さなければならぬからだ。倒さなければ——出られない。

この、地獄から。

「くっそ…強すぎんだろ…」

「その上…ホラ、早い。もう最初の位置にまで戻っちゃった。おじさん嫌になるよ」

「死柄木弔。ここは一度引くべきでは…」

「逆に聞くが黒霧、逃げられるとも思ってたのか?」

「確かにね。ここはアンノウンの庭、どこかへ逃げるにしても捕捉される可能性があるわ」

服の汚れを払いながら立ち上がり、すぐそこにまで迫ってきたアンノウンと対峙する。

ヴィラン連合は体制を立て直してから改めてアンノウン目掛けで突撃する。

「イヤー、強いネエ…：この様子じゃあワタシも行かなきゃ、カナァ？」
倒れているトウワイスの隣で殴り飛ばされたり、叩きつけられたりしているヴィラン連合のメンバーを見て呟く。

「トガちゃんダツケ？イカないノ？」

「うーん…：なんだかあの人とやるのは気が向かないのです。なんだか私知っている人と雰囲気似てて…」

「ナンダソリヤ」

呆れたように肩を竦めるヴィラとうーんと唸るトガ。

深く被っていたフードを取って、アンノウンの元へと、ヴィラン連合の助太刀に入ろうとした瞬間。

ヴィラを一瞬見たアンノウンが何か呟いた。

「……………」

その行動に首を傾げながらも加速を開始しようとしたその時。

「私を、見ろ！私を、恐れよ！私を、讃えよ！」

突如として響き渡る声。

その声は凜としていて、自信に満ち、朗々と謳うように語り出す。

「その者が助けを求めたのならば！」

ひとつの光が、空中のドアから落ちてくる。

「その者が悲しみに暮れるのならば！」

そして、その光は収束しやがて人型へと姿を変える。

「救けてみせよう、この拳で!!」

光が収まる。そして、その声の主の姿が現れる。

青いピッチリとしたスーツにヒーローのマントのような長く赤い髪。その目は黄金の輝きを放ち、まるで闇をも見通してしまう程に透き通っていた。

「我が名はヒーローの悪魔!!」

——正義を為す為、参上した」

ニヤリと不敵に笑いながら、ヴィラの前に降り立った

☆☆

ヴィラン連合がビルごと地獄へと送り込まれた少しあと。

外界のとある工場、いや、たつた一瞬で跡地となつてしまったその場所での世界における最凶にして最恐の巨悪が、この場所を捜索しに来たヒーロー達をほんの瞬きの間に、蹂躪した。

「——ここにも居ない。せつかく弔が自身で考え自身で導き始めたのに……思わぬ所で邪魔されるとはツイて無いね」

その工場跡地を囲うようにある壁の傍で爆豪救出の為に来たいた緑谷、切島、轟、飯田、八百万の五人は、その圧倒的な気迫に——振り向くことすら、出来ない。

『君はいつか奴と……巨悪と対決しなければならぬ……かもしれない』

いつだったか、オールマイトが緑谷に言った内容を思い出していた。

「(弔…死柄木のことだ…!!なんだよ…ウソだろオールマイト…まさかじゃああれが……オールフォーワン……!!)」

「さて、やるか」

幸いというべきか、オールフォーワンは緑谷達には気づいていなかった。

しかし、だからといって緑谷達に出来る事は無い。オールフォーワンのその気迫は壁越しにですら、死を錯覚させたのだから。

たとえここに爆豪がいたとしても、アリの象に挑むような物。実力差がありすぎる。

ただ、五人は体を震わせるだけ、ヒーローを待つ民間人の様に。

☆☆

体が、足の爪先から震え上がり、止まらない。

痛みが身体中を駆け巡り、呼吸すら辛い。

意識は朦朧とし、今にも気絶しそうだ。しかし、ここで折れない、めげないのがヒーロー、ベストジーニストだ。

「さすがN.O. 4!!ベストジーニスト!!僕は全員吹き飛ばしたつもりだったんだ!!」

拍手しながら、ベストジーニストの健闘を称え、ゆつくりと歩みよるオールフォーワン。

「皆の衣服を操り瞬時に端へ寄せた!判断力・技術…並の神経じゃない!」

なんとか、体を起こそうと踏ん張りながらオールフォーワンを睨むベストジーニスト。

「……………いつ…」

作戦会議で、オールフォーワンについての事は聞いていた。ヴィラン連合のブレーンにして、その強さはオールマイトに匹敵、しかし狡猾で用心深い。だが、それ故に己の安全が保証されぬ限り表には出ない。そう、聞いていた。

だが…現実は違った。

「(話が違う…!!)」

しかし、しかし、ベストジーニストは諦めない。話が違うからなんだ?一流はそんな物を失敗の理由には——

反撃を試みるベストジーニスト。しかし、最後のものがきを嘲笑うようにオールフォーワンは攻撃の素振りすら見えない速さで、ベストジーニストを屠った。

「相当な練習量と実務経験故の“強さ”だ。君のは…いらぬ。——
—— 弔とは、性の合わない“個性”だ」

あっさりと、されどはつきりオールフォーワンは、ガクリと意識を飛ばすベストジーニストを無価値だと断じた。

「……………ふむ。転送も使えない、か。となると個性すら隔絶する場所に送られた…?厄介だな」

ベストジーニストを屠った後に、転送の“個性”を使用して見たものの、反応が無いことから異空間のような場所へと送られたのだ、と推察したため息を漏らす。

暫く考察していると、空から一つの影がオールフォーワン目掛け飛んできた。

高速で飛んできたヒーロー…オールマイトはオールフォーワンと激突する。

凄まじい衝撃と風が、激突とともに巻き起こる。

「全て返して貰うぞオールフォーワン!!」

「それは僕の台詞だよ。オールマイト」

宿敵は相對する。

世界を揺るがす巨悪と、平和の象徴と呼ばれるヒーローの決闘が、今始まる。

☆☆

打つ、打つ、打つ。しかし、全て躲され、正確無比な一撃を叩き込まれる。

アンノウンは当たらず、やけくその攻撃も見切られた上にカウンターとして重い一撃がヴィラン達を襲う。

それだけでは無い。

ヴィラと戦っているヒーローの悪魔を名乗る少女は、ヴィラの確率操作によって当たらなくなっているはずの攻撃が全て当たっている。

影に潜ろうとすれば、首根っこを捕まれ投げ飛ばされる。面と向かえば卓越した身体能力から放たれる一撃を躲すことすら出来ずに全て食らってしまう。

「グッ………！ヒーローの!! 貴様はア!!! いつもいつもワタシの邪魔オオツ!!!」

「何度だって邪魔する、さー!」

「グフツウ!!」

せめて一撃でも、と朦朧とした体に鞭を打ち蹴りを叩き込もうとしたが、ヒーローの悪魔の手によって防御され、カウンターとして同じところにヴィラの顔面目掛け蹴りが飛んでくる。

足搔く。足搔く。意地汚く、泥臭く。

死は怖くない。だが、ここで、この相手に負けるのだけは嫌だ。だが、届かない。

勝利のための確率を手繰り寄せようとしても、嘲笑うようにそれは書き換えられる——自身の敗北という結果に。

ヒーローの悪魔は負けない。死なない。いや、負けてはならない。死んではならない。

助けを求める人がいる限り、ヴィランがこの世にいる限り。

敗北の運命や、死の運命すら超越し、ヴィラン敵を倒す。

それが、ヒーローの宿命故に。

「そろそろ限界か……」

アンノウンは吹き飛ばされ続けるヴィラを尻目に、迫り来るヴィラン連合をいなしながらとかる座標まで誘導していた。

「ぐっ……なんだよコレはっ……」

苦悶の声を上げる死柄木。

アンノウンの代わりに相手にさせていた悪魔、地獄の悪魔によってヴィラン連合はすでにボロボロとなっていた。

アンノウンとしてはここでヴィラン連合を倒すつもりは毛頭無い。なぜならばそれは原作主人公の仕事だからだ。

本来なら自分は物語に存在しない異物。故に自分はしゃばり過ぎないようにしている。が、ヴィラン敵の悪魔は別だ。自分が解き放ってしまったという責任がある。

だからこそ、ここでヴィラを討伐する。

確実に殺し、自分の支配下に置く為に。

「——ヒーローの……ここだ!!」

「了解!!」

アンノウンが叫び、ヒーローの悪魔が呼応する。

「(今ここで、現世に戻る!!)」

「ッ!!揺れた!?!」

「地面が割れてるっ!!落ちるぞっ!!」

「……クソっ！」

大地が割れる。

それと同時にヴィラはヒーローの悪魔によって空へ高く蹴り飛ばされる。

「カ、ハッ………！」

地面が割れ、空をおおっていた無数のドアが遠のいて行く。

足場が安定せず、その場にしがみつくとヴィラン連合と、爆豪を抱えるアンノウン。そして、次の瞬間――

「っ!!? 吊!」

「爆豪少年!!?」

オールフオーワンとオールマイトの所へと、現世に戻って来た。た。

☆☆

現世の遥か上空にヴィラは投げ出されていた。

「(身動きが……取れないっ!)」

蹴りあげられた衝撃と痛みから何も出来ずに、ただ落下していくだけであった。

その刹那。

ヴィラの上に影が差す。

「っ!!?」

悪寒を感じ、急いで振り返るとそこには最後の仕上げと笑うヒーローの悪魔が居た。

「ツソレデモ!!ワタシは負けナイ!」

「いや君は負ける。ここで死ぬんだ。それが、ヒロフミが決定した事だ」

ヴィラが下でヒーローの悪魔が上にいる状態で、位置的にはヒーローの悪魔が有利だ。

「……これでおしまいだ」

ヒーローの悪魔の足が輝きを放つ。

それは夜空に浮かぶ一等星のように辺りを美しい光が照らす。

「ア、アアアアアアアアアア!!!」

足掻き、叫ぶヴィラ。それとは対照的に正確に、冷静に狙いを定めるヒーローの悪魔。

そして――

「――正義執行!!」
ジャッジメント

ヒーローの悪魔の右足が、ヴィラの体を穿ち抜いた。

ヴィラは苦悶の表情を浮かべ、その体を塵にと変化させた。

崩壊していく体。だが、ヒーロー悪魔の足の輝きによってまるで星屑のように輝き、流星のように下へと降り注いだ。

めちやくちや

☆☆

「……何が起こったのか分からないのだけど…ひとまず無事で良かったよ。弔」

労るように、語りかけるオールフォーワン。

「先生…ソイツ……」

「ああ、我が宿敵——オールマイトさ」

「よそ見している暇なんて無いぞ!!」

吹き飛ばされたオールマイトが超スピードでオールフォーワンに急接近し、SMASHを叩き込む。

天候すら変えてしまう程の威力を持った拳を真正面から掴み、複数の個性を発動し再度投げ飛ばす。

「——さて、何があったのか教えてくれないか？」

「……アイツが……あのトウワイスの格好をしたやつに潜り込まれて…何の個性か分からないが…草原みたいな場所に送り込まれたんだ…」

フラフラと立ち上がるアンノウンを指差しながら、死柄木は先程起きた事を説明する。状況を把握したオールフォーワンはもう立っているのがやつとな状態のアンノウンに向き会う。

「弔がどうやら世話になったようで…申し訳無いけど僕は今君の相手をしている暇は無いんでね。ヴィラン連合は君に随分苦戦させられたようだけど——弱ってる君なら勝てるだろう」

一瞥してアンノウンの状態を判断し、無常に判断した。

確かに、今の今まで大量の悪魔の行使により疲労は限界に近い。地獄で圧倒していた時とは違い、今にも倒れてしまいそうだ。

しかし、ヒーローとしての気概だけで爆豪の前に立ち続けた。

「……卑怯だなアおい！サシでやろうぜヴィラン連合!!」

「卑怯でこそヴィランだからな。お前の提案は呑めない」

「たはー…道理だな」

ヤケクソ気味に提案してみたが、結果は当然のように却下。アンノウンは一息ついて呼吸を整えると、覚悟を決める。

状況は彼にとって絶望的。

個性は使えず、疲労による慢性的な頭痛のせいで割れるように痛む。

だが——その目に諦めの色は一切無い。

「時間を稼いで逃げれば万々歳。爆豪だけでも逃がすことが出来ても万歳。一番ダメなのはここで死ぬ事かな」

ゴキ、ゴキと指を鳴らしながらゆっくりと取り囲むように迫るヴィラン連合を見回す。

「モテちやつて困るなあー。でも、俺ってばソツチの趣味は無いんだよねー！」

「調子に、乗るなー！」

アンノウンの挑発に最初に乗ったスピナーが大剣を水平にスライドさせながら斬らんと迫るが、その場で跳躍して大剣から逃れると、そのまま上に乗りスピナーの頭を蹴り飛ばす。

「ガッ……！」

呻き声を上げて、痛みに悶えるスピナー。

アンノウンは軽やかに大剣から飛ぶと、倒れている爆豪の前に着地する。

意識まで飛ばす所までは行かなかったものの、フラリ、と後ろへ下がる。

それを見たアンノウンが追撃とばかりに腹へ鋭い突きを放つ。

勢いと衝撃で吹き飛ばされ、強制的に地に這うこととなるスピナー。

「オイオイこれで弱ってるのかよ……」

「個性を使っていない所を見るに弱ってること自体は確かだろうが、コイツ…素で強いぞ」

「はーあ。トリックもあの場所で全て使っちゃったし…打つ手が限ら

れてきちやうねコレは……」

数秒の戦闘で、まだ戦える事を示したアンノウンのヴィラン連合の面々は戦々恐々としていた。

足でしっかりと地面を踏みしめているはずなのに視界が揺れているように見える。

余裕を見せる為にさつきは無茶をして戦ったのだが——…限界だ。

「くはっ…オイ、ヒーロー強がったな？今のスピナーとの戦いでもう限界だろ？あんな大規模な個性を展開した後だもんなあ？当然息切れもするよなあ!!」

目敏く、アンノウンの異常に気付き、嘲笑を上げる死柄木。

「ハア…ハア…ハア…そうだな。もう、俺ア限界だ。——だが、Plus ultra…ここで限界を越えてこそ…ヒーローだ。だろう？爆豪勝己」

息も絶え絶えにしながらいけるアンノウン。

「……ああ。ぶん殴ってきた事は気に食わねえが…そこには賛成だな」

「ツチ、厄介なのが起きやがった」

——そこには気絶から復帰する爆豪が居た。

「お前には色々聞きてえが…ひとまずそれは後だ。ここを切り抜けるぞ」

「…はいはい」

気だるげに、しかし先程とはしっかりと立って返事するアンノウン。

そして——同時にヴィラン連合へと突撃した。

☆☆

爆豪を助けに来ていた緑谷達はアンノウンの善戦、そして爆豪の復帰により——絶望的かと思われた救出作戦が現実味を帯びてきた。

背中越しに聞こえる破壊音。

オールマイトとオールフオーワンによる決戦が災害の如く街を駆け巡る。

——直後、大地が跳ねてしまったのかと誤解する程の衝撃が鳴り響く。

「空気を押し出す」＋「筋骨発条化」^{パネ}「瞬発力」×4 「臂力増強」×3
…この組み合わせは楽しいな…増強系をもう少し足すか…」

「オールマイトオ!!!」

「うろたえんな!!あの肉ダルマはちよつとやそつとじゃビクともしねえよ!」

「——分かってるじゃないか。心配しなくてもあの程度じゃ死なないよ。だから…ここは逃げる弔」

黒く変色するオールフオーワンの指が少しづつ伸びていき、先程の衝撃で気を失った黒霧に突き刺さる。

「黒霧、みんなを逃がすんだ」

突き刺さった体から一斉に黒い霧が噴出する。

「(マズイマズイマズイ!!!逃げられる——!!)」

これでは逃げられる。爆豪を連れ去られたまま。今は抗えてるとは言ってもジリ貧だ。いずれ捕まる。そうなれば最悪だ。なんのためにここまで自分たちが来たのか分からなくなる。

「行こう死柄木!あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めてくれる間に!」

コンプレスが、アンノウンと爆豪の戦闘によって負傷し、気絶した茶毘を林間学校でやったように圧縮し、小さいビー玉状に変化させる。

「——コマ持ってよ」

「めんっ…ドクセー」

「ハア…ハア…」

スピナーとマグネが立ち塞がる様子をアンノウンと爆豪の二人は睨み付ける。

「(オールフオーワンが邪魔してかっちゃんを助けられないんだ…!その隙に連合はかっちゃんもろとも逃走しようとしてる!)」

緑谷は冷静に分析しながら様子を見つつ、冷や汗を浮かべていた。

「(かつちゃん達も囲まれて逃げられる状況じゃない……)」

反転、爆破、回避、爆破。

回避、反撃、回避、回避。

分かりやすく防戦一方で、苦しい展開が続く。

思うように戦えないながらも、何とか意思疎通と即興のチームアップだけで立ち回って来ていたが――

「――ゴホッ……」

ずっと前から戦い続けていたアンノウンの限界が来てしまった。

咳き込み、膝から崩れ落ちるアンノウン。これをチャンスと見た連合は一気にアンノウン目掛け畳かけようとするが、これを間一髪で爆豪の爆破によって距離を取らせる事に成功した。

「なんだよ、もう限界か？偉そうにPlus Ultraだと言っておいてよお？」

煽るように爆豪がアンノウンに話しかける。

「はっ、冗談……ゴホッ……だろ。問題……無い」

ゆっくりと立ち上がり、強がって見せるが……実際、限界などとうに越えている。それでも、アンノウンは立って見せた。

更にその先へと、進むために。

「(顔も分からないが……!!敬意を表すぞ！名も無きヒーロー!!)」

オールマイトはその様子を見て、アンノウンを一時的に信頼する事にした。彼になら爆豪を任せられる。ならば自分がすべき事は、オールフォーワンの足止めだ!!

「(……キツイ。痛い。苦しい。でも、でも、止まらない。ここまで来たんだ……！止まってなんか……)」

ガクガクと震える足に喝を入れ、しっかりと立ち苦しい呼吸を大きく深呼吸して整える。

そして、拳を強く、強く握りしめる。

「――止まってなんて、いられねえよなあ」

駆け出したスピナーが迫る。爆豪が爆破の推進力で空を飛びながら迎え撃とうとした所をトガとマグネが狙っていたかのように飛び出す。

「ツチー！」

「……ツらあ!!」

間に割り込むようにアンノウンがマグネの得物とトガの得物を受け止める。

「随分と……力が弱ってるようねえ!!」

「言っ……てる!!」

マグネは力で押し込めると確信し、そのまま全体重を得物にかける。

ズン!と足が地面にめり込み、ぐぐもったような、苦悶の音がアンノウンからこぼれる。

潰す。個性も使わずに、ただシンプルに。

ヴィランらしく、いたぶって潰す。マグネの中にあるのはただ、それだけであった。

爆豪も助太刀に入ろうとしたが横入りしてきたスピナーとコンプレスにより、阻まれてしまう。

「ぐ……ああ……!」

「ホラホラア!!このまま、ペしゃんこに潰れてしまいなさい!!」

——嗚呼、ここまでか。

「させねエよ」

一発の発砲音。遙か遠くのビルの屋上から、マグネの足を、まるで糸に引かれるようにして正確無比に貫いた。

「痛ッ——」

バランスを崩すマグネと、急に上からの圧迫が無くなり同じように体制を崩すアンノウン。

トガは嫌な予感を察知し、すぐに後方へと飛んだ。

倒れ込むアンノウンはそのまま地面に――

「よく、頑張ったね。後は――私に任せて」

横からアンノウンを抱きとめる。

「ああもう、次から次へと――今度は誰かな？」

オールマイトと取っ組み合い、そして吹き飛ばしながら不機嫌そうに問いかけるオールフォーワン。

「こんにちはオールフォーワン。貴方の企みを阻止しに来ました」

「私の名前はマキマ」

「覚悟してください」

「弟を傷付けられて怒らない姉なんて居ないですから」

脱出

☆☆

無表情、マキマが今何を感じているのかは分からないが、その瞳は絶対零度。

纏う雰囲気は圧倒的なまでの強者のそれであった。

オールフオーワンは無視出来ず、油断のならない相手として認識したが——今はオールマイトとの一騎打ちの真っ最中。余計な意識を割いている暇など無い。

「——早く逃げるんだ、弔。その子を持って」

若干の焦りを込めて、死柄木に逃げるようにと話し掛ける。

「……んな無茶な……」

とはいえ、実力差を鑑みることが出来ない程死柄木は愚かでは無い。目の前のマキマから放たれる威圧感によって足が進まない。進めない。

爆豪の前にはマキマがいる。

隙だらけだ。人数的にも手負いのアンノウンが向こうにいる限り、相手は底いながら戦わなければいけないだろう。

状況だけ見れば余裕。だが——一戦交えなければならぬ相手の可能性を無視した話ではあるが。

「……どう見ても」詰み」だろこんなん……」

「——しかし、困りましたねえ……これじゃあオールマイトの邪魔になっちゃいます……」

「あぁ？」

死柄木がボヤキ、わざとらしく話すマキマ。

「彼にはオールフオーワンを倒して貰わねばならないといけないのですが……私一人では二人を担いで行くなどできそうにないですね……いや、弟の方は死んでも担いでいきますが」

抱えるアンノウンの頭を撫でながら、マキマは死柄木たちヴィラン連合の方を見る。すると、慌てて構えだす。

マキマの行動一つ一つに、ヴィラン連合はいちいち注意しなければならぬ。既にこの場の空気はマキマによって支配されていた。

「そう——他の勢力が彼を救いに来ない限り、私と、オールマイトの行動は著しく制限されてしまいますね」

僅かだけ壁の方へと視線を向けてからヴィラン連合に向き直る。

まるで誰かに語りかけるように、マキマは独り言を呟いた。

「さて、それまでは不良少年達の相手でもしよかな」

悪魔が迫る。薄い微笑みを浮かべて。

☆☆

一際大きな破壊音が鳴り響く。

一方ではオールフォーワンとオールマイトが互角の決戦を。

もう一方ではマキマがヴィラン連合に対して蹂躪を。

流星は平和の象徴とまで謳われたオールマイトの宿敵オールフォーワン。互角以上の戦いを繰り広げるが、その内では焦っていた。

マキマの存在が原因だ。

彼女はオールフォーワンから見ても強すぎた。今のヴィラン連合では太刀打ち出来ない。

急いで片付けてそちらへ向かいたいが——目の前のオールマイトがそれを許さない。

継承する個性により何代も蓄積されてきた個性ちからが自分を打ち倒さんと迫ってくる。

とてもじゃないが簡単に勝てるとは思えない。

苛立ち任せに個性を複数同時発動させて、真正面から迫る拳を迎え撃つ。

戦闘は更に激しくなる。

☆☆

「……………飯田くん。皆！」

壁を挟んだ所で、緑谷が轟、飯田、切島、八百万に思い付いた策を話そうと、呼びかける。しかし、様子から察した飯田は止めようとするが、緑谷は策があると言う。

決して戦闘行為にならず、自分たちもこの場から去れる、それについて、爆豪を救い出せる方法が。

自分たちも戦うのか、と委員長として止めようとした飯田であったが、そうではないと知ると一度、話を聞いてみることにする。

「でもこれはかつちゃん次第でもあって……………」

一度、そう前置きしながら緑谷は麗日が言っていたこと、そして爆豪が連れ去られる際に言われたことを思い出す。

「この策だと多分……………僕じゃ……………成功しない。だから切島くん。君が成功率を上げる鍵だ」

自分の名前を挙げられた事にはつとまって緑谷を見る切島。

「かつちゃんとのあの女性は相手を警戒して距離を取って戦っている。タイミングはかつちゃんとヴィランたちが二歩以上離れた瞬間」

緑谷の口から語られる策。それはやってみる価値は十分あるものであった。

「飯田さん……………」

「…バクチではあるが…状況を考えれば俺たちへのリスクは少ない…何より成功すれば全てが好転する…」

少し、考える。

そして、頷き、決断する。

「やろう」

飯田の決断が決め手となり、爆豪救出のために、動き始める。

「っらア!!」

爆破が迫り来るヴィラン——スピナーを襲う。

流石に戦い続けてきて、威力が弱まってきたのか吹き飛ばす程の力は無い。

煙の中から飛び出て、意識を奪おうとするが——横から鋭い横槍が割り込む。

——マキマだ。

迫り来るヴィランを赤子の手をひねる様に、蹂躪していく。

助けられた事に関して、謝意を述べる事無くそのまま数メートル離れた位置をキープする爆豪。

何となくだが、いまここにいる誰よりもマキマの事が信用できないと感じたからだ。

ここにいればオールマイトの邪魔になる。だからこそなるべく早くこの場から離れなければいけない。

それは分かっている。分かっているが、ヴィラン連合がそれを許さない。

さすがに、焦りの表情が浮かび出す爆豪。

なにか、なにかここから脱出する手は無いか——……

突如として、建物を囲う壁から突き破るような音が爆豪の後ろから鳴り響く。

直後登り坂になっている巨大な氷壁が、壊された壁の方向から天へと高く高く形成されていく。

そして、緑谷のフルカウル飯田のレシプロによって凄まじいスピードで氷の滑走路を駆け上がる。

高く高く。空へと飛び上がる。

騎馬戦の騎馬のように緑谷と飯田が下で切島の土台となり、一気に戦場の上空を駆ける。

これにオールフオーワンがいち早く察知し、攻撃を試みようとするがこれをオールマイトが阻止する。

『僕じゃダメだ。轟くんでも、飯田くんでも、八百万さんでも……入学してから今までかっちゃんとは対等な信頼を築いて来た——』

切島が、地上にいる爆豪に向かってめいっばい手を伸ばす。

『——君の呼びかけなら!!』

大きく息を吸い、そして――

「来い!!」

大きく、よく響く声で爆豪に向けて叫ぶ。

一瞬の、逡巡。初めて止まった爆豪に死柄木が迫るが、これをマキマが阻止。横面を蹴り飛ばされることにより吹き飛ばされる。

何故、ここにいるのか。何故、来るなど言ったのに来たのか。なんてものはこの際どうでもいい。オールマイトが戦い辛い。自分のせいで窮地に立たされている事は分かっている。だからこそ、この場から離れたい。

そこに颯爽と現れた状況を打開できる可能性のある一手。

自分が、今、どう動くのが最善か。

それは、考える間もなく。気付けば爆豪は切島の伸ばした手をガツチリと、掴んでいた。

「…バカかよ」

ようやく空へと飛び、ヒロフミの話通りに去っていった爆豪達を見てマキマはアンノウンを抱えこの戦場から退却して行こうとしたが、ここでマキマが思い出したように立ち直り、爆豪たちを追おうとしていたマグネ、スピナー、コンプレスに狙いを定め――

「ばん」

吹き飛ばした。

「…ふう。多少はスッキリ…かな」

と、言う割には少し不満げな顔をしつつも、マキマとアンノウンはその場から立ち去ったのであった……。

日常に戻って

☆☆

さて、予想外に手間取ったが作戦は成功だ。敵の悪魔の討伐成功!!

その後は何事もなかったかのよう^{ライラン}に家に戻った。一応家にずっといた体で過ごしたけど少しヒヤヒヤしたな。

いやー、これで俺の気も晴れるってもんよ。なんせ俺のせいで無関係な人間が死んだようなもんだからな。肩身がせまかったぜ。

マキ姉があの場合を去った後どうなったのか。それは響香宅のテレビに映るニュースから結果は何となく分かる。

『NO. 1ヒーロー、オールマイトの記者会見が今日行われ——』

オールマイトはオールフォーワンに勝った。自身に残るワンフォーオールの残滓を代償に。

ま、原作通りってわけだ。

別にここでオールマイトと共闘してオールフォーワンを倒しても良かった。いや、むしろこの世界的にはそっちの方が良かったのかもしれない。何代も力を蓄え継承されてきた力と何人も人間を支配し残機のある限り不死身の力。この二つの力を持った者同士が協力しオールフォーワンと戦えばオールマイトは力を残したままでいられたかもしれない。

……まあ、だとしても終わりが伸びたってだけでいつかは無くなる力なのだろうけど。

でもまあ、俺はそれをしなかった。

色々理由はある。

バタフライエフェクトの可能性だったり、マキ姉の力の露呈を防ぎたいとかな。特にマキ姉の力とアキ兄の力は現状、俺の手札の中でもジョーカーに等しい。ここで変に見せて動きにくくなるのは嫌だしな。

……それにしても、マキ姉キレてたなあ……。流石は一部ラスボス。風格が出てたわ……。

それに、ナガンさんも俺の回収を援護していてくれたらしい。やっぱりあの発砲音はナガンさんのだったか。いやー、こういう時のナガンさんは頼りになるなあ。

……マキ姉と同じようにブチギレてはいたけど。

何故だろう。俺の周りって、俺が傷つく度に過剰にキレる奴多くないか……？

いや、愛されてるのは嬉しいんだぜ？むしろ大事な事だ。嫌われるよりかずっといい。

でも、なんて言うかなあ……想いが重くて辛いつていうか……

響香も何故かコピーの俺を見抜きかけてたらしい……

なんだろう、俺の周りにそういう奴を集めるフェロモンでも出るのかな？

「ヒロフミー、っ飯できてるよー！」

台所から響香の声が聞こえてくる。

今日の昼飯当番は響香だったか。腹も減ってきたしとつと向かうとするか。

「あいよー……」

まあ、たくさんの人に好かれてる事はいい事だからな。

俺の長所が出来たと思えばいいだろう。

さ、難しいことはあとだ。美味しい飯でも食って少し休むかねえ。

☆☆

ヒーローの悪魔に殺され、ヴィランの悪魔はヒロフミの地獄へと強制送還された。そして、ヒーローの悪魔、禍の悪魔、??の悪魔の前に拘束されて引き摺り出されていた。

「やあ新人ちゃん。ちよいーとオイタが過ぎたみたいだね？」

「……??ノカ。ハア……残念、無念ダヨ。ヒロフミに殺されるのならマダシモヒーローのに殺されるトハネ……」

「な！コイツ……反省してないぞ!!」

「……そもそも……ヴィランの悪魔が……反省することなんて……槍が降っても……有り得ないんじゃないか……?」

「それもそっか。ヴィランだもんねー」

呆れたように腰に手を回し、拘束されているヴィランの悪魔を見下ろすヒーローの悪魔と、こてんと首を傾げる禍の悪魔。

その様子を見てヴィランの悪魔は「腑抜けてる」と嘲笑う。

「人に禍いを齎し不幸のどん底に陥れる悪魔が聞いて呆れる。なぜ、秩序側に付いている?」

「……クク……言うじゃないか……ヴィラン敵の……耳が痛いねえ……だが……それと同時に……愚かだと……言わざるを……得ないな……」

可笑しくてたまらない、というように口元を歪ませる禍の悪魔。

「……ナニが可笑しい?」

「……無知とは罪……だと思わんか……?」

「……は?」

「……いいか……私たちが……いや……私が……ヒロフミに……従う理由はな——」

「はあいストップ」

出来の悪い生徒を叱るようにヴィランの悪魔に語ろうとしていた禍の悪魔を、??の悪魔が途中で止めた。

いい所で遮られ、ムツとなった禍の悪魔だが??の悪魔の責めるような視線で「はいはい……」と首をすくめながらその口を閉ざした。

「離反していた彼女に言うのは早い」

「……ふん……」

「キニナル所で止められタ……」

「まだその時じゃないって事よ。然るべき時が来たら言うわ」

不満げなヴィランの悪魔に返した??の悪魔。

ヴィランの悪魔は一応は納得し、引き下がる事にした。このまま、食い下がっても意味は無いだろう、そう感じていた。

「さて——気になる貴方の処遇なだけ……」

「ドウセ痛めつけるダケデショ。とつととハジメナヨ」

「……そうじゃないんだよねえ……」

「……エ？」

てつきり罰として拷問のような事をされるであろうと思つていたヴィランの悪魔は拍子抜けの声を出す。

「敵の悪魔、貴方への罰は……ヒロフミの蓄積疲労の受け皿になつてもらいます」

「……ソレダケで良いの……？」

「ほんとにね！コイツは悪いやつなんだからもっと苦しめても良いのに!!」

頬を膨らませてプンスコと怒るヒーローの悪魔。ヴィランの悪魔は本当にそれだけで良いのか疑問を持ちつつ、楽に済んで得したな、位としか思わなかつた。この時までには。

淡い光が敵の悪魔を包み、ヒロフミが抱えていた疲労が移つた事が分かる。

瞬間。

「ツ……ガッ……アアッ……カハッ……これ、ガ……？疲労……!!?!?!」

怠い、辛い、苦しい。重い。

痛み等が移る訳ではなく、ただ、ヒロフミがそのまま悪魔を使う度に蓄積されてきた疲労がヴィランの悪魔に注がれただけだ。

ただ、それだけのはずなのにこの苦しみはなんだ。地球一周を全力疾走したとて、ここまでの倦怠感を覚えなかつただろう。

……いや、尺度が狂っているが、そうとしか表現できない程に、怠い、辛い、苦しい、重い。

「が、あああ、ア？ごフツ……!!?!?!」

「これはね。ヒロフミの身体から抽出した疲労の全てなんだけど……悪魔を使うためにここまでの疲労を溜め込んでいたのね……」

大粒の汗が、溢れては滴り落ち溢れては滴り落ちを繰り返して、あつという間にヴィランの悪魔の足元に池を作る。

「おゝえゝゝえゝゝえゝ……」

胃液を堪えきれずに、そのまま吐き出してしまふ。

そして、そのまま蹲り腹部を抑えて「コヒューツ…コヒューツ…と不自然な呼吸をするだけの存在と化してしまった。

「日々回復するとはいえ、微々たるモノ…私たちが言うのもなんだけど…彼もまた…バケモノなのね…」

「…やはり…ヒロフミは…闇…いや…」

「こうなるって分かれば逆らうって事なんてしないだろうけど…」

悪魔達は扉で埋め尽くされた空を見ながら、ヒロフミに畏怖の念を覚えた。

閑話編——What If…?
報告、及び連絡。

☆☆

——年6月6日。——市の住宅街において個性の暴発事故発生。

中心部とおぼしき場所は黒魔家。

被害は甚大にして絶望的。個性を発現させたと思われる少年、黒魔ヒロフミの両親の死亡、及び家屋の消滅。

周囲の住宅は半壊。被害に遭った一般人は約30人程であり、その全てが今後の生活に何らかの影響を受けるほどの重症であった。公安は保護の為に少年をカウンセリングという名目で本部へ移送。少年は終始汗が止まらず、なにかブツブツと呟いていた。

公安で行われた聴取の時も目は忙しく動き、言っている事も要領を得なかった。

後に、公安直属ヒーローのレディ・ナガンとの聴取によってようやく落ち着きを取り戻した。

——が、その直後、当時公安委員長を務めていた人間の発言によって事態は急変する事となる。

その夜、突如として、当時の公安本部に黒魔ヒロフミ本人が委員長のいる部屋に誰にも気付かれない事無く潜入していた。

そして、殺害。死因は絞殺のようで首には蝟の吸盤のような痣があった。

その日を境に公安直属ヒーローレディ・ナガン、本名筒美火伊那の消息不明になった。(後日黒魔ヒロフミと共に行動していた事が判明し、ヒーロー名簿から除籍されヴィランとして登録される)

同時期に、——出版社から出された記事によって黒魔ヒロフミの素性、当時引き起こした事全てが大々的に報じられ、秘匿していた

情報の漏洩が発覚。世間では黒魔ヒロフミの事を『悪魔の子』と呼び、大きな騒動へと発展した。

——年6月6日。

黒魔ヒロフミが引き起こした『悪魔の子事件』から丁度三年後のある日。

突如、アメリカに黒魔家に現れた怪物(呼称を銃の悪魔とする)が出現した。

アメリカ124秒上陸24万8012人死亡。

カナダ7秒上陸8481人死亡。

ハワイ0・4秒上陸780人死亡。

そのままロシアへと向かおうとするが、太平洋の中心にて、アメリカ軍とオールマイトとの共闘により、銃の悪魔討伐。

銃の悪魔はそのまま海へ倒れ込み、消滅。

討伐された後すぐに、世界中で電波ジャックが起こり、全世界のテレビに映し出されたヴィラン『クリフォト』による犯行声明がなされる。

『これから、私、クリフォトは世界を滅ぼす準備に入る。今行ったのはその予行演習に過ぎない』

『オールマイト。貴様を殺す手はずも整えている』

『覚悟しろ。そして、恐怖しろ』

『先程の悪魔の名は、銃の悪魔。前時代の武器だが…当たれば死ぬ。当たり前前の事だ。昔の人々はそれを恐れた』

『今や個性でなんでも治ってしまったり、弾丸などもはやおそるるに足らず、なんて思っていただろう？いいや、それは間違いだ』

『今見て、実感したはずだ。銃の悪魔を止める為に様々な強力な個性を用いて向かっていったヒーロー達はどうか？見るも無惨に死んだだろう』

『この超常の時代に旧時代の武器が蹂躪していく様は——傑作だった』

『残念ながらオールマイトに討伐されてしまったが…安心して欲しい。悪魔は死なない。私の中でまた、生まれ変わり、転生を遂げる』

『さあ——世界よ、私が、来るぞ』

音声データはここで消えたが、当然、世間は大混乱に陥った。三年前の事件と今回の事件。まだ真新しい事件であったため、正体について思い至る事象が多すぎた。

世間のみならず、世界からも今回の事件を受けて日本の、それも公安の動きには厳しい声があがりなぜ日本は黒魔ヒロフミ——クリフトを逃したのかとバツシングを受けた。

絶対に、彼を捕まえなければならぬ。

これ以上の被害が、後に予想される。どの可能性も天文学的数字の被害が出るであろう。

そんなことを我々がさせない。

彼というヴィランを生み出してしまったのはひとえに我々の責任だからだ。

幼い少年だった彼にあんな仕打ちをしてしまったのは我々だ。

これ以上、罪が重なる前に、必ず。

君に任務を与えようホークス。

黒魔ヒロフミを止めろ。彼は世界を本気で滅ぼすつもりだ。

既に兆候が出てる。

数ヶ月前から不自然に日本で起こっている自然災害。

恐らく、準備が完了に近づいているのだろう。

6月6日、——市で行われる巨大電波塔の開催セレモニーに事が起こると、命がけてこちらのエージェントが情報を掴んだ。

既に日本中のヒーロー達を招集し、警備をする手筈を整えた。

また、避難誘導に雄英高校ヒーロー科一年も参加する。

まさに総力戦だ。

公安の罪と向き合う時が来た。

勝て。

幸運を祈る。

A組の新たな任務／クリフオト：オリジン——1

☆☆

6月1日。

雄英高校ヒーロー科1年A組の教室は少しざわついていた。

「緊急で話があるって先生は言ってたけど…なにがあるんやろうね？」

「最近の自然災害の大量発生の事に関してじゃないかな？昨日だってほら、台風がなんの気配もなくきたし」

「……やっぱヴィランの仕業なんかな？」

「…だとしたら相当ヤバいね……自然災害を操るなんて…いや、過去に似た個性のヴィランはいたにはいたんだけどここまで多様なタイプじゃなくて——」

「デクくんのブツブツや……」

最近、というより数ヶ月ほど前から不自然な自然災害が頻発していた。

竜巻や、台風はほぼ毎日のように発生し、それによる土砂崩れなどで被害は拡大していた。

教室では、事前に担任である相澤先生からの連絡の内容についてあーでもないこーでもないが無軌道に予測を口々に話していた。

「——ハイそこまで。皆揃ってるな」

ぬるっと教室に入り、教壇に上がる相澤。

それによりガヤガヤとした雰囲気は一旦静まり、話を聞く体勢に入ったA組の生徒達。

一度確認の為にぐるりとクラスを見渡してから相澤先生はため息を少しこぼしてから口を開いた。

「えー…今回集まって貰ったのは他でもない、今、世間を賑わしている“自然災害”についてだ。まア、結論から言うところあるヴィランが関

係している」

はっ——と、緑谷は息を呑む。さつき麗日と同じ話題で盛り上がっていたからだ。

それと同時に疑問も沸き起こる。しかしなぜ、一介の生徒に過ぎない自分達にこんな話を?と。

「そのヴィランの名前は『クリフォト』と言う。……そう、あの『銃の悪魔』のクリフォトだ」

思考の海に沈もうとしていた緑谷を引きずり出すような特大の情報に思わず声を漏らす。

銃の悪魔と言えば25万7273人を虐殺したクリフォトの個性と呼べるものであり、その討伐はオールマイトの持つ功績の中でも一、二位を争うものだろう。

だが、そのおかげで銃への忌避感が高まり、最も被害を出したアメリカでは銃の規制政策が取られるほどであった。

「…なぜ、この話をしたのかと言うと…来る6月6日、クリフォトがとうとう動きだすらしい」

「命がけでこの情報を掴んだ人がいたんだ。その人によると、——市…雄英からも見えるだろうがああ電波塔のオープンセレモニーを狙って襲撃が目的だ」

「……一体何のために……」

「…恐らくだが、8年前の再現をやるうとしてるんだろう。8年前も国は違うが、クリフォトは電波塔をジャックしてあの反抗予告をしていた」

緑谷の呟きに答えるように相澤が話を続ける。

「そこで、だ。申請が来ていた。君らには避難誘導の手伝いをしてもらおう」

「……まさか!!?来ると分かっていたとおせレモニーをやるつもりなんでしょうか!?!」

「そうだ。クリフォトという超一級のヴィランを捕まえるまたないチャンスだ。…当然プロとして民間人に被害を出す訳にはいかない。策はちゃんとあるさ」

飯田が立ち上がったって抗議しようとしたが、想定していたようにノータイムで答える相澤。

ちゃんと民間人を守るための策があると説明されて落ち着いたのか座り直す飯田。

しかし、話を聞いていた緑谷だけは首を傾げていた。

「本当に、大丈夫なのかな…？先生はああ言ってるけど…銃の悪魔は攻撃するだけでほぼ正確に人間を撃ち抜くって言われてるし…ノータイムで攻撃してきたら為す術ないんじゃないか…」

うんうん、と悩ましげに考え込む緑谷。

なにか、嫌な予感がするのだ。

詳しい事は分からないが自然災害を引き起こす個性を持ったヴィランがあつちにはいる上に大虐殺を一瞬で引き起こせる銃の悪魔もいる。

底がしれない。一寸先は闇のように思えてならない。

相澤が避難誘導のポイントや周辺地図を配っている中、緑谷はどうしようもない漠然とした不安を覚えるのであった。

☆☆

転生、という言葉をご存知だろうか。

転生とは、肉体が生物学的な死を迎えた時、生物は魂だけの存在となり別の生物へと生まれ変わるといふ事なのだが、現在に至ってはそれは創作のフィクションの一つとして広く大衆に広まる事になっている。

…まあ、難しい話をしたが要は俺は転生をした、ということだ。

物語のような、二次創作のような、転生を。

しかし、これは現実だ。

前世での死はもう覚えてない。テンプレ化したトラックだったのか、はたまた病死か、老衰か。だが、今となってはもうどうでもいい。

転生して最初に目にしたのは前世の母とは違う新しい母の――

—凄惨な死体と、生家であると思われる残骸。

グロテスクな死体に目を背けたくて、別の方向を向いたら、今度は父と思われる男の死体。

既に物　となつたそれを見てとうとう吐いた。

直近で自分がかげ物になつていた感覚があつたことも相まって、なかなか吐き気は収まらず、暫く瓦礫だか床だか分からない地面に蹲り続けた。

なんで、こんな目に。キツイ、辛い、苦しい。吐き気も止まらないし目眩も止まらない。誰か、誰か、助けて、助けて、助けて——

これが、最初の絶望だ。

ひとしきり吐き終えたあと、近隣住民が警察を読んだのだろう、家だった跡地の周りにはパトカーと見慣れない服装をした集団が俺を取り囲んでいた。

……多分、日本語を喋っていたんだろう。もう昔の事だ。あまり覚えてない。

断片的に聞こえる声からの質問に無気力に答える。この時、俺は突発的難聴だったらしく音がしばらく聞こえづらかった。

「個性?——」

「ヴィランかも——、——!」

「——まだ早い、ここは保護——」

個性?ヴィラン?なんのことだか分からなかった。前世では見たことない変な格好をしている集団が俺を取り囲んで何やら難しい顔で話し込んでいた。

変な格好の集団の一人が俺の耳が聞こえづらくなっているのを察したのか筆談してきた。

『ぼくたちはヒーローだ。とりあえず、はなしをきくために、あのくるまにのつてくれないかな?』

……ヒーロー?

待てよ。さつき、ヴィランと個性って聞こえたぞ?

ヒーロー、ヴィラン、個性、おかしな格好。キーワードを頭の中でも精査する。思いだせ。俺はこの世界を知っているはずだ。

……あ。

……もしかしてこの世界って……『僕のヒーローアカデミア』の
世界なのか？

☆☆

創作で良くある展開に巻き込まれるとは思いつかなかったな。

前世じゃ色々たしなんでいたものだから状況の把握は早かった。それでも、その後にもう、元の世界に帰れないであろうと思いついた時には心臓の辺りに穴がぽっかり開いてしまったような寂しさと悲しきで涙が滲んだ。

それでも、前を向こうとした。

いつまでもクヨクヨなんてしてられない。折角の転生だ。楽しまなくては、と。

最近、同じ夢を見る。そのせいか見ている途中で夢と分かる。

俺が入る前の、幼い記憶。

それはとても温かくて、家族の愛が一身に注がれていた。

笑顔で満ち溢れていた、平和な家庭。

ぬるま湯に浸かっているような、いつまでもそこに居たいと思ってしまう。

……だが、俺はそこにいるべきでは無い。

だって、だって俺がその幸せを奪ってしまったようなものだから。

「……………最悪だな」

太陽が昇り出し、空が白くなり、明るくなり始めていた。

一筋の涙の通った後を手でなぞりながらベットから起き上がる。今日もまた、憂鬱な日々が始まる。

☆☆

「ハアツ…ハア…ツ！やめ、てくれ…どうか、命、だけは……」
呼吸が荒い。床は鮮血によって池を作っていた。

こいつは公安の委員長らしいが…正直なところこんなクズが？という感想しか出てこない。

…にしても、こいつを息絶えるまで放置すれば俺も立派な敵ライバルか。

お、ナガンさんが部屋に入ってきた。おーおーびっくりしてる。

「何を…してるんだ…？ヒロフミ……」

「何って…見たらわかるでしょ？殺したんだよ俺が、貴女の代わりに」
「なぜ、なんだ」

分かりやすく動揺している。取り調べの時には優しげだったし余裕のある大人って感じだったんだけどな。まあ無理もないか。

「…まあ、結局のところおれもあなたと同じなんだよ。絶望してるんだ、この世界に」

「……………」

「何がなんだか分からないうちに人を殺してしまっていて、これ以上被害を出さないように頑張ったのに、周りは白い目で見てくる。おれは、何も知らなかったのに、分からなかったのに」

「誕生日、祝ってもらえるはずだったのに」

声が無意識に震えた。視界が滲んだ。

これは俺じゃない。俺の体が勝手に反応してるんだ。

確かに『彼』は消えてるけど、どこか肉体に魂がこびりつき、『彼』自身が叫ぶように反応している。

「もう、どうでもいいんだ。おれなんて」

「っ、そんなこと、ない！」

「はは、優しいな」

きつと俺は今、酷い顔をしているのだろう。

ナガンさんは顔を曇らせている。だが、それでも顔を下に向けることなく、こちらをじつと見ていた。

「ナガンさん」

「っ……………」

一歩ずつゆっくり歩み寄る。

俺が近づく度に、ナガンさんは後ずさる。

「俺と一緒に逃げませんか」

大きく見開かれる目。ナガンさんの足が止まり唇が震えている。

まるで迷子の子供のように忙しなく、濁った瞳を揺らす。

長い思案の後に、ナガンさんは俺の差し出した手を取った。

☆☆

「……い、……おいってば」

「……んあ？」

いかんいかん。少し昔の事を思い出していたらぼーっとしてしまっていた。

計画の日が近付いて緊張をほぐすためにやっていたが、やりすぎは良くないな。

死柄木に強めにつつかれたおかげではっと戻れた。

「…その調子で大丈夫なのかよ」

「でえじょうぶだあ。…もしかして心配してくれてるのか？」

「あ？」

「さーせん」

少し余計な事を言ったか。怖い目で睨んでくる。ただ、割と長い期間ヴィラン連合と絡んできたがこんな風にデレて来たのは初めてだ。

おじさん嬉しいよ（泣）

「何考えてんのかわかんねえがとりあえずム力つくから一発ぶん殴らせろ」

「コワ〜」

青筋浮かべる死柄木に降参のポーズを取ると、フン、と鼻を鳴らしてカウンターのコップに手を伸ばす。

さ、俺もそろそろ時間だ。行きますかね。

黒霧にドリリンク代を渡してバーの出口へと向かう。

『行くのかい?』

万人を落ち着かせられるであろう声が備え付けのモニターから聞こえる。

声の主はこの世界におけるラスボスにして俺の大先輩……まあそんなこと一度も思ったことはないんだがな。

「行きますよ。まさか、止める気ですか?」

『いや、君程の人間には弔の隣にいて欲しかったんだけどね』

「俺は誰かの下に付くなんてことはできませんよ」

『はは、違くない。君はそういう器では無いからね』

「…^手助けは^をい^出り^すません^なからね^よ」

『分かってるさ』

ヴイラン『クリフト』になってから色々と話したことがあるがやっぱり得体の知れない奴だ。

「……………」

「なんだよ。死柄木もしかして寂しくなったのか?」

「別に。これからまた一人でLOLやんのが面倒になっただけだ」

……ツンデレかな?ま、俺も死柄木とゲームすんのは楽しかったな。またやれるといいな。

さて、これ以上長居する理由もないしな。とつとと出よう。

そんでもって、準備が完了次第早速おっぱじめようか。

世界との戦争を。

準備は綿密に

☆☆

——6月5日。

都心、スクランブル交差点にて。

鉄の摩天楼が赤く染まる、夕方。帰路へとつこうとする人々が濁流のように歩く。

「はー…疲れたー」

「母さん！今日のご飯はなにー？」

「今日は唐揚げよー！」

「やったー」

「ったくあのクソ上司…俺が異形型の個性だからって……」

「えー今日これないのー!?折角オシヤレしてきたのに……」

様々な声が飛び交う交差点の中心にポツンと一人、髭を生やした初老の男が立っていた。

少し周りとは違う雰囲気を見せるその男を避けながら人々は歩む。

すると、パトロール中のヒーローが不審に思ったのか歩み寄って肩をポンポンと叩く。

「じいさん、大丈夫か？怪我とかああああアアアアアアアアアア?！」

肩に置かれた手を男が触れた瞬間。途中で間の抜けたような声になり——顔、いや身体がまるで糸繰り人形のように変化してしまった。

「…大丈夫です」

人形に変えた男はそのままぺこりと礼をするとその場を去って行った。

——同時刻。

「ったく。上も面倒な作戦を立てるよなあ……」

「仕方あらへんやろ。これまでクリフオトのクの字すら見せへんかったようなやつが今になって現れたんやから。そら上の奴らからしちゃあ絶好のチャンスなんやから」

「そうはいってもなあ…」

二人のヒーローが愚痴をこぼしながら、クリフオトの襲撃予定地である巨大電波塔の周辺をパトロールしている。

「……ま、あん時の銃野郎のせいで日本は相当バツシング受けたしなあ…国としても見過ごせへんのやろ」

「面子つてもんかねえ…だとしても、関係の無い一般人が被害を受けるかもしれないこの作戦はヒーローとしてなあ……」

「はア…シヤキツとせんかい!!ここでクリフオトを捕まえんとそれ以上の罪のない民間人の被害が出るかもしれへんのやぞ!?!んな情けないこと言つてられるかい!!」

「……そう、だよな!!」

関西弁を話すヒーローの喝に相方は顔を引き締める。

そうだ。クリフオトを捕まえればあの日の惨劇で亡くなった人々へ報いることが出来るはずだ。

「………ん?ここって確か…立ち入り禁止だよな?」

「ああ、せやけどどうしたん——つてありやりや」

指を指した先には挙動不審で忙しく首を動かしている男。首に関係者を示すカードをかけていない事から不審人物で間違いない。「酔っ払いが間違えて入ったのかねえ?」

「その可能性もあるが…一番警戒すべきなのは……」

「クリフオトの息のかかっている可能性があるつちゆうことやな。ほんならちよつと話聞きに行こかー」

2人は警戒度を高めながらさつきからキョロキョロしている男に近付いた。

「おにーさん。こんなところで何を……」

「ハロウインハロウインハロウイン!!」

「お、お、おとおお??」

「……おにーさん??」

「ハロウインハロウインハロウインハロウイン?」

「お、あ、おお、おああ、おお!!?」

「?!!?」

「こらアカンわ。会話にならへん」

関西弁を話すヒーローは肩を強めに叩きながら「おにーさん」と呼びかけるも反応が無い。

大きな声をだそうが、叩こうが男はうんともすんとも言わずに、ただ唸るだけだった。

諦めて連行しようとした時、ふと自分の相棒が何も話していないことを不審に思い、振り返った。

「さっきから何をだまつ、て……」

そこには血溜まりに沈むかつての相棒の姿と、その相棒そっくりの顔した人間が血のこびり付いたナイフを握りしめて立っていた。

「っ!? 誰や!? ウチのモンに何をしたっ!?」

「あ、あ、あー。これでいっつか。とつととこいよー」

かつての相棒と瓜二つの男が目の前のヒーローに興味無さげに上に張り付いていた者に呼びかけた。

「無視すんなやつ——むぐっ!?!」

ドサリ、と背中に感じる確かな体重。

ヒーローは慌てて攻撃しようとするが——もう遅い。叫ばれぬように口に手を当てて、そのまま——斬。

悲鳴すらあげられず、そのまま相棒と同じ末路を辿った。

そして、上から覆いかぶさってきた者の顔も自分が殺した関西弁のヒーローと瓜二つとなった。

「あーあ。折角のべっぴんさんだったのにね」

「うへえ。お前ソツチなのかよ。いい女だったから口説こうと思ってたのに」

「こちらこそごめんだわ。…ん? あー…顔に傷がある。やっぱナシかな」

「あ、忘れるところだった。オイ相棒、お前の言葉遣いは特殊だからな」

「分かってますよー……ほな、行こーか」

「ん、イントネーションは完璧だ」

「じゃあ楽しい楽しい死体処理をしてから定位置につくで」

「へいへい…」

テキパキと慣れた動きで死体と血痕を隠蔽していき、さっきの惨劇がまるでなかったかのように綺麗になった。

「すごいやノリで連れてきたコイツ、どうするん？」

「クリフオトさんが攪乱に使って言ってたけど…もう要らないし殺しとくか」

「せやね」

定食屋で料理を決めるように気軽に決めるとこのハロウィンしか叫べない哀れな男も心臓を一突き。

「さあて。かますぜー？」

「調子のもって捕まらんようになく？」

☆☆

6月5日、夜。

「皮の悪魔、人形の悪魔、準備完了との事です」

「…ん。ありがとうプリンシ」

高そうなソファに身をうずめていたクリフオトは蜘蛛クモの悪魔シの報告に返事をする、深いため息をつく。

「内部セキュリティはこれでこっちのもんだな。マキマ姉さんに監視カメラ関係もハッキングして別の映像に差し替えておいたしその瞬間は写ってないはず」

あとは、と手元にある地図を眺めながら独りごちる。

「指定ポイントに禍の悪魔、銃の悪魔の配置」

「ワタシはー!？」

「…：：：ウイルスは俺と行動だつて言ってるんだろ」

後ろから生まれたままの姿で飛び付いてきたウイルスウイルスこと敵の悪魔。

「エー…ツマンナイー!」

「詰まる詰まらないの話じゃねえんだよ」

少しイライラしながら抱きついてきたウイルスをベッドの方へと

突き飛ばすとそのままソファに座り直した。

　　ヴィラはなおも不満そうにしていたが、段々と眠くなってきたのか数分後には寝息を立て始めていた。

「寝ていてくれた方が静かに作業できていいわ」

　　苦笑いして、呟くクリフオト。

「くあ：俺も眠くなってきたし、プリンシお前も明日に備えて休め」

「は、了解致しました」

　　プリンシに指示を出してからヴィラの眠るベッドへと向かい、少し湿ったベッドに体を埋める。

「……もう少しだ。もう少しでこのくだらない胸の痛みも無くなる」

　　少年の、どこか寂しいつぶやきは誰にも届く事無く、夜の静寂に溶けていった。

悪魔は踊る——1

☆☆

——6月6日。早朝。

この日はとうとう巨大電波塔オープニングセレモニーが執り行われる日だ。

緑谷達雄英高校の一年A組の生徒たちは顔を緊張に強ばらせていた。無理も無い。様々な修羅場を渡っていたとはいえ、相手は超が付くほどの悪党、クリフォトなのだ。

「何事も無ければいいんだけど…」

緑谷の願望に近い眩きは誰に届くでも無く、風にかき消された。

☆☆

「やて、やてやて」

数えることすら馬鹿らしくなるほどの人の数々。

ビルの上から見下ろしながら顔を隠したクリフォトはマントの下でニヤリと笑う。

「どこまで、足掻けるかな？」

隣に控えていたプリンシに指示を出す。

クリフォトが襲撃予定の電波塔を見据える。

「人形の悪魔に合図を出せ。——なるべく民間人が多いところがいいな」

「は、ではその通りに」

そう言うと、プリンシは恭しく礼をするとその場からスッと消えた。

「連絡役として優秀だ」と関心したようにつぶやきながら、屋上から去る。

そして、ビルの階段を降りていき、一つの部屋に入る。そ

の部屋は薄暗く、電球の橙色の淡い光だけがその床下部分と僅かな周りだけを照らしていて、不気味な雰囲気醸し出していた。

その真ん中にポツンと置かれた木製の椅子に座ると対面にいる誰かに対して話しかける。

「やア、今からあんた方の考えた用意周到な策とやらを真正面から踏み潰す。…あんたには特等席で見えて貰おうかな」

ニツコリと、意地の悪い笑みを浮かべるクリフオト。

その様子に対面の誰かは反応を示さない。いや、示そうとしないのだ。

「あんたらの考えた策はこうだ。表面上では華々しいオープニングセレモニー…色んな催し物に会場に来た人々は心を踊らせ、記憶に残る素晴らしいセレモニーになるだろう」

「……………」

「……………」だが、その来る民間人のほとんどは全員カタギじゃない。その変装をしたヒーローや警察だ」

核心を付いた発言を試してみるも、そのヒーローは何も言わない。ただ、黙ってクリフオトを睨むだけ。

それを知らないのか、それともあえて無視しているのか、クリフオトはただ淡々と話を続ける。

「もちろん、何も知らないただの民間人だって沢山来ている。むしろそっちの方が多いからな。理由は…大方予想が付く。俺に悟らせなためだろ？ 敵を惑わすにはまずは味方から…なるほど、合理的だ。まさかヒーローがそんな手を使う訳ないと思わせるいい手だ」

ヴィランは民間人を襲う者。ヒーローはそれらから守る者。この関係は逆転することはまず無い。

だからこそ、それを逆手に取った。

民間人を囮に使うという、ヒーローであればまず考えつかない、策を。

「———まア、意味ないんだけどな。見物だなあ？ ヒーローはどこまで救けられるのか」

しかし、クリフオトはそれらを完全に把握したうえでこれか

ら更に上回る。

「にしても…他の国からも沢山ヒーローが来てるんだな。…大国のほとんどは日本に集まってるんじゃないか？ここまで来ると露骨だぜ？」

呆れたように話す。

「特にアメリカの奴らの熱意は半端ないな。知ってるか？あっちの国の秘匿情報じゃ俺は抹殺対象らしい。一応この作戦は捕縛が目的だろ？こんなことしでかしたら最悪国際問題じゃねえの」

ま、当然ちや当然なだけど。と、クリフォトは言葉の後に小さく、納得したように呟く。

「二人で喋ってるみたいで寂しいなオイ」

子供みたいに拗ねたフリをしつつも目の前に縛り付けられたヒーローを見て苦笑いをこぼす。

先程からずっと黙ったままのヒーロー。縛り付けられた鋼鉄製の椅子の周りには鷹の羽が散らばっていた。

彼の名はホークス。通称、早すぎる男として呼ばれている。彼は、21歳という若さでヒーロービルボード3位にまで出世し、そしてその個性故に物理的な意味でも早かった。

当然、クリフォト達を見つけ、行動した速さも――。

「ちよつとの手掛かりで俺たちの足取りを掴むんだから困ったもんだよ」

「……一つ、聞きたい」

「何かな？」

「なぜ、こんなにも沢山の敵を増やす真似をしている？君なら分かるだろ？個性がいくら強力だろうと数の前では無力だということを」

「なんだ、口を開いたと思えば――そんな事か」

ホークスの指摘に鼻で笑う。

「未だに俺の個性が銃の悪魔だけだって思ってるんなら大間違いだぜ？」

「なんせ俺の個性は――つと、……なるほど、ホークス……やるじゃないか」

「なんの事かな?」

「良く言うぜ——」

ホークスとの会話の途中で、異変に気付きそしてその意図を察するとしてやられたといった顔をしながら笑った。

「お前、自分すらも囷につかつたのか」

上階から聞こえてくる破砕音にため息を吐いてその場から離れようとしたその瞬間。

クリフオト達が居た部屋の壁が吹き飛んだ。

「お!?! テメエか? クリフオトって奴は!!」

兎の耳を揺らしながら。

ラビットヒーローミルコは勝気な笑みを浮かべて突入してきた。

「いかにも。ヒーローミルコ君の活躍はよく聞くよ。なら——君の性格的にする事と言えば一つしかないな」

「分かっくんじゃねエか。——大人しく捕まって貰うぜ?」

牙をむき出しに笑いかけるミルコ。

対してクリフオトは余裕の表情でこう返す。

「——断る」

「——なら、蹴っ飛ばすしかねエなア!!」

悪魔と兎

☆☆

重い蹴りを食らいサッカーボールのように己が転がされる未来を視た。

だから——この蹴りを余裕を持って躲す事が出来る。

俺の前じや早かろうが強かろうが無駄だ。だが、だからと言って油断や慢心する理由にはならない。目の前のヒーローの個性は「兎ちからっぽいことを兎以上に出来る」ものであり、五感は勿論のこと特筆すべきは膂力だ。筋肉の悪魔で身体強化してなかったら同じ土俵にすら立てない。

「今のを避けるか！骨があるな！」

「そりやアそこらの有象無象とは…違うんでね!!」

攻撃を避けながら隙を見つけて蛸の悪魔による攻撃——ダメか、躲された。

強いな。裏社会に身を潜めていた都合上荒事には慣れてるつもりだったが…さすがヒーローと言うべきか。

「強くて、骨があつて、更には悪いヤツは好きだ。なんてったって蹴飛ばし甲斐があるからなア……!!」

「ツ——！バーサーカーめ!!」

いきなり本気を出すなよ！びっくりするだろうが！

——ツ!!?まずった！隙が——コレは——!!

「避けられねえよな？」

「ガツ——！」

たとえ未来が見えていたとしても何もしなければ変わらない。今のは急に攻撃のテンポが変わって焦ったか！

メキリ、と嫌な音が耳に届く。脇腹…肋骨4、5本はイったか。痛つてえわ。

——だけど、

「ツ、カ、マ、エ、タ」

ニタア、つと邪悪に笑ってみせる。俺の豹変ぶりを見てミルコの瞳には微かに“怯え”が見えた。

「いい蹴りだ。疾く、強い。——だが、狙いが甘いと言わざるを得ないな」

俺にめり込むように振るわれた右足をガツシリと掴み、離れられないようにする。ミルコは必死に振りほどこうとするが自らの失策に気付くのが遅すぎたな。

油断や隙というのは勝利を確信したときにこそ生まれるものだ。いやまあ……だからと言ってそれを狙う為にわざと食らったと言うのではなく普通に俺のガバなだけだな。とは言え、このチャンスに逃す訳には行かない。

「吹き飛ば——クウエイク・スマツシユ」

「くそー離せ——ツ!!」

禍の悪魔——その力の一つである地震の力を拳に纏い、ミルコ目掛けて放つ。

イメージはグ○グ○の実だ。だが、これが洒落にならないくらい強い。当てずとも、その振動で敵の臓器を軽くシェイクに出来る。だからホラ——俺の一撃を食らったミルコが吐血しながら部屋の壁をぶち抜いて隣のビルに叩きつけられた。

ありや当分起き上がれねえな。

——直後、クウエイク・スマツシユの反動で余震起こる。

さて、このままいたら位置バレするしとつとズラかるかー。

「——ツ待て！」

あ、忘れてた。まアロープはさほど強く縛ってないし逃げられるでしよー。

振り返れば案の定と言うか、拘束を解いたホークスが翼の刀を持って俺を睨んでいた。

正直ここで時間食うのは計画の大幅なロスになる。仕方ない、ここは適当な雑魚悪魔に相手させとくか。

「……で止め——」

「ヒル、コウモリ、やれ」

ホークスがなにか言い出す前に悪魔をけしかける。さー、とつとつ
行きますかー

「待っ——邪魔だ！」

「じゃア楽しんで!!」

「待て、待てえええー!!」

うるさ。

…んじゃ、とつとと離れますかね。いやーミルコは強敵でしたね。
骨折れちやつたもん。すぐ治るけど。

…：ホークスが何やら喚いているけど聞こえない。

階段を降り、外に出るとマキマ姉がいつものようにスーツを着て白
いスタイリッシュなスーパーカー…ランボルギーニ・アヴェンタドー
ルにもたれかかって待っていた。

俺が近づくと気付いたらしく、ぱつと顔を上げて微笑みかけてく
る。いやあ、映えるねえ。美人にはカツコイイ車が似合う。

そんなことを思いつつ、助手席に乗り込むとマキマ姉が運転席に戻
り車を発進させる。

「やアクリフト、車を用意しておいたよ。さっきの騒ぎで周辺の
ヒーロー共が集まって来ててね」

「分かってるさ。かつ飛ばしてくれ、マキマ姉」

「ふふ、了解」

…：ヒーローの包围を振り切り、目的地に向かう途中、ふと、思った
ことがあった。

「人形の悪魔の様子は？」

「クリフトの予想通り、と言っておこうかな」

「そりゃア良い。ヒーロー共は？」

「大混乱さ。ま、無理も無いね。守るべき民間人が人形にされて、更に
は攻撃してきたんだから」

「ははっ！想像するだけで笑えてくるな！悪魔が入ってなければリア
ルタイムで見たかった所だ」

「——悪魔かな？」

「……や、ヴァランや」

地獄の顕現——1

☆☆

「うへえ…人多いい…！」

うんざりしてるような感じで、人混みの中を歩くウラビティこと麗日お茶子。

「ケロ、世界最大級の電波塔だもの、仕方ないわお茶子ちゃん」

その隣で諭すように話すのがフロッピーこと、蛙吹梅雨。二人は、
雄英高校ヒーロー科一年A組の担任のイレイザーヘッド二人一組組
むように言われていた。

『通信確認も兼ねて作戦をもう一度話しておく。目標の目的はこの電
波塔だ。オープニングセレモニーの影響で民間人のみならずマスコ
ミも詰めかけて来ている。くれぐれも余計な事は言わん様にな』

…なんてイレイザーヘッドが語っていたが…いくらなんでも多
すぎる、と麗日はひとりごちる。

異常がないか、周囲を見渡していると飯田とペアを作っていた緑谷
の姿が目についた。

………つい、目で追ってしまっていた。蛙水に指摘されていなかっ
たらそのままフラフラと向かいそうだったからだ。…顔が熱い。

パタパタと手で顔を仰ぎつつ蛙水に誤魔化すように笑いかけてい
たらその視界の端に妙なものを見つけた。

それは一見人の様に見える。しかし、良く目を凝らして見れば口か
ら顎にかけて謎の線があったり、眼に当たる部分がまるで物のよう—

—そう、あれは人形？

「………なんやろ…あの人…そういう個性なんかな？」

首を傾げつつも、まあそういう人もいるか、と一人で納得して、す
ぐ側で転けて泣いている子供あやそうと駆け寄った。

…この時の判断を麗日は強く後悔することになる。

カタカタカタ。音が鳴る。木と木がぶつかるような音が。カタカタカタ。身体が動く。糸で操られた人形のように。腕は鋭利に剣のように。そして明確な殺意を持って――

「キヤアアアアア!!」

手始めに目の前にいた人間の体を切り裂いた。

飛び散る血と、同行者らしき女性の悲鳴。

切り裂かれた人はそのまま倒れるかと思いきや、その場で立ったまま、手をダラリと垂れ落としたまま虚空を見つめて――そして人形へと姿を変えてしまった。

周囲の人々へ波紋のように広がる恐慌と混乱。

ヒーロー達も異変に気付き飛び掛かろうとするが、時は既に遅く。人形となってしまうた人々が急激に増え始めた。

「ちくしょうどうなってんだ!!」

「ぐあっ!や、やめっ!!」

悲鳴が、喧騒が、加速する。

「何が起こったんだ!?!あの人たちは…人形?ヴィランの個性なのか…!?!」

「ツ!!行かなくては!!」

「待って飯田くん!アレを見たでしょ!?!触れたらアウトなんだ!!…別の方法を考えなくちゃ」

飯田が焦り、緑谷は止めようとその前に立ち塞がる。

誰かに攻撃を受けている、と確信した緑谷は逸る飯田を抑えながらその様子を観察していた。

殺人人形となってしまう、触れたらアウトのウィルスのような個性。そういうタイプであるのなら本体がいるはず。だけど――

「こんな超嚴重な警備体制でいつ、どうやったんだ…?」

そもそも、目的は?ヴィラン側に立って考えて見ればこの数の民間人は人質だらけだ。そのはずなのに、内容はこの惨状だ。

「…分からない。だが、このままでは――!」

苦虫を噛み潰したような顔で今もなお悲鳴をあげる人々や、助けようとしていたヒーロー達が人形に変えられる光景を見ていた。

緑谷も気持ちは痛いほど分かるからか、悔しそうに顔を歪める。何も出来ない。こんな時に——…

その時。

「…つまりはよオ手を触れなければいいってことだろ？簡単じゃねえか！」

爆風と。

「悪い、遅れた」

氷の巨壁が、出現した。

「かつちゃん!!轟くん!!」

「来てくれたのか!!」

寄せ付けなければ良い話だが、緑谷達の個性からして、それは難しい問題だった。だからこそ、それができる二人の救援はありがたかった。

爆豪による爆破で起こる爆風のノックバックを利用した誘導。轟の氷壁による包囲。

即席ながらも見事に連携が取れていた。

「凄い……これなら誰も傷つけずに……!」

「ああ……他のヒーロー達も立て直してきたみたいだ……!」

二人の活躍により、余裕が出来たヒーロー達は爆豪達と同じように役割分担で人形達を捌きだした。

「おーい!!」

「早すぎるって……」

すると、爆豪と轟がやってきた方角から少し遅れて、爆豪とペアだった切島と、轟とペアだった上鳴がやってきた。

そして、緑谷たちを見つけると駆け寄って来る。

「いやア……異変が起こったところ俺らの担当地区から遠くて……」

「でも！来てくれてありがたいよ！僕達も避難の手伝いを——」

これで自体は好転する——筈だった。

ビルに登り、風に靡かれながら、狙撃銃に変わった腕を構える女性がいた。

「——ああ、こりやまずいな」

——おっぱらえる？

「やれるよ」

——お願いしていい？

「…任せとけ、クリフオト」

——ありがとう、ナガンさん。

耳元のインカムからの言葉にフ、と笑いを零す。

それはこちらの言葉だと言うのに。

共に生きて^{落ちて}くれて、自分を肯定^許してくれて——

髪を弾丸に変えて。

息を止めて、冷静に狙いを定める。

そして——、

「痛ッ——!!」

轟の腕を正確に貫いた。

「ッ——!？」

突然の鮮血。痛みを感じるより先に驚愕の感情が勝つ。

どこからだ？電波塔から1km以内の建物は全て点検済みだ。一

体どこから——。

轟は痛む腕を抑えながら考えようとした瞬間。頬を掠めるように

して一発の弾丸が後ろにいたヒーローに直撃する。

倒れ伏す姿を見て、弾かれたように顔を上げる。

「頭伏せろ!!狙撃されてる!!」

何とか絞り出せた言葉に、周りのヒーロー達は弾丸に備えようとした。

しかし。

「な、なんだコレ!?!逃げてても…追ってくる!?!」

「弾こうにもかわしてくるぞ…!」

一人の狙撃兵の存在で、また混乱が戻ってきた。

抑え込まれていた人形達も息を吹き返したように、暴れだした。

「(どこだ…この”個性”は見た事がある…)」
雄英高校ヒーロー科の中でも随一のヒーローオタクである緑谷が、この個性を知っていた。

弾丸が曲がり、当たるまで追跡し逃れられる者は居ない。遠距離系ヒーロー達に絶望と、羨望を与えたヒーロー……………

「……………まさか、レディ・ナガン……………？」

1つの可能性に思い至り、呟くように口にした。

「……………知ってんのか？」

「……………うん、まあ」

弾丸から避けるために逃げ込んだ射線の通らない路地裏で、途中で合流した蛙水、麗日ペアに手当されながら、轟は緑谷に聞いた。

そして、それに煮え切らない様子で頷く緑谷。

「出来れば…聞かせてくれないか…？」

「レディ・ナガンは…その…ヒーローとしては…ネガティブな意味で有名でね？確かちようど10年くらい前に当時、公安直属だった彼女はその上司である委員長を殺害した後に…黒魔ヒロフミ…今のクリフォトと共に姿を消したとされてるんだ」

「な、なんだって!？」

「初耳やわあ…」

「ケロ……………」

「…でもよお、なんでレディ・ナガンはクリフォトと逃げたんだ？」

各々が驚きの声を上げる中、切島は疑問を口にした。

「確かな情報はないんだけど…噂によると、委員長暗殺はもしかしたらクリフォトの指示、とか、クリフォトがカリスマ性を発揮したからだとも言われてるね」

「……………ハ、くだらねえ。噂話がしたけりゃしてろ。俺は

さつきから高所でバカスカ撃ってるアイツをぶつ潰しに行く」

心底くだらなさそうに鼻で笑って緑谷の話を一蹴すると、爆豪は先程から弾丸の来るポイントを見ながら立ち上がった。

その顔には獰猛な笑みが浮かんでおり、自信に満ち溢れていた。

「な！それは危険だぞ爆豪君!!」

「うるせえ。お前には関係ねえだろうが」

「オイオイ喧嘩してる場合じゃねえって!」

揉める飯田と爆豪の二人。そして、仲裁に入ろうとする上鳴。

こんな時に…と少しうんざりしながらも、どうにか自分の幼馴染を説得すべく上鳴の援護に回ろうと立ち上がった時、麗日の呟きが緑谷の耳に入る。

「……………こんな時になんでオールマイトはこんのやろ…」

……………言われて見れば、確かにそうだ。

この人形化の惨状も、狙撃の妨害も、オールマイトが居れば何も問題無いはずだ。そもそも、渡されていた配置図には近くにいたはず。それなのになんで、

オールマイトはおろかNo. 2ヒーローエンデヴァーも来ないんだ?

オールマイトに異常な対抗心を燃やすエンデヴァーも来ていない。オールマイトを超える為ならばなんでもしそうなヒーローだ。絶対に意地張つてでもオールマイトより早くヴィランを倒そうとするはず。

もしかして、なにか別の所でトラブルが発生したのでは――。

『ザ…ザザ…い!!聞こえるか!!』

一斉に全員の耳から聞こえる声。この作戦をするに当たって配給された通信機器だ。

「聞こえますー!何があつたんですか!」

『クソっ!そっちにまで電波ジャックの影響が…いや!そんなことはどうでも良い!!途切れる前に全部言っておく!まず一つ!電波塔は既に何者かに侵入されている!!通信確認の時に聞こえてきた俺の声は恐らく似せた俺の声だ!急遽こっちで用意した機材でそっちに通信しているが…これもいつまで持つかわからん!』

イレイザーヘッド:相澤先生のここまで焦った声は初めて聞く。

既に、電波塔に侵入されているのも驚きだ。

ならば、何故今になって外を攻撃し始めたのだろうか?と緑谷が疑問に思った瞬間。特大の爆弾情報が落とされた。

『最後のこれが最も最悪だ!!——銃の悪魔の出現が確認された!それもこちらに近付いてきてる!!エンデヴァー、オールマイトラが対応に向かっているがどうなるか分からん!もし、こっちが失敗したらお前たちは全速力でその場を離れろ!!』

『いいか!ザザー!逃げ!ぞ!!………ザザー!』

その後、相澤先生の声は聞こえなくなり、やがて砂嵐だけしか聞こえなくなった。

重苦しい空気の中、嫌に弾丸の地面の掠める音だけが鳴り響いていた。

地獄の顕現——2

☆☆

人形達の行進は止まることを知らない。

それは、煌びやかなパレードのように。

それは、魑魅魍魎蔓延る百鬼夜行のように。

絶望を伝播させながら、電波塔へ向かう。

「止まれよっ……………」

「だめだ!!個性を使うな!!元は人間なんだぞ!!」

「っ…!!このままじゃあそれ以上の被害が……」

ただ、やられている訳ではなくヒーローも、ヒーローの矜恃がある。何とか、爆豪と轟の様に触れずに押さえ込もうと役割を分けて立ち向かうが、いかんせん数の差がある。

どれだけ足掻いても、返り討ちに合い物言わぬ人形と変わるか、ただの民衆の様に逃げ惑うしか無くなってしまっていた。

「——どうする?このままじゃ、ジリ貧どころか皆仲良くあの人形になっちまうぞ」

「分かってる…でも…策が浮かばないんだ…」

「……………チツ」

万事休す。

抑え込める可能性のある個性を持った二人がいるが、外に出た瞬間、レディ・ナガンに狙撃される。

かと言って何もしなければ、電話塔はクリフトの手に落ちる。

緑谷は考えを巡らせる。何か、何か、狙撃手レディ・ナガンを無力化して、尚且つ人形も無力化する、そんな手は無いか——。

「……………あれ?人形達が……………道を作っている?」

必死に手がかりを探っている際に見つけた——違和感。

今も尚増え続ける人形——大部分は逃げてその速度は遅くなっているが——ある程度の規則性を持って行動している事に気づいた。

それは、まるで王の歩むレッドカーペットのように。
返り血で真っ赤に染まった道をモーセの海割りのごとく開けてい
た。

——何のために？

「……考えるまでもない、か」

一人、確信に至ったように呟いて緑谷は覚悟を決める。

「……一つ、策を思いついた。でも、これはみんなの協力がないと成り
立たなくて……でも、これなら……クリフォトを倒せるかもしれない
い」

「……教えてくれ」

「うん。それは——」

轟が促し、緑谷が小さく頷いて話始めた。

☆☆

「——先ず、第一に……戦いというのは数が大事だ。今の状況を客観的
に見れば圧倒的にこっちが不利……だから、分断する。人形勢力と、
クリフォトを。こちらが、有利に立つために。……オールマイトが居
れば数なんて関係無かったんだろうけど……」

「……まあ、今この場に居ない奴のことを気にしても仕方ねえよ」

戦いの基本を説いた後にぼそつと数^{オー}すら関係ない規格外^マを別枠と
して置いておく。

直ぐにコホン、と咳払いをしてから緑谷は話を続ける。

「だ、だからこそその分断って事なんだ」

「なるほど。つまりあの数の人形＋クリフォト、という構図ではなく
クリフォト単体の状況を作り出す、と……」

「で、でもよでもよ！そんな状況どうやって作り出すんだ？」

「ケロ……そうね。あのクリフォトだもの。孤立してくれるとは思わな
いわ」

緑谷の策にもっともな反対意見を出す、蛙水と上鳴の二人。他も気
になっているのか、視線が一気に緑谷に集まる。しかし、急に複数の

視線が一気に集まった緑谷はタジタジになる。しかし、それでも何とか返事をしようとしたその時。

「——俺だな？緑谷その分断した状況を作り出すのは」

確信を得た瞳で真っ直ぐに。轟は緑谷を見る。

緑谷は少しの逡巡の後に、頷いた。

その様子を見て轟は——フ、と笑い続けざまに緑谷が用意していたもう一つの策についても言い当てた。

「…そんなもって俺が分断して、お前たちがクリフオトを相手している間に露払いする奴が必要だ。それが——」

「…クソが」

「爆豪、だな」

ずつと黙ったままの爆豪に目線を向けた。

緑谷は見抜かれてしまったて少し悔しい気持ちやらなんやらで複雑であったが、それを振り払う様に首を縦に大きく振った。

「……………、……………今回ばかりは乗ってやるよ。だが、今回だけだ。次、このクソナードのクソみたいな策に頼る事は二度とねエ」

葛藤が目に見えるようだった。顔は引き攣らせていて、明らかにイライラしていたが、緑谷以上の策を思いつかない自分自身にもムカつきが止まらなかつた。

大人しく引き下がった爆豪にはつと息を撫で下ろすと、そのまま緑谷は続ける。

「そして、クリフオトと実際に戦うのは、僕と、インゲニウム、ウラビティ、フロツピー、烈怒頼雄斗、チャージズマの6人だ」

ゴクリ——誰かから唾を飲み込む音が聞こえた。

勝率は決して高い訳では無い。しかし、それでも。痛い泣きながら人形とかしてしまった人がある。

助けようと、手を差し伸べた途端に人形へと変えられてしまった人がいる。

誰もが、被害者で——加害者だった。

こんな、残酷な事は無い。こんな非道な事は無い。

この、地獄を生み出した敵、ヴァイランクリフオトを許せない。

だからこそ、6人は覚悟を決めた。
真つ向から戦う、覚悟を。

☆☆

「——着いたよ」

「……うわあ、グロテスク」

車から降りた俺の視界に広がる光景はまさに地獄と言えるもので。
血で象られた道を、人形の悪魔が作り出していた。
悪趣味だな。玉座へのレッドカーペットってか？

ううむ、鉄臭い。……つつーか、そんな指示してないよな？ って事は人形の悪魔の意思によるものか……。

とはいえ、制圧してくれてるからあととは電波塔に行くだけか。

……鼠がチラホラいるようだけど。

まあ、ちよつかいかけてくる馬鹿はおらんでしょ。

この数を見て。

犇めく、蠢く、騒めく。

現世に出づるは陸地を埋め尽くさんばかりの悪魔共。

その全てが俺の前に跪く。それは、正に地獄の様で——。

「さあさあ大詰めだ。ここままで生き残ったヒーロー共は乗り越えられないか、見ものだねえ」

まだ、傷一つない電波塔を見据えて、俺は不敵に笑って見せた。

「格好着けてるとこ悪いんだけどさ。雄英高校ヒーロー科の子達が多
だ居るらしいよ?」

マキマが駆け寄ってきた鼠を手に、呆れた様にため息をこぼす。

「……え?」

……えっ?!

☆☆

「………………。ま、まあたかが子供だし、問題無いでしょ」

「壮絶な葛藤が見えたね」

「イウホド警戒する必要ナイと思うケド」

俺の強がりに反応して、ジト目を向けてくる二人。

ふ、ふん!!どうとでもいえよ!!

どうせ俺と同年代で、俺より強いなんて事は無いし。

問題ないってのは本当だ。ただ…少しめんどくさいな。この状況でまだ残っている雄英生徒って事は確定で主要人物^{ネームド}だろう。

……面倒くさいな。戦えば大幅なタイムロスだ。

とはいえ、道はここしか残されて無いんだよな。他は封鎖したし。全盛期を過ぎたとは言えまだまだ強いオールマイトに加えて、エンデヴァーだ。No.2とは言え実力は本物だ。銃の悪魔の時間稼ぎどのくらいになるか…

つまるところ…時間はあまり残されていない。

「うーん、よし、殺すか」

「ダト思っタ」

「…まあメリットないしね。賛成だよ」

ヴィラは犬歯を剥き出して笑い、マキマは複雑そうに微笑んだ。では、俺は、俺は——…笑えて、いるのだろうか。

——…いや、いや、自分を信じる。余計な事は考えるな。

強く握りしめた拳は、爪がくい込み、血が滲む。痛みを感じる。けれど、その傷さえすぐ治る。

——人間じゃないだろ。

分かっている。

——お前は悪魔の子だろ。

そうだな。

——お前は、”僕”の親を殺しただろ。
……………ああ。

——一丁前に罪悪感なんて感じてんじゃねえよ。お前には、その資格すらないだろうが。

……………
幻聴が、聴こえる。

囁くように、咎めるように、嘲るように。

『黒魔ヒロフミ』が、『俺』の心を蝕む。

消えてくれ、きえてくれ、消えて、ください。

ごめんなさい。クズです。俺はどうしようもないクズなんです。人生を奪ってごめんなさい。許してください。すみません。すみません。すみませ——「ヒロフミ?」

はっ、と顔を上げるとマキマ姉その黄金の双眸を揺らしながら心配そうに俺を覗き込んでいた。

「何でもないよ…うん。大丈夫」

「……………辛かったら辞めても別に」

「——いや、それはない。必ず、遂行する」

俺は断言した。

その様にマキマ姉は明らかに不服そうにしながらも「分かった」とだけ返し、先導するように電波塔へと歩み始めた。

「ホラ、行こーヒロフミ!」

花開く様な笑顔で、ヴィラは俺の手を引きながらマキマの後をついて行った。半ば引きずられるようにして、進み出したが、やがて決心し、自分の足で、歩み出した。

「——やるか」

☆☆

一歩、また一歩とクリフオト達は進む。

振り返ることは無く。その後ろには大量の悪魔を引き連れていた。

——後に、百鬼夜行と呼ばれる行進である。

地面は赤く血で染まり、電波塔までを元は民間人やヒーローであった人形達が、王に傳くようにして道を開けていた。その様子を遠く離れたビルにて、スコープ越しで確認したレディ・ナガンはようやく一息つけると、安堵していた。警戒は緩めず、しかし肩の力を少しだけ抜いて。場所を移動しようとしたその時だった。突如として、クリフォトの進行方向に霧が——否、水蒸気が壁を作った。

「——なんだ？」

疑問を口にする。が、答える者は居ない。

スコープ越しのクリフォトは、少し怪訝そうにしながら歩むスピードを緩めて確認しようとしていた。

当然、レディ・ナガンも狙撃手として警戒のレベルを一段上げていた。

その瞬間。

巨大な氷壁がクリフォトの目の前に現れた。

レディ・ナガンは慌てた。急いで、この壁を作り出した者を探さなければ——…

しかし、追い打ちをかけるように氷壁が、クリフォトを挟み撃ちの要領で背後からも作り出された。

これでは、狙撃が出来ない。

冷静にそう判断したレディ・ナガンは、移動しようとした。

——気配。

振り返りざまに銃を展開し、明らかに自分に向けられた敵意の方へと向き直る。そこには——

「…なぜ、貴女がここにいるんですか——レディ・ナガン!!」

鷹の翼を持つヒーロー、ホークスが息を切らしながら、立っていた。

☆☆

「今だっ！」

緑谷の号令を聞き、轟は氷と炎で水蒸気を生み出し狙撃手とクリフォト達の”目”を一時奪った。その隙にクリフォトと戦う六人はこつそりと戦場に入った。

六人が行った事を確認すると、すかさず氷の壁を展開し、クリフォトの歩みを止めた。

そして、急いで路地裏を移動しクリフォトの後ろに行くと同じように氷壁を展開した。

これで、クリフォトとその一味は一時的に氷の檻に閉じ込められる事なる。だが、これは轟も同じだ。ビルと路地裏の間を埋めるように展開したため、中からも外からも入れない。

あとはもう、勝利を願う他ない。

「——頼むぞ……」

戦闘が始まろうとしている氷の檻に向かい、祈るように轟は呟いた。

☆☆

突如として。

クリフォトの覇道を邪魔するように、水蒸気が壁を作りだした。

不審がり、速度を緩めるクリフォト、マキマ、ヴィラの三人。その行動は——正解だったと言えるだろう。

何故ならば、その直後巨大な氷の壁が出現したからだ。もし、あのまま進んでいれば三人は仲良く氷漬けになっていた。

「——氷、ね。まア直ぐにぶっ壊せるんだが」

拳を握りしめ、氷壁目掛けて振り抜こうとしたその瞬間。ぬるり、とした感触と共に振り上げられた右腕が掴まれた。

「何——？」

「っ！今よ!!」

怪訝そうな顔をしてこの舌の主を探す。

しかし、水蒸気によって生み出された霧の様なこの状況は視界が悪くよく見えない。——辛うじてだが、囁くような少女の声が聞こえた

程度だった。

「視界を封じ、俺個人を分断……無駄な気もするけど……」

冷静に敵の目的を見抜いたクリフオトは呆れたように呟く。共に来てきた二人は既に臨戦態勢の様で、殺意を隠そうとしていない。

音を立てて、閉じ込めるように出現した新たな氷壁を見て、確信に至ると、「はア」と一つため息をこぼす。

「なるほど。って事は……」

クリフオトの上空から、緑谷がその拳に継承した力を宿し飛び掛かり、真横にピツタリと超スピードで水蒸気を吹き飛ばしながら飯田が接近し、耳を澄ませばどこかでバチバチと電気のような音が聞こえ、切島が全身を硬化させながら俺の前に躍り出ている。

「俺狙い撃ちって訳ね。主人公君」

「二「おおおおおーっ!!!」二」

クリフオトはニヤリと笑い、援護しようとする二人に目で手を出すな、と制する。

雄叫びを上げる四人。その表情には覚悟が表れており、決して簡単な相手では無い、と感じさせるには十分であった。が――、

「まア、それは並大抵の相手だったらの話だがな――」

――それは正しく、瞬殺であった。

届かなかったのだ。緑谷の拳も、飯田の足も、上鳴の電撃も、切島の拳も、蛙水の個性も、麗日ちからの予め浮かせていた岩石も。

策は全て見抜かれ、小手先の技術すら無意味だった。

真正面から、ただ蹂躪されたのだ。

さつきまでの威勢も、余力も、勇気も、完全に消え失せていた。痛み、軋む体はクリフオトの拳をもろに食らった証だ。

緑谷は歯噛みする。

届かなかった悔しさに。

緑谷は恐怖する。

これからの展開に。

相手は一線級のヴィラン。何をしてくるのか、想像するだけで恐ろしい。出来ることならば、仲間を抱えて逃げてしまいたい——が、体が言うことを聞かない。

倒れ伏す五人のクラスメイト達に逃げろ、と叫ぶが殆ど気絶しているのか、反応は無い。

爆豪と轟を呼んでみるか——？……いや、呼んだところでどうにかなる相手ではないだろう。確かに二人は強いが……ここに来て、戦力差を誤ることはしなかった。

——詰みだ。

緑谷の冷静な部分がそう、囁いていた。

だが、緑谷の意思は諦めていなかった。諦めきれなかった。

クリフォートの足音が近付いてくる。

足掻こうと、顔を上げようとする。——が、体を動かした瞬間激痛が走り、出来ない。

「よオ、ヒーローの卵くん。名前は……ああそうそう、デク……緑谷出久だな。おっと、なんで知ってる？っていう質問には答えないぜ？」

——知ったところで、無駄だからな。

クリフォートの嘲る様な言葉が、緑谷の耳に響く。

いつしかクリフォートは緑谷の前に来るとそのまましゃがみこんでからその頭を掴み観察するように、持ち上げた。

「お前、正直俺を舐めてただろ？ 同い年だからって。ガキだからってさ。——甘エンだよクソツタレ」

ハッ——と鼻で笑い侮蔑の表情を浮かべる。

緑谷は、怒りと、悔しきで、奥歯を噛み締め、クリフォートを睨む。

だが——その時初めて、緑谷はクリフォートの顔をしっかりと見ることが出来た。

暗い、昏い目。全てに絶望し、全てを飲み込もうとする沼の様な瞳。

ただ——その奥底に、どこか、迷子の子供を思わせる様な——

「……………オイ。なんで、そんな顔が出来る」

「か……………お……………」

「ああその顔だ。てめえ今俺に生殺与奪の権握られてんのになんで——……ヒーローの顔が出来る!？」

否定するように、いや、否定しなければいけない、とクリフォトは叫んだ。——だが、それが緑谷にとって、答えとなってしまった。

「(……ああ、そういう、ことか……クリフォトは、彼は……)」

「——救いを求めている、顔をしてる……」

そこまで言い切ると、緑谷は糸が切れたように倒れた。

クリフォトは苛立ちが止まらなかった。今にも沸騰しそうな怒りを抑えきれなかった。この、フラストレーションは誰かに——そう、緑谷にぶつけねばと思い、筋肉悪魔と禍の悪魔の力を込めた拳を握りしめ振り下ろそうとするが——

出来なかった。

途中で拳が進行方向を変え前方の——電波塔へと続く方向に——振り抜いた。

凄まじい衝撃が、氷壁に直撃した。

轟音を立てて破壊される氷壁。間から差し込む様に太陽光が緑谷を照らし、クリフォトをまだ残っていた氷壁の影が覆った。

「……は、俺は、何してんだろうな……」

自嘲気味に呟くと、クリフォトはそのまま倒れ込む6人達を無視して、電波塔へと何事も無かったかのように歩み始めた。

ヴィラは困惑しながらも、クリフォトの強さと悪辣さに惚れ直し、甘えた声で駆け寄って行きマキマは目を細めながら、見守るように黙ってその後ろを着いて行った。

そして、クリフォトもヴィラも、マキマでさえも気付けなかった。クリフォトが去ったその場所に、赤い髪を揺らしている少女の存在に。

☆☆

地面が跳ねたかと錯覚してしまうほどの揺れが起こる。衝撃のすぐ後に、何か崩れていく音が轟の耳朵を打つ。

「——ッ！」

嫌な想像が頭をよぎる。

不自然なほどに動かない人形達を尻目に轟は戦闘があつた区画の氷を溶かして入る。そこには——

「……これは……っ！」

息はしているのだろうか、全員が倒れ伏しておりこの惨状から見るに——敗北したのだらう。完膚なきまでに。

「ぐ……うう……」

「緑谷！」

呻き声を上げる緑谷に轟は弾かれたように駆け寄る。

怪我を確認しながら、心配そうに覗き込む。

しばらくして、ようやく目を開いた緑谷は身体をガバツと勢いよく起こす。

「クリフオトは?!」

「…さあな。どっかいっちまった」

「あ、轟君…ってことは僕達は…」

「ああ、負けたんだらうな」

やけにあっさりとして、しかし慮るように今の状況を断じた轟と、どこか腑に落ちたような反応を示す緑谷。

「……負けるって分かってたのか？」

「……ハッキリ言つて、”可能性があつた”だけだからね…それでもやっぱり逃げたくはなかつたんだ」

気まずい沈黙が二人に流れる。

とりあえず、ここで倒れているクラスメイト達を安全なところに運

ぼうと、緑谷と轟が動き始めた時。

突如として、沈黙を保っていた人形達が動き始めた。

「っ!? まずい!」

「クソ!! なんで今になって——」

急いでクラスメイト達を抱えようとするが、間に合わない。これでは、囲まれる——!

「ハッ、やっぱり負けたかクソナード」

侮蔑の意を込めた声で空から降ってきたのは——

「かっちゃん（爆豪）!!」

歯を剥き出しに笑う、爆豪勝己であった。

爆豪はそのまま迫り来る人形を爆風で吹き飛ばすと、緑谷と轟の2人がクラスメイトを回収するまでの時間を稼ぐ。

「ツらあ!!」

飛びかかってきた人形をまた一つ、薙ぎ払う。

額を伝う汗が地面に落ち、染み渡る。

いつしか、瓦礫の山の頂点にまで追い詰められていた。

緑谷と轟はクラスメイト達を回収することには成功したものの抜け出すことは出来なかった。

「くっ、どうする!? このままじゃジリ貧だぞ!」

「せめて、麗日さんが起きてくれれば……! かっちゃんとの組み合わせで空高くへ脱出できるかもしれないのに……!」

轟が氷で、緑谷がフルカウルで応戦する。

しかし、襲いかかる人形の元は人間。余り強くは出れない。

制約の最中戦っているからか、彼らは普段通りの力を出せていなかった。

そんな時。

一筋の赤い流星が天空から舞い降りた。

「私が——」

少女は、青いスーツに腰まで届く程の赤い髪をマントのように翻しながら、ただの風圧だけで周辺の人形を吹き飛ばした。

「来た」

その姿は、緑谷、轟、爆豪の憧れた、オールマイトのようで、三人は目を離すことが出来なかった。

☆☆

「……………む」

「どうした、ヴィラ」

「チョットやなヤツの気配がしてネ」

「ふむ…まあいい。予定通りここの門番は任せたぞ」

「マカサレター！」

ピシッと敬礼して応えるヴィラを背に、クリフオトとマキマの二人は電波塔に入っていった。

一步、踏み入れたその先には警備員や、ヒーローのものであろう血で床を池のように沈めていた。

入って早々に顔を顰めるクリフオト。

「…………汚えなオイ」

「…やっぱり掃除しといたほうが良かったんじゃん！」

「えー、でもこっちのほうがそれっぽくない？」

軽口を叩き合いながらクリフオトの目の前に現れたのはヒーローの装束に身を包んだ皮の悪魔。

事前に潜入して内部の制圧をしていた。

二人は、そのまま恭しく跪くとさっきの軽薄そうな様子から打って変わってまるで従者のようになる。

「我が主^{マイロード}。第三段階まで終了しております」

「既にこの国の電波は我が手に落ちました」

「あとは」

「——ああ。あとは、この国を落とすだけだな」

血を踏みしめながら、クリフオトは最上階へと向かっていった。

☆☆

「……ここまでくれば大丈夫だろう」

ヒーローとだけ名乗る少女は倒れ伏していた皆を抱えながら近くのビルにまで運び込んだ。

「す、凄いたった一人で……こんな人数を……！」

「ハハすごいだろう！すごいだろう！」

「……」

「……」

「……一部から凄い目で見られてるけど気にしない！ヒーローだから！」

緑谷からは純粹な賛辞を。轟と爆豪から睨むような、吟味するような目線で一定の距離を置かれていた。

嫌われるようなことをしたかなあ、と頭を搔きながらアハハと笑う少女。

決して和やかとは言えない雰囲気は漂っていた。

しばらく手当をしてから。

「……さて、だ。君たちの懐疑の視線の理由は分かる。そのヒーローオタク君のオタク知識データベースにも私の情報が無いことから、正規のヒーローでは無いと勘づいているのたろう？」

いきなりド直球で三人が思っていた事を言い当てる。

緑谷は動揺するが、轟と爆豪は眉を顰める程度だった。

緑谷はほぼ病気と言っている癖があった。それはヒーローを目にした時にそのヒーローの特徴や個性、得意な事を興奮しながらまくし立てるといふ、オタク特有の早口である。

しかし、今回の少女に対してはそれがなかった。この時点で爆豪と轟の二人は彼女が正規のヒーローでは無いのでは？と疑いを持っていた。

そしてその疑念を確信に至らせたのが、さっきの発言だ。

「……見たこと、無いヒーローだったから……もしかしたらとは思っていません」

「緑谷が発作を起こしていなかったらからな」

「発作って…言い方…」

「事実だろ」

「うぐぐ……」

「そんな事で私の正体を見破られたのか…ちょっとショック…」

彼女にとっては予想していたとは言え当たって欲しくはなかったと嘆きつつも、気を取り直すように「ホーンと咳払いを一つする。

「いきなり出てきてアレなんだけどね。私はもうすぐ消える——いや、とある奴らを倒してから、消えるんだ」

「……どういう事です？」

「………詳しくは言えない。——ただ、一つだけ言うならば、宿命、かな」

「宿命……」

緑谷は宿命、という言葉を噛み締めるように呟いた。それは師であり、自身の個性の先代でもあるオールマイトが倒したとされるヴィラン、オールフオーワンのことが頭によぎったからだ。

絶対に倒さなければいけない悪。

自分でしか討ち取れない敵。サイラン

悲壮な覚悟が少女から感じ取れた。

「…それは一人じゃなきゃダメなんですか？」

「そうだね。私でしか——ダメなんだ」

諦め——ではない。本気で、そう思っている瞳だ。

「倒さなきゃいけない奴らって言うのはクリフオト達…ですね？」

「………参ったな。君には誤魔化すって事が出来なさそうだ」

いや、彼女がわかりやすいだけだ——という言葉は飲み込んだ。

緑谷は慎重に、ヒーローとだけ名乗る少女に語りかけた。

「僕は…どんなに困っていても笑顔で救けるヒーローの姿に憧れて、ヒーローを目指したんだ。いつかその人に追い付きたい、と思ってる。そのためには、そう——」

「救いを求める顔をしている、たった一人の女の子の事も救けられるようにならなくちゃね」

恥ずかしげに顔を赤くしながら、それでも、ヒーローらしく微笑みかける緑谷に少女は呆気にとられたような顔をしてから——顔を抑えて俯いた。

「あ、いや、その僕なんかがとか思うかもしれないけど、一応雄英のヒーロー科の生徒だし」

泣かせてしまったのか、とオロオロし始める緑谷に対して、少女は肩を震わせながら頭を横に振りながら顔を上げた。

「くつくつく…ははは!! ああ、そういう事か。だからヒロフミが恐れるわけか!」

まるで大輪の花が咲くように。

心の底から笑顔になっていた少女は笑いすぎて目尻に浮かぶ涙を指で拭き取る。

「うん。うん! 気が変わったよ! 緑谷出久くん! 君はとても好ましい人物だ! ヒーローとして尊敬する!!——故に、契約をしよう」

「は、え? 契約…?」

「私の正体はヒーローの悪魔。あのクリフォットの個性にして唯一の離反者さ!」

「ええええええええー!!??」

「……………何?」

これには沈黙を保っていた轟と爆豪も驚いたようで、少女——ヒーローの悪魔を見る。

悪戯が成功した子供のよう、からからと笑う。

「私はヒーローとして悪に堕ちていく彼を容認出来なかった。それで、戦って、負けて無惨に逃げおおせたのが私だったんだ。だからさ、せめて彼は私の手で倒そうと思っていたのだけれど——うん。君らに任せる事にするよ!」

「だからこそ、契約だ。君たちがクリフォトを倒すためにあの大きな電波塔に行くだろう。その際に門番として立っている悪魔——ヴィラは私に任せてくれないか? そして、私が見事ヴィラを打ち倒すことが出来たら対価として、君たちに私の力の一部を貸し与えようじゃないか!」

「……いいんですか？そんな条件で…」

「いいとも!!私に君が気に入ったんだ!幾らでも使ってくれよ!!」

気合を入れるように背中を強く叩くヒーローの悪魔。

「ツはい!!」

緑谷には分からない。自分の主がどう足掻いても悪に堕ちるしかなかった時の彼女の絶望が。

彼女の想いは計り知れない。だからこそ、緑谷はクリフトを救^戦けに行^いくのだ。

☆☆

両親を事故で死なせてしまった。

それを本人に非が無いはずなのに世間は責め立てた。

人は、分かりやすい”悪”があると、相手の事情を考えずに叩く。それが、たった一人の少年であったとしても。人間というのはどこまでも残酷で、なろうと思えば悪魔にだってすらなれるのだ。

そして、その悪意を一身に受けた結果がクリフトとという怪物を産んだ。

もはや止まれない。止められないと思った。

だが——怪物を倒す勇者が、目の前に現れた。

彼は、緑谷出久はクリフトは救いを求める顔をしている——と言^う。

それを聞いた時、目から鱗が出るような思いになった。救^け?誰^が?——クリフト^ヒが?

混乱した。けれど、どこが納得もした。

諦め、絶望、悲観、恐怖。

渦巻き、澱んだ瞳は希望を映していなかった。

ありとあらゆる力は、彼に意味をなさないだろう。だって余りにも力の差があり過ぎるから。

言葉を尽くしたとしても、やはり意味をなさないだろう。既に彼の耳は閉ざされている。

どんなに強い光を照らしたとしても、もはや彼の目に映ることは無い。

——…ならば、優しく差し伸べるヒーローの手は？

凍えるような孤独も、溶かしてくれるような温かさを持った手ならば、
ばもしくは……。

私は、その答えを持ち合わせていなかった。

だが、目の前の少年は持っていた。

だからこそ、私は力を託す。

一縷の望みをかけて、全身全霊を尽くす。

どうか、どうか——クリフォトを、ヒロフミを、救ってくれ。

希望は無く。

☆☆

……これは——この気配は。

「さア——行こうか!」

「ちよ!?!早!?!」

「置いてかれるぞ……!急げ!!」

「んなこと言われなくてもなア!?!分かつ——てんだよオ!!」

声とする。

希望に満ちた、ヒーローの声。

その声達は、誰かを倒しに行くと言う訳ではなく。

まるで誰かを救いに行くようであった。

——何故?誰を?

周辺に人の気配はもう無い。あるのは息絶えた死体か、物言わぬ人形だけだ。

…段々と、声が近づいて来る。

——分からない。

クリフォトには理解できない。

緑谷、爆豪、轟——そして、ヒーローの悪魔がやろうとしていることは自殺行為だ。

普通なら、一度撤退するのが正解だろう。

一度下がりが、勢力を引き連れてくるのが定石だと言うのに。それなのに

「誰のために?」

ヒロフミは気付けない。

己の心の中の悲鳴に。

☆☆

緑谷たちは一陣の風となって道を駆け抜ける。

「走りながら——君たちに作戦を言い渡す!!」

「は、はあ!」

「まず門番に立っている敵の悪魔は、私が倒す!!君たちはまず、勝てないだろうからね!」

「ソレってどういう——」

「そんでもって君たちは私が相手してる間に電波塔に潜入、そしてクリフォトと戦ってくれ!!」

有無を言わず、端的に作戦を述べるとヒーローの悪魔は更に加速する。

「ちよ——早すぎでしょおお——?!?!」

「置いてくぞ!!クソデク!!」

「悪い、急がなきゃなんねえんでな」

「くっ——限定解放……10%!!」

…着々と、近付いて来ている。

悪魔の巣窟と化した、巨大電波塔に——。

☆☆

「ハア…ハア…ハア…中々、やるじゃない、後輩くん?」

「……ふう…ええ、まあこんな仕事託されるくらいですからね」

一番と言わずとも、弱くつちやあ務まらないですよ。と、食えない笑顔でホークスは笑っていた。

隙が見えない——とナガンは心の中で歯噛みする。肩で息をしなから、ふう、と一つ呼吸をして慎重に頭を冷やす。

既に、監視及び撃退という任務はホークスが乱入した時点で失敗している。

失敗してしまったことは今気にするな。

そんなことよりも、いま、ここで自分が出来ることをしろ。

「(ヒーローを少しでもあつちへ行かせるな)」

ヒーロー側に必要なのは数だ。

現状四人しか戦える者がいない上、三人はまだヒョつ子だ。だが、実力は確かなものがある。

正に少数精鋭と言えるだろう。さすがのクリフトも、ここまでで疲労が蓄積されてる。休む暇を与えなければ——詰む。

そこに、この経験も、実績もあるホークスが加勢するとなると、面倒な事になる。

だからここここで——

「倒す」

「押し通らせて貰いますよ——先輩!!」

ホークスの言葉を皮切りに、ナガンの銃身から弾丸が放たれる。

放たれた弾丸は一直線に、ホークスを穿たんとするが——

「甘いっ!!」

剛翼を広げ、空へと舞い上がりナガンを見据えるが

「…知ってるか? 私の弾丸は曲がるんだぞ」

直角に、ただ一点ホークスを穿つという念を込められた弾丸は執拗に彼を狙う。

ホークスは舌打ちをしながら間合いに入った弾丸を刀で切り落とすが——二射目は既に放たれていた。

同じように狙うはホークス。心臓目掛けて空気の壁を撃ち抜く。

——回避：間に合わない! つ!! ならー!

一射目と同じように切り落とそうと——

「——なっ!?!」

その弾丸は蛇のように、ぬるりとホークスの握る刀を避けて彼の間合いへと入ってきた。

それは、恐るべき精密性を持った個性操作であった。

レディ・ナガンという、自分の先代とも言えるヒーローが極めた、ヒーローを殺すための技だ。

このままでは、撃ち抜かれる。ホークスは頭ではなく直感的にそう感じた。何も出来ずに、憧れのヒーローに並び立つことも出来ずに。

駆け巡るように頭の中を流れていく記憶。

——走馬灯、か。

ホークスは自嘲気味に独り言ちた。

：話は変わるが、一説によると走馬灯というのは人が死の間際に生き延びるためのヒントを探すための生存本能、と言われている。

ホークスの脳内を駆け巡っているのは、死ぬほど辛かった訓練や、勉強では無く、エンデヴァーの人形を握りしめる幼い少年^{ホークス}の姿であった。

なんで、この記憶なんだよ。と苦笑するホークス。

記憶の中の少年は、両親のことなど忘れて、ただ目を輝かせながら、フレイルム^エヒーロー^デの姿を眺めていた。

ただ、それだけであつた筈なのに、ホークスの胸の奥底からふつふつと燃え上がるような情熱が巻き起こり始めた。

それは、小さい炎だつた。だが、それが次第に憧れに近付く度に轟々と燃え上がっていった。

原点^{オリジン}だ。原点^{オリジン}が——燃えているんだ。

——そうだ。俺はあこがれたんだ。圧倒的なまでの実力で一位に君臨するオールマイトじゃなくて、何を言われても、どう見られても、不器用ながら二位と一位という、短いようで長く大きい溝を埋めようとするヒーローの姿に：!!

「オ、オオオオオオオオオオオオ——!!」

ホークスは吠えた。

自分の情けなさを吹き飛ばすために。

身体を思い切り振り、翼で壁を貼りながら、弾丸を躲し——きれてはいなかった。

肩を穿かれ、声なき悲鳴が出そうになるのをぐつと堪えると大翼を広げ、ナガン目掛けて一気に加速する。

「何!!?」

目を見開くのはナガンだ。

さつきまで詰みの状況にまで持って行ったはずなのに、目の前のヒー

ローは、後輩は、それすらもひっくり返して迫ってくる。

遠距離攻撃系個性は近接に弱い。

故に、三射、四射と続けて放ち距離を取ろうとするが――

「ツ――！！アンタが！！公安ウッチにどれだけ絶望したか知らん！！でも、でも――その個性ちからは！確かに誰かを生かすためのものだった！！」

「っ違う！！そんなんじゃない！！私の力は！確かに命を奪った！！正義の為だと言われ！！これは正しい事だと信じ込み！！殺した殺して殺して殺して――血塗られてるんだよ！！私は！！アンタみたいなヤツに何が分かる！！」

「分からねえよ！！でも！貴方がそれをした事で保たれた平和がある！！平穩がある！！貴方のお陰なんだ！！だから！だから――！！」

加速、加速加速加速――！！

太陽を背に、速度を上げながらナガンへと急転直下の飛翔。対するナガンは太陽光を背にしたホークスの姿が上手く視認出来なかった。が――それでも、ナガンは五射、六射目を放ち、正確にホークスを狙撃する。

ホークスはそれを紙一重で全て躲して行く。躲された弾丸はそのままホークスの背にピッタリ着いてホーミングしていた。しかし、ホークスの速さにどれも追いつけなかった。

残り10 m。

七射目が放たれ――ホークスに切り落とされる。

残り8 m。

ナガンが移動しようとして、ホークスの羽がマシンガンのように降り注ぐ。

残り5 m。

右腕の銃と化した腕を盾にしながら防ぎきると至近距離で狙撃しようとする。

残り――

「仕舞いだ」

弾を込められた腕銃で脳天を狙い――放た――

——れなかった。

「何——!?!」

「さっきの、」

もう、距離の近いホークスが悪戯に成功した子供のようにニヤリと笑いながらささやく。

「さっきの翼の一つを実は銃口の中に忍ばせておいたんです」

ナガンの銃口の中では弾の代わりとなる髪の毛と、ホークスの翼でジャムっていた。

「——ああ」

レディ・ナガンは目を閉じた。

「——ありがとうございます、先輩」

落下の勢いと、速度を利用して刀がレディ・ナガンを斬った。

「貴方がいなければ、きつとヒーローの信頼はそこまで高くなる事はなかったでしょう。——あと、斬つといてなんです、貴方は死なせません。いや、死んじゃダメなんだ」

ホークスはそのまま倒れ込むレディ・ナガンを横抱きしながら支える。

「……すこし……聞きたい……お前は、なんで……さつきも……今も……笑ってられたんだ……?」

「……俺には支えてくれる人がいた」

エンデヴァーの人形を抱く自分を思い出す。

あれが自分の原点だと、固く思ってから、極めて簡単に、一つの答えを口にした。

「——俺、樂觀的なんす」

「は、はは……なる、ほどなあ……アイツにも……ヒロフミの近くに……お前みたい……奴が、いれば……」

それは、有り得ぬ”もしも”だ。

だが、想像してしまう。

もし、出会っていたのが、自分ではなくこの後輩であったのならば、と。

そうであったのならば、きつとヒロフミは良いヒーローになれたかもしれない。

鷹の翼が舞い散る屋上にて一つの戦いの決着が着いた。

「電波塔の…門番を…：…しているのは…：…ごほっ…！クリフオトの持つ…：…悪魔の中でも最上位に位置して…：…いる…：…」

「——何だつて？」

「やつ…：…力は確率を…：…操作…：…している…：…精々…：…この情報を活かせ…：…後輩…：…」

そこまで言うのとレディ・ナガンはフ、と意識を落とした。

「…：…最後の最後に、貴方つて人は…：…分かりましたよ。意思は受け継いでみせますよ、先輩」

レディ・ナガン vs ホークス

勝者、ホーク

ス。

☆☆

電波塔正面まで来ることが出来た緑谷達一向は、その足をさらに早める。

「見えてきたよあそこに——！！」

風切り音が響き、何か黒く細長い物体がヒーローの悪魔の頬を掠める。

音は一つ。しかし、ヒーローの悪魔が躲したことで後ろの壁に突き刺さった杭の数は三本あった。

「っ!?あれは…!!」

「…：…ヴィラか…：…随分とまあ大物が来たもんだな」

「また一段と強くなってるね…：…」

電波塔の入口、そこで門番のように立ち塞がっているヴィラ。ヒーローの悪魔達の姿を視認すると、加虐的な笑いを浮かべ、地面に突き刺している杭の一つを引き抜き――槍投げのように投擲した。

「よい――しよつと!!」

一直線に、ヒーローの悪魔を狙い突き刺ささんとする杭を間合いに入るまで引き付けて、そのまま蹴りあげた。クルクルと、上に蹴飛ばされた杭はそのまま地面に落ち、カラン、とどこか間抜けな音を立てて転がった。

「いやア…久しぶりだねえ…ヴィラ?」

「ダレかと思えば…：負け犬じゃナイ。…：チャアント殺したハズなのになんでイキテルのかしらネエ?」

「狙いが甘かったんじゃない? あつ、キミは外さないはずだったよね?! ゴメンね? 私、正面から掴んでカウンターまでしちゃった!! おかげで…ほら、化粧じゃ隠せないくらいに痣ができてるね!!」

「………殺す」

犬猿の中、不倶戴天、水と油、会った瞬間から殺気をぶつけ合う二人。

ヒーローの悪魔はあえて真正面から挑発に乗り、尚且つ煽り返す事で一緒に来ていた三人の注意を逸らした。

「――まあいいや。それよりも…そこ、通してくんない?」

「ダレが通すカ」

「そっかあーじゃあー…」

「戦^ヤるしかないよネエ!!」

腰を落とす――踏み込み――ヴィラの姿が掻き消える。

「コソコソしてんのは分かってンダヨネエ!」

「あれまあ」

「――でも、門番が守るべき場所から離れるのはいただけないかな」
振り上げられた拳を掴むと、そのまま離さないようにしっかりと握りしめて――地面に叩きつける。

「今だよ!!」

「はい!!」

「……ああ」

「ハ、精々そこで雑魚と遊んでろ」

一人だけ、激励…激励?の意を込めた返事をする。三人はそのまま電波塔の中へ入っていった。

「はは、威勢が良くてなによりだ。……で?わざわざ入らせた門番失格悪魔はどうするつもりかな?」

「ダマリナヨ。ゴリラの悪魔。ベツに、只で通らせた訳じゃない——あの中はそんなに単純じゃあないってコト

……ソ・ン・な・事よりいゝゝ?

イマカラ、テメーを

ブツコロスのが楽しみだなアゝゝ??」

地面に押し付けられていたヴィラの顔が酷く歪む。舌を出したまま、だらり、と涎を垂らすと恍惚とした形相で、ヒーローの悪魔を見上げた。

「知らないの?正義はね最後に必ず——勝つんだぜ?」

「ソリヤア最後に立っていた方が正義勝者ダカラなア!!」

バネが跳ね上がるように、地面から跳ね上がるヴィラと、異常を察知して後方へ距離を取ったヒーローの悪魔が向かい合った。

「絶対ゼッタイに」

両者が拳を構える。

「お前オマエだけは」

その目にははつきりと憎悪を込めて。

「殺す!!」

不倶戴天の敵同士が激突する。

☆☆

「なあ、マキ姉…いや、マキマ…どこまで仕組んだ?」

俺は、ヴィラとヒーローの悪魔が激突した所をみてとある確信に至

り、後ろで微笑む支配の悪魔の方へ問いかける。

「そうだねえ…ヒーローの悪魔の手引きをしたのは私だよ」

さらりと、特に誤魔化す様な事もせず告解した。

いや…何となく分かっていた。いまは離れているとは言え、元は俺の個性だ。何を考えているのかは大体分かる。

「それと…潜入していたネズミにそれとなく情報を流したのも私だし…ナガンには…少し、話したただだよ。そう、キミの願いについてね」
……はあ、厄介な事をしてくれたものだ。

「私個人としても、可愛い可愛い弟にそんな事はして欲しく無いからね」

「……はは」

とんだ裏切り者だ。己のボスの狙いをバラしただけでなく、味方を離反を誘導し、こちらが封印していた渡つて欲しくない戦力もあちらへ渡ってしまった。

こんな裏切り、首ひとつじゃ足りないだろ。

組織の長として、殺さなきゃ…ならない……筈なのに……。
出来ない。やれない。

最初は存在しない記憶の姉として、いつの間にか姉面してたのに、今や本当の姉だと思っていたんだ。

……あまりにも、一緒に居すぎたんだ。

「……ほら、」

マキマが、いつの間にか隣に来て俺の耳もとでささやく。

「こんなに震えて、」

抱き寄せてくる。マキマの柔らかさと、温かみを感じる。

「こんなに顔をぐちゃぐちゃにして、」

頭を撫でてくる。その手つきは慣れたもので、俺に安心感を与えてくれた。

けれど、今は、それと同じように罪悪感というやすりが俺を削っていた。

「あなたをそんなになるまで、追い詰めるなら——」

「辞めていいのよっ」

甘い囁きが、俺の脳を犯した。

ああ、なんて…なんて魅力的な提案なんだろう。
頷きたく、なる。

でも、

俺は、俺は、俺は、

「止めてくれようとして、ありがとう」

「そして」

「さようなら」

「——」(ひゅっ)

もう、止まらないんだ。

マキマの胸が、刀によって貫かれる。

「か……は………そ、う……あなた、……は……」

憐れむような、哀しむような目で倒れ伏すマキマは俺を見上げる。
俺の腕は刀と化していて、マキマの血液が滴り落ちて地面を濡らしていた。

「それでも前に進むつもりなのかな……?」

「………そうだよ。——…ごめん姉さん」

「ふ……ふ、絶対に……ぜえーつたいに…説教……、だからね」

………さて、電波塔に入ってきた三人を迎え撃つべく、少しだけ目を瞑るとしよう。少し、だけ。

ただ、絶望のみが彼の瞳に写っていた。

☆☆

「——ッ！分かつちやいたが…悪魔がうようよ湧いてやがる…！」

炎を用いて迫り来る悪魔を燃やしながら、苦しそうに呻く轟。

かれこれ十五分は上を目指して階段を登っているが、止めどなく表れる悪魔に辟易としていた。

「だああっ！クソ！やりにくい！！飛んでいければ…！！」

「でも、それだとクリフォトに撃ち落とされるってあの人が…！！」

「んな事は分かってんだクソが！！」

だからこそ、もどかしい。と爆豪は歯噛みする。

緑谷も口では爆豪を説得していたものの、思っている気持ちは同じであった。

ここまで来る度に見てきた被害を見る度に許せないと思うと同時に止めなければという使命感が進む度に強くなっていく。

「もうすぐ…着くはず…」

玉のような汗をかきながら駆け上がり——

「……ようやくだ。ようやく、会えたぞ！！クリフォト！！」

「——ああ、長かったな主人公」

ゆつたりと、緩慢な動きで振り返り傲岸不遜に笑うクリフォト。

風が吹く。強く、激しく。

屋上にて対峙するのは爆豪、轟、緑谷。

三人を確認したクリフォトはおどけるようにヘラヘラと笑いながら、見据えた。

「いやア——怖い怖い。そんなに睨まなくてもいいんじゃないか」

「とぼけんなよ。テメエがした事考えりやあ分かんだろ」

「キミってそんな正義に燃える男だったっけ？…いや、割とそんなやつだった気が…うーん知識が曖昧」

首を傾げながらぶつくさどと呟くクリフォト。その様子に怪訝そう

にしつつも、3人は各々の個性を発動させる。

「殺意しか感じない件について」

——ここで、このヴィランは捕えなければこれ以上の被害が出ることは明白だ。

今もまだ、増え続けているであろう被害を止める為に。

増援は待つていられない。

だから、ここで、今。

「——倒す！」

「——アハ」

緑谷が踏み込み、拳を振り上げて。轟が氷を、展開しクリフトを閉じ込めようとして。爆豪が空へ飛び空中から、襲いかかろうとして。

三方向からクリフトただ一人を狙って攻撃しようとする。

そんな中。

クリフトは、その淀んだ瞳で無感動に、ただ笑っていた。

愉しそうに。そして、哀しそうに。

☆☆

「っチィ!!」

「うおっと!!」

——所変わって電波塔前の大通りにて。

ヒーローの悪魔と敵の悪魔は激しい戦鬪を繰り広げていた。

ヒーローの悪魔が右ストレートを放てば、敵の悪魔の顔を正確

に貫く——事にはならず、ただ自然とまるでそこを狙っていたかのように、拳は空を切る。

反撃にと、ヒーローの悪魔の脇腹目掛けて鋭い蹴りを放つ。その行動を察知し、腕でガードしようとした瞬間——ヒーローの悪魔の反応速度を超えた速度の蹴りが叩き込まれた。

「——ごひゅっ!!?」

そのまま、あばら骨を数本折りながら蹴飛ばす。

防ぐことすら出来なかったヒーローの悪魔は、そのまま横へ吹き飛ばされる。

「(ツ……！私の反応速度を超えて……)」

「ハヤスギル——ツて思ってる力オだね？」

心を読んだように、ヒーローの悪魔の疑問を口にする敵の悪魔。

「……だから、何なんだい？」

「イヤ？別に」

「……確率操作……全く、厄介な能力だよ」

冷や汗をかきながらも、まだ笑みを絶やさないうヒーローの悪魔。既に数合やり合っているはずなのに、まだどこか余力のありそうな様子に敵の悪魔は少し不機嫌になりつつも、冷静に目の前の敵を注意深く観察する。

「(……体は既にボロボロ。怪我しているところが無い位には痛めつけた。けれど、何故コイツは余裕そうなんだ……?)」

……とは言え、もう既にヒーローの悪魔は瀕死に近い。あと少し追い詰めれば、勝てる。

ヴィランの悪魔はそう判断して、一步踏み出した。

——ヒーローの悪魔はヴィランの恐怖から産まれた。

無慈悲に、悪を裁く為に日々ヴィランを追い詰めるその姿をヴィランは恐れた。

特に最近、突如として現れた平和オールマイイトの象徴のせいで特に恐怖が増している。

仮に、ヒーローを出し抜いたり、勝てたとしても、ヤツがいる限り、ヴィランに安息は無い。

——……ふざけるな。

なぜ、私たちがお前たちヴィランを追い詰めるか知っているか？

なぜ、私たちが命懸けで戦っているのか知っているか？

無駄に力を得たお前たちが罪なき一般市民を襲い、悲しませ、眠れない日々を過ごさせることを強制しているからだ。それも、お前たち

の私利私欲のために！

それなのに何故、お前らは一端に恐怖している？

それ以上の事をしている癖に。

許せない。許さない。

絶対に、私が裁く。

——ヒーローの悪魔を構成しているのは基本的に自身という存在を生み出したヴィランへの”怒り”である。

先に自分たちが罪なき一般市民達を恐怖のどん底に突き落として
いる癖して、いざ自分たちが狙われる立場になった瞬間に恐怖する
ヴィラン共が許せないのだ。

溶岩の様な怒りはヒーローの悪魔の力を増幅させる。

罪なき人々が悲しむ事があればその涙を拭うためにヒーローの悪
魔のスピードは格段に上がる。

そして何より——

助けたい人の為ならば、その力は理すらも捻じ曲げる。

「まだ、まだあ!!」

一気に詰め寄ったヴィランの悪魔の攻撃を必死に耐えながら、ヒー
ローの悪魔は吼えた。

「ハ、オシマイなのがナゼ気付かナイ!!?」

嘲笑いながら、ヒーローの悪魔の踏ん張りを破壊すべく、目にも止
まらぬ豪雨の様な連撃をぶつける。

一步、二歩、三歩、と下がっていく足。

段々と、立っていることも辛くなり、意識は朦朧として来た。

——が。

ヒーローの悪魔は、倒れない。

守りたいものと、救いたいものが、ある限り。

「痛くても、苦しくても、それでも——!!」

トドメの蹴りがヒーローの悪魔に——

「ナニ!!?」

足を掴んだ。そしてそのまま投げ飛ばして、体勢を整える。

「ヒーローは!!最後には必ず勝つんだから!!」

己の矜持に掛けて。

ヒーローの悪魔は駆け出す。そのスピードは疾風よりも早く――

「――ツッ!ハヤッ――ゴツ!!?」

あつという間に間合いに入り込みヴィランの悪魔を蹴り飛ばした。空高く、吹き飛ばされるヴィランの悪魔。衝撃と当てられたという事実に目を見開く。

ヒーローの悪魔はその様子を確認してからヴィランの悪魔のいる地点よりも更に高く、高く跳躍する。

「――ツツ!!マダ、マダア!!」

空中で体勢を変えて、ヒーローの悪魔へと向き直り、ヒーローの悪魔はその右足に自身の力の全てを注ぎ込み――空中にて、二人は対峙する。

ヒーローの悪魔は太陽を背に。

ヴィランの悪魔は地面を背に。

両者に言葉は無く。ただ、その瞳には二人が狩るべき獲物として、互いに写っていた。そして――

「――正義――」
ジャッジ

「――混沌――」
カオス

ヒーローの悪魔は右足を突き出し、ヴィランの悪魔に狙いを定め、ヴィランの悪魔は左拳に禍々しい黒いオーラを纏い迎え撃とうと
していた。

「執行――!!!」
メント

「激突――!!!」
ストライク

ヴィランの悪魔から放たれた拳から黒い波動が一直線にヒーローの悪魔を襲う――!!

しかし、その波動を真ん中から割る様にしてヒーローの悪魔の蹴りはヴィランの悪魔目掛け、穿たんとそのスピードを更に上げる。

「オオオオオオオオオオ!!!」

「グ、アアアアアアアア!!!」

禍々しい黒い波動はヒーローの悪魔を灼く。ヒーローの悪魔は苦悶の表情を浮かべながらも気合いで耐えながら吼える。

一方のヴィランの悪魔も、段々と近づいてきている焦りからその出力を上げる。

「まだ、まだ、まだア!!」

「イ、イ加減シネエ!!」

更に出力を上げて、押し戻されそうになるヒーローの悪魔。これはヴィランの悪魔を貫くよりも自分が焼き尽くされる方が先だ。

そんなの…そんなの絶対に認められない!!

ここで、自分がやらなくちゃいけないんだ。

癪だが、マキマに手助けされてここにいる。

ヒロフミを助けたいのだ。

あの日あの時、自分がもつと止めていれば力があればと何度嘆いたか。

彼は良くも悪くも普通なのだ。今も、異常なフリをして誤魔化しているけど、心では泣いている。

その涙を拭えなくて、何が、何がヒーローか!!

「それでも、それでも!!ヒーローは必ず勝つんだからああああ!!!」

「ホザケ!!勝つのはワタシだアアア!!」

じわじわと、ヒーローの悪魔との距離が近くなっていき、そして――

「グッ、ワアアアアアアア!!」

ヴィランの悪魔の心臓を貫いた。

「ぐっ……………」

空中で爆散し、塵となっていたヴィランの悪魔を見届けながらヒーローの悪魔は力の反動から地面へと倒れた。

「………まで、か。ゴホッ………で………も………後は託し………ている………から、大丈夫、か。………後は契約の履行を………待つだ………け」

——頼んだよ、3人とも。
そう、眩くとヒーローの悪魔は光の粒子となって消えた。

「完全に出るタイミングを見失った……」

駆け付けていたウイングヒーローホークスは、既に戦闘が終わった市街地を見て一人ポツンと残念そうに息を吐いた。

☆☆

……ヒーローの悪魔とヴィランの悪魔がやられたか。いや、ヴィランの悪魔の方が消えた速度が早い所を見るに負けたのはヴィラか。いくら相性があるとは言えヴィラの方は俺が恐怖という燃料を投下して強化していたはずだが……さすがは主人公陣営つて所か。変な修正力が働いてやがる。

とは言え、だ。

現状——負ける気がしない。

「——ッ！赫灼ねっ——」

「まだ完成度が低いだろソレ。発動まで時間掛かりすぎ」

轟の腕を掴んでぶん殴り、吹き飛ばす。

「榴弾^{ハッザ}イン……がはっ!!」

「その技はその距離でやるもんじゃないでしょ。ちゃんと間合い見な
〜?」

蛸の悪魔で即縛り上げると俺の足元まで引き摺り、そのまま踏みしめ、体重を掛ける。

「かっちゃんを——放せ!!——SMASH!!!」

「軽い軽い」

筋肉の悪魔で盛り上がる右腕で緑谷の拳を掴むとそのまま地面に何度も何度も叩き付ける。

…弱い。いや、俺が強すぎるだけか。

「あーあ。詰まんねえなあオイ」

「グ……アア？詰まんねえだあ？何ふざけたこと言ってる……まだ、まだ、これからだろうが、よオ!!」

踏んでいる爆豪が立ち上がろうと俺の足を押し返そうと踏ん張るが――

「これから？オイ。おいおい、お前らに次があると思ってるのか？」

踏みしめる足に力を込める。浮き上がりかけていた爆豪の体は勢いよく、また地面に叩き付けられた。

そもそもその膂力から違うんだわ。

「お前たちに訪れるのはただ一つ。絶望だ。俺があの日、あの時、味わった苦しみのみが平等に降り注ぐ」

――ああ、ああ。

肌で何となく分かる。もうすぐ、決着がつくのだろうと。どちらが、勝つのかは分からないけど。

「別にヒーローだけじゃないがな？」

「どういう、意味だ」

「簡単さ。守るべき市民、そして――この国にも」

何をした所で俺の罪はもう消えない。ならいつその事――全部ぶっ壊しちまおうかなってさ。

「ツ……それは、違う!!それはお前のエゴだ！罪なき人達を……関係ない人達まで危険に晒すな!!クリフオト!!」

「そう怒るなよ緑髪のヒーロー君。第一、ヴィランってそういうものだろう？」

もう、何も感じなくなってきたんだ。

「今!!ここで!!!――お前を倒す!!」

「――やっって見せろよ」

終わりにしようぜ

☆☆

圧倒的とも言える力の差は、簡単に覆せるものではない。
奇跡は無く。偶然は訪れない。

あるのはただ――

「ハア…ハア…ハア…ッ…:…!」

「緑谷…:…大丈夫…:…か?」

「そっちこそ…:…怪我が酷いようだけど…:…:」

技術すら超越した力によって引き起こされる、蹂躪だ。

痛む体に鞭を打ちながら轟に問いかける緑谷であったが、怪我の状況から見るにどっちもどっちだ。

「――ッらあ!!」

それでも。踏ん張り、立ち上がり、懸命にクリフォトに食らいつく者がいた。

「おっと、今のは中々危なかったが…:…そこ!」

「(回避――間に合わな――)」

ミシリ、と爆豪の体から嫌な音が響く。

爆豪はそれを苦悶の表情で受けつつも――ニヤリと、獰猛に笑った。

「ああ…:…だが…:…捕まえたぞ?」

「ッ!? テメエ!!」

叩き込まれた拳をしつかりと掴んだ。

連打、連打連打連打――!!

手当たり次第全てを爆破し、クリフォトを熱と衝撃が襲う。

たまらず、クリフォトは爆豪の腹部にめり込ませてた拳を引っ込めて、フリーになっている爆豪の足を蛸の悪魔の触腕で掴むと距離を離す。

煤けた体。そして灰で黒くなった顔を拭う。

先程の爆豪と入れ替わるようにして、緑谷と轟もまた、飛び出してきた。

さつきからずつと、飽きもせず。

「ッ――ラァッ!!」

禍の悪魔——綿津見^{ワタツミ}を発動させ、大量の海槍が二人を襲う。

「——緑谷!!コレの相手は任せろ!!」

「……分かった!!」

迫り来る無数の海槍に対して、緑谷の前に躍り出て一手に引き受けた。

緑谷はそれを見て強く返事をして、振り返ることせずに駆け出した。

轟は駆け出して行った緑谷を確認すると、迫る海槍を全て凍らせた。

「何をしようが無駄だ!!実力の差がまだ分かんねえか!!」

「それでも!!僕はキミを止める!!」

「な……んで、そこまで——」

クリフトは酷く顔を歪ませながら叫ぶ。

その瞳は迷子のような、困ったような——そんな色が浮かんでいた。

「——だって、キミが今助けを求めている顔をしていたから」

「……………」

その言葉に、一瞬だけ固まった。

それは、彼が漫画越しに飽きるほど読んだ台詞だ。

それは、彼がその漫画の中で最も心に響いていた言葉だ。

その意味も、使う相手がどういう状態だったのかも知っている。

まさか、それが自分に向けられているとは思いつかなかった。

「——嗚呼……でも、それは、それは……」

優しい言葉だ。しかし、残酷だ。

だって、自分はこんな虐殺を引き起こしておいて心の底で救われたがっているなんて——そんなの、ただのクズじゃないか。

「言うのが……少し遅すぎた」

「えっ——」

儂い、笑顔を一瞬だけ浮かべると、すぐにいつもの感情を失ったよ
うな哀しい顔に戻る。

「もう、戦うなよ。勝てないの分かっただろ?」

「緑谷の渾身の拳を簡単そうに受け止めながらクリフォトは語る。

——だが、緑谷は譲らない。

それでも、と叫びながら突進する。

「何度やった所で無駄——」

「へエ、じゃあこうしたらどう?」

「——ッ何!!?」

クリフォトの意識の外から、放たれた予想外の攻撃。

「ホークス……!」

「どうも、さつきは一杯食わされたんでね。お返しだよ」

ヘラヘラと笑いながら、正確にクリフォトとそのまわりを妨害するように鷹の翼が突き刺さる。

——このままでは…負ける。

……いや、否!それは許されない!!自分はもう進んでしまった。今更日和ってなんていられない。

「それでも!!」

ホークスを蝮の悪魔と蛇の悪魔をけしかけることでプロヒーローを好きに動かせないようにすると、今度はまた真正面から向かってくる緑谷に向き直り——

「ッラア!!」

「——なっ!?!」

——迎え撃とうとした瞬間、背後を取った爆豪による絨毯爆撃がクリフォトを襲う。

閃光、衝撃、炎熱。

意識を失いそうになるが、すんでの所で耐えた。

「(距離——いや!まだ間に合う!)」

回し蹴りで爆豪の腹部へクリーンヒットさせると、追撃しようとしていた爆豪は、思わぬ反撃を食らい横へと転がる。

緑谷が既に間合いに踏み込もうとしている。距離にして大体…5mくらいだろうか。だが、今の緑谷は全体的な身体能力が底上げされている。あつという間に追い詰められるのは必然だろう。

今度こそ、と拳を握るが——その瞬間、震える程の冷気がクリフオトを包んだ。

「まだっ！足掻かせてもらおうぞ……！クリフオト……！！」

「ふざっ——いや！足が凍っただけなら！」

まだ、腕がある。拳がある。

大丈夫。勝機は絶対に——！！

「——させっ、ねエ、よっ！！」

「つぐ？！は、離せっ！！」

横から飛び出てきたのは吹き飛ばしたはずの爆豪。

先程、転がりながらも地面を蹴ってそのまま己の個性で浮かぶとそのまま加速してクリフオトの死角から飛び出て来て、そのまま腕を抑える。

対してクリフオトは焦りの声をあげながら、振り払おうと暴れる。

——が。

「20%・正義執行……」

緑色の英雄が、

「SMASH!!!」

クリフオトの腹に渾身の一撃を叩き込んだ。

☆☆

………あ、れ？

「——い——！！」

「——、——！！」

何かが、聞こえる。まるで、誰かを呼んでるみたいだ。それも、なんだか必死そうだ。

………ツ！！………全身が痛い。

何が、あったんだ。俺は、確か——

「起きろー！黒魔ヒロフミ!!!」

何故だか、今度の声はハッキリ聞こえた。

…その声はどこか懐かしくて、泣きたくなるような気持ちになった。

目を見開く。

いつの間にか夕方になっていた様で世界は茜色に染まっていた。

——風が吹く。強く、激しく。

……嗚呼、なるほど俺は負けたんだ。んで、吹っ飛ばされて、落ちそうになっていてそこをすんでの所で緑谷達が俺の腕を掴んで何とか引き戻そうとしてるのか。

3人がかり…いや、4人か。それならすぐ引きあげられるはずだけど……ああなるほど。窪みに引つかかかってすぐには引き上げられないのか。

「ぐぬぬ……!!もう、ちよつと……!!」

「どうなってやがんだ……!!」

「ホークス!!翼は!!」

「さっきの戦いで使い切った!!空ももう飛べない!」

なんだか間抜けな絵面だ。

…いや、こんな状況でそんな事思うのは変か。だけど、それ以上に不思議なのが——

「なん…で、助ける……?」

何とか言葉に紡ぎ、緑谷に問いかける。

すると緑谷は一瞬だけ驚いたような顔をするが、すぐに切りかえて、不細工に、しかし人を安心させるような顔で微笑んだ。

「……キミは本心からコレをやりうとは思っていないようだった。いや——実際には止めて欲しかったんだらう?」

理由は分からないけど——と緑谷は語る。

………ンだよ。なんだよ…スゲエじゃねえか……主人公……俺まで救けようとしてやがる。あんなにボコボコにしたのに。あんなに非道い事をしたのに。それでも、お前は、お前たちは——

「……スゲエなあ……!スゲエなあ……!俺もそんなふうに生きたかったなあ……!」

「……………」

「なんでだろうなあ…？なんで、俺は生まれた時からこんな罪を背負わなければいけなかったのかなあ…？」

生まれたときから、この”黒魔ヒロフミ”という少年の人生と、両親を奪って、事故だと言うのに俺を危険視して保護観察という名の処分を下そうとしてくる奴らを返り討ちにしただけなのに——その時は殺さず怪我をおわせるに留めたのに！——奴らは事実を隠蔽して俺をヴィランだつて、言ってくる。俺をスコア扱いして捕まえようとしてくるヒーローもいて。

…ずっと、ずっと、苦しかった。

誰か、救って欲しかった。

——それでも、誰も助けになんて来やしなかった。

それどころか、風当たりは強くなるばかり。

もう、無理だったんだ。我慢するのが。

だから、振り切れた。いや、振り切れてしまった。

「——なあ…どうしてだろうなあ……………」

「……………僕は、それに対しての答えを持ち合わせていなければ、」

緑谷は一呼吸置いてから俺の目をしっかりと見据える。

血だらけの顔だ。申し訳ないなあ

「それでもキミは生きて、罪を償うべきだ。…酷なことを言うなら、苦しむべきだ。ずっと…永遠に」

……………

「ハ、ハハ…厳しいな。でも、恐らくその意見が正しいんだらうね」

そうだ、そうだと。

結局、自分の人生がどんなに悲劇だったとしても、それは他人の命を奪う理由、免罪符にはならない。

理解している。ちゃんと。道理は知っている。

理解してるからこそ、だ。

「……………だけどき、ヒーロー」

「……………何、かな？」

「俺は、お前みたいに強くはないんだ」

「っ!?やめろ!!クリフオト!!それは——!!」

漸く轟が話し始めたぜ。

俺と緑谷しか会話してなかったから少し不安だったんだ。

…にしても、察しの良さはすげえな。

だが、もう遅い。

俺の腕を断ち切った。

会話して、いる間に全員の視線の死角探って置いて正解だった。おかげで刀化した腕に気付かれなかったしな。

さあて、最期だ。

ちったア格好つけたっていいだろ。どうせ、前世じゃロクな死に方してないんだ。

「——さア!!死ぬぞ!!悪魔を統べる王たる俺が!!一足先に!!地獄に逝ってくる!!」

「待てや!!クリフオト!!」

遅いんだよ。もう。

「待っ——」

最期に聞いたのは、緑谷の制止しようとする声と轟、爆豪の怒りと焦りの混じった怒号だった。

☆☆

ここに、正義は執行された。

周囲の環境により、追い込まれた彼は、いつしか自分を失い、正気を失って暴走してしまった。

止められない。

——いや、もしかしたらもっと早い段階で、誰かが彼の傍にいてやることができれば、防ぐことの出来た悲劇だったのかもしれない。：しかし、結局それはたられればの話である。

死は——救いである。

そう思わない者もいるのかもしれないが：少なくとも、彼にとってはそのうだった。

故に——契約完了だ、緑谷出久君。

最後に、力を貸してくれてありがとうね。

そして、さようなら。

仮免試験編 入寮と、説教。

☆☆

今日の耳郎家は少しバタバタしていた。

と、言うのも――

「お茶菓子つてなに用意したらいいのかしら…相澤先生って甘いもの苦手だったりする?」

「いや、イレ先そんな気遣いしないでいいって言う人だから」

響香は少し苦笑いしながらお菓子を用意しようとしていた母を止め――

「今更になって緊張してきたな…：良し、今から俺は厳格な父親で行くぞー!」

「じゃあ俺はおちゃらけた兄役で…」

「二人は何ふぎけたこと言ってるの…：…」

父とヒロフミは、キャラ作りだと言って設定を考え始めていた。そんな二人に呆れた様のため息を吐きながら、響香は片付けを進める。

耳郎父が「頑固系ロックンロール親父…?」と迷走しだした時点で、ヒロフミは立ち上がり重いものを持つようとしていた響香を手伝う。

「持つよ」

「ん、ありがと」

軽くひよいっと持ち上げるヒロフミに少しドキリとした響香であったが、その気持ちに少し戸惑いつつヒロフミに悟られぬ様からこの寮生活はどうしようか、と問いかけてみた。

「実は結構楽しみだったりする。同年代の奴らと共同生活とか、密かに憧れてたんだよなー」

「…へえーそうなんだ」

ヒロフミの年相応な無邪気な笑顔に響香は目が、離せないでた。

普段、大人っぽい雰囲気なのに。急に自分と同じ位の目線で話してくるなんて。…ズルいなあ。

「あ、でも」

途中でなにか思い出したかのように言葉を切り、響香の方へ顔だけ向ける。

「気軽に響香の飯が食えないのは少し寂しいな。だって寮生活ってことは夕飯はランチラッシュの飯だろ？いや、たしかに美味いけどさ。俺、響香の飯も好きだからさ」

ヒロフミはそう言って響香に微笑み、そのまま荷物を持って家の二階へと登って行ってしまった。

その後、響香が大きなため息を吐きながらその場に膝を抱えると何かニヤけてる顔を元に戻すのに必死になったのは、言うまでもない。

☆☆

さて、諸々の問題があったものの漸く入寮イベントがやってきた。目の前にはバカでかい寮がドーンと、建っておりこれだけでどれだけ金がかかってんだと少し戦慄する。

額を考えただけで恐ろしいぜ。

ああそうそう。三者面談もあったけど今の保護者は耳郎夫妻だったのもあって響香と一緒に寮に入ることをあっさり許可してくれた。

正直居候している身分としては寮での生活っていうのはありがたい。漸く、居候ライフから卒業だぜ!!今までありがとうございました!!プロになったらちゃんとお金入れますね!!!

さて、と。俺の近況は良いとして。問題は目の前で起こってるコレだよなあ…。

いま、目の前では相澤先生がカンカンに怒っている。それはまあご立腹だ。表情と声とかから分かりにくいけど相当頭にきてるなこれは。…当然と言えば当然か。

轟、切島、緑谷、八百万、飯田の五人が爆豪救出に赴いていたのだ

から。

ハイそこ。お前も行つてなかったかとか言わない。

俺はホラ、あれだから。公安直属のヒーロー（予定）だから。トリプルフェイス並に活躍して日本守っちゃう系男子になる予定だからさ。許してくれや。

まあ、正体とかバレてないし相澤先生も気付いてないっぽいしセーフやろセーフ。

ただ、原作知識という記憶を持っている俺以外は皆驚いているようで一齐に五人へ視線を向ける。

だがその様子は誰が見ても、彼ら五人が行動しようとしていた、もしくはその素振りを把握していたという証明にほかならず――。

「その様子だと行く素振りは皆も把握してたワケだ。…色々棚上げした上で言わせて貰うよ」

ただ、淡々と相澤先生は声を荒らげることなく告げた。

「オールマイトの引退がなけりや俺は、爆豪・耳郎・葉隠・黒魔以外全員除籍処分にしてる」

……………んん??なんで俺はその他大勢に区分されてないん……………あ。

そういや、俺はトウフェイスずっと響香の病室に居たつて言つてたな。何故か入れ替わる時にイイ笑顔でサムズアップしてたけど…………。

まあ、それで除外されたのか。緑谷の病室にいなかったから。

その後。相澤先生は調子を変えること無く、淡々とA組に語りかける。

オールマイトという存在の引退により、しばらくは混乱が続く。今回の事件で全貌が見えてきた敵ヴィラン連合がどう動くか予想できない以上、今雄英から下手に人手を流出させる訳には行かない、と。うーん合理的。俺も同じ判断するかな。

「行つた5人はもちろん把握しながら止められなかった12人も、理由はどうあれ俺たちの信頼を裏切った事に変わりない」

ずつしり来る。大人のセリフだな。

敵との戦いで、酸いも甘いも経験したヒーローの言葉でもある。こ

れは当事者達は効くだろうなあ。

「正規の手続きを踏み正規の活躍をして信頼を取り戻してくれるとありがたい。——以上！さっ！中に入るぞ元氣に行こう」

良し行こうかー、じゃねえんだわ。空気が最悪なんだわ、主に先生のせいでね！

……ん、これは俺がやるべき仕事……いや、まだか。

鎮痛な空気、とはこの事だろうか。どんよりとしていて、どこことなく居心地が悪い。

……だが、徐に爆豪が上鳴を引つ張ると茂みの方まで連れ込み——放電の音が響く。

そして、茂みから投げ飛ばされるように出て来たのは……

「うえ~~~~い」

放電のしすぎでアホになった上鳴であった。

………っし耐えたア!!ギリだ!ギリ笑わなかったぞ!俺は!!

しかし、隣を見れば響香はツボに入った様でしばらく笑いが止まらなくなっている。ふ、修行が足りんな。

「アホ鳴はやっぱすげーわ。その状態になっているだけで空気が変わる」

「うえ~~~~い? (それ褒めてる?)」

「褒めてる」

「アホ鳴……っく……ふふふっ!」

響香はもうダメかもしれないね。

それはそうと。……やはり爆豪にも心境の変化があったのだろう。いつもの傲岸不遜な態度は鳴りを潜め……では無いけど、若干、いや気持ちだけ丸くなったような……?

「爆豪が優しくなっておじさん嬉しいよ」

「親戚みたいなこと言うんじゃねえ!!ヘラヘラ野郎が!!」

「照れ隠しか?そういう年頃だもんなく?」

「だあ~~~~ウザってえ!!肩組むな!距離詰めるな!近寄るな!!」

ぐふふ、やっぱり爆豪はイジってて楽しいですなあ。

いつの間にか。A組にはいつもの雰囲気に戻ってきていて。少し、

ホツとした。

☆☆

寮に入ると、相澤先生から部屋割りと風呂やトイレ、洗濯機の説明を受けた。

女子風呂の話が出た時点で峰田が大分やばいことになったが、相澤先生に釘を刺されたことにより静まった。

安心しろ。俺は同志だからな……！後で色々話おうな……！

さて、諸々の話が終わったことで一時荷物を部屋に置くための時間となった。俺は三階で峰田の向かいに位置する部屋に割り振られていた。

…結構持つてきちゃったな。知らず知らずのうちに舞い上がってたみたいだ。とはいえ、時間もなししちやっちゃかやってくか。

…

……

……………

「良しっ！出来た！」

中々オシヤレな部屋になったんではなからうか。

…まあ、普段から片付けは心掛けとかないとこの綺麗な感じは維持できないだろうから普段から掃除する習慣を身につけ……たいなあ……。

ん？ノックの音だ。

扉を開けると——そこには響香がいた。

「ヒロフミ？荷解き終わった？」

「おう、終わったぞー」

「……じゃあさ、ご飯まで時間あるから……その……」

なんだかモジモジしてんな。どうしたんだ？

「な、なんでもない!!!」

「うおあ!?!いきなり大声はビビるぞ」

「ご、ごめん……」

「んで？なんのようなんだっけ？」

「あー…うー…その…そ、そうだ！1階に行つて皆のところに行かない!?今日は切島が貰つたお金で焼肉だし！」

「お、それいいな。早速いこうぜ!!」

焼肉…：焼き鳥屋でアルバイトしていたこの俺に焼けない肉はあんまり無いぜ!!抜群に美味しい肉を食わせてやる!

と、意気込みながら俺は早歩きで1階へと向かうのであった。

「ぐううううー…まだ2人つきりでヒロフミの部屋で一緒に過ごすのはハードル高いってえ……!」

仮免試験の準備

☆☆

蛙水の涙、そして想いを知った緑谷出久はそのまま少しだけ外にいることにした。風に当たりたかったのだ。

すると、寮の庭の方から話し声が風に乘って耳に入った。恐らく、電話をしているのだろう——と、判断した緑谷は聞くのも悪いと思つてその場を慌てて去ろうとした瞬間——

「……襲撃の件だけど………予定通り………」

「——え?」

聞き逃せないような、言葉が聞こえた。

——いや、気のせいだと思ひ直す。しかし、どこか心がざわつく。

…結局、いけないことだと分かつていてもその会話を聞きに行くことにした。

「そんで?………は確定でいけるの?………そっか。じゃーその辺はアキ兄に任せるわ。うん?調子?元氣だつて」

「(この声…ヒロフミ君か?………良かったただの家族の会話みたいだ)」

変な風に考え込んでしまった自分が何だか馬鹿馬鹿しくなつてきて、さつさと寮に戻ろうと踵を返した瞬間——パキツ、と木の枝が折れる音が緑谷の足元で鳴った。

「——うん?ちよつとまった。……誰かいる?」

音に気付いたヒロフミは、緑谷のいる方向に声を掛けた。

緑谷はああやっちゃったと思いつつ頭を掻きながら木の影から出た。

「なーんだデクかよるビビった〜」

緑谷の姿を見ると、ホツと息を吐いて安堵の表情を浮かべるヒロフミ。

「ごめん…聞く気は無かつたんだけどなんか声が聞こえてきてさ…少

し気になっちゃって」

対して緑谷は申し訳無さそうに謝っていた。

少しの間を開けてから、緑谷がヒロフミに電話の相手を聞くとヒロフミは「…まあ、兄みたいなものかな」と何故か微妙そうな表情で答えた。

「え!?ヒロフミくんお兄さんいたんだ!!」

「っあー……そう、だな。ウン、オニイチャンがいます…」

今まで家族の事は余り話してこなかったヒロフミからの意外な関係を聞いて驚く緑谷。

そして、尚更家族の邪魔をしてしまったことに気付いて、慌てて「あ、じゃあ僕寝なきや!おやすみ!」と言い残しそのまま急いで去って行った。

「あー…変な勘違いしたまま走り去って行っちゃったよ……」

『お兄ちゃん…お兄ちゃん…良いな。良し。今日から俺はお兄ちゃんだぞ!!』

「……いや、それずっと前から勝手に名乗ってるじゃん……」

『ぐふふ、アキ兄もいいが”お兄ちゃん”と言う響きも良いな……!』

「ダメだコレ聞いてねえ」

うんざりしたように呟きながら、ヒロフミは寮の方へと振り返る。すると、慌てて隠れるように影が動いていた。

「……ん?あの辺……いや、まさかな」

——たしかあそこは青山優雅がいる部屋だった筈だ。

「一応警戒しておくか」

——もしもの可能性がある。それは痛いほど感じているからな。

心の中でそう呟いてから、トリップから戻りかけている兄(と名乗る精神異常者)との会話に戻る。

「んじや、手筈通り内部からの弱体化頼んだよ——副社長さん?」

『ああ——任せてくれ。我らが課長』

☆☆

仮免試験——1

☆☆

仮免試験、当日。

俺たちA組は国立多古場競技場へと来ていた。他の高校のヒーロー科の生徒たち（若干年上っぽい雰囲気を感じる）がぞろぞろとバスから出てきていた。

「いやー緊張するねえ」

「よく言うわ。昨日一番早く寝たくせに」

「寝たいと思う時に寝るのも大事だぜ？」

「イレ先みたいに？」

「…あれは……単に寝不足ってだけじゃねーかな……」

と、上鳴とそんな会話をしつつ体を伸ばしながら状態を確認する。うん、絶好調。

軽めのストレッチを終えたあと、周りを見る。

やはり、色んな意味で有名になっている”A組”だけあってこちらに向けられる視線が多い。

仮免という限られたイスを奪い合うライバル校の一つなのだ。そしてその中でも脅威となるウチを狙うよな。

「緊張してきたア」

「試験で何やるんだろう。ハー仮免取れっかなア」

不安の声が、響香と峰田の口から出る。

実力的に言えば問題ないけどなあ。

「——峰田。取れるかじゃない。取ってこい」

「おっもっモチロンだぜ!!」

ぬるっと現れたイレイザーヘッドに驚きながらも峰田は返事をする。

寝袋……やっぱり寝てたのか。体には労わって欲しいところである。

「この試験に合格し仮免許を取得出来ればお前ら志望者^{タマゴ}は晴れてヒ

ヨっ子…セミプロへと孵化できる——」

「頑張ってるい」

イレイザーヘッドからの激励の言葉だ。ま、程々にやりますよ。

「つしやあなつてやろうぜヒョっ子によオ!!」

「いつもの一発決めてこーぜ!」

全員が拳を握りしめて——

”Plus”……”

”Ultra!!”

耳元で大きな声で叫ばれたのかキン——と耳鳴りの様な感覚になる。

流石に文句の一つでも言おうとしたが、その前に同級生と思われる生徒から「勝手に他所様の円陣へ加わるのは良くないよ——イナサ」と窘められると即座にピンツと背筋を伸ばしてから頭を勢いよく地面に叩きつけ謝罪してきた。

「どうも——」

「大変——」

「失礼致しましたア!!」

一々声がデカイ!!体の動きがカクカクしてる!!

なんかもうとにかくうるさい!!!

耳を抑えながら、イナサと呼ばれた生徒を観察する。

坊主頭で、The熱血つて感じの顔だが——その肉体は結構鍛えられていて中々侮れなさそうだ。

瀬呂評の「飯田と切島を足して二乗した様な男」というのは中々の得得ていると思う。

「そっちの貴方は——雄英体育祭で一位だった人ツスよね!!そんな方と切磋琢磨できるなんて…光荣ツス!」

「あー…ヨロシクネ…」

苦笑いを浮かべているのが自分でも分かるくらいだ。

最後に俺たち全員に挨拶してから自分の高校の方へと——雄英に並ぶ高校、士傑高校の生徒の集団へと戻って行った。正に嵐の様だった。

——夜嵐イナサ。要警戒だなー…
そろそろ入場の時間帯か。
コスチューム着ていざ会場へ！
と、その前にマキ姉とアキ兄にメールをば…。

☆☆

「あ、あの人見た事ある。公安ウチでも有名な過労死寸前の人だ」
——と、とてつもなく不謹慎かつ失礼な事を思いながら壇上に登った職員に目を向ける。

所は大きく広い体育館——の《様な場所》にて、会場を埋め尽くすように全国各地の高校のヒーロー科生徒達が集められていた。

恐らく激務だったのだろう。そしてこれからも。

疲れと眠気によって職員の声はフラフラだ。だが、この場は仮免許験の本番。寝るわけにはいかないと、机にもたれ掛かりながら仮免許験の概要について語りだした。

「ずばりこの場にいる受験者1540人一斉に、勝ち抜けの演習を行ってもらいます」

職員は疲れを隠さないまま言い切った。

「現代はヒーロー飽和社会と言われ、ステイン逮捕以降ヒーローの在り方に疑問を呈する向きも少なくありません。まあ…一個人としては…動機がどうであれ命がけで人助けしてる人間に”何も求めるな”は…現代社会に於いて無慈悲な話だと思うワケですが…」

思う所があったのか——飯田は顔を俯きヒロフミはヴィラを思い出し苦い顔を浮かべる。

一度言葉を区切った職員は、はア…とため息をひとつ零してから続ける。

「対価にしろ義勇にしろ多くのヒーローが救助・敵退治ヴィランに切磋琢磨してきた結果、事件発生から解決に至るまでの時間は今、ヒクくらい迅速になっています」

「君たちは仮免許を取得し、いよいよその激流に身を投じる。そのス

ピードについていけない者……ハッキリ言って厳しい。——よって、試されるはスピード！条件達成者先着100名を通過とします」

ここまで聞き、ヒロフミは理不尽ではあるがなるほど道理だと感心していた。

ここで変にヒーローらしい学科にするよりも、競争率を煽り、ふるいにかけることによつて実力のある者を更に見つけ出す——という事なのだろうと予測を立てた。

だが、ヒロフミの周りの生徒は絶望したような表情を浮かべていた。

会場の生徒の悲痛な声も適当にいなしつつ、職員は今回の試験の内容について、説明を始める。

まず、受験者はターゲットを3つ体の好きな箇所に貼り付ける（ただし、常に晒されている場所限定。足裏などは無し）。そして、6つのボールを携帯し、ターゲットはそのボールが当たった場所のみ発光する仕組みとなっており、3つ発光した時点で脱落となる。

そして、倒した条件というのが、3つ目のターゲットにボールを当たった人となり——そして、二人倒したものから勝ち抜きとなる。

「(コソコソ隠れて漁夫の利を狙う……ってのもアリなんだろうな。中々やらしい試験なこと)」

ある意味じゃ、雄英高校の入試よりも苛烈なルールだ、と認識するとヒロフミは心の中で一度、背筋を伸ばす。

「えー……じゃ、展開後ターゲットとボール配るんで全員に行き渡ってから一分後にスタートとします」

「展開？」

職員の一言に、違和感を覚えると同時にゴゴゴと音を立てて、天井が開き出した。

そう——文字通り。

玩具の箱が開くように、四方の壁も一斉に動き出し今回の試験の会場が現れる。

「各々苦手な地形好きな地形、あると思います。自分を生かして頑張ってください。……まあ一応地形公開をアレするって言う配慮で

す……まアムダです。こんなもののせいで睡眠が……」

開けた先、そこには山岳地帯から都市部まで揃えた縮小版の都道府県のようになっていた。

職員から少しの猶予が与えられている。

雄英高校ヒーロー科A組の生徒たちも、ボールとターゲットの準備を終わらせ、作戦を立てるために集まっていた。

「先着で合格なら……同校で潰し合いは無い……むしろ手の内を知った仲でチームアップが勝ち筋……！皆……あまり離れず……かたまりで動こう……！」

やはりと言うべきか、こういう時の判断は早い緑谷はそう言っ、他のクラスメイトに話し掛けたが……

「ふざける。遠足じゃねえんだよ」

爆豪が馴れ合いを嫌い集団からさっさと離れて行ってしまった。

そしてそれを追う形で切島も離れて行った。

「俺も大所帯じゃ却って力が発揮できねえ」

「轟くん!!」

轟も離れ――

「――んまあ、俺もあっち行くわ。俺体育祭で一位だったし、ヘイト買う意味でもその方が良いだろ」

「ヒロフミくんまで……！」

「緑谷時間ねえよ！行こう！」

カウントダウンが近付き、A組も移動を始める。

「単独で動くのは良くないと思うんだけど……」

という、緑谷の懸念の声を背中で聴きながらヒロフミは都市地帯の方へと駆け出している。

周囲の受験者の視線がヒロフミに刺さる。

「状況的に見れば、ネギを背負った力モの様なモンだしなあ」

多すぎる視線に苦笑を浮かべつつ、周囲を確認する。

別れて行動している集団を見るに、計四つの高校がヒロフミを狙っているのが分かる。

己の知名度に喜ぶべきか、始まった瞬間に集中砲火を受けること

に嘆くべきか——などと考えていると、既にカウントダウンは”3”を切っている。

周りの受験者達のボールを握る手の力が強まる。

何しろ先着100名の狭き門だ。

確実に取れる獲物は狩っておきたいと考えるのは仕方の無い事だろう。

そしてその獲物は自分の個性については既に体育祭というイベントで晒してしまっている。”個性不明”のアドバンテージを失っている訳だ。

正にまな板の上の鯉といった状態だ。

——『2!』

カウントが刻まれる。同時に緊張感もMAXへと跳ね上がる。

——『1!』

「……悪く思うなよ——」

誰がこぼしたか。始まる前に既に勝利を確信したような声は何処からか聞こえてくる。

——『START!!』

戦いのゴングが今、鳴り響いた。

「「そこだあ——!!!」

無数のボールが、ヒロフミに襲いかかる——!!

「——ふはっ!」

四方八方から投げ込まれるボールを見て——ヒロフミは、笑う。

その程度で、自身を倒せると思っっているその見通しの甘さに——!

「展開——百鬼夜行」

地上に無数の悪魔達の咆哮が響き渡った。

仮免試験——2

☆☆

「貰ったア——!!」

いの一番に駆け出し、至近距離からボールを投げる受験者——中村は、今回の仮免試験に並々ならぬ熱意を向けていた。

「(ここで合格して普通科のあの娘に……告白するんだア——)」

ヒーローを目指す者としては些かアレな理由ではあったが、このために努力を続けていたのもあって彼の学校の中では実力が頭一つ抜けていた。

「くっ！やっぱり中村に先行かれるか……！まあいい！それなら他の高校の奴らの妨害をするぞ！」

中村の後ろに着いていた受験生達は援護するように各々の個性を発動した瞬間——視線の先のヒロフミが動いた。

人差し指と中指の二本をピン、と立ててニヤリと口元を歪ませて——囁くように、言い放つ。

「展開——百鬼夜行」

ボールを手に駆け出していた中村の背筋の辺りをゾツとするような怖気が走った。

——なんだ、このプレッシャーは

ドツと出る冷や汗と共に、ヒロフミを中心として風が吹き荒れる。勢いが萎んでいく、が距離は既に己の間合いに入っていた。ここから臆せず投げることが出来ればあとは投げるだけだ、どうってことはない。この震えはただの武者震いだ。

腕を高く上げ、腰に捻りを効かせて狙いは一直線ヒロフミに目掛けボールを投げ込——「あアごめんねエ？」

「——あえ？」

突如として、中村の腹部に衝撃と悶絶必死の激痛が走る。一瞬、何が起きたのかすら認識出来なかった。

ただ、空を舞う感覚だけを味わいながらどうやら何かに吹き飛ばされたらしいと、中村は辛うじて感じる事が出来た、がその肝心の何かの姿を中村はついぞ見る事は無かった。

だが、それは幸せな事だったのかもしれない。

「な、なんだアレ……」

「車の、化け物……？」

ヒロフミに迫ろうとしていた受験者達を一掃するように、現れたの
は一見するとただの車のようだが——よく見てみればライトの部分
はぎよろぎよろと目玉のようになっていて、ボンネットの部分にはギ
ザギザの歯が歪に並んでいた。

「……グウ……」

「な、なんだアレ……暴れだしたと思えばいきなり止まって……寝て、
いるのか？」

某危機一髪ของเกมのように、音を立てず慎重に近付くと——

唸り声のようなエンジンが急に掛かり出し、近付いてきた受験生を

一斉に轢き始める——!!

「おお、あつちは車の悪魔の方か」

怒号のある方向へ目を向ければ今は睡眠状態になっている車の悪
魔が暴れていた。

「あるいは、居眠り運転。あるいは飲酒運転。その恐れが悪魔となっ
たもの——やはり人災系は中々強いな」

感心したように呟きながら、呼び出した悪魔たちの壁を突破してき
た受験生を軽くないしつつ戦況を注視し続ける。

「このっ！当たれよっ!!」

光弾を打ち出してくる受験生の攻撃を軽く回避してから、蝮の悪魔
の墨によって視界を塞ぎ戸惑ってる隙を狙って一気に距離を詰める。

「(うーん新技の運用実験はこの辺かな)」

確かめたかったのは確かめたし——と、心の中で呟いてから目の前
でもがいている受験生のポインターにボールを当て、その少し先で幽

霊の悪魔にからめとられている受験生に向かってボールを投げてもう二つめのポイントを確保する。

「お、おとおーっ!!」

「ん？突破してきたのか」

やはり、この試験のためにさとう準備してきたのだろう。と感心しつつも、最後の3ポイント目として見定めた。

「食らえっ!!」

上段の蹴り。それは明らかに頭部を狙ったものであったが、距離がまだ自身の間合いとあつていなかったのかあつさりと空を切る。

「暴力的じゃないか!——蛸!!」

蹴りが空を切った後の硬直を狙い蛸の悪魔で目の前の受験生を後ろから縛りあげようとするが、

「それは体育祭で見たぞッ!!」

地面に吸い付くように背後からきた蛸の足を交わすと、そのまま地面を蹴ってヒロフミに突貫する——!

蹴りの力が強く、彼の足跡が瓦礫となつて刻まれる。

間合い、完璧。タイミング、最高。狙いはもう外さない。

正に、奇襲であった。誰もがこれは防げないと思うであろう。

「——ふはっ!」

しかし、相手は悪魔を統べる王。

彼は勇者足り得なかった。

「よくここまで来れたな——」

ボールを押し付けようとしていた場所にまるで分かっていたかのように、蛸の足が巻き付いた。

「だが、無意味だ」

梯子に登りきる直前で切り落としたような宣言と共に、腕を掴み捻りあげると脇腹部分に着いていたポインターにボールを押し当てた。

「ナイスファイト。いい戦いだっただ」

「……くそ。爽やかだなオイ」

「何か言った?」

「いんや。はー、1つ残機が減ったか…ま、残り2つあるし……まあい

けるかな」

「頑張れよー」

倒れ込む受験生に手を差し伸べてから立ちあがせ、少し話をしてからヒロフミはポインターのアナウンスに従い、待機室へと向かうのだった。